明治四十年八月十五日増刊（毎月一回一日發行）明治卅七年十二月九日第三種郵便物認可

女子文壇定期増刊

志ら萩



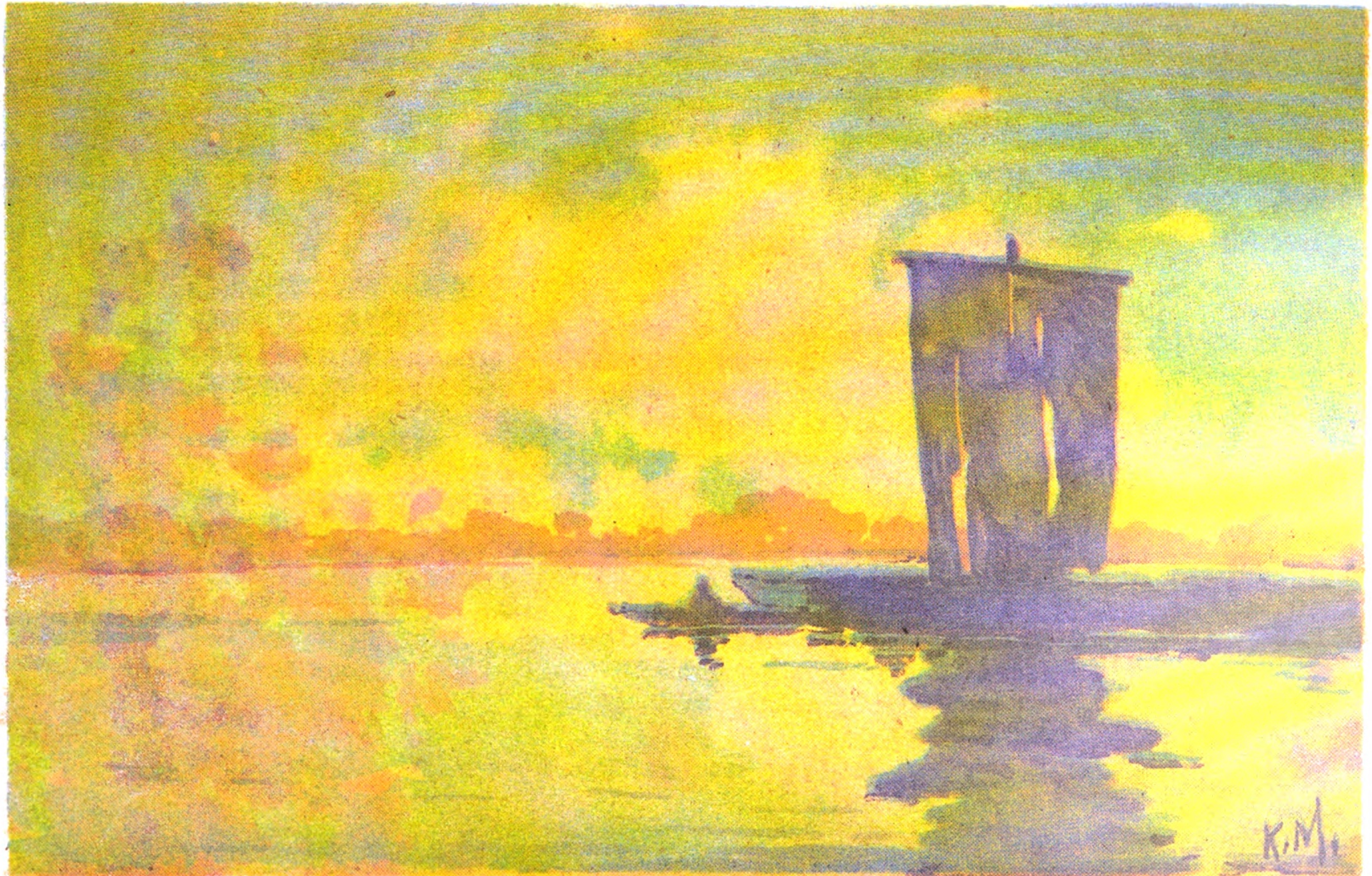
第三巻
第十一號



郵便はかき

CARTE POSTALE

夕凪



三宅克己先生筆

毎號 皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第參卷第十一號　志ら萩　秋期增刊

女子文壇の廣告によりて御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大懸賞募集

此の才媛文集發行以來女流文學の鼓吹となり模範となり女學生は勿論令嬢夫人其他明治文學に志ある人は男女を論せず各一本を手にせざるなき盛況を來し弊社同人の光榮之より大なるはなし今や其の第二編第一集の發行に際し大に面目を一新し大懸賞原稿を募集し大々的發展を期せんとす希くは續々御投稿あらんことを

原稿　來九月卅日締切　來十一月三日發刊

賞與　天（各正金參圓）地（各書籍券貳圓）人（各書籍券一圓）各部一名
秀逸（女子文章作法、文集西洋傑婦傳の中壹冊）各部十名

明治才媛文集

第二編 第一集

論說、	叙事文	（馬場孤蝶君選）
抒情文、	消息文	（鹽井雨江君選）
小說、	日記	（島崎藤村君選）
御伽話、	短文	（中村勁林君選）
短歌、	今様	（尾上柴舟君選）
新躰詩		（蒲原有明君選）

各章必其種類別を明記し必明治才媛文集原稿と表記すべし日記は必日記躰たるべし今回は專ら旅行又は歸省の途上家庭又は歸省中其地方にて得たる記事を主とす

●女子大學教授　文學士鹽井雨江先生著
●女子文章作法　金五拾錢　郵税八錢

文學士大町桂月先生選評
●第拾三　明治才媛文集　新刊○金廿五錢○郵税四錢

發行所　東京神田南乘物町十二番地　合資會社 東洋社　電話本局二七二一番　振替口座五一四一番

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

當今一番よくきく月ざらへは何か

●諸孃姉方に急告す●

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極ず各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とにより普く**特効藥**を蒐集し直接**大醫**に係ると同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ケ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八才に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

理想的最良藥



改良月ざらへ 女月丸

藥價			
一週分 六十錢	特製四週分 二圓廿錢	送料 各四錢宛
二週分 一圓十錢	特製六週分 三圓卅錢	

◎本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもわさる事なし眞に有効無害の奇藥也

調劑本舖 東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地 **小宮愛生堂**

器械不用 迅速鮮明 早取寫眞

日進ノ今日化學ノ進歩實ニ著シク其應用ニヨリテ得ル所ノ裨益又偉大ナルハ世人普ク知ル處ナリ本館發明ノ早取寫眞術ハ所謂破天荒ノ新發明ニシテ名ノ如ク器械ナ用ズ二三ノ藥品ナ混合シ日光ノ作用ナ以テ人物又ハ風景等其他如何ナル者ニテモ大小ノ論ナク思フ儘ニ速寫シ得ル斬新愉快ナル大發明ナリ寫シタル者ハ器械ニテ寫シタル者ト少モ異ラザレバ見ル人ナシテ覺ヘズ快哉ナ三呼セシム藥品ナキ地方ハ本館ヨリ送ル、書代及郵稅トシテ爲替ニテ金**拾八錢**ナ送レ教授書ナ送ル此書ナ讀メバ誰ニテモ直ニ速寫シ得ル也抑モ本法ハ本館ガ責任ナ負ンデ教授スル者ナレバ本書ナ讀ミテ若シ器誠寫ノ通リニ寫ラザレバ何時ニテモ**返金**ス安心シテ注文セヨ御本書ニハ器械不要鮮明早印刷法輕便電氣燈輕便電話機復寫いんき製法煙火製法紙石盤鍍金術のみ取粉齒磨洗粉石鹼香水白粉鼠ト蠅取藥毛生藥目藥等ノ製法夏日氷ノ製法リモナーデ製法蜜柑水製法ラムネ製法淸酒醬油倍增ノ大德用法其他奏効確實ナル諸種ノ製法數多記載ス◎附言珍奇ナ好ムハ人ノ情ナリ依テ前記早取寫眞術ナ以テ己ノ肖像ナ名刺用紙ニ早取シ輕便早印刷法ナ以テ己レノ姓名ナ好ム字體ニ印刷シ**寫眞名刺**ナ製セバ一層面白ク見ル者誰ニテモ羨ムナラン。本書ノ名ナ萬物製法秘術實典ト云フ郵便切手ニテ代金御送附ノ方ハ二錢增(二十錢)ノヿ

三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

道具不要輕便 食パン 并に 和洋菓子製造書

道具も熟練もいらず皆さんの家にある道具で拵へる事が出來て米より費用が少くて滋養多く出來たパンは誰の口にも適し美味で柔く一度に廿日分も拵へて置けるから毎日飯を焚く世話もない食パンの拵方や和洋菓子の製法を澤山記載せり故に此書を讀みて菓子を製せば面白く手垢のつかぬ美しき菓子が安くて澤山製せます本書は郵券十六錢で送る

弘報館

珍聞 頓智笑話

泣いて暮すも一生笑うて暮すも一生なり然も泣く者は不幸の生涯を終り笑ふて暮す者は幸福の生涯を送る本書は最も面白き頓智話や笑ひ話を澤山集めし者なれば一度讀めば腹を抱へて笑ひ倒れぬ者は一人もなし面白く笑ひ〳〵世渉りせんと欲せば本書を讀め、頓智ある人は時々世人を歡ばす本書は郵券十七錢で送る

弘報館

萬民必攜 和洋料理書

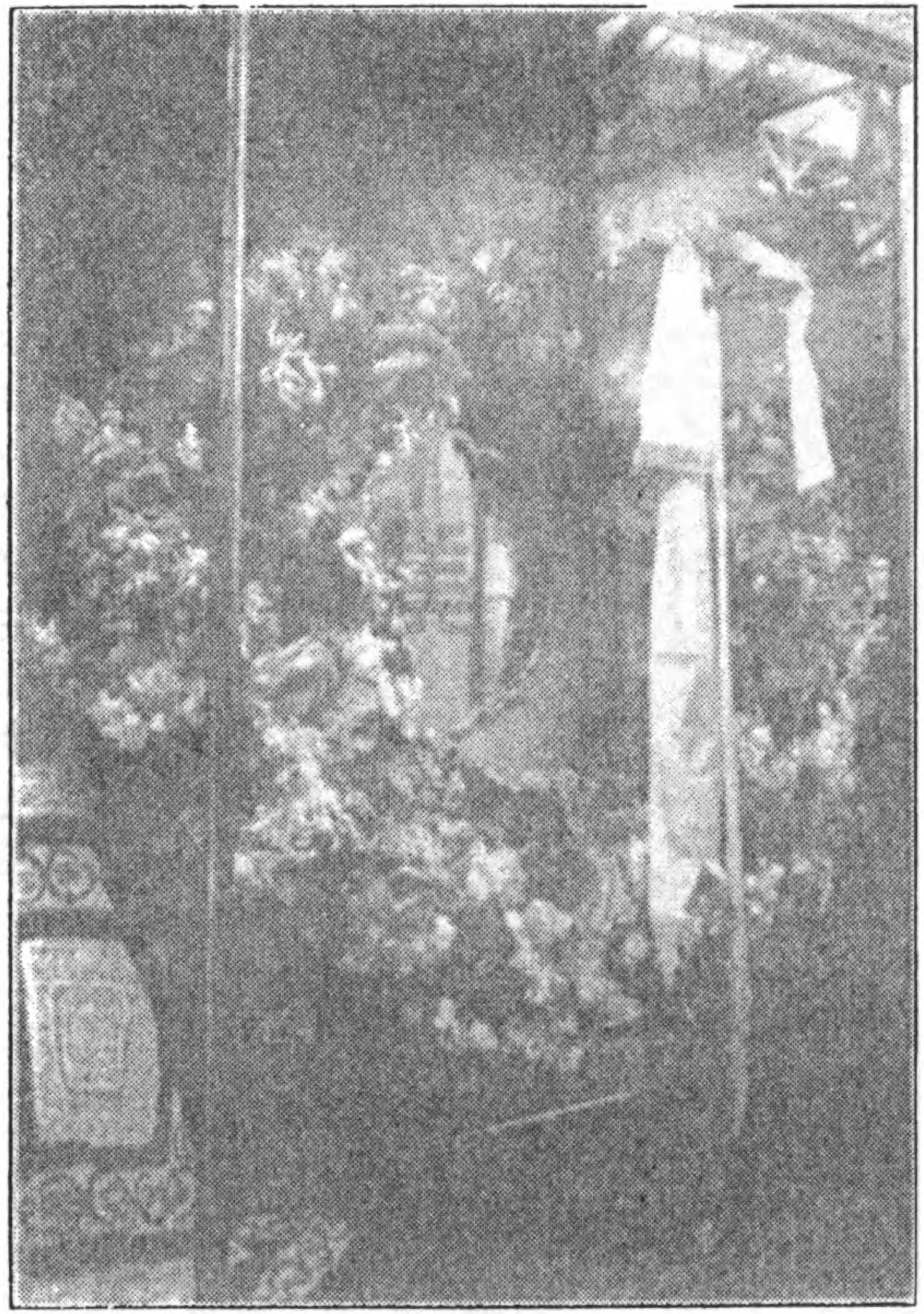
厨房必要の良書にして經濟と手輕を旨として著述せし者なり抑も今日は日本料理の外に西洋料理、支那料理、朝鮮料理、和洋折衷の料理等ある今日なれば料理法の研究は一日も怠るべからざるの時世なり少額の費用にて年中飽かず珍しき美味の獻立を得んと欲せば須らく本書を讀め郵券十七錢で送る弘報館

越中眼目山龍泉寺山門

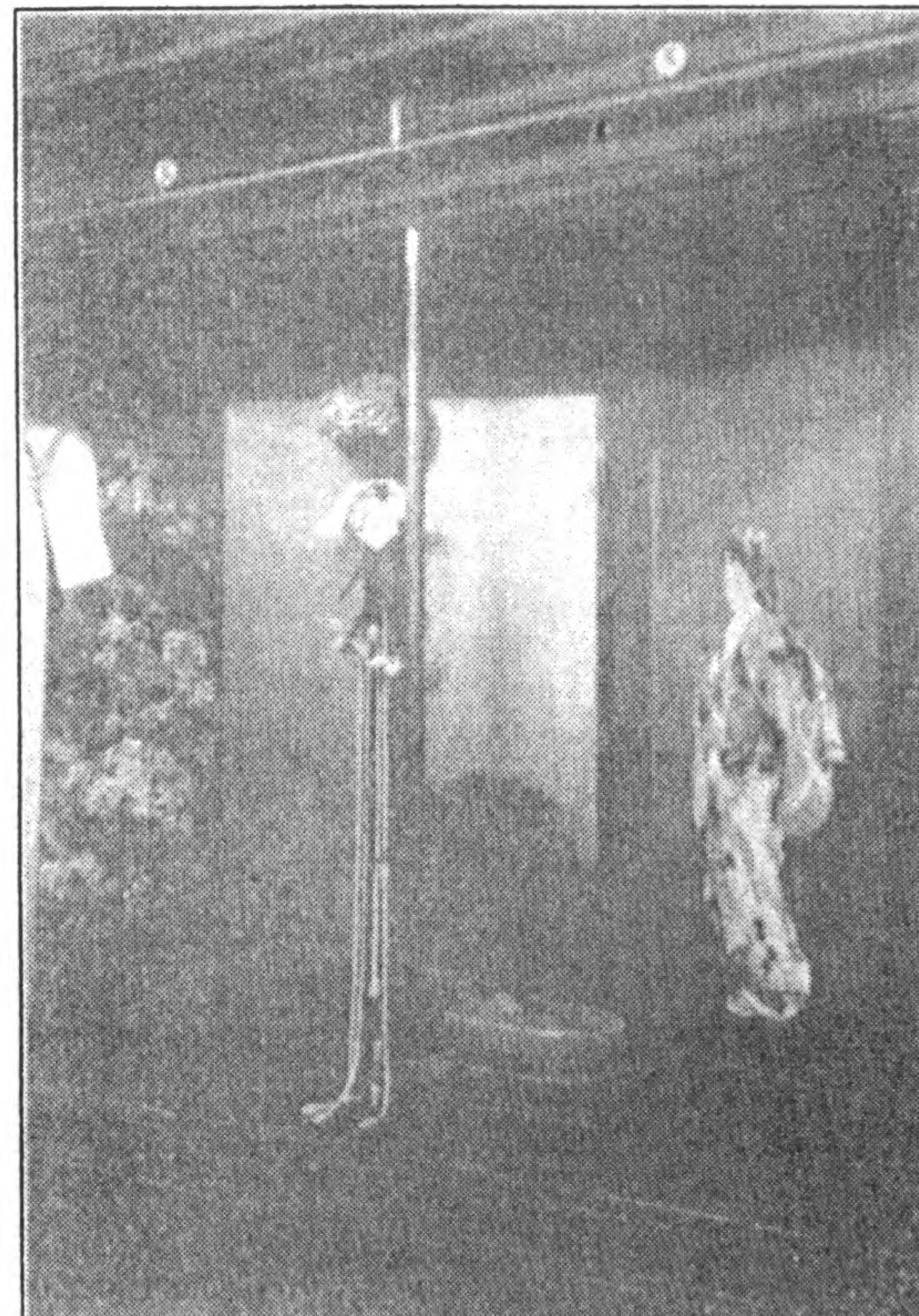


（友田崎子寄贈）

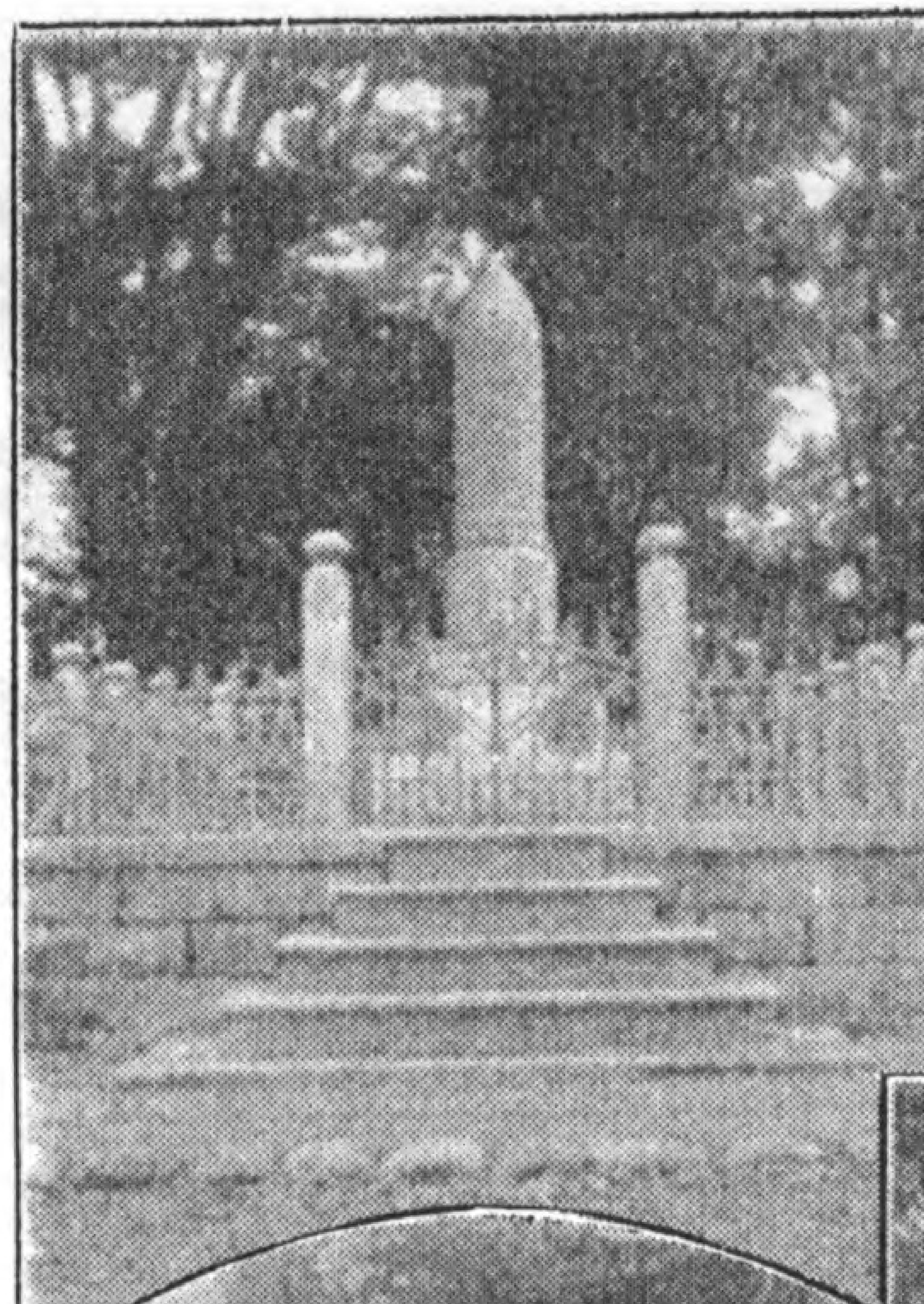
女子美術學校生徒の製作品



仝花環



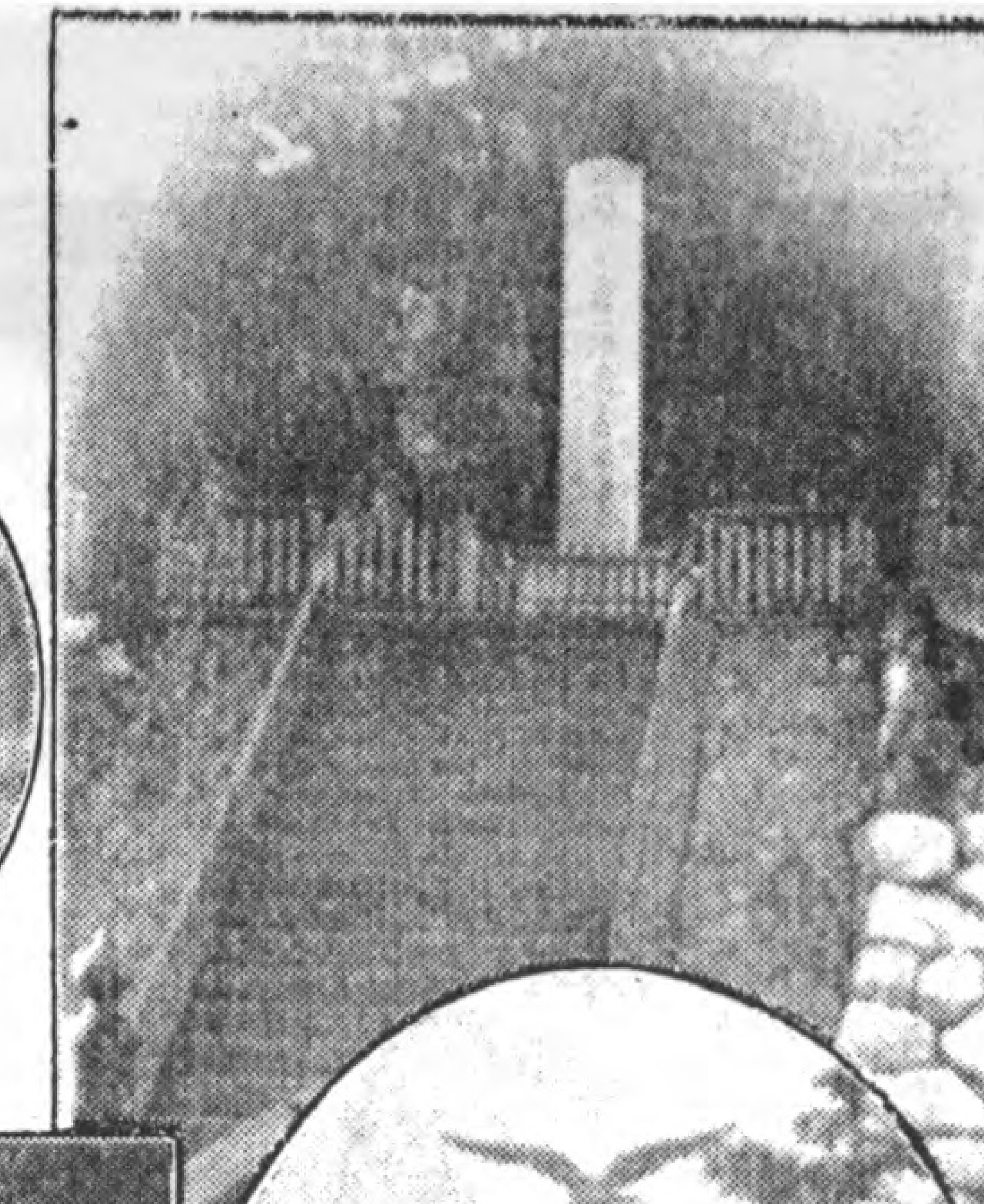
博覽會陳列の刺繡



越後新井大谷派別院境内
卅七八年戰役殉國紀念碑（古見きい子寄）



下總市川間々手古奈神社（板橋ただ子寄）



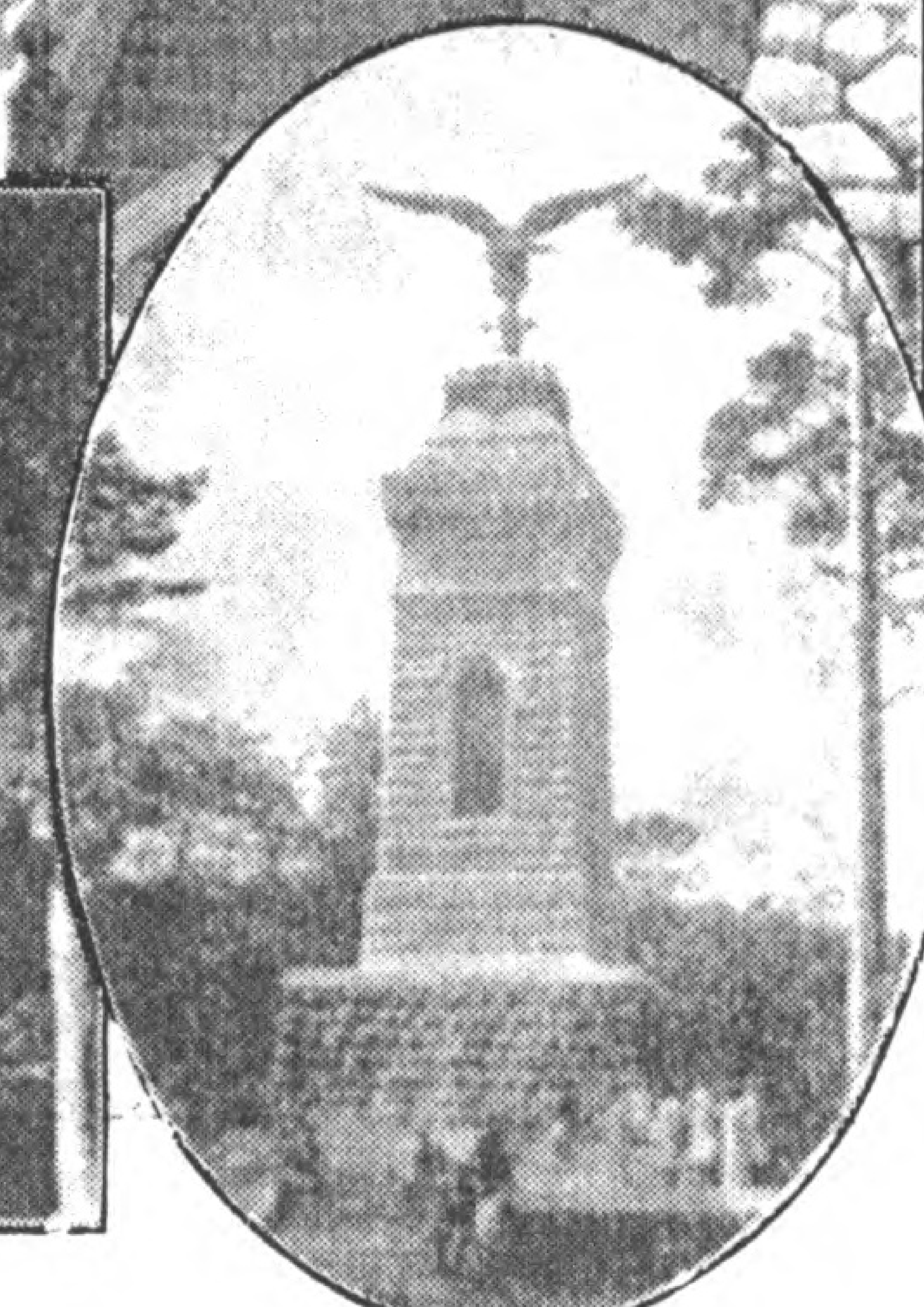
若狹青井山麓の梅田雲濱先生碑（澤田あい子寄）



下關市平家の墓（弘國きく子寄）



越後高田町眞宗淨光寺本堂（植木よね子寄）



仙台天主台上の昭忠碑

（秋月すみ子寄）

無邪氣



(日本女學校附屬幼稚園運動會)

於東京勸業博覽會



各女學校御用
美術造花材料
シホン
附屬品並ニ
造花器械類一式

東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話（長）浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番

…………切取線…………

●營業目錄御入用なれば此切取を添へ御申越被下度候（女子文壇）

縣　　郡　　町村

世界唯一 痳病消渴の根治新藥

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進步したる最新の痳病消渴即治模範藥なり、

本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して**痳病消渴**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵劵代用貳割增しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新舘藥房**

色白特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白**くし、**粗糙質**を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む）

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新舘藥房**

癩病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅し病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痳毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしふしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**すること確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割增しの事

●以上貳藥 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

眞正極秘 粹珍書案內

望の人郵券四錢送り直は送呈すべし披閱忽ち愉絕快絕直に粹士必讀の珍書案內

申込所 東京市下谷區西黑門町廿番地 **東雲堂書店**

志ら萩

女子文壇　秋期増刊

影日向

河井酔茗著

かげ

胸の巣に黒鳥棲みて
明けき光と見れば
遮りぬ、まさぐりゆくに
足端のかゝづらはしく
「禍」と連立ちゆきぬ
彩鳥の森の生く音も
たま〳〵に胸には入れど
黒鳥は凶にきゝなし
忌しく聲羽ふるひて
わが時の惡きを告げぬ

ひなた

輝く胸の白壁に
日蔽ふ雲はかゝるとも
かき消す如く湖水の
波紋のあとのゆた〳〵と
ひろごり去りぬ跡もなく
對居る時の眼の色も
映るがまゝに照り返し
けしうはなしと白日の
人を迎へぬ彼方より
はた此方より來れるを

朝

柳川春葉

佐藤春也が故郷の田園に籠つてからもう四年になる。先方から手紙を寄越す度に、遊び旁二人が丹精の農園を見に、是非一度來て呉れるやうと、毎時も夫婦連名て云つて來る。自分も、お手前味噌の農園は左に右、あの温順しい友と、交際上手な妻君とて作つて居る樂しい田園生活の有様を見たいものだと思ひながら、自分は東京の中央で、日曜以外には半日も暇のない忙がしい身體、まして彼の故郷の作州奥津在とは二百里以上も離れて居るので、ついぞ今迄一度も其機會がなく、僅かに月二三回の文通て我慢してゐる許りてあつた。が、今度社用を帶びて岡山の支店まて出張したので、往復二週間の豫定て暇を貰つたのを、五日て用事を切上げ、愈久しぶりに友の顔を見て歸らうと、それ〱土產を調へ、六日目の二番列車て、午前十時に津山に着くと、其儘七里の山路を車を飛ばせて、奥津の中村屋といふ小やかな、それても村一番の旅籠に着いたのは彼是其日の灯點し頃てあつた。

勿論佐藤には此度の事は知らしてない。明朝不意に寢込を襲つて二人にあつと云せやうといふ計畫だから。新らしい鮎の鹽燒と、卵づくめの田舍料理て夕飯をすますと、其日は早く床についた。枕に近く鳴きしきる杜鵑の聲に、暫しは夢も結ばれなかつたが、旅の疲勞に何時となく、ぐつすりと寢込て、はつと心付いて眼を覺すと。はや枕邊の雨戸の隙から、東雲の微光が幽かに射し込んてゐる。勃然と跳ね起きて窓を排ける、一道の涼氣颯と襲うて、寢屋の曖昧の取れぬ身體を擽るやうに嬲つて去る。

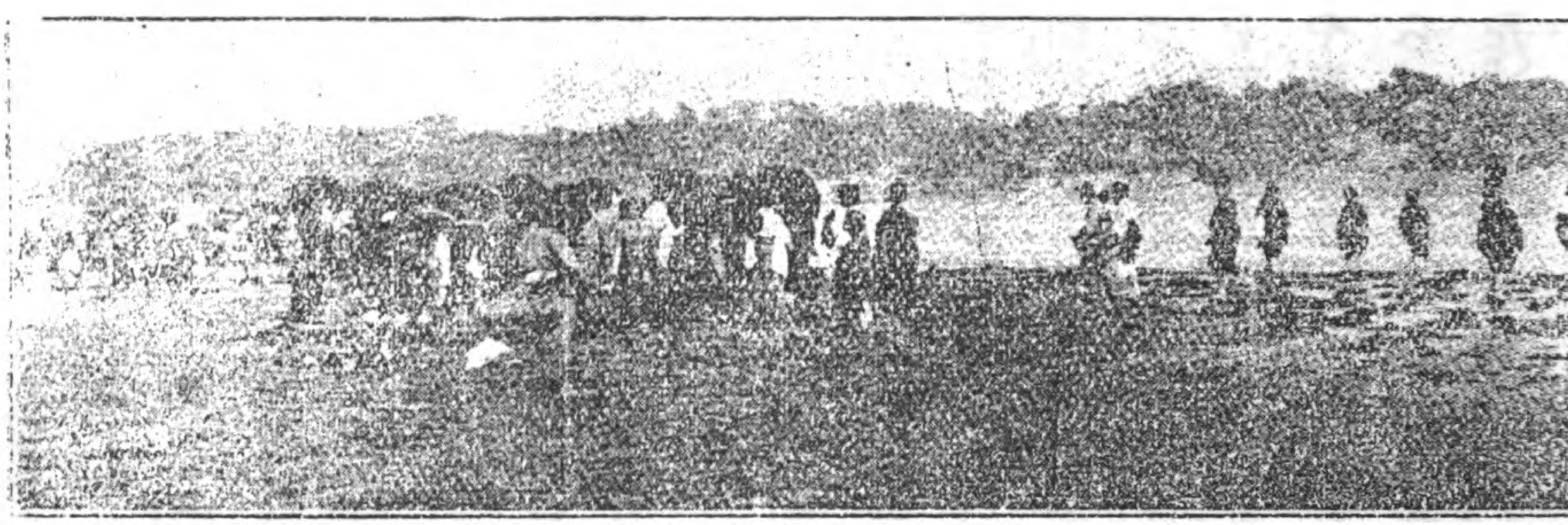
外面は宛然絹篩て漉すやうな、眞白な細かい霧が濛々と降り罩めて、昨日見た山も川も野も杜もまだ其内に包まれて靜かな夢地を辿つてゐる。

手早く朝餉を濟ませて宿を出た。

友の家は村を外れて十町許りの杜の中にあるのだ。新

らしい草の香漲る野中の小路を傳つて、葉末の露の美しくきらめく常盤木の杜に入つた。四邊は未だ寂として、時々しとゝしとと露の滴る音がする。何處かで呴々と鷄の鳴くやうな聲がするので、耳を傾けながら、木蔭を潜つて行くと、森を出た處に、稍廣い野を前にして、瀟洒した平家造りの家がある。是こそ友の家に違ひない。鷄の聲は其後ろから聞ゑて來るのだ。

四邊の霧は奇麗に晴れて、重なるやうに若葉の茂つた木々を洩るゝ日影鮮かに廂に迫る山々の翠、さては芽出し紅葉牧場の若草、何れも活々として背伸びでもしてゐるやう。胸の痛いほど清々しい夏の空氣は一面に漲り、豁然と晴れた大空には、毬のやうな白雲が一片輕く漂うてゐる。



日本女學校生徒鎌倉海岸修學旅行　（森木しげ子寄）

表側の戸は全然明け放たれてゐるが、家の中は寂然として人の氣勢もない。佐藤の寐坊が未だ無性を極めて居るのだなと思ひながら、態と聞ゑよがしに靴音高く洋杖の先で礫を叩きながら戸口を入つて奥の方を覗き込み、

「御免！お頼み申ます。」

と聲をかけると方角違ひの處で、

「はい。」と聞き覺のある和しい答があつたので、おやと思つて居ると、暫くして裏手から、甲斐々々しい姿をした女が出て來た。紛もない細君のお光さんだ。此處邊に見なれぬ洋服姿に驚いたやうであつたが、軈て近いて自分の顔を見ると

「おや。まあ福島さん！」

と云つたまゝ流石に懷かし氣な面色である。自分も一寸改まつて、

「何うも暫くでした。」

と頭を下げると妻君はやつと我に歸つて、
「本當に暫くでしたねえ。お懷かしうございます。まあ何から申上げて宜しいやら、さあ何うぞお上りなすつて下さい。何うも汚ろしい所でして。」
「は難有う。」と低い上り框に腰を卸して靴を脫ぎながら、「佐藤君は。まだお寢み中ですか。」
「いゝえ先刻一寸この先の果樹園まで參りました。後程呼んで參りましやう。」と云つたが俄かに思ひ出したやうに、「ほゝゝ。もう今てはあの頃のやうに寢坊ては御座いませんよ。相變らず貴方はお性質が惡くてゐらつしやいますから……。」
自分も相變らずだが、妻君の愛想も相變らずだ。然し寢込を襲ふ筈の計畫が外れたので、少しく悄然て居る處へ、云ふ事毎に先を越されて殆んど魅まされた人のやう。奥の間に引きあげられて、辛つと腰を卸すと又改まつて一別以來の御挨拶。不作法にも早や崩しかけた膝頭を其儘四途路になつての受太刀ながら、漸くの思ひでそれも濟んて、それ〳〵土産を並べた。
「まあ此麼に御心配下さいませねば宜しうご座いますに、何うもお珍らしいものを難有う御座いました。」と戴いて隅に置き、「まあ眞實によく被來して下さいましたわね。全く思ひがけませんものですから、始めは誰方かと存じまして。失禮致しました。良人が歸りましたら何んなにか喜びますでしやう。始終さう申しては御噂して居ますので御座いますよ。」と云ひながら、棚の茶盆を出して座を立つたので、始めて室を見廻した。
佐藤の書齋らしい八疊の一室は、さまて立派な造作てはないが、總てが整然と片付いてゐる。床の間の違ひ棚には、植物學に關した書籍と、手摺のした金文字の詩集とが秩序よく配置され、其横の壁には、まだ東京にゐた時分から持つてゐたミレーの落穗拾の摸寫をかけ、下手に据えた一閑張の机には百枚許りの原稿綴が幾つとなく重ねてあつて、略佐藤が日々の勉强の模樣も偲ばれるのである。妻君は茶盆をさげて再び坐に返り、暫く四方八方の物語をしてゐると、森の方から綾

やかな蹄の音が聞えて、門の前にぴたりと止つた。
「おや。良人が歸りましたやうです。」
と妻君は慌たゞしく出迎に立つた。
「あなた福島さんが被參したんですよ。」
「福島?」
「えゝ。東京の。」
「さうか。それは……。」
と語るのが聞えたが間もなく二人で這入つて來た。隨分變つたものだ。美しかつた髯を剃り落して、手織の單衣を來てゐる處は何うしても純然たるお百姓だ。只變らぬのは活々とした其眼、其態度だ。
「や、これは珍らしい。」
と、さも可懷し氣に云つて、机の前に坐りながら、一寸挨拶して、
「お家でも皆さん御變りはないかね。」
「難有うお蔭で。時に君の事業も餘程成功したやうなお手紙だつたが、成る程思つたよりは第一非常に位置の可い處だ。
「馴れて見れば格別可いとも思はないが、然し事業の方は昨今幾分か緒に就きかけて來たのでね。」
「そりや何より結構だ。」
「難有う。時に君は今度大變昇進したといふではないか。」
と佐藤の云ふ後から妻君も、
「さやうで御坐いました相で、誠にお目出度う御座いました。」
「いやお言葉で却つて恐縮する位なものです。」
「何しろ大に賀すべきだ。」
と友は心からさう云つて、一寸言葉を切り、扨何から話しかけやうかと云ふ風に、其美しい眼を自分の方に向けてまぢ／＼してゐる。
「あなたもう、彼方はお濟みになりましたのですか。」
と不意に妻君が尋ねかける。
「いやまだ中々濟みさうもないが、一寸要る書類が出來たから……」と云つて思ひ出したやうに、自分の方に向いて「僕はも一度果園に行つて來なければなら

ないから失敬するが直ぐ歸るから暫らく待つて居て呉れ玉へ。もし君あまり疲れて居ないなら、一緒に行つて見ないか、葡萄と桃とを賣る事にして見積に來て待つてゐるから、序に案內してよく中の樣子をお目に懸けやう。」

「さうか。君が邪魔てさへなければ行つても可いが、何處だ遠くかね。」

「何、これから十五丁許りだけれど馬なら譯はない、ぢや一寸……。」

と出て行つた。

暫くすると外から聲をかけるので、出て見ると、毛布を敷いた二頭の裸馬を据えて待つて居る。一頭の黑い方を指して、

「さあこれに乘り玉へ。」

「可い馬だね、今は馬の方も飼つてゐるのかい。」

「いや。今迄は乘用のを一頭置いてゐたが、先日軍馬の拂い下げが有つた時あまり廉かつたから序に買つて置いたのだ。可なり可いだらう。」

と云ひながらヒラリと裸馬に跨る、自分も續いて跨つた。

「おい。正午前には歸るから、何か田舍料理でも拵へて待つて居て呉れ。」

「はい承知しました。それでは行つて被參いまし。福島さん、御要心なさいませんと其馬は初めての人だと嫌ひますよ。」

と笑ひながら云ふのを後に、二人は森に沿うて家を出た。

彼是朝の九時でもあらうか。華々しい光は一面に漂ひ先に立つた友の吸ふ煙草の煙が、パツ〳〵と薄紫色に風に散つて、何處からともなう香しい草の香が流れて來る。

杜の木々は甦つたやうに戰ぎ初め、奥の方では時々鳥の茂みに潜ろ音が聞ゑる。

そこを外れて稍廣い野に出た時、馬上の友は振り返つて、

「今狩野は何うしてゐる。矢張獵に逆上せてゐるか

ね。」
「相變らずだ。」
「さうか。秋一度あの男を連れて來たいよ。此邊は非常に鳥の多い處でね。そりや朝早く連發銃を擔いて出懸る氣持たらないよ。それこそ狩野が聞かうものなら乾度何事を放擲してもやつて來るね。」
「あれの狩獵狂人も久しいものだ。」
「然し面白い男だつたね。」
と快げに云つたが、聊か眞面目になつて、
「僕も此方へ歸つてから初めの間は隨分人に知れぬ苦勞したよ。」
「さうかい。然し初めの意氣込は隨分素晴らしい物だつたぜ。」



「今だから云ふんだが、一時は斷然中止しても一度都門の生活に歸らうかと決心まてした事も一度や二度てはなかつたよ。」
「君が？」
「さうさ。中々苦しい目に遇つたからね。」
「僕は君よりも、妻君の方が辛抱出來まいと危んでゐたのだ。それは不思議だ。」
「いや戯談ぢやない。此方に來てからは妻の方が非常に本氣で、云はゞ是迄になつたのも大半は彼女のお蔭さ。」
「さうか。何にしても其位結構な事はない。僕も此方へ來るまでは、內々何んな事を遣つて居るかと危んで

ゐたので、場合によつては上京を勸めやうとも思つてゐたんだが、今はつく〴〵君の境遇が羨ましくなつた。」

「君も此方へ來ちや何うだ。隨分有望だよ。」

「然し其奴は少し六ケ敷からう。第一御本人が大の無性な處へ、相手が是に讓らぬ剛の者と來てゐるから、二人連れて君の處へ轉がり込む位が落さ。はゝ……。」

「そんな事は受合つてないさ。中々やつて見ると氣樂だ、第一常に自然の懷に抱かれてゐるんだからね。それに著述の暇もあるし。」

「著述と云へばもう餘程出來たらしいね。」

「まだ駄目だ。秋頃には何うか角うか完結するだらうと思つてゐるが……。」

「そりや面白い、乾度大作が出來るだらう。」

「いや其方は駄目だが、出來上つたら其篇を持つて、妻と一伴に上京する積りだ。」

「ぢや今度は此方が待つてゐるから是非早く上京し玉へ。然し又此方へ歸るだらう。」

「勿論!」

といふ意味を眼に示して無言で點頭いた。志す果園はもう程遠くない。山の斜面に大きな桃林が見えて、友を待つてゐるらしい二三の人影が其中に動いて居る。

撫子の話

文學士　畔柳芥舟

八月の臨時增刊にと云ふことですから、時候を見圖らつて、撫子のお話をして見ましやう。

撫子のお話を完全にしやうと思ひますと、日本に於ては、ナデシコ、カラナデシコに加へるに、夏の眼皮と秋の仙翁とを一處にお話しまして、支那の方に進んでは、瞿麥、石竹、剪春羅、剪秋羅、西洋に遷つては所謂、ピンクと、それに加へて、カムピオンのお話をしなければ成らなくなります。然し、成るたけ短く、そして撫子だけに就いて、談話を試みて見ましやう。

東洋と西洋とに亘つて、文學上撫子屬が、日本で一番

盛んのやうであります、支那と西洋は先づ同じ程度位のところになつて居りまして、何方も目立つては居りません。で、其譯と申しますと。日本に於て、撫子と云ふ名稱が、或る他の方の意味を加へて歌題にするのに、餘程都合が好いのであつて、其爲に和歌で盛んに歌はれるのであるらしく、其影響をうけて、俳句の方でも比較的に、句がなか／＼多いのであると思はれます。

撫子屬は草本であつて、通常は宿根するのであります。北半球の溫帶に產し、北亞米利加の西部には無いと云ふことです。種類は大抵七十種ばかりありますが、其內に於て、日本で、カハラナデシコ、若くは、ナデシコ（學名ジアンス・スペルブス）と云ふて居るのは、野原に自生して、河の傍や、砂地等に最も多くあります、從て庭に植ゑるものと別つ爲に、カハラナデシコと云ふのです。花瓣に剪裁が深く、鳥の羽毛のやうに、又、絲のやうであつて、色は淡紅紫を普通にして居ります。純白若くは濃紅色などのは、先づ無いと云つて宜しいでしやう。莖の高さは大凡一二尺ばかり、葉は狹く細くして對生で、色は薄綠に少しく白を帶ばしたやうに見へ、梢上が別れて銘々に一ッ宛花を着けます、花は五瓣です。

其次の、カラナデシコ（學名ジアンス・ヒネンシス）の方は野生がなく、多く人々の家に蒔いて、花を賞して居ります。カラナデシコと云ふ言葉の示すが如く、是は支那から來たのであつて、撫子の一種になつて居る譯です。今一つは、アンジャベル、又の名は、オランダ石竹（學名ジアンス・カリオフィルス）は、和蘭種で、莖の高さは二尺ばかり、其名の示す如く、和蘭から輸入したものであります。

文學上先づ此の三種位見て置く必要があらうかと思ひます、其外に數種ありますが、其方は必要ありますまい、文學上此の三つは別に區別して云はないで、撫子と云ふ總括した名の下に歌つて差支ありません。古くは萬葉集に、既に撫子の名が出て居ります、撫子の意義は『花の形小さやかにその色愛すべきを以て名づく

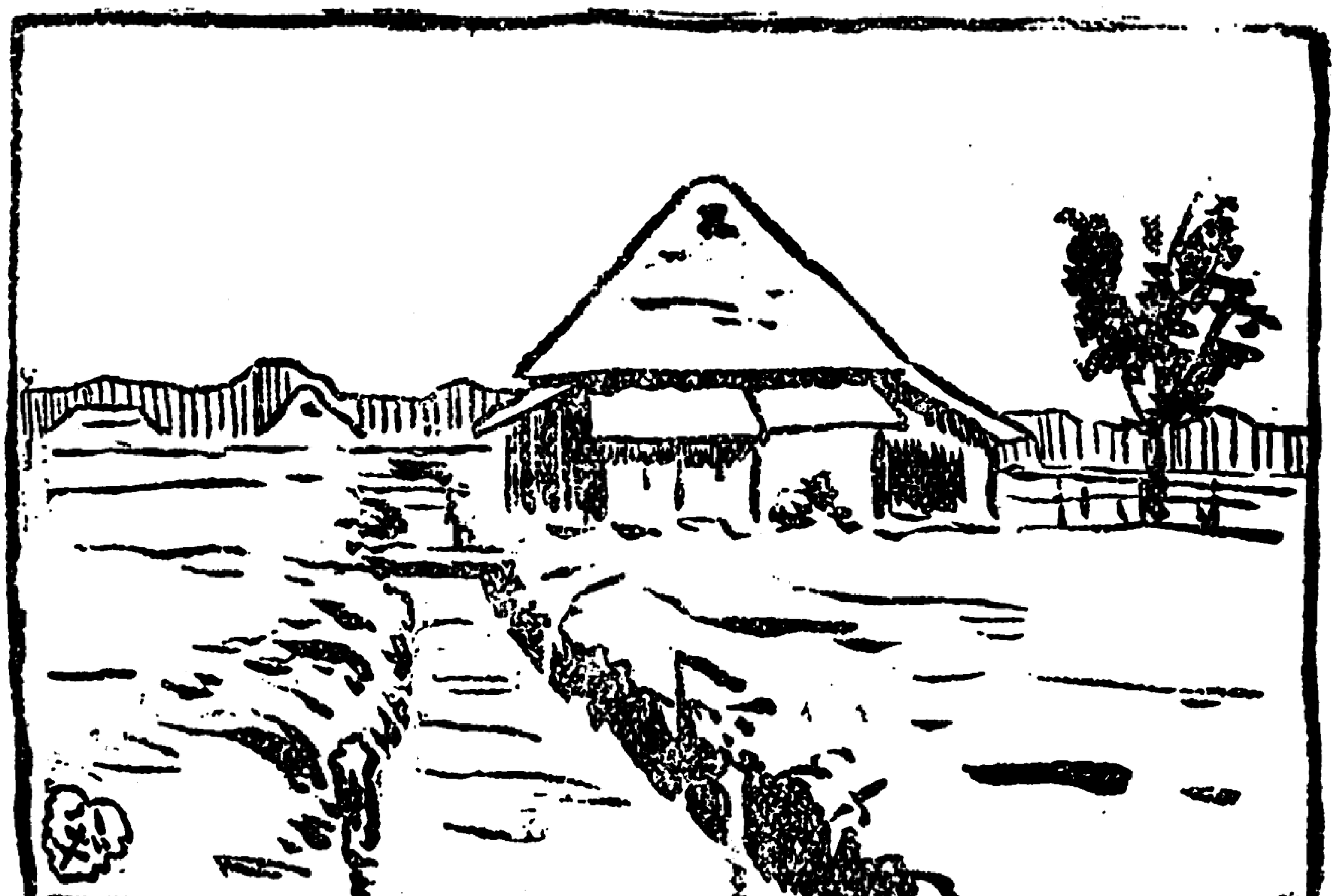
常夏とは春より秋まで盛り久しく咲きつゞくゆゑに名づく」と榮雅抄に出て居ります。清輔奥義抄には「鍾愛抽衆草之故撫子とはいふ」と出て居ります、假令無理に此のやうな意味を附けたにしても、斯ういふ説明をして居ればこそ、自ら此の意味で歌に廣く詠まれてくる譯になるのです。萬葉集には、巻の三、巻の八、同十、十七、十八、十九、二十、等に見へて居りますが、其意味は、秋の近づくのを知らせると云ふのと、花が咲かば妹に準へて見んといふ意味や、或は「花妻」といふて愛して見たり抔して居ります。

萬葉集には常夏の名は全く出て居りません、此の名稱は古今集から始ります。歌の數は非常に多いので、一一歌を擧げることは出來かねますが、總てを讀み通して考へて見ますと、常夏のトコと云ふ音に聯想するものと、ナツの音に聯想するものと、其他に、子供に聯想するものと、此の三つが主のやうであります。花の色は濃淡何方も區別なく好いたやうですが、殊に紅梅色が大層好いと云ふやうな歌があります。野にあるものを詠んだのも、庭にあるのを詠んだのも出て居りますが、露を配つて美觀を歌ふのが多いやうです。昔は餘程氣に合つた花らしく思はれますのは、譬へば、枕の草紙に『繪にかきて劣るもの撫子』又は、同じく枕の草紙に「美しきもの撫子の花』「草の花は撫子、唐のはさらなり、大和のもいとめでたし』更科日記には「夏は大和撫子の濃く薄く錦をひけるやうになん咲きたる」紫式部集に「常夏、庭の面に唐の錦をおるものはなほ常夏の花にぞありける」仙覺萬葉集註釋に「撫子の花はしなやかに美しければ」等のことばて、人々の撫子を愛して、居たといふことが明瞭に分ります。源氏物語の箒木には「咲きまじる花はいづれとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき」とありますが、此の歌では、撫子が一番美しいと云ふ意味になつて居ります。

俳句の方では、子供に聯想をするものもありますが、其外に『石竹の節』などゝ云つて、節のことを云つて居ります、子供に聯想することは和歌にもありますが、

節に目を附けましたのは、歌にはなく、俳句に始まるやうに思ひます。其他、露を配合て居ることは和歌と同じですが、夏の暑い感じを適切に讀者に與へるのは、俳句の和歌と大に違ふところかと思ひます。小供の聯想を詠んだものでは、一茶の「撫子や地藏菩薩のあと先に」。節のでは成美の「撫子のふし〳〵にさす夕日かな」。蝶夢の「石竹や節横折れて打ちみだれ」等であつて、鬼貫の「撫子よ河原に足のやけるまで」は、夏八月の酷しい暑さを感じます。

支那にて瞿麥及び石竹の消長の跡は稿管贅筆の「閑花野草亦隨時輕重、唐人詩中多言夜合石竹、如遼陽春盡無消息、夜合花前日又西、山花搜寳髻、石竹繡羅衣、是也至今唐畵宮殿池臺多作二花自然富貴氣今人絕不知重矣。」これに依て



見れば、唐時代にはなか〳〵詠はれて、後世に至つては全然廢てられて了つたのであります、但、詩としては、唐宋は無論のこと、其以後にも見られますけれども、何うも面白い詩がありません。譬へば李頎の「無爭李桃時」は、時期が夏にあつて、春に無いから、從て斯樣な詩がある譯です。司空曙の「誰憐芳最久、春露到秋風」は、常夏の意味を知らせる譯です。然しどうも詩としては、面白い句が薩張り見當りません。花としての位着けも、下から二番目位になつて居ます、よく〳〵貴くないやうです。要するに王世懋の花疏に所謂「石竹雖野花、厚培之能作重臺異態、他如夜落金錢鳳仙花之類、俱離落間物也」て、金錢花や鳳仙花やなどゝ一處に、捨てるものでも無い位になつて居るので、少し

も重んぜられてゐる様子は見えません。

西洋の方では、地中海地方や、溫帶の亞細亞地方が原生であるから、歐羅巴に普く廣がつてをりまして、種種の變種も加はつて居り、色の美しいのと、香のよいので、栽培されることが久しく、現今日本にきてゐる、カアネーションは、アンジャベルから出たものであり、其他、アメリカナデシコ(學名デアンス、バルバッス)及び支那の石竹等までも、花園では好んで培養して居ります、英吉利抔では、デットフォード、ピンク(學名デアンス、アルムメリア)ヒメナデシコ(學名デアンス、デルトイデス)、アンジャベル――普通の撫子――(學名デアンス、プルマリウス)等がありますが、詩の中には誠に活動して居りません、名高くない詩人が物好きに歌つた句は見えますけれども、有名な人…………譬へば、バーンスの句などを讀んで見ましても、少しも面白くなく、獨逸のゲーテの句も見えますが、之もつまりません。亞米利加では、アメリカナデシコ(學名デアンス、バルバッス)を題にした詩が見えますが、之もごく〳〵僅かです。

要するに、世界の文學中、撫子屬は日本程盛んに歌はれて居るところはありません、古代の日本文學に撫子の生命が依托されてゐると總評して差支ないと思ひます。今後の日本文學に於ける運命は、豫言者でない限り分りません。

附言●これは蒸暑き梅雨の夜、畔柳先生を原町の御宅にお訪ねして伺つたお話を筆記したのですから文責は記者にあることをお斷りして置きます。

婦人の登山

小島烏水

私は毎年夏になると高山に登るのを樂しみにしてゐるが、未だ實は婦人と一緒になつて、登山したことがないので、婦人の登山といふ題に就き、經驗上のお話をすることが出來ない、併し登山の利益とか、快樂とかいふ點にかけては、人類一斑に共通的のもので、兩性の孰かに偏すべきでなからうと思れるから、こゝで

は暫く、女性の立場になつて、卑見を述て見ませう。
先づ第一に婦人は、男子に比して旅行をする機會が多くない、汽車旅行なら格別、天下の山川を跋渉するなどといふことは、殆んど望まれない、故に北海道から東北、中央から畿内、山陰、山陽と歩かうなどとは、時間も周圍の事情も許さぬに違ひない、然るにこゝに高山がある、山麓から絶頂までの間で、温帶から寒帶までの植物も、氣候も、空氣も、有してゐる、即ち他が平面的に幾百里に亘つて延びてゐるものを、是れは縦面的に、裾から天邊まで十里足らずの間に、具體してゐる、自分はかつて山岳を論じて、宇宙を短縮した統計だと言つたことがある、言葉は小六ヅかしいかも知れぬが、幾月もかゝるところを、一兩日間に上下し得られて、麓は夏、中腹は秋、七八合目邊は春、絶頂は冬で、寸草も生えないし、雪が猶灰色になつて殘つてゐるやうな光景が、この海面上から一萬尺前後の立躰に、具備されてゐるから、乏しい時間で、四季を通じた光景と、温帶から寒帶にかけての氣候以下、萬般の變化を經驗し得るのは、山登りに限る、少くとも婦人には、この意味に於て登山ほど、天然を觀察し得る便宜を、有したものは無いと信じます。

私は天然の觀察と言ひました、これには雲とか雨とか、日出日沒など、天に屬するものばかりでなく、岩石、植物、昆蟲等も、皆含めて置きます、聞く所に據ると、英國の婦人は、嗜みに水彩畫の一枚や二枚描ける人は甚だ多いさうで、かくの如く婦人が天然の觀察に鋭敏な眼を以てゐるのは、友達の衣服や、容貌のアラさがし、或は人間の弱點を見透すばかりが、能でもあるかの如き、一種の婦人に比べて、いかばかり其人の天品を、高めるてせう、一寸例を擧げると、富士山の裾野を旅行された御方は、御承知でありませうが、富士薊といふ薊があります、土地の人は、須走牛蒡などと稱して、根を食しますが、あの薊は、見方によつては、普通の薊などより、花の色が美くしいだけ、毒毒しくも感ぜられますが、高い不二山と、廣い裾野との間に、あの花を配すると、此花の色も、浮織か刺繡

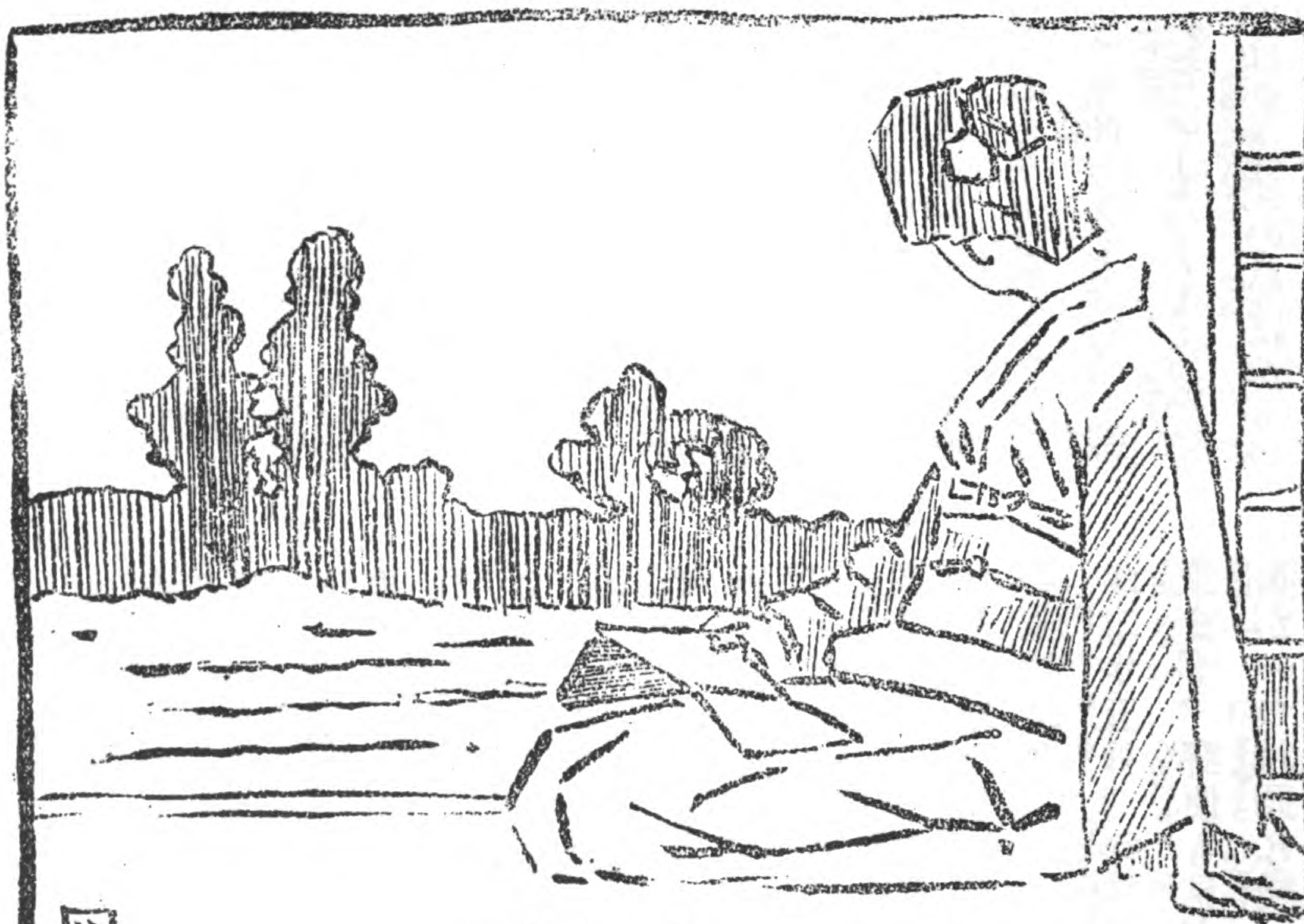
のやうに鮮やかに見えて、又とない美觀を添へるものてす、私の言ふのは、こゝてす、薊なんて、厭な花てあると、花の中の繼子扱ひにするのも、其人々の好き嫌ひとあれば、何とも致し方がないが、もし花の特性が解つて、光線の強い、雲霧の變化の多い高原に、呼吸をして、雪解の水に浴みをした、一個の女性と見れば、その濃紅紫色の花頭が、却つて懷つかしくなりませう、一步進んて、かやうな花が、全く水分を缺いた砂石の上に、どうして咲くか知らむと思ふと却つて憐憫の情を增すものてす、哀れみと思ひやり、これは殊に女性の專有する美點てはありますまいか、自然を深く觀察すればする程、天地の美くしいとが解り、延いては之を享受する人間の性行に、及して來るものてす。

そればかりてはありませむ、『蝶々止まれ菜の葉に止まれ』の蝶も、風に吹き颺げられると、一萬尺の高さに來ることもあります、雲雀も野てばかり遊んてゐませむ、富士山の噴火口の緣まて、來て、キヨロ〳〵して又下界へ下りて行くことがあります、蝶も雲雀も、可憐な、脆い、美くしい動物てありますが、このやうに高く超がることがあります、これらも婦人には、何等かの教訓か、啓示を與へますまいか。

これ等は、一例として、一微草一小動物を擧げたのて、單にこんなことなら山へ登らずとも、野外を散步しても、解るわけてすが、人里に近い自然と、全く自然のまゝに放任された自然とは、形も、色も、匂ひも、感じも、凡べて違ひます。

碧く見える空、鮮明に耀く星、パノラマのやうに展開する山下の土地、絲のやうに細い川、氷の海のやうな雲、覩れば覩るほど、平生の自分の眼力も怪しまれるばかりに、愕かれます、そして胸が爽然として、清い風が吹き通しに吹きます、生れ變つたやうな氣持になります。此快感は、平生自家を以て天地とするやうな境遇の婦人には、一倍多く與へられるだらうと思ひます、例へば石燈籠か、敷石か、石碑の外に花崗石を見ない婦人が、甲斐の駒ケ岳とか、金峰山とかに登つて、あの閃々たる無邊際空の白玉城廓を見たら、何んな

てせう、風呂て使ふ輕石の外に、焼石を見ない婦人が淺間山麓の「押し出し」といふ、三四里にも渉つた大熔岩流を瞥見したら、恍惚となるてせう。是れも婦人に限つたことでは無いが、一躰に見聞の狹い、話種の少ない婦人に、大なる自然の働きを見せるといふことは、最も必要て、興味のあることゝおもひます。併し日本の山岳は、登山の道路宿泊の設備等が、整つてゐない方が、十中の九以上てあるから、當分婦人の登山は(比叡や筑波のやうな低い山は別として)富士山か木曾の御嶽ぐらゐより、外



に御勸めは出來ませぬ、越中の立山や加賀の白山あたりでも、さほど險しいといふてはないから、婦人の登山は出來ますが、設備は愈よ不完全てす、其他の高山に至つては、言語道斷、到底歐羅巴のアルプスのやうなわけには行きませむ、日本では一二の高山を除いて婦人登山者の皆無なのも、當然てあります、富士山だけは、私は何人にも勸めますが、その外は婦人には、冒險に類したことになりますから、いくら浩大な自然に親しむのが宜いからと言つても、勸める氣になりませむ。

秋草日記

河井醉茗

▲七月二十日。土用の入、快晴、土用の入から秋草の日記を書くのは早すぎるやうであるが、夏にならない先に盂蘭盆が來る東京では、秋の七草の前に夏の七草があつて、其實は女郎花桔梗の類、秋も夏も擇ぶ處はない。全體花は其時候に適切に咲いてこそ心持も好いが、早く咲いたり、遲く咲いたりするのは嫌である、世に謂ふ早咲、變り咲きの類は自分は大嫌ひであるが事實は如何とも致し方なく、茲に於て土用の入から秋草の日記を書く。

▲二十一日。植物學上の事は知らないけれど、千駄谷に草木を植ゑると、下に太らずに、細く上へ上へと伸びる、地の質が然らしむるものであらうと誰やらが言つたが、果して我庭の萩は垣根より高きこと三尺。鐵葵も、天竺葵も、天竺牡丹も其外皆ひよろ〳〵と細い我家の人間も細長い、地に這ものは金蓮花の蔓ばかり。

▲二十二日。やよひ子病む、微熱あり、夕方、庭の花を剪つて小さな花束を造つてやる、姉の子は自分で造る。

▲二十三日。夜、人を訪ねての歸るさ、青山の緣日に植木店を見る、ある植木店の爺、人と喧嘩して遙か彼方に聲高に爭うて居る、いつまで待つても歸つて來ない、植木より喧嘩の方が大事と見える、好個の江戶瀟
カンテラの油煙に無花果の葉は焦んとするに。
女郎花二株を求めて歸る。
頃日來の齒痛、漸く烈し。

▲二十四日。齒ます〳〵痛みて、好きな草花に水を灌漑ぐ事も出來ない、早くより寢る、二三十分にして覺め其まゝ終夜少しも眠れない、煩悶また煩悶、堪忍し切れず痛い時は、痛い、痛いと轉び廻つてるより外に詮方はない、無理に抑へ附けやうとしたり、强て眠らうと努めたりした處で、人間だもの、肉の痛みは痛切に感ずる。

▲二十五日。終日北窓の風通し好き處で仰臥、新聞も讀まず、郵便も見ず、物も食はず、小さな鉢に白の朝顏が一つ枕頭に咲いて居る、うと〳〵とすると其れが白百合になり、白芙蓉になり、葵になり、又もとの朝

顏になる。

▲二十六日。午後に到りて少しく痛み薄らぐ、漸く女郎花を植てやる、女郎花は强い花だ、弱つた樣子は見えない。夏、植物に水を與へないのは人間が三度の飯を食はぬやうなものである、さるにても常陸の夜雨、頃日頻りに懊惱して食慾更に不振、三度の飯に箸を持つたことなく、曰く飯の匂と、醬油の香は鼻について堪らず、飯粒二三粒舌の上で轉がしては見るが咽喉へやる氣にならぬと、抑も何で生きて居るか疑問である。最も自分の方から食パンの柔かいのを小包では送つて居るが、常陸へ着く時分には堅くボロ〳〵になつて、飢たる旅人でも甘しとはせぬであらう、母あり、父あり、同胞一族あり、幸ひに心配する事はなからうけれど、食慾不振は、乾ける土に植られたる草花の如く、いかで萎れないであらう。元來が花守詩人の名を得たる君、萎れては困る。

▲二十七日。近所隣りでは奇麗に雜草を刈るが我家では餘り刈らない、他所では一本も殘さず美しく刈り取つて其れを毎日の仕事にして居るらしいが、我家では少々刈り取つても雜草は樹の根や、垣の根にいくらも生へて居る、必ずしも亦皆刈り取り挘り取らうとは思はない、茫々として夏野の如く生へても困るが、蟇の隱れ得られるほど、蟲の鳴き出す程は雜草も生へてあつた方が宜い、蚊が湧くから不可と細君の反對說もあるが、少し位の蚊には平然でもあるし、別に蚊を恐れない自分には其爲に雜草退治をやらうとも思はぬ。雜草の中には晝顏も咲き、蓼も咲き、つゆ草も咲く、これが東京の中央だつたらアスパルトか何かで叩きつけられて草は生へたくても生へない。

▲二十八日。青樹花の花は薄紫に美しく、松葉牡丹は黃と緋と、桔梗は白い、中に紫が交つて居やうとは思はなかつた。

▲二十九日。例の通り朝の時刻に女子文壇社へ出勤すると、社の前に朝顏屋が荷を下して居る。紅や、藍や、鳶や、茶や、白や、繪具の猪口を並べたやうて美しい。片影の町を早く賣り歩かねばなるまい、雜誌も早く出て、早く賣れるものほど美しいと思つた。













山中古洞先生選

懸賞當選圖畫（其十一）

(1)雲の峯　（二等）　失名

(2)夏野　（三等）京郡府下紀伊郡伏見町字京町大黒　星野とみ子

(3)子守　（四等）伊勢桑名町三の丸　加藤つたへ

(4)田植　（五等）名古屋市押切町七丁目　淺井こう子

(5)夏　（五等）佐賀縣西松浦郡　失名

（「雲の峯」「夏」の筆者は至急住所姓名報知をこふ）

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○あらぬ噂

岩代須賀川　服部貞子

女は縹緻よく生るゝが徳、お芳さんをご覧じろ、手桶さぐるも重そうなあの細腕に若旦那をまるめ込み、と言ひも終らぬに傍なる一人、ほんにつまらなきはこちとらなり、僅か二月ばかりの店賃の滞りを、差配のあの禿爺めが矢のやうな催促、同じ店に住み乍ら扶持米送らるゝ人さへあるものを。でも鼻の下の長き若旦那様。米淅ぐ手におのづから力のはいる荒々しさのとばしる水に面そむけてまた一人、でもよいさ／＼を止められたのが大仕合せ、あの地響に棚の徳利がころげ落ちて、二度まで砕いてしまひしと、芳といふ名のふと耳に入りて、柳のかげに我佇めりとも知らぬ人達のさがなき口々。口惜し、何事ぞあゝ其取沙汰は、知らざりき、知らざりき。かゝる譏を傳へらるゝ上からは、最早決してお世話にはならじ、今まではとてもお世話うくるが心苦しからざりしにはあらねど、瀕死の母の面影に打ち消されて、お惠うけたるが我あやまり、思へば心弱かりき。いぬる年、醫學士の冠を戴き給ひて、お歸國中の家主の若旦那様が、此度大きやかなる病院を建つるとて、きさらぎの頃より人足ども數多つどふ前なる空地、地固めする頃は、母の病もやう／＼に重りて、日毎々々の地響に顔顰め給ふを見ては、悲しう怨しう、見やらるゝはかの廣場、音頭の唄に和して面白げに張り揚ぐるかけ聲も、身にはたゞ腹立しう、呆然として佇める後に、面白くてかとのたまふ聲、驚きてふりむけば、たちますは若旦那様なり。つるべの縄にたつさはりて、仕事を見給ふお姿を、いつも凛々しと見上げまつるが常なりしが……折から奥に咳入る聲、病む人やあると眉うち顰め給ふに、赤らみし面を落ちたる小櫛拾ふにうつむきて、母がと答へまつれば、それ大事なり、いかなる様か我診て遣はさんと、早やたちつけ悪き戸に手をかけたまふに慌てゝ驅け上りてあたりの塵を拂ひつゝ出すに座蒲

園もなき恥かしさを、つゆみ心にもとめ給はず、やがて腕こまぬきて、かゝる容態にてはさぞやかの仕事は騷々しからん、明日よりは暫の間中止さすべしと、事もなげにのたまふに、驚きしといふはおろか、たゞお顔のみ打ち見戍れば、微に笑まれて、我父も今病みてあり、心する足音にさへ不興の聲聞くは度々なるに、かゝる重き病の身にはかの騷々しさは堪へざるべし、病にもまた惡るし。醫の道を修めたる我、わるしと知りてなし得べきや、人を救くるが醫の道にはあらずや。さのみ急ぎのことにもあらねば、あすより暫し中止すべし、且つは父の病む折から、よき功德にもなるべければ、と、ひとり心得て立ちあがり給ふお姿を、たゞ伏し拜み伏し拜みたる其明朝より、まことの廣場に人のかげは見えずなりぬ。それよりは足繁く母の病を診たまふのみか、苦しきたつきを早くも知りたまひてや、折々のおつかはせもの、受けざるも心苦しう、冥利がつきて恐ろしと泣く母もろとも、我も涙は絕えざりき。父と兄とにさきだゝれて、世に身寄りとてなき我等母子、せめて臺所の隅の水仕わざなりとして、一生を萬分一の御恩報じにつくしたく思ふ心は山々なれど、いかにせむ(二)あらぬ名をうたはるゝ口惜しさ、かくては若旦那樣の御身にもよきことあらじ、やがて奧樣たるべき美しき人の此町うちにありとさへ聞くものを、若しも流れ〳〵てそなたのお耳にいらば何とせむ、火のなきところに煙りはたゝずなどいふ言の葉の昔より傳り居るなるを。母の病とて今は癒ゆべき見込みもなし。いつまでかかくてあられんものぞ、さらば今宵此地を立退かんか、何處をさして行く身か知らねど……。

いつしか空は曇り來て、手桶の水に細かき波紋を描きぬ。ひくう飛びゆくつばくらめ、事なかばなる敷地をめぐりて、行末はいづく、彼に家あり。あゝ住むに家なき吾が身をいかにせむ。

（評）取材陳套を脫し、筆致に寸分の隙なく、悠揚として迫らざる裡に詩趣溢れたり、近來稀に見るの好文字。

四等

○妾の叔父さん

石狩國雨龍郡北龍村字和培本社　繪澤元子

妾は學校から歸つて來ると何時も裏の牛小屋へ行つて牛に草をやつたり背中をさすつてやるのが常であります、さうすると牛は喜んでモウ〳〵と言ひます。今日は土曜日ですから學校から早く歸つて御飯を食べてから例の通り裏の牛小屋へ行つて牛に草をやつて歸つて來ると裏座敷でお父つさんの聲で。

「夫れだから失敗するのだ止せ〳〵」

と言ひますから何んてしやうと思つて其所へ立つて聞いて居ると、叔父さんが餘り砂金探撿に心を奪はれて、親から讓られた多くの財產も何も使ひ果して今日はお父つさんに探撿費用を借に來て今しもお父つさんに意見を加へられて居るのでありました。

妾の叔父さんは何時も妾に砂金を採つて來て吳れる吳れると言ひますが、眞實に吳れたこと、否見せてくれたことは是れまで一度もありません。

てすから妾は朋友に何時も元ちやんの言ふことは悉皆ウソだ〳〵と言はれました、てすが妾は今までウソなどは一度も言つたことはありませんてした。

夫れてすから妾は、殘念で〳〵たまらないけれども、只涙を呑んであきらめて居りましたが、朋友にウソつきと言はれた恥は何時か洗い清めたいと思ふ念は去りませんてした。

それに就ても如何して妾の叔父さんに砂金と云ふものが採ることが出來ないのかしら。

妾はこんなことを思ひつゞけて居る內、何時かお日樣は遠く增毛山の頂上にかすかに光を殘して居りました

夫れから一週間程立つて或日曜日の夕方。

夏の臺　本郷　金井れん子



「ヤア元子喜んで吳れ、兄貴も姉御も。」と言ひながら、まるで氣狂ひの樣な聲を出して這入て來たのは、何時もお父つさんに小言を食はせられる叔父さんなのでした、叔父さんは今迄とは打つて替つた顏面には言ふに言はれぬ喜びの色はアリアリとあらはれて居りました。

夫れから叔父さんはお父つさんの座敷へ通つて懷中から一通の書物を出してお父つさんに示しました。

妾は傍て見て居りましたが何んだか妾にはマダ學校て敎はつたことのない六ケ敷い漢字計りて、始と末の方に朱の印鑑が押してありました、お父つさんに聞いて見ましたら是は叔父さんが後志の或る澤て砂金地を發見して、早速に北海道廳へ砂金地拂下願書を出した所が、早速道廳にて聞屆けになつて指令書が下付になつたのだともうされました。

叔父さんは十七の時から北海道へ移住して僅か四年の間に親から讓られた、多くの財產も何も使ひ果して、何所までも砂金採掘に心を込め、山に宿り谷に伏し、やう〳〵此度砂金の脈地を發見して、始めて成功のい

とぐちを開いたのでした。

その翌日叔父さんは八人の人夫と米や味噌を用意して後志澤を志して發足致しました。

叔父さんが立つてから丁度十日目の正午頃、何時も妾の女子文壇やお父つさんのお手紙を持つて來る配達さんが小包郵便と言つて小さな箱を置いて行きました。お父つさんと二人で開いて見ましたら、夫れは〱お母さんの指輪より美しい砂の樣なもので、是れは叔父さんから送つて與れた砂金と云ふものだそうです。

妾はその砂金を用箪笥の引出へ大切にしまつて置きました、餘り砂金ばかり見とれて居りましたので牛に草をやるのを忘れて終つた、

裏の牛小屋で牛の聲が、

「モウ〱モヽモヽヽヽヽ」

（評）幼き書きぶりに叔父君の喜びを側面より描ける、文に幼きものに非ず。

五等　○ある夜

三河　壽千代子

ゆくりなく連れ合つた寺男と云ふのに行李を持つて貰つて、心寂しく辿るのだが、胸は恐ろしさに戰きが絶えぬのである。

よく凪いだ夕で、月は出たが薄りと雲に被はれ、行手の雜木林の間を洩れて、霧に包まれた灯がボッカリと紅く一つ。今過ぎた村の方から、鐘の音が眠たげに聞える。

私は首垂れて歩み乍らいろ〱と考へるのである。―若し此男が直しく無いもので、自分の荷物を持つた儘、逃げ隠れるやうなことが有つたら怎う仕やう、萬一にも自分の身を辱かしめるやうなことが有つたら怎うしやう那の時は唯何とは言へぬなつかしさに、前後も考へず頼んだが、あゝ怎うかして貰ひ返すことは出來まいか、爾して此の男と分れる道は有るまいか、と思ふと少し後れて凝乎と樣子を見入つた突然开處の茅葺の屋並の間から、二人の姿を怪しんでか、火の付く樣に吠え出でた犬が一匹、不意を打たれて覺えず小走に男に倚り添つた。ハッと思つて飛びのくと、道は折れて、犬は後ろの方に吠いて居る。私は二度男を見入つた。五十になるか成らずだらう、地味な縞の布子の上へ、紺の鯉口を着て、しみの付いた白木綿の襟卷をしてゐる。夜目にもしるく所々汚れた白足袋を穿いて、頭には古風な頭巾を冠つてゐる。まさかと思ふと、氣が落ち着いて來た。

暫くすると「和尚樣とは何ぞお知合てすか。」「祖父の知つてる方なので、御厄介に成りに參りましたのでムいますが。」

「ちふと何とか言ひましたつけ……あの――學校の

先生様て。」「へゑ……。」「あゝ左様ですか、鳥渡も知りませんて、今日おいてるつて和尚様が言つて居ましたに、――はアさうですか先生様て、私の忰も行つてますだから、何分お頼み申しやす。」是れて疑は全然晴れて了つた。

心づくとあたりは一面の竹藪、折からのならひにザワザワと戰いてゐる。それを畚頭れると少し引込んで銀杏の大木が二本。「こゝてす。」と男が立ち止つて言ふ。哮として、山門の右手の竹の木戸から入つた。

木槿垣に添つて、梅の木の間を縫ふと、覇王樹の有るところが庫裏の戸口、寺男は大聲て。

「和尚様、和尚様。」「誰だ、濟兵衛か。」「はアー。」

「お待ち、今開けてやるから。」聽てどしりと框に下りた音、カラ〳〵と日和下駄の音が戸口に止まると、がらッと耳門が開いて。

「遲かつたのう。」「へい、和尚様御客様だ。」「どなたか。」耳門から顏を出して、「どなたか知らんが御入んなさい。」「和尚様、あの先生様においてるつた……。」

「あゝ鈴木さんか、ようこそ、外は寒いから御入んなさい、私はまた今日は遲いから、おいてぬのかと思つて居ましたに。」と云ひ乍ら、先へ立つて、上ると直ぐに据ゑつけた長火鉢の前へ座る。そこでかたの如く挨拶が濟むと、寺男が奥の方から座布團を持つて來て、

「お敷きなさい。」と言つて、和尚と向き合に敷いて呉れる、和尚はぽか〳〵と莨をのみ始めたが、旋てぽんと吸殼をはたいて、「待ちなさいよ。」と立上つて、戸棚から茶入れを取つて、急須へ少し分けて、「ハヽヽ不調法ぢや、是れは貴孃にして貰んだつた。」と笑ひ乍ら私の方へ突出す。七十恰好の眉が白く長い、色の淺黒い男で、身に白つぽい物を着てゐる。襯衣の紐扣が一つ落ちてゐるので、开所から毛のむさくさ生えた膚が覗いて居る私が茶をたて始めると、和尚は炭をつぎ乍ら、

「祖父さんは健全てすか。」「有難う、お蔭さまて……。」「それは何よりぢやーー、何歳かな。」「七十二て。」

「左様ぢや七十二も、這麽孫が有るのかなハヽヽ。」と大聲に笑つた。

それからは寺男と三人て四方山の噺、それも濟むと、和尚の案内て、特に自分の爲めに設けられた奥の間へ通された。そこは北に面した八疊一間で、加旃に床の間が付いて、粗末乍ら山水畫の屛風も立てゝある。

時計を見ると十時過ぎなので、行李の紐を解いて寢卷を出して、床についたが、さて眠ろうと思ふと、時計の時を刻む音が、耳について、とても寢着かれぬ。燈を消して强ひて眼をつぶつて見たが、瞳は異様に冴えて、愈々眠られぬのである。霎時すると、ザワ〳〵と物のそよぐ音、あんなに凪いで居たのに風が出て來たのか知ら、と思つてゐると、「それが次第に募つて來て、どーつと濤が海岸の岩礁へ打ちつけるやうな響を傳へる。

私は音の具合から色々と此寺の地形に就いて考へて見

た。若しやこゝの窓下が墓所であつて、それを廻る杉木立に風があたつて、あゝした悽い聲を放つのではあるまいか、果して墓所で有つたら什麽しやう、私は到底此室に堪へることは出來ぬのである、などゝ凝束ない想像をめぐらして居ると、不意に窓端で梟が啼きだした。ギヨッとすると、ばた／＼と羽音がして鎭まつて了つた私は冷水を浴せられた心地、不思布團をしつぽりかむつて、さて耳を澄ますと風は次第に靜まつて行く樣子旋て遠くて一番鷄の鳴くのが微に聞えた、風は凪ぎきつてそよとの訪れもない。

自分はとろりとしたと思ふと、戸の透間から日がカンカンと射してゐる。

（評）どこまでも女らしくてよし。

秀逸

○夜の留守居

小石川　山崎房子

櫻の名所小金井の村はづれ、玆に妾の親戚があるのです、過ぐる日こゝの叔母から櫻も見頃だから來いとの手紙に、幸ひ試驗休暇を好機として二三泊で出かけました、其の日は美しい櫻を案内されて日漸く西の森へ落ちんとする頃宿に還りました。

還つたはよいけれど妾は此の寂しい田舍家にしかも一人の留守居を頼まれました、東京と違ひ夜になれば四面暗黑一つの燈火も見えません、たゞ天空に輝く星の光、遠き／＼水田の中の鎭守の森に淡く光を放つ神の燈火ばかり、寂しくてたまらず戸障子かたく建てこめて一人女子文壇を繙くのである。

夜は音も無く靜かに更けて行く、カラコ／＼と鳴く蛙の聲或は高く、或は低く、或は消えんとして又高く背戸に當りてギー／＼となるはねつるべの音、定めし隣家の娘が野良還りの足洗ふ水をくむ音であらう、都そだちの妾には身の毛もよだつ程さびしいのです。

ハテ何時かと燈火かきたてゝ時計をみればハヤ十時をうたんとして居る、ア、何うして斯く遲く迄還らないのだらうと獨り思案にくれて居る時、突然表戸の開かる音嬉しやと出て迎へれば、コハ如何に叔母にあらで顏も見知らぬ五十斗の眼をギヨロ／＼さした眞黑な大男顏を半分内へ入れて唯ギヨロ／＼とあたりをみまはすのである、妾は餘りにうす氣味惡るく、言葉も慄へながらどなたですと言へば彼れはドラ聲もて『だれも居ねえのかい－おめえさんは東京のお客かい－外ぢやねえが此の筍堀つたから持つて來たゞ－よく言つてくんねえ』と持つて居つた筍を下へ置いて、ドンと戸を閉てあとは音もなく還つてしまつたときに村の若者が

二三人寂しげに馬方節をうたつて、背戸の細道を行くのである。

（評）歸つた後でホツと一息。

○日記の一節（四月三十日）

三河　くに子

今朝は常よりも早く起きた、牡丹が二花開いて居た、今日は月末だから女子文壇が來るはずだ、此度は多分出てゐるだろうと、それを樂しみに、桑畑の中で母と二人で精出して働いた、五時頃畑から歸つた。女子文壇が來てゐたから、直ぐに一枚一枚繰つて見たが自分のは見えない、之れはふしぎだとまた繰りかへしたが自分の名に似た名もない、自分はやけになつて雜誌をほうり出した、が、それてもと思うて、もう一度心をおちつけて繰つて見たが、あゝ、やはりだめだつた。藤棚の下が暗くなつた頃、不快でならぬから夕飯も食べずに、ふらりと前の堤に出た、空は曇つて來たがまだ降り出しはしない、直ぐ前を流れて居る水も常とかはりはない、月見草も昨夜の樣に見て居る間に奇麗に咲くが、なんだか少しも面白くない、此度こそはと、あれほど熱心に綴つたものをまたも沒書、あゝ、とても筆持つ資格の自分にはないのだ、今日からは筆も捨て紙も破つて、鎌と鍬とを今までよりもなほ忠實に持ちませう「詩を作るより田を作れ」と昔の人の云うた事の、まことにさうであると想うて暗き水面をながめて立つて居た、耳を澄すと、遠くから蛙の聲が眠むさうに聞える、月見草は足下にある花程明らかに點々として順にうすぼんやりと見えて居る、空を仰ぐと、月のある所だけが雲の一部分黄色である、もう歸らうと、月見草を一枝折つて、家の方へ歩るき出した時右手の鎭守の森の方で時鳥が鳴いた、妾はなんだか面白くなつて來て、先きに捨てようと思ひきめた筆を、またとつて見たくなつた。

時鳥はまたも一聲わが頭の上で鳴いたがどちらへ行つたか知れなかつた。

（評）此景に接して誰か詩をおもはざらん。

渡船場　下總　馬場美千代



○比叡

京都　武田つゝじ

東北の一隅、白雲を抜いて永劫に我が桓武の帝都を守護する比叡の峯、優如たり威如たる其姿、玲瓏として紅塵を抜いて、いやが上に高し。

仰がずや諸人、崇高なる叡峯。

我と同じく人の世の冷き笑みに迎へられ、欝勃たる憤

悶を胸に抱くの人、來りて仰がずや。
慰安と平和を偉大なる胸底深く秘めて、巍然として雲表に屹立する秀峰。
さる時は汝等が胸裡に充滿せる憤怒と邪氣を洗うて、彼は清き鮮血を注ぐなるべし。
渾濁なせる現世の潮流に押し流されて、漂々落魄に泣く敗殘の人、來りて見ずや。
罪惡利慾の巷を脚下に踏まへて、美しき慈愛の微笑みを浮べて天そゝり立つ靈峰。
さる時彼は偉大なる胸奥を開いて、汝が枯れし胸に温き慰安を注ぎ、汚れし汝が耳に新しき希望を私語(さゝや)くなるべし。
智巧に偏し、情操を棄斥し、徒に私慾主義、功利主義を之れ事とする物質的なる現代の文明に飽きし者は、振り仰がずや。
紺靑なせる大空に立ちて、山江の境を爲せる雄渾なる大嶺。
さる時汝心胸に欝結せし不平も早や無く、妄想既に消えて偉なる自然の清淨に解かるゝを感ずるならん。
あはれ世の人來りて仰がずや、崇高にして清淨なる、幽邃にして神秘なる叡峯の靈姿、彼は常に自然の恵を汝が心緒に與へて止まざるなり。
平和と希望と慰安に充ちたる比叡の峯、永劫に雲の帷を破つて微笑み立つる比叡、汝は吾が古き都の守なれ世の人の慈愛の母なれ。

（評）整はぬ節はあれど文に力あり。

○理想の住居

大阪　滿壽美

所は東京近在、後は山、前は廣々とした野面をひかへて、家は南うけの見晴しよく、庭はさのみ廣くなくとも四季折々の草花だけは絶やしたくありません、背戸にはこれもほんの僅の菜園、家内三人が日々の野菜類に事缺かねばそれで澤山です。

さて家は玄關、客間、居間、及び廊下傳ひに行かれる離れ座敷、これは弟の書齋にいたすつもりで御座います、客間は冬は敷物をしきつめて、夏は疊のまゝ、椽側には腰高障子をはめ、掛け物も置き物も挿し花もすべて皆清楚を尊びます、居間に西にれんじ窓をあけて其下にオルガンを据ゑます、南を庭にして此所は中ガラスの障子を入れて書類は皆書齋に置きますから、此所の小さな机の上には只硯筥と一二冊の詩集雜誌などをのせて置きます、壁には知人の寫眞や美しい繪葉書などかけるも樂しみてせう、弟の書齋は三方ともスリガラスの障子で、書棚、机、椅子、ソーフアーなどの配置は弟に任せます、湯殿は少し廣くとつて普通の石風呂にいたしたう御在います。

疊と障子とは何時も新らしく掃除を奇麗に行き居かして心地よく、そして頼もしい弟と親切な婆やとの三人で主人公として思ふまゝの生活を試みたいので御在います、時折には弟の先生やお友達などをお招きして御

馳走をし、活潑な面白いそして有益なお話をいたしもし承りもして樂しみたく、學校のおやすみの時などは、長い時は御兩親の御機嫌伺に大坂迄、短い時は江の島や日光あたりへあそびに出かけます。

斯くして私は人樣からは何の制裁をも受けず靜に愉快に弟の成業を待つ、これが私の切實な理想なので御在います。

（評）想像しただけでも愉快です。

○電車の中

近江　今村野百合

三條で腰の曲つたお婆さんが乘つた、三年程前によく流行つた模樣の、大きい信玄袋を右手に大事さうに抱えてゐる。妾は側に置いた紫包みを膝の上に載せた。「お婆さん、此處にお座はんなさいまし」「へい〳〵御親切さまに」お婆さんは叮嚀にお辭儀をして、妾の側に腰を下した。

「貴女何處まで」簡單に車掌が尋ねると、お婆さんは復た頭を下げて、「へい〳〵五條まで」と應へた。

「三錢です」お婆さんは懷から大事さうに、赤い大い財布の裡から、銅貨を摘み出して車掌に渡して、青い切符を貰ふ。

「動きまあす」車掌が恁う言つてモートルを廻すと電車は走り出した。

「お婆さん五條へ入らしやるの」と尋ねると、「へい五條の娘の嫁つてる芳川といふ家へ參りやす」尋ねもしない親類の苗字まで言ふので、まあ罪の無い人だと座ろにほゝ笑まれた。

電車は五條に着く、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀ぶ」婆さんが低い聲で念誦しながら降りて行く。

入れ代りに可愛らしい水兵服の子供が、母らしい人に連れられて上つて來た。

「動きまあす」「動きまあちう」水兵服が車掌の口眞似をする。「まあ、俊ちやん」母なる人が口では笑みながら目許で睨む。「かあちやま」水兵服が甘へて其の膝にもたれ掛る、今叱つた母樣は、水兵服の帽子の上から頭を撫でゝゐる。

妾の丁度前に腰かけて居た鳥打帽が、今日の萬朝報を見て居たが、讀み終てか四つに折つて懷ろに容れて、「駄目だ」と獨りつぶやいて窃と欠伸を洩らす。

「七條の方は有りませんか、七條降り、七條降り」其聲に氣が附いて、妾は紫包みを手にして電車を降りる。パッと辻のアーク燈がともる、目が覺めたやうに町が蘇つて來る。

（評）好スケッチ。

○武ちやんの足駄

金澤　山本よね子

武ちやんといふは、今年三つになる可愛らしい弟である、今朝いつもほしがつて居る小さなつまがけに毛のついた足駄を買つて來て見せたところが「武ちやんあ

んよ武ちやんあんよ頂戴」といつて、とびすがつた、早速渡したら、よろこんで〳〵其うれしさうな顔といつたら、とても〳〵こんな拙ない筆にあらはすことが出來ません、武ちやんは、すぐにそれをはいて、廣くもない家内中をかけまはつて居たが、やがて兄さんの帽子を見つけて、俄に自分が背高くなつたから兄さんのやうになつたとでも思つたのか、其帽をとつて呉れとて聞かぬ、止むを得ず、とつて上げたら、すぐかぶつて、兄さんのずつくかばんをかけて、わざと玄關の方から來て、只今、といつて眞面目な顔で挨拶した、餘りのをかしさに、武ちやんどこへ行つて來たの？といへば、學校、といつてすまし込んで居る、皆が大笑して居る處へ叔父樣がいらしつた、一番先にちやんとおじぎして居るから、よく見れば、足駄はいてすわつて居るので、また、どつと大笑がおこつた武ちやんあんよ、とつとして、おきなさいね、といつたら、はーい、といつて仕末しにゆく、どうするかと見て居たら妾の本箱の上にのせて知らん顔して居る、をかしくてたまらず、姉ちやんがい丶方へとつとして上げませう、といつて本箱の上からおろしたら、さあ大變〳〵武ちやん、まつかになつて、姉ちやんあんよとつたア、といつてわめきたてたので、びつくりして渡すと、手にとるが早いか、さつさとお祖母樣の膝にかけついた。足駄を兩手でひしと抱へながら、いつのまにか、膝の上で、すや〳〵……と、今頃は多分あんよの夢でも見て居るでせう！

（評）アレ姉ちやんがあんよとつた……ムニヤヽヽヽ。

○野の夕

茨城縣　小泉榮子

一日私は、とある丘の上に寢そべつて、例の取止のない空想に耽りながら、徐に時の移り行くのを眺めてゐた。と、季節を忘れたのか、其處らの雜木林の奥あたりで、世間を知らない鶯が、低い顫へた聲で途斷れ途斷れに啼いてゐたが、まるで老人が歌でも謠つてゐるやうな、淋しい、元氣の無い、寧ろ氣の毒の樣な聲であつた。其で聞いてゐると、何となく悲哀の感が滿ち渡つたが、自躰何が悲しかつたのか、自分にもよくは解らなかつた……、が、或はこんな事であつたかも知れぬ。人といふものにも盛りがあるものだから、何時か一度は私も鶯のやうに老いて時の過ぎ去つたのも知らずに、妾と聲を涸らして居ながら、其でも人の耳に入らずにしまつて、空しく時の爲に葬られて了ふ………、といふやうな事がありはせぬかと考へ出して、其て耐へ力も無く悲しかつたのかも知れなかつた。單調な、繼續した、眠いやうな水車の音に背を叩かれて、つい、うと〳〵として、危く頰杖を突外さうとしながら、爽快な幻影に胸頭を揉られて、まるで醇酒にでも醉はされたやうな心地……、ほんの少時であつたけれど、私は非常な幸福な者にでもなつたやうに思つて、

と云つて何が幸福であつたのか解らぬけれど、兎に角心はもう蕩々としてゐた。幻ながら、誰か彼方で美しい聲に歌つて居るものがある、ふと我にかへつて眼をあいて見ると、四邊の風景は恐ろしく變つてしまつてゐた。手に持つて居る筈の、ロングフエローの詩集も何時取落したのか、無慘に草の中にうつぶせになつてゐた。

日沒には既も間があるまい。遙か野末の山の端には日が熾に夕燒けして、今日の最後の景色を呈してゐる。其の影を受けて、銀のやうな光を放つて居る小流れやら欝々した翠りの林やら、其の間に若葉に低くなつてゐる古風な藁屋根やら、植付が濟むだばかりの疎な田面やら、もう黄ばみかゝつた麥畑やら、町中に轟々して居る高樓の白堊やら、町の一端を繞つてゐる笛吹川の高い堤防やら、すべて目に入るものは、うつすりと、紅さして四邊は一と時眼の覺めるばかりに映映しくなつた。大氣は鮮に透つて、靑々として滴りさう。

見上げると、杳な深碧の大空には、此處彼處眞白な雲がゆら〳〵と動き出して、大きな手を廣げながら、徐かに天上の平和を攪き亂さうとしてゐる。私はいつも午後になると此の丘の上の緑滴たる槐樹の蔭に横たはつてゐるので。

「勤勉者‼　春は過ぎて夏は來れり、すべての勞働を秋に殘して快樂を以て、森の中に、草の野に、あるは
　自己の好むところに休め‼
　休みて寢ねて終日を過ごせ。
怠惰者‼　春はすでに過ぎて夏は來れり。平素の勞働を補ふべく、次に來るべき秋を思はずや。勉めよ、勵めよ、以て寸時も怠る勿れ。勉め勵みて終日をすごせ。暑中の休みは怠惰者のためならず、終始、勉め勵める勤勉者への賜なり」とうたふ聲がありありと聞えた。



風船玉　矢名

川堤に牛を追ふ牧童の影があらはれ、あたりは淡紫の暮靄こめて、廣々しい野邊は淡として夢の樣である。

（評）冥想的なる所に取るべき點はあれど、餘り説明を加へ過ぎたる爲却つて趣味を殺ぎたり。

○夕雲　　羽前　緑星子

暑い息を終日下界へふき下した、太陽も、今日の勉めが終つたので、西

く山の彼方へ行き休息するのであらう、赤い〳〵眞赤な顔で明日も今日の樣に、と云はんばかりな顔をして山に入つた。

空は殘れる雲に名殘の光を殘して、美しく〳〵色どつて居る、雲も名殘を惜むのか種々の形をして居るさながら天の岩戸の前で、八百萬の神の舞をなすが如くであつた、然しもう少しも御顔は出さなかつた、南の方に重り合つて居つた夕立雲も、俄然泣き崩れて、涙雨をしきりに降らしてをる、東山に棚引き居つた一帶の雲も、何處となく消え失せて、影だにとゞめなかつた、たゞ大空の中央に大なる鯨の如き形をした雲が、まだ太陽の餘光を下界へ放つて居る、西の山の上へ、一つの白雲が出て來たが、見る〳〵兩方へ細く長く延びて山の頂に破つた。

それと殆んど同時に中空の雲は影をかくして終つた、後は夕風の涼しく吹き來つて、下界は暫時に暗くなつて行く、西の山の雲の少し上には、夕の星が一つ大空にわがもの顔に笑つて居る、月はまだ出ない、二三の淡き光の星が見え初めた。

心なく見れば雲はやはり雲である、雲は心なく空に變態を呈するものであるが、破れたる笠を傾けて望んでは旅情を引き、客窓にながめては鄕を思ひ、遠征の將士には感慨が胸に充つるであらう、山を抜く如き力氣世を蓋ふ如き英雄も爭でか涙なからう、天文者は之によつて天候を卜す、吾れのかく筆取つたのも、雲の爲めに惹き起されたのである、嗚呼無心か有心か、夕雲よ。

○夕の散歩　兵庫　ゆき子

晴れしとにはあられども、おとゝひよりの大風もはたと止み、そぼ降る春雨も、名殘りなう晴れて氣も心もそゞろにすが〳〵し。

二輪三輪さては一輪取り殘されて麗しかりし櫻の花、はたまた、今を盛りとおぼつかなくも優しく笑めりし藤の花も、あはれ一夜の風伯に嘗め盡されて、束の間に若葉の世界となり終んぬ。

晩餐後海岸に散策を試む、練りに練り晒しに晒されし白沙は、あたりの綠とてりはえ、松吹く風は波と調べを合し、淡路の島山手に取るごと靜かに金波を打ち寄せ、恍として仙境に遊ぶが如し。

沖に浮べる漁帆片帆かぞふるに暇なく、漁り舟海面をおほへり、貝拾ひ藻摘みし濱の子も、今は影だにとゞめず、幽かに網引きの節をかしくひゞく。

美髯の紳士遊女を伴ひて、此神聖なる濱邊を逍遙す、晩鴉は頭上に嘲を殘して、塒に急ぐ。

我も亦、興つきて、假の宿に歸る、長閑なる春の日は、將に錦江城頭に暮きて、夕づゝ一ッ紅なりき。

○笛吹男　越中　地崎竹子

物の哀れは秋こそと、我れ人ともに言ひ合へりしが、さて思へば哀れは秋のみにはあらざりけり。

過ぐる日そゞろ歩きの時なりき數多の人の集へる中より、やさしき笛の音聞ゆるに、我れにもあらでさしのぞけば三十路にあまる盲目の男の子が脇目もふらで吹きならすなりけり。

やがて件の男は笛の音をやめてあたりを見回し、お情ある方の御手の內、思召の御報謝に預りたしと言へば今迄取巻き居たりし數十人はくもの子を散らすが如くやがては見えずなりぬ、男の子はしばし恨めし氣に送り居たりしが、何思ひけん淋し氣に笑みつゝまた吹かむとす。

この有樣に我れにもあらで進み出ていさゝかなる端錢を與へつゝやよ汝のたへなる其笛の音をもて、如何なれば情なき人の合力をまつぞと言へば、仰はさる事ながら過ぐる日露戰爭の時流彈の爲足を折り去年よりは亦目もしひたり、今は一歩もあゆみ難く身も世もあらぬ心地ぞする、生ける甲斐なき身にはあれどしかすがに此世のえにしはつきぬなりけり、よるべなき身はせん方もなく今は僅になれたる此笛をもて露命はつなぐも夏の暑さ冬の雪に絶え入る事も度々に候、と打萎れてぞ物語るなりき。

あゝ花を見てさへ、袖を絞る多情の人達が、如何なれば己が同胞の一人にして生きながら我飢道に陷れる、此不幸なる笛ふき男には涙をそゝがざる、つく〳〵思へば世は末なりける。

○そゞろあるき　群馬縣　あかつき

讀書に倦いた私は庭下駄突き懸けて當もなくさまよひ出た、柳が五六株

植ゑられてある、こんもりした小枝の中をみそさゞいが一羽飛び廻つて居る、何だか一寸考へる樣な眞似をして居るかと思ふと向ふ側の藪の中へ姿をかくした、鉛色して居る水はゆるく微妙な音を立てゝ流れて居る、其の流れの一番ゆるやかな所に數へきれぬ程目高が集つて泳いで居る、足音に驚いてか急に亂れ散つて深みへ姿をかくした。

なかば崩れて居る土橋を渡つて細道づたひに裏の田甫へ出た、此處は皆、自分の家のだ、麥は今三四節に成つて居て滴たらん計りに青々として居る、蒔いてから私も二三度手入れしたのだ、自分の家のだと思ふ所爲か慾目かは知らないが他の家のよりは好く見える、蒔いた時には隨分骨が折れた、忘れもしない六月後の昨日丁度十一月の七日であつた、所々にふはついて居た時雨雲が重り合つて何か大あらしでもして來さうな空模樣、それに冷たい寒い赤城颪が交つて居て、肌も氷るかと思ふ樣であつた、今では唯にこんなに莚や、れんげ草がはびこつて居て、時得顏に吹き亂れて居て、蝶や、人々を喜ばせて居るけれども、其の時分はまだ、莚や、れんげ草などは影も形も見えなくつて、處々に枯草が音を立てゝ居つた計りであつた。降られては大變と朝飯前から蒔き初めたのであつたが其の時に私は加燐酸石灰の交つた穀肥の重いのを、大きな笊に入れてそれを荒繩のふといので肩から斜に胸へ懸けて施肥したのであつたが、足どりは惡るかつたし、手は凍るかと思ふ樣であつたが懷手する事は出來ないし、火にあぶる暇はないし、其の苦しかつた事は實に涙のこぼれぬ計りだつた、其の時は斯んな骨の折れる百姓なんかはやめたい、なんぼ先祖傳來の職業であるとは云へ、何にも百姓で一生を送られねば成らぬと云ふ譯ではないのだから、と考へた、それもまだ昨日の樣に思つて居るのに、もう三四節になつて穗が少しくふくれて居る、今一月もたつたならば鎌が入れられるだらう、さうすれば直ぐに田植だ、私は田植が大好き、白手拭て姉樣被り、其の上へ饅頭形の白い背笠を被つて、それに紺の手甲掛て、あの田植歌の上手な信さんや、お芳さんと一處に樂しく歌ひながら植ゑられるのだもの……それももう近い中だと思ふと、何んとなく嬉しい樣な氣持がする。

畔一重向ふは油菜が植ゑられてある、矢つ張り自分の家のだ、今は晩菜の花が眞盛り何んとも形容の出來ない香ひが、麥の上を丁度青波の樣な形して渡つて來る春風に誘はれて來る、其の上に蝶や蜂が數へきれぬ程、微妙なさながら天の女神の彈く樣な響を立てゝ樂し相に飛び廻つて居る。

突然、唱歌が聞え出した、と見ると十二三の女の子が二人菜の花の中に現れた、手に籠を下げて居る樣だ摘草にでも來たのだらう、此方へ來る、近づくまゝに好く見れば肩先から裾一面黃色に彩られて居る、大方鬼事でもしたんだらう。

私は嬉しい樣な、面白い樣な妙な心地に成つて、野面を見つめたまゝぢつと立つた。



商家のうら　琵北　石原感子

○夏の山　神田　田中常子

光のどけき春の花は靜心なく散りて、九十の韶光うたゝねの夢とすぎ、新緑若葉の漲溢らむとする夏の山!!いかなる蒸し暑き夏の炎威もこの山には入りも來らず。夏山はげに夏の命なりけり。もし夫れ木眠り、草萎れ、天かける鳥も息ぶき絕えし水無月の空、一たび此夏山の緑の蔭に來り見よ。清泉滾々として岩根より湧き、薫風新葉の霧を吹き來りてそこにパラダイスを見出さむ。あはれ夏山よ、汝を越えて一里行けば、わが戀しき母君います、汝がその清き涼しき風を送りて、母の生命と、健康とに貢ぎくれずや。

○寄宿舍の夕べ　福岡縣　永野吉子

夕食なすまして唯一人花園に歩を移した、寄宿舍のつゝじは今が盛り、學友の山田さんの白い手が枝にふれた刹那、紅の花びらが芝生の上に點々、永野さん短い花の命を少しても縮めるのは可愛さうてはありません

か」と三年の昔小學校の花園で紅のつゝじに見とれ、たまらなくなつて手を掛けた時、優しかつた新林先生が私の眉に手をおいて御諭し下さつた時の有様がありありと目の前に浮ぶ、山田さんは美しい一枝を手にして彼方に去る。

入れちがひに來たのは同室の春邊さん、惚とりして少しづゝ近よつて行く、あの手がどの枝にふれるかと私の目は其方に結びつけられた、思ひきつて一歩近よつたが手はふれなかつた、つゝじは元のまゝ平和である、手折るべく近づいた瞬間、春邊さんの胸には新林先生の樣な優しい感情が湧いたのであらう、紫の袴永くしとしとと若草をふんで行く後姿なつかしく、今日はしみじみと眺めた。ぼんやりして居ると、テニスの選手の吉川さんに手を取られて運動場に出た、しかし人ごみの中には居る氣にならず、又裏の小川へと歩み去る。

年に一度もかまを入れぬ向ふの土手には、青草が憚なくのんびりとして限りなく目を慰める、彼方にたゞずんで居るのは中山さん、涸戀らず只一人の物思ひ、私と同じ境遇の孤子で、憂を含んだ目なざしの同情よせずにはゐられない、花びらはむしられた牡丹の一枝をもつて小川の流れを見つめて居る、其視線をたどると白牡丹の花びらが三つ水草に止められて波のまにまにゆらりゆらり。

花を小川に流して眺めて居る中山さんの小な胸にはどんな思が湧いて居るであらうか、くしき浮世の運命でもうらなつて居るのではなからうか。

入日の匂ふ森から飛び立つ夕鳥と運動終りの鐘とは同時に寂莫を破つた頭を上げるとたん私を見出した中山さんは驚きの聲あげて近づいて來る「何をかんがへて居らしたの」「私しホヽヽヽつまりませんわ、あなたこそ何して居らしたの」「あなたを眺めてました」「いやな永野さんれ」さ行きませうと二人は鳥の群を仰いで手を取つた。東の森から夜の色は次第にせまつて來る何となくたのもしい感じにうたれ手を引きながら寄宿舍にと歩をうつすのである。

○夏の花

長崎縣　芳子

一

伏屋よりのぼる白き煙の末には朝の月みえて、そが靜かなる淵の面にう

つれる、またなくおもしろし、手拭かむりし草刈の少女、おもたげに露草せおひてすぎゆく。知らずてか、山吹の花一枝まじれり。

二

嶺はおち眼はくぼみて、うるはしかりし花の姿も、むかしの面影をとめず。

夜はふけぬらし、里の小川峠の松風、音さえて、西の戸もるゝ月のかげ、いまはの妹が青き顏をてらしぬ。せきくる涙、おさへがたくて、おのが室にかへれば、かれがうゑにし鉢のあやめ草、殿に匂へり。あはれ、この花、やがてはちらん運命としも知らざるか。

三

新綠雲をかくすみ山の奧、苔ふるき岩間を銀の玉なす谷水に、森姫の涙の凝りか、白百合の花の姿すゞしく水かゞみなせる、げに風情あり。人里遠き靜寂の境に、あした森の鶯と語り、ゆふべ山の精とあそび、野の子の手にもふれざるさ百合は、げに清きものなるかな。

四

あしたとく起きいづれば、兄君が心づくしの朝顏の花つゆをふくみて咲きそろへる、目もさめんばかりなり、ゑがほもゆたかに、妹のよりきて、いたづきの兄君に見せばやと、しろきかひなのばして、紫なるをつまむとすれば、露ほろゝ顏にちる。折しもあざやかなる朝日かげ、みどりの森を透きて、さつと彩りぬ。げにこの世のさまとも見えざりけり。あはれ、朝顏のはえ、たゞつかのまなるぞいとはかなき。さあれ、牛にはまれ馬にふまれてながらふる野邊の雜草よりも、花やかに一時をかざりて、契りけん露とともに潔くしぼみゆく朝顏こそ中々に望ましけれ。

五

早少女の歌もいつしかたえて、弓はりの月山の端にゐはし。夏の夕風心地よきまゝ城跡のほとりをさまよひつ。門はくち壘はくづれて夏草のみ所えがほに生ひ茂り、濠はなかば水田となれり。露ふかき草原かきわけてゆけば大きなる池あり。やんごとなき公達、春のあしたは綸をたれ、秋のゆふべは月をめでてけんこの池、今は問ふ人もなくて、昔をかたる蛙のこゑのみぞ、うら悲しげにきこゆなる。

折しもほとゝぎすの、胸もさけよとなきすぐれば、青葉の雫はら／＼とこぼれて、池の面に波の輪を描きぬ、あはれほとゝぎす、夢と消えにし榮華のあと、弔ふ若き子のこゝにありと知れりやいかに。

月はいつしかおちて、燦然たる星の花池のそこに咲けり。いざかへらばやと、ふりむけば、あれはてしあづまやの軒下に、卯の花の、あたりもあかるきばかり、ましろにぞ咲きみだれたる。

○夏の野

石見　石橋浪子

櫻の花は散つた、新綠の香りがなつかしい餘り、ぶらりと郊外に步を運ぶ、眞晝の光がきら／＼と眼を射て、まぶしい、其所此所に愛らしい少女の白いリボンが見えて、唱歌の聲も遠く近く、向ふの小川のほとりの松の木蔭には麥わら帽の男が餘念もなく釣を垂れてゐる、岸には遲咲きの山吹が風の吹くたびほろ／＼と黃色な花片を水に散らす、麥うらしが傍の一本松てしきりに鳴いてゐる、涼しい風はたえず自分の袂を吹く、爽やかな空氣の裡に覺えずうつとりとした。

○待合室の一時間

上毛　千鳥子

私は今ぬれねずみのやうになつて大間々行の汽車に乘るべくこゝ桐生の停車場へかけて來たのである、時計を見ると丁度一時間はやい、そんな譯は無いがとまた見直したがやつぱり早い、こんな事ならもつと休んで來てもよかつたにと、待合室へ入つて腰掛けた、十三四の女生徒が多勢來た、多分今日の展覽會見物であらう、どこの人か知らないが生憎の此大雨てさぞ御難儀であらう、小山行の汽車が來た、乘客はどや／＼プラットホームに出る、生徒も出た、話の樣子が小俣らしい、先生の御骨折は思ひやられる、汽車は出る、大變ひつそりしてしまつた、今迄氣がつかなかつたが、自分の側にあまりきれいてないと云ふよりは寧きたないと云つた方が相當して居る足袋跣足て手織木綿の着物同じ物の袢天にそれても手拭ばかりは新らしい、小さい生黒い風呂敷づゝみをお婆さんしよつてあたりきよろ／＼ながめて居る、「あゝくやしい今出た處よ」と二十才位の婦人と十四五の妹らしい二人連、大方小山行にのりおくれたのであらう、私の後へ來て頻に口說いて居る、中學生らしいのが七八人來た、金剛杖見たやうなものを持つて山へても登つたらしい、此雨の降るのに、せつせと何か話して居る、見るともなしにお婆さんを見ると、胸をひろげてかいて居る、私を見て「姉さん伊勢崎へ行くのはまだかね」「いえもうぢきですよ」「あゝそりやよかつた、わしや連衆はれいし、困りましたよ」「私達と一所に乘ればいゝのですよ」「はあそうかねえ」このお婆さん奉公に出して置く孫のところへても行つたのであらう、向ふの方には父親らしい人と色の靑白い二十二三位の女が居る、顏色の工合と云ひ、荷物の大きさと云ひ、どう見ても此近邊に居た機織女らしい、年期があけて父親が迎ひに來たのてはないか、そう思ふせいか、何となくうれしそうに見える、先の二人連は御手玉をとり始めた、中學生らしいのもずゐ分さわがしい、女が三人寄ると姦々しいと云ふさうだが、男が七八人寄つたら何と云ふだらう、袴をつけたのが三人來た、京都がよかつた旅順がよかつたと云ふのは正しく展覽會見物の人てある、あちらのすみてはお辨當つかつて居る、こちらの方では、かすていらをむしや／＼食べて居る。

切符を賣り出した、私ら赤を五枚買つてくる、お婆さんも行く、皆荷まとめにいそがしい、婦人の二人連ばかりは悠々としてまだお手玉を取つて居る。

「わしの切符切つて下さい」お婆さんまだあまり乘つた事がないと見える、そばの老人丁寧に敎へて上げて居る、よくわかつたと見えてほくほくして居る、すると又「伊勢崎へ行きなさる方どけえ御座らしつた」これはきつと私がさつき云つた言葉を、誤解して私を尋れて居るのであらう。

やうやく汽車が着いた、約束した譯てないから私はお婆さんにかまはず



留守居　　紀伊漣月子

先へ乘つてしまつた、機織女らしいのも同車であつた、學生はすぐ次にお婆さんもそこへ、これでお婆さんも安心したであらう。

○螢狩り

鳳城　や　ま　川

五月二十七日の夕べ、妹を連れて螢狩に出たのである。夕風さら／＼と鬢の後れ毛を嬲ぶつて、日中の暑さはどこへやら、袷一枚では寒いよう。人氣絶えた小路より金剛川に出れば、半熟した麥の香冉々と迫まり、潺潺たる流は月光を碎いて、川上遠く白鷺が纏れ／＼に上つて居る、月は未だ鎭守の森を離れぬ。螢來い／＼と遠くから呼ぶ聲がして、孫であらう十才計の子供に紙袋を持たせた爺樣が下つて來た、水吹いた袋は朧夜の星のよう。自分は妹に籠を持たせて、草を分けて捕るのであるが、仲仲思ふように捕れぬ、手を出せば光りを隱くしてほろりと落ち、葉末から滑つて水に流るゝもの數疋。一疋捕る中に妹が次のを見付けておいてくれるが、一天瑠璃の如く澄みきつた空に十六夜の月が三千里の外も照してゐるので、露の玉の燦々と光るのを間ちがへて指すことが幾度やら、其度每に二人ともに笑ふのである。畝代の上を大きなのが縱橫に飛び廻はつてゐる、男の子は尻を捲くり追ひ廻はして居るが、百姓こそ迷惑なもの、彼等は一粒の米も額の汗から成ることを思はないのであろうか、我こそ佐々木、梶原よと川に乘り入れて向ふ岸のを捕る氣速者もある。あんな螢が慾しいと妹の天を指したので、仰いで見ると、金星が輝いて居るのであつた。月は少し森を離れて天地水の如く、入面山の裙を一帶の薄霧が罩つて、淡煙糢糊と夢でも見るよう。草露冷やかなので妹が若しや風でもひいてはならぬと思うて明日の晩を契り歸途についたが、ふり返つて見ると、黑法師が右に左に跳せちがつてゐる、螢來い來いと！。

○夕立

群馬縣　小　暮　た　つ　子

北山の一隅に、蟲々とした黑雲現はれ、遠く幽かに雷の音聞ゆと見し間に、滿天かきくもり、豆のような雨が降つて來て、霹靂一聲、天地も裂けるかと思はれ、其のものすごさ、何と言うて好いか言ひようがありません、そろ／＼雨戸をしめ、佛前に香をたき、かやをつり、其の中へはかり、各々蟲ばら、蟲ばらと唱へながら耳を塞いて、一時間ばかしたちますと、だん／＼雷の音も遠くなりましたから、起きて見ますと、家中六人が、一とかたまりになつて居りました。

もう雨もやんだらうと、かやから出ようとしましたらピカ／＼と、光がしました、驚いて中へはいり、耳を塞いで居りましたら、幽かな音でした、「何だ馬鹿／＼しい」、さうかうして居るうちに、雷はをさまる、雨はやむ、夕日が窓に紅うさしましたので、思ひ出したように、庭へ出て見ますと、草木が生れ變つたように青々として居ります、昨日弟が、山から取つて來て植ゑました楓もいき／＼として來ましたから、それを見て居りますと、後から、「姉さん虹が、虹が、」と弟の聲、振り向きますと、東天へ弓なりに、虹が懸つて居りました。

○住吉神社

長門　中　津　江　照　子

本町を曲つて西に向へば住吉神社に詣られる。住吉神社の境內には、住吉神社を始め、栗島神社、惠美須神社が安置されてある。此の頃神社合併論が喧しいが、此の住吉神社は、今では是非殘されると云ふことである。あちこちには、何十年立つたかと思はれる松樹が、こんもりと茂つてゐる。東の方には綺のような東舍が立つてゐる。其のとなりに一つの大きな藤棚があつて藤の花が今を盛りと咲きみだれてゐる。古句に「下る程其名は高し藤の花。」と云ふことも思ひ出され實に美しい事と云つたら、それこそ妾の如き拙い筆には畫き現すことが出來ぬ程である。西には、菊ヶ濵があつて、今や、蒸汽船がさつさと、北方に走つてゐる。大方、是は、小畑港に行くのであらう。さう、さう、去年、下瀨先生につれられて七曲りに行つた時も、ちようど、沖の方で蒸汽船が黑煙を吐きつゝ、走つてゐた。其時先生は「下駄に燒味噌」と、云つて笑はれた。そのことも思ひ出され、月日の早いことが心に染んだ。が、今も先生の云はれた事を解きかれてゐる。それより、足を南に向けると、御船小屋がある。これは、住吉神社の祭禮の時、引き出され、若者がそれに乘つて、お船歌を歌ひ町を練り廻るのである。其船は立派なもので、總べて朱塗りて、金色で三つ巴の紋が畫いてある。後にむいて見たが、强ひて云ふ程の事もないが、只、小さい杉檜櫻等が植ゑてある。はるか向ふを見ると鷄江の臺が新綠の爲め青々と見えて、けしきがよほどよい。

新體詩

河井醉茗先生選評

○上棟式

名古屋　小木曾女

家たつ術に妙を得て
藝術の神が寵兒てふ
工匠、八月を齋戒の
淸き鉋の痕とめて
築き上げたる高館
姿ぞ空に仰がるゝ
今日棟上の宴莚
白木の薫身に逼る
うつり香美しき甘酒に
醉ひしれ男手を打ちて
礎祝ふ萬歳の
節面白き歌聲に
賴もしい哉祭壇の
神の御幣ぞひるがへる

東京では木遣節と云ふもの、何を言つてゐるか分らないけれど勇ましく、上棟の日は確かに詩になると思つてゐましたが、今、あなたに依りて先んじられました、猶、同じ題で此れ以上の作を望ましい（醉茗）

四等

○朝顔夕顔

備後　二子山

あした朝顔ゑまふとき、
夕顔ねぶりなほさめず、
ゆふべ夕顔さむる時、
朝顔すでに夢に入る。
自然の母の乳ぶさには、
甘き露ありめぐみあり、
されば朝顔朝露に、
されば夕顔夕露に。
天の惠をささわけて、
似たるひかりの花ながら、
かみの心のふたかたに、
にほふ色香のまさり劣らず。

詩語の使ひかたが對偶法にかなひて、一寸おもしろく讀まれました（醉茗）

五等

○人は笑ひぬ

山陽　萩雨女史

優心のさゆらぎに、
あつき血のときめきや、
たにぎりのいと堅く、
醉ひ惑ふその隙を、
嫉みの手あらかに、
戀酒の甕破れて、
末枯野に悲しむを、
『まよへり』と人は嗤ひぬ。

悲哀の黒鳥の、
巣くひたる弱き胸、
病みつゞきさらばひて、
冥府のかげ、暗き扉に、
捨てがたきオきざみ、
光明を望めども、
しるしなくわづらへば、
『おろかや』と、人は嗤ひぬ。

心靈のあくがるゝ　いと崇き「みち」追へど。
まよはしの敎へにて、　虛僞の信仰を、
しふる世の賴みなく、　眞理の扉ひらくべき、
疑なきにはかなめば、　「さかしら」と、人は嗤ひぬ。

さかしらかも知れませんが、詩人の聲に依りて此の疑惑はいくらでも救はればなりますまい（醉茗）

秀逸

○大無患樹の歌

能登　しらゆき

「おぞや下界を見渡せば　小さき者の何ぞ脆き
敎へ」と宣らす天神の　仰畏み直立の
天柱森にそゝり立ち　群樹を叱す無患樹や。

魔軍鬨を突く小夜の闇　梟、風に喝すれば、
花は白露に咽び泣き　鳥は和毛の夢おぢて
阿鼻叫喚の大虐を　「すは來たんな」と無患樹や
下枝の巨壘慘として、　刧初の憤怒素裸に、
目眦裂けて勢荒らに、　彩葉の征矢を擊々と、
いぶきに載せて下這に、　峠に谷に射かくるや。
怨敵驍の威に怖ぢて、　黑沼に遠く落ち行けば、
今平和の紺村濃　四更の靄は幹を捲き
華鳥の夢と領じたり。　流石疲れぬ、大童、
まろ寢の夢を覺め來れば、　一日は明けて夕なりけり。

詩語の使ひざま愼重を缺く、可惜好詩材も爲に興を殺ぎました、最も淸新ではありますけれど（醉茗）

○病室

名古屋　すみ子

身に餘るおもき苦痛に　熱ひかで氣六ケ敷くも
幾月を衾籠りに　そてはかと空想に疲れ
夢心地うつら〳〵と　零落に病める戀の身。
病室は空氣重りて　電燈ぞ暗くまたゝき
冥府の火と光りの靑み　灰濁める壁に影して
しん〳〵と夜はくるゆきて　寂寞の領こそ迫まれ。
はと思ふ刹那ぞ胸に、　熱烈と血潮のさわぎ
我室は煙に捲かれて、　烈火てそ渦まき躍り
山とゞろ崩る音して　家も身も焰の眞底。
こわ夢にうなされけりと　疾くさめて心はよべと
切なさに息もつまりて　覺めながら覺めぬ苦み
さびしみやあゝ世の終か　小枕に沮落しぬ―夜は一時

痛室の詩は引つゞいて毎號出るやうですが、快樂の時の聲よりも苦痛の時の聲の方が、人をひきつけるやうです、此作にも暗い陰や苦し、聲が籠つて居ます(醉茗)

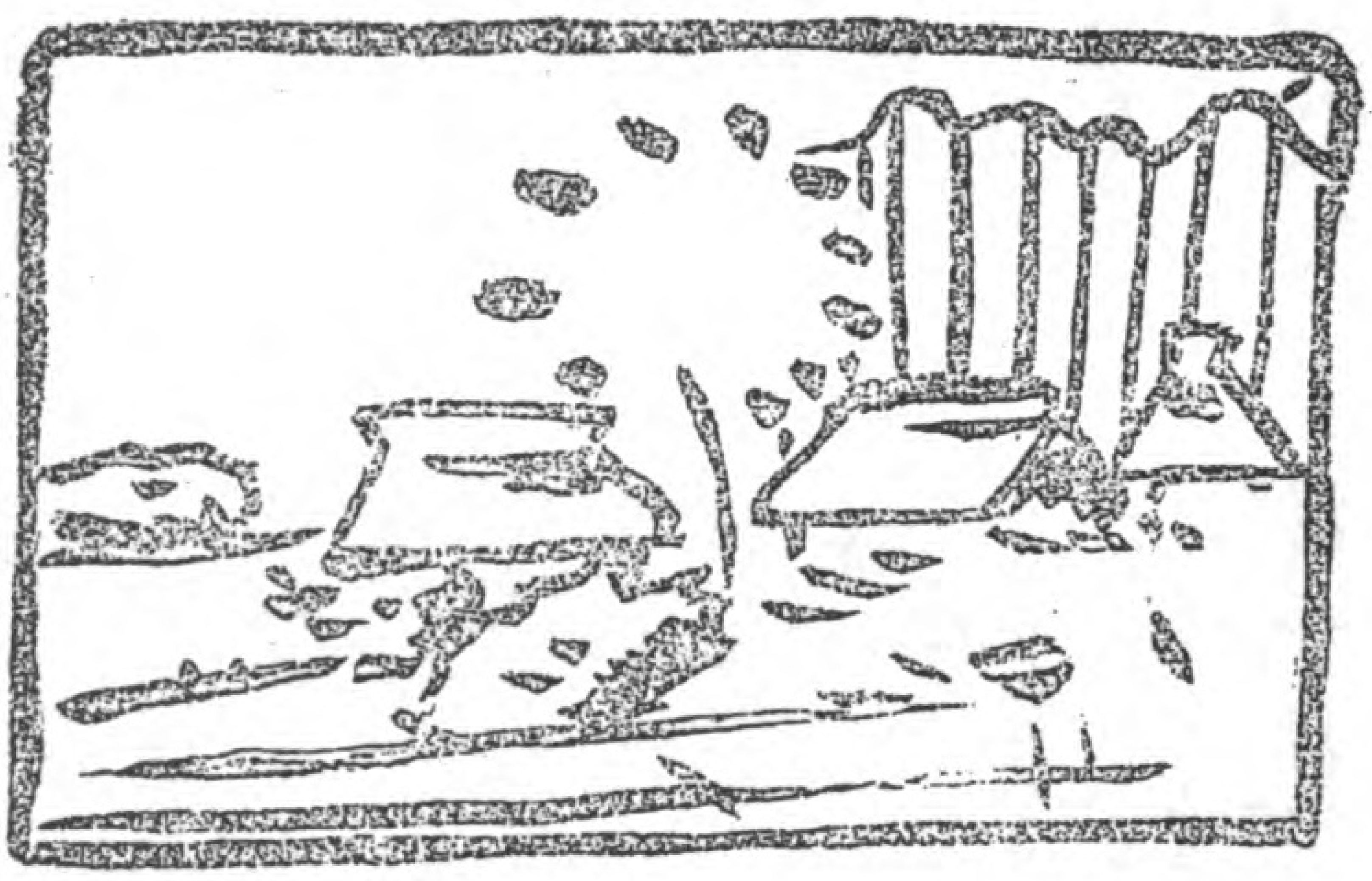
○春の夜

米澤　樋口夏月

にほひゆたけき練絹(ねりぎぬ)の
　夕の幕をもれいでゝ
影ほのうすき三日月の
　さゝやく聲を因邊(よすが)にて、
御園すぎ行佐保姫の
　春の車は華やかに
かをる小窓に月さして
　歩みはおそきしら駒の
其の艶やけき脊の上に
　ちるや幾ひら花ざくら
白き光りに照されて
　老木若木のそれ〲に
夢靜かなる花のかげ
　かの綠なすびろうどの
それかけぶれる若草に
　思ひも遠きふたすぢの
くるまの轍はるかにて
　すゑは朧のうすがすみ
まだうらわかき斷きの
　かなたにたかし春の夜

如何にも佐保姫の行く姿が見えます(醉茗)

山村　陰奥　　松尾ちよ子



○幼兒の柩に

紀伊　竹園女史

うば玉の、やみよりやみに、たどりなば、
麗はしき、世の萬有は、まぼろしと、
愛らしき、眞珠の瞳に、うつりしか、
生れたる、しるしと云へば、神の手に、
あらかりし、世の波風も、おだやかに、
呼吸せし、刹那のときか、あなあはれ、
をさなきを、神はとこよに、守らまし、
たのしくて、永き命に、住めよかし、
あゝひつぎ、ひつぎに何の、靈ありや、
ねむれるは、世にいと尊き、神なるよ。

好個の墓銘です(醉茗)

○夏の神

水戸市　小蘋恩女

みどりの焔(ほのほ)もゆるなる、
　若葉がくれの岩室に
今し杜鵑花(う)の紅衣、
　卯の花衣ひき重ね
天降りましけん夏の神
　巾は溢るゝ露草や
夢野の卷の淡彩を
　姉佐保姫が二十四の
黑羽の蝶に讓られつ、
黃金に編める花籠の、
常夏の花百合の花、
つゝむや碧き露の綃、

花輪まばゆき舞車、紅梅笠の小舍人は
襷の衣のむらさきを早もぬがんの悲しみに
あわたゞしさの春の夢、破れし綸絹と消えけるよ

美くしく韻致あること、往々にして此種の作を詩壇に見る(醉茗)

○寫眞をさきて

小諸　花ぞの守

女子文壇に寄せんと思ひしが拙き性を顧みひきさきて
手箱に秘めぬ

をのゝく指にわが面影を
つとひきさきて手箱に秘めぬ

詩友の面影見る毎に詩にあくがれのわが胸は
あゝ幾ぞ度をどりけむ美し御姿なつかしの
まだ見ぬ君をかいだきて、同じき道を辿りてし
さすらひの子が寫しゑも、出だきまほしく思ほへて
つと筆取りて表書きを書かんとすれば何處にか
「あゝまて暫し地の子」とよびます御聲夢か、そも
筆もつ指はをのゝきぬ、あゝあやまてり我はしも
虚榮の夢に耽りしか「わが此心詩神の
御胸の絃にふれん時さやけきひゞき響きなば
甦らん」と一片を手箱の底に裂き入れぬ。

眞の情が稍裝ばれて居ます、も少し眞摯に歌うた方が人を動かした
てせう(醉茗)

○友を慕ひて

德島　長曾我部菊子

嗚呼金銀…雲は渦まきて櫓を落す——烈火の如
流れて沈む彼方こそ、おゝ、彼方こそ
我憧憬の可怜國、(蓴菜秀く邦)なれ
思へ高濤驅くる…水門
百合なりや否眞帆なる鳴門舟、舟唄濟ら——漕ぎ歸る
鮁に高く丹の香なす落暉、海は眞東——裹渦貝
否櫻貝仄光る濱を五百餘里、(蓴菜秀く野に——)
病み伏す友が涙ゆゑに、いたまれつ且つ憧憬れつ
高走りゆく我が思こは、そは何故や。あらず。知らず
大積水の漿のうねく〵美しきやしあゝたゆたの潮に
蒼凪ぐ上に光射して、雲逝く——彼方かのましたこと
我が痛む人ある國と、長へにあくろが國と——日毎しかと
(亦も今日涙して濱に立ち居つ——戀しさぞ盡きぬ)

强烈なる感情の迸りは見えました、抑もあくがろゝ空とは何方てせ
う(醉茗)

○化粧

熊本市　島田たけ子

湯上りを半裸の姿、ふくらみの垂乳可愛く
大理石刻める如き、線の美は肩より走る。
大象をつなぐと聞きし、黑髮の煙ぶる五尺を
さながらに小櫛に梳きつ、前髮をふくら結いては
紅薔薇そとかざしけり。

おしろいの艶めく馨り――薄化粧。薄紅さすと
都べに香こそ高けれ。
うつゝなに見入る鏡の、　面影に少女は醉ひぬ。
誇らひの笑み若うして、　鏡にうつる諸ろ笑靨。

思ひ切つて誇りを歌はうとした處は甚だ佳、今少し技巧が欲しかつた(醉茗)

○化粧室

八王子　秋月芙美子

麗日は青葉をすべりて、　小窓に晶玉の瓔珞かけぬ
大いなる鏡光る――化粧室薔薇の香みなぎりて
いとも靜かなりや
窓越しに若葉そよぎて、　涼風を生む――と見れば
眞白なる象は鏡の面に、　美しき影――それも一瞬
さと流る薔薇の香

島田たけ子さんのと同じやうな題目でありますが、なまじひ意味がついてないだけ、此方が韻致が多いやうです(醉茗)

○美し夜

明石　禧代子

聖き潮湧く詩の海、　かゝる夜なりき
寂靜の姫は袖おほひて、　奇しき天の笛すゝぎ、
楡の和香めぐる神の森、　かゝる夜なりき
やは血に燃ゆる戀星と、　低う囁く人も見き
白膠木の木闇に俯居して、しろよそほひや額白の
天つ女あへかにほゝ笑て誦しもこそすれかゝる夜の詩

新粧の詩(醉茗)

○久米仙

千葉縣　金子麗子

空見津山跡は地の歌、　雲より遠く山水の、
美し國やと下に見る、　宰相ぶりなる垂れ眦。
久米の邊のさゝ流れ、　姉樣被ぎ赤き裳を、
俚唄ながら高褰げ、　十七八の脛白き。
童の鳴神夜の星、　落ちては腰をあいたして、
痛さが通の通なりと、　「戀愛神聖」の禮讃や。
少女驚く尻餅に、　打覆したる柧桶の、
蕪菜唐菜瀬を早み、　浮名を世々に流しける。

滑稽詩の一體とも見るべきものでせうか(醉茗)

○立聞

磐城　手塚久子

夕もや深く立ちこめて、　天は遠眺をゆるさねど、
かなたの土手に腰かけて、　ひそ〳〵語るをみなごゑ、
我は靜かにうかゞひぬ、　杉の丸太のうづ高き、
陰に我身をひたよせて、　立聞すなるあだ心、
白ばらの花二人手に、　うつむく影は見ゆれども、
話はしばし絶えてけり、　やがて言ひ出し其の聲の

今は聞かじと思へども。

一寸捉えどころがよい、詩にする用意乏しくして、却つて詩になつてゐます（醉茗）

○濱に遊びて

四宮　森井せい子

可愛妹と手を取りて、　戀し故郷の濱遊び、
物珍らしもことわりや、　まこと五年振りなるを。
大人ぶりたる妹の、　物云ひ樣のあどなさに、
釣り込まれてはほゝ笑みつ　あゝ變りしよしばらくに。
濱は昔のまゝなれど、　昔に增して興多き、
小さき貝殼拾ひつゝ、　歩む濱路や夢心地。

何氣なくてよい（醉茗）

○古塔

安房　岩崎つゆ子

不聖の戀に世は老いて、　思多かる詩の窓、
遙かに遠く一道の、　燃ゆる光を指して、
此處にきづきし古塔や。
夜目にも白う聳やぎて、　光りは白き星の如。
聖は逝きて幾千歲、　守る番僧年老けて、
鐘撞く腕の躊躇へど、　花には笑みの若きぞや。
吾欄の壞れ彫龍の、　柱ことごと朽ちにたれ、
番匠が鑿の香を高み、　中に藏むる萬卷の、
聖經生きて聲すめり。

終りの一句です（醉茗）

○荒れにし心

伊豆　曉子

われは人の子、　朧ろなる戀にも醉ひぬ。
うれしかる愛をも求めぬ。　さはれ今、
散りぬべき月影追はじ——　水の上の、
わが心かへて死びぬ。　木枯のすさぶあれ野と。
山深みひとりくれれる、　紅藤のそれにしも似て。
うら若き花のよわいを、　ひとり苦診に終ふるかな。
されば君、　君の情は知れゝども、
石より冷きわが心、　血管を流る冷き血の——
君がみ胸におどるなる、　熱き血潮は知れゝども、
如何でか我れに通ふべき。　されど謝す。君が心を。
われは世にかへてぞすまむ。　葛這ふ古木の扉
永久にかたくとざして。　血と熱のあふるゝ君よ、
美はしき秀才の君よ、　此世の春の幸多かれな。

○夏の日

四谷　桃子

牡丹散る丸窓に　若葉越し風ふいて
頰にあたり髮なでゝ、　れむり氣のおそひ來る
風に乘りほの遠く、　廣目屋の連れ立ちが
大路ゆく鳴り物に、　まどろみもさそはれて
欹つきて目を掩ひし、　束の間の今の時
夢かはや寄案逼う、　まぶしうも夏の日ざし。

○青葉陰

青葉涼しくみづ枝さす
亡せにし妹を忍べども
思へばいとも人の世の
花はあとなき夏草に
花たちばなに風過ぎて
現のゆめと辿りてし
樂しき夏もありにしが。
巖の陰に湧く清水
去年に變らて流るれど
共に掬ひし人は無く
窶れし影を映すのみ。

○この櫻

滋賀縣　菊香靜枝子

愛讀の、詩集に挾める、
この櫻
あゝこの櫻、
うす紅は、白にあせて
色はなくとも、
よし色はなくとも
とことはに、
我はえすてじ
我、我はえすてじ、
歌をばそへて我にとて、
あゝそのなつかしの花ぞ。

○春の日

僧は鐘つく無心の力、
無心無想の一うちに、

牛込　川上清子

木の下みちの苔の香に
過ぎにし夢の跡もなし。
戀ぞ果敢なき春過ぎて
樅の根のしげき哉。
香りを送る四つの袖。

れん／＼よ—



こはわが戀ふるかの君の
贈り給ひしなつかしの

芝　内田よし

鐘は高鳴無想のひゞき、
櫻の花は散りちりぬ

信濃　小林みつゑ

菜の花ぐもり風温ろう。
石の地蔵につながれし、
鍬の齒光るこゝかしこ
牛の尻尾に陽炎のぼる。

○晩春

今年五才の子にはかに死しければ

福島縣　坂内銀鈴子

花みだれ散る此の夕、
潮騒低う流れては、
百鳥さわぐ野の森に
雨とならんの氣配かな、
昨夜は夢も圓らにて、
風やこまよと叫びたる
いとしき吾子の血は冷へて、
落ち日のかげも見えぬかな
珊瑚と紅かき緩はあせて、
呼べども解けぬ唇に
昨日泣きたるさま見えて、
いぢらしうとも哀れとも、
なれし添寢の手枕に、
乳ふくませずいとし子を
斯る夕を泣き泣きて、
野に送り來し母を見よ。

乙女の夢に色あらば、
たなびく霞翠あらば、
さびしき冬や今いづこ、
降りましけむ佐保姫の、
唇甘き美酒に、
されば見出す我が頰に、
もゆるか光暖けく、

○春のさまよひ

牛込　幻の子

春うすがすむ遠の空。
乙女の胸のこひの歌。
天の小琴の音に乘りて
かぐはし姿初戀の、
醉へる乙女に似たるかな。
春の光のくちつけや
もし色あらば赤からむ。

風のゆくてを眺むれば、
夢の葉末をそよがせて、
久方とほきあげ羅徑、
霞の帳奥深く、
汝よ幸あれ汝が胸に
世にうらぶれの我身さへ

○夕煩悶

波のさゝやき寛にや醉ふ、
松原つゞき薄闇の、
かゞやく露のかげきえて、
それにもまさる我が煩悶、
氣高きまみを片想ふ、
畏怖あらじか我なやみ、
さはれ思ひの彼の君の、
恨みの征矢を胸にうけて、
ちぎれし雲のあな遊く、
戀のいづみはあふれたり、
波のさゝやき寛にや醉ふ、
まつ原つゞきうす闇の、

○朝起

ほんと釣瓶の音がした、
父上樣の咳拂ひ、
ふーーと見れば紫陽花の、
ひな鷄三羽遊んでゐる、

○淸夜曲

妙香滿ゆる天堀に、

緋こぞめの夢畑の
何をさゝやくひそめごと。
春の神秘や探るらむ
雲の宮居にいそぐかな。
湧かむ泉や春の聲
希望ゆたけくわくものを。

播州　矢島芳子

絶ゆるが如く消えなづみ、
寂しさもりてきこゆなり。
たふれかゝれる高峰の、
永劫にうせず燃ゆるらむ。
塵ににごれる此の胸の、
悔はあらじか我うれひ。
いかれる時のきたらばや、
逝かむ望みのなきこの世。
行きぬと見るまにくるはしき、
煩ひつよく堪へかれて。
絶ゆるが如くきえなづみ、
寂しさもりてきこゆなり。

下總　秋山花馨子

それにわたしは眼が覺めた。
それに姿は跳れ起きた。
花の下にてヒヨ／＼と、
それにわたしは餌を與つた。

尾張　長司哲子

緞緻姫月桂冠さし翳し、
七彩衣の秋姫と、
秋風の樂流るゝや、
無明の浮雲今とけて、
紫匪銀星燦爛の、
燈火何の祭かある、
公孫樹の精は舞ひ出でゝ、
ひらり／＼と翳しつゝ、

○夕霧

夜ごと朝毎棚雲に、
殘せる人の俤は、
夕濱千鳥鳴く磯の、
歸りて身のみ佇ずめば、
戀は苦しと人はいへど、
いとしき君を思ふ時、
堪へ得ぬ胸に霧たちて、
「能く似た笠も」迎らまし、

○野の火葬場

幽冥の火か影青白う、
寂寥の野の火葬場に、
（雨生むらしき陰雲の帳）
夢うつゝ花崗石敷く、
冷たうも上りてわれは、
（陰鬱をもれて鈍色の屈光點々）
新た木の柩破られて、
おゝ死體灰のむくろ、

舞たけなはの天の舞、
栗地模樣を銜したる、
天馬と計り馳けゆけば、
娥嫦の手ぶりにこぼれきて、
瑠璃光淨土目のあたり、
黄金小扇百千ひら、
讃美の曲にふけてゆく。

石見　安達久子

戀しき心懸け添へて、
朧に見えてはかなかりしを、
故里は砂原荒はてゝ、
いづこに戀の影やある、
戀は悲しと人はいへど、
禁めし神はなかりしに、
天地おほふ夕暮に、
切めて狂うてわが眼もが、

和歌山市　さき子

黄昏の色は迫りぬ、
菩提樹の若葉黑くさやぎて。
階段を跫音低めて、
赤錆びし鐵の扉あけぬ。
彫石の女神の如く、
白衣よ手なる聖書よ。

（陰濕をおびて風雲を吹く）
睥、唇、色はあせたり、　されど／＼匂ひやかにも、
肩に亂れ髮艶に照し、　むしろ恨なる。
（小舍守る番人松明とり出てぬ）
泣かむには涙出てず、　叫ばむに聲は小さし、
眼は盲いよ、耳は聾せよ、　このまゝに吾が息絶えよ。
（番人虎髭食いそらし艦に火をはなつ）
あゝ人戀ひて人に戀れず、　戀うも戀に逝きし、
少女の靈を天に誘ふか、　鐘の音は暗よりひゞく。
（白煙濛々番人の顔火よりも赤し）。

○歸省　京橋　戸田としを

人の作りし巷を出てゝ、　神の御手なる田舍に逍遙ふ、
吾れや思へば其過去は、　胸裡に功名の焔を燃やし、
眼は空想の影を追ひつゝ、　夢より果敢なき希のために、
此懷かしの郷里を離れて、　蒼の空にあくがれけるが、
噫！思へばそれも夢なりけりな、　胸に燃やせし焔は消えて、
影を追ひたる希望は絶えて、　枝にさゝへて迦るやあゝ何處。

○神の森　上毛　關口初子

今や黎明神の森　石疊道纈きて
誰が子の親ぞれき申す　聲も微かに聞えきて
なのゝく手にて鈴ふりぬ　樫の若芽ものびに兇
杉の青葉も茂りけり　塒はなれの朝がらす
若き木梢をゆすりては　自然にそよぐ若葉哉
やがてあぐれば神樂殿　百鳥經む羽をのして
一齊に讃美の歌謡しぬ。

○瀧の音　岡山縣　三宅しずゑ

白絲たゝるやま影に、　かぜの奏づる箏の音か、
四弦のひゞき嘈々と、　千仞ふかき音のそこ、
藍を湛ゆる瀧つぼに、　たぎりて落つる瀧つ瀬や、
銀漢くだる練ぎぬの、　白きは神の酒なるか、
砕けて玉の飛び散るは、　天つをとめの戯れか、
水は激して鼕々と、　天の鼓の樂の音、
谷にはおどる星川の、　自然の箏の音たかし、
隈なく露のそゝぎては、　檜のみどりいろまさり、
狹霧に朝日かゞやけば、　岩根に虹の橋かゝる、
あゝかゞはしき天地の、　神の彩色美しく、
七彩浮ぶ水の色、　永劫たえぬ瀧の音。

○戀衣　山形　高橋その子

雨ふる夕御牀邊に、　糸絲の手に纏れては
幼稚ごゝろを愛でられし、　縊づくりの笑ましさも
今怨めしき我が身かな。
あはれ過去の罪いかに、　憂世かはれる遊れ星
悲哀の胸を假裝て、　戀しゆかしと羽ぐめども
紅嘲む姿の淺ましや。

○亡妹花子　相模　大矢百合子

平和滿てる春の野の、　葦の床に蝶まふて、
炎陽もゆる彼方より、　ゆかしき歌のもれて來ぬ。
來ませ姉君今も今、　尋れわびたりいましなと、
くれなゐ匂ふ兩頰に、　笑まひの花を堪えつゝ。
わは胸をどり天國の、　神の御子かとぬかづけば、
色麗しきかんばせの、　忘れかれたる妹花子。
おゝ妹と抱きつけば、　花の姿はきえうせぬ。
あはれ夢なり夢にして、　常世に魂は通ひしか。

◎琴の音

遠江　松本綾子

往き來すくなき町はづれ
なびく糸よりいやほそく
月なき夜半も仰ぎつゝ
歌ふこはれの清けきと
目しひの人の心にも
歌ふこはれも琴の音も
戸ざせるかどに青柳の
見えぬ盲のあはれさは
妙なる調べをきかんとて
さびしきかどに青柳の
かきなす琴の聞えけり
秋のかげひく夕にも
妙なる糸のひゞきには
天津乙女やうつりけん
いつしか聞えずなりにけり
むなしく月を招きつゝ
かくとも知らで今も猶

◎すみれ

みどり子

降りくらしつる五月雨の
ふと取り出し對を手に
ゆかし野末のつぼすみれ
花の形見と今もなほ
窓のつれ〴〵いやさんと
讀むとしもなく見てあれば
やさしき姿そのまゝに
色うつろはて押されたり

◎牧の子

長野縣　藤村花泉子

蒼天の空に千切れ飛ぶ、
一つ〳〵に詩趣あふれて
華なる榮華に暮の日の、
詩しらぬ身に眺めむは、
睡る羊がま白毛を
また吹きならす笛の音に、
雲の形の樣々や
惜しめどもやゝに暮れ行く
深ふも殘るたゆたひや
いと惜しかりし夕なり
一つ〳〵と撫でゝ見つ
夕の蝶よもつるゝは

◎機織る乙女

秩父　桂花子

吾れは機織る乙女なり、
花を裝ふに親なくも、
胸に綾見る能あり、
髮をかざるにリボンなく、
神に背かぬ我身には、
腕に梭持つ力あり。

◎隅田川

青山　後藤よし子

隅田堤のさくら樹も
葉さきびしき此日頃
蟬の時雨は鼓譟する
淺草寺の鐘の聲
黄昏いそぐ渡し守
入日に長き松影も
いつれ青葉のしげりあひて
ひと雨ほしき日盛りに
枕の上をめぐりけり
待乳の山にひゞきては
塒をいそぐむらがらす
今はいつしか暮はてぬ

◎朝の海

上總　花峰冷女

紫金の亂れ靄はしき、
靄は神和の色深く、
その礒が根にたゞ一人、
白き鷗の羽輕く、
實にや東の空紅く、
染こぼるゝ御光は、
あゝ美しき朝ぼらけ、
帆は紫に染めなして、
空曙の海の面、
波は千古の影たゝふ、
そゞろ悲愁に沈む時、
日の神來ると叫きぬ。
五彩眩き雲湧きて、
眼に玉と輝きつ。
見よや黄金の波遠く、
光の中にまぎれ行く、

◎春愁

常陸　春江

あかつき立ちて星きえて、
靄ゆるやかに望みあり、
曙光かゞやく朝あけを、
やがて紅涙袖にしみ、
かへるさ急ぐ野の子らが、
夕映そらにうるはしく、
ほのめき出づる新星の、
理想碎けて泣くわれは、
遠くみ空をあふぎなば、
黄金のとばり開くとき。
人は美妙とたゝふれど、
身の落寞なげくかな。
辛苦の曲をうたふとき、
彩ある雲に平和あり。
庭の梅花に匂へども、
伏してぞ神を祈るなる。

○戀

下谷　蕉雨子

つらき此の世に幸うすれ、
少女子の身と生れきて
悲しき折もうきなりも
涙かくして笑む我の
深き思を知るものは
只君のみといつしかに
馴れて親めばなさけある
君も親なきこしかたの
これに似たるを今よりは
二つちがひの兄君と
御名をよぶべし許しませ。

○夕川の流れ

大和　霞女史

草屋もる煙かすかに
からだちの垣になびきて
牛ひきて歸る童の、
宵より日は暮んとす
翁ひとり汀にたちて、
鍬洗ふ河水けぶり
紫のゆるき流れに、
眞珠なす月は冴えたり、
塵はあらぬ片山里に、
現身の此身をよせて
世の波に漂ふ胸の、
亂れさへ今は和ぎたり
夢心地今日の現も、
いつか又醒めて思へば、
仰ぐ淡月朧ろし迄は
此まゝにせめて歌はん

○夕の思

下野國　榮谷　德子

夕まぐれ思ひに堪へず
只一人磯邊さまよひ
くれて行く海原見つゝ
種々に我世を思ふ。
立續く波路は遠し、
み渡せば帆影三つ四つ
果てもなき大海原に
友千鳥鳴く聲聞ゆ。
彩雲は四方を照して
空遠く虹棚引く
水赤く光うつし
夕日影今しも沈む。
美はしき自然の景色
限りなき美妙の眺め
さりながら思へば悲し
世の戀は此の幻しか。
ふみわらひ實僞
種々に世をたばかるも
乙女子が頬の紅
長しへに替らぬ色か。

冬の夕　周防　赤松つれ子



はかなきは人の運命よ
夕雲の遠き磯邊に
つくづくと世の樣みれば
吾が頬に涙ぞあつき。
夜の色四方をとざして
漣の音はかすかに
眺むれば大空高く
輝き出てし宵の明星

○涙痕

小石川　近藤　愛香

蝶よ花よと二親の、
慈愛の袖に抱かれて、
憂きも辛きも世の人の、
運命も知らず生立ちし、
神の御子なる少女子よ。
四年の昔武夫の、
君に嫁ぎし甲斐もなう
いとしの夫は滿洲の、
荒野の露と消しより、
哀れをとゞむ未亡人。
今日切髮の花眉に、
昔しの春をしのばんと、
夫のみ墓をおとなへば、
あはれ涙の痕ありて、
冷えたる土に匂ふ菫よ。

○菜に與へて

越後　山村芳枝子

醒めやすき、
戀に狂ひて泣かんより
僞多き友を求めて悔ひんより
限りなき自然の闉に歌ふたい
誠ある文の机に親めよ、
塵の巷に名を競ひ
汚れの富を追はんより、
淸き團欒の賤が家に
父を助けて畑を耕せ。

○はな露

大阪市　菫　艶　子

若き胸のまよひより
乙女の情にあこがれて
ふみまよひ入る戀山路
眞の神のさゝやきに
戒め給ふを聞きもせて
人しづかなる北郊に
我は乙女の手を取りて
若葉に薫る夕風に
戀の小衣ふかれつゝ

空の御星を仰ぎ見ぬ
星のやさしきさゝやきに
互に胸も打とけて
あゝ升ら今は夢なれや
手に手を取りつ取られつゝ
乙女とわれのさまよひは
黑覺のふちにてありしなり
心のほぞも亂れそめ
行末ふかく契りしぬ
立てし誓は消けれど
エデンの園のそれならで

◎五月雨賦

姫路　柳田白百合

雨ふりそゝぐわびしさに
凄氣みちぬるとこ闇の
春や三月むね病みて
六月梅雨の窓近く
西も東も分かぬ身を
とり殘されし姉妹の
二十とせ長き恨み哉
「みかん」ふくみてにこやかに
ゑまひて逝きし姉君の
忍ぶにつらき我こゝろ
あはれいとしの姉君よ
などすげなうもふり捨てゝ
やせたる腕さしのべて
「みかん」ふくめばしかすがに
まなこ閉づれば姉君の
灯火さへも消えうせて
破床に病の身をよせつ
再びたゝぬ露の身を
死の影せまる運命哉
世の涙にたゞよへと
浮世の幸の味知らで
すもゝの花の白き宵
さらばと斗り聲ひくゝ
はかなき笑の思ひ草
悲憤の涙わくものを
死をば共にとちかひしを
一人ゆきけん死出の旅
闇にもたかき甘き香の
姉がいまはもおもはれて
在りし面はも浮び來る

◎母をしたひて

長野　えむ子

月明かき夜にして、
しゞまの境のゆかしうて
淋も若き梅木立
遠きみ空を仰ぎ見る
粧ひこらして微笑む姿
星の光りの影淡く
獨り悶えを慰めの
吐息しづかによりそひて
霞をへだてゝをちの山
清き香りのみつる夜や
我幼くて逝きませし
わが目の前にあらはれて
導きの後にしたがひぬ
あゝ人の子のはかなさよ
母をしたひてそゝいく夜
あゝおぼろなる母の姿
夢に見し花園に
あゝされど我に翅は無し
母の姿は消え失せぬ
たゞ神に召さるゝ日をぞまつ

◎靈の輝き

四村女子

春はすゝきの根より流れ、
ちさき目高の走り行きて、
春は寂び立つ櫟の樹ずゑ、
赤き乾ぞりのひとは散りて、
春は高照る夏の御そら、
日足寂しく點をゑがき、
秋は野菊の庭に咲きて、
横にくれりて天を仰ぎ、
秋は小窓のまろき思へ、
有形無象の海はひらけ、
細くせゝらぐ水に住むや――
胸に憂のひゞきのこす。
延びてまばらの枝に住や――
こゝろ幾度の波を起す。
黑きからすの羽根に住むや――
空にめぐらす輪こそ見えれ。
うすき萱色の影に住むや――
放つ光のすゑはいづこ。
ゆふ日つゝめる胸に住むや――
靈のかゞやき寂びて出づる。

◎五月の日

京橋　今泉磯千鳥

姿が一日の用事終やし、
馴れし書齋の間に入れば、
紅白躑躅綻びて、
家に何らの音も無く、
手に取る筆も重からず、
筆もわが意に從はて、
四五丁去りし田の面に、
かすかに田植歌聞ゆ、
机に向ひ書き初めば、
お伽噺を綴らんと
金蓮紅衣の牡丹笑み
あゝ美しの姫おはす、
清き香は身にしみて
目痛み體疲るゝに
反古紙多くたまるなり、
雨を促すの人ありて
あゝ姿も又聞まんと
清き香の間に消じぬ。



三等

○静な夜

くれなゐ

朝からの五月雨が漸くやむだ。静かな夜。閉めて置くと、むすので窓を細目にあけておく。折々來る風が新らしい若葉の香を運んで……ランプの灯影が其度に、ゆら〱とゆれる。復習も濟だので、好な金帆を披げた時、「御孃様」と障子の外て、細い聲、「誰？」と問ひ返す。

「あけても宜う御座えませうか」と恐る恐る……あの訛は……そうよ。四五日前に來た、あの小間使の、

「いゝとも、お入り」

がた〱手暴に開て、隅てぺたんと、蛙の様なおじぎをする。

讀かけた處に栞を入れて、ぱつたり……手織のじみな袷、赤唐縮の帯、不恰好な銀杏返し、丸い白い顔、愛らしい、私より四つ位は年下だろう。

「何か用？」と、優しくきく。「はあ」と、ぐづ〱して、「わし高等一年きり學校よしましたて、學問しなさる人、羨しくて〱堪りましねえて……」と、赤くなつて「御願に上りましたゞ。御孃様のお暇の時で宜御座りますだが教へて頂き……」と、口の中て消る。

「え、分つてよ。私も未修業中、ろくな事は出來ないけれど、及ぶだけはね」

「有難う御座えます」叮嚀に頭を下げて心から莞爾。

「本は私の古のを貸してあげやう。明晩からお出、まあお互に助合て行きませうよ。」

「勿體ない、助あふなんて」と、目を見はる。

無邪氣！山の白菫のやう……。

「可成言葉お直しよ」「はつ」とばかり恐れ入る可愛くつてたまらない。
「お琴教へて上げようか？」ときいてみる。
「そんなにして頂くと、罰あたりますだ、あたりますて御座えます」と云ひなほす。
「ほゝゝ、まさか、手ほどき位はして上げられてよ」と引入れられて、につこり。
「名は？たしか幸ね？」――はつと、かしこまる。
「いゝ名、今に幸福になりますよ」「今でも幸福て御座ますだ。二親は揃てますし、お屋敷は、皆様お優しくして下るだし」と可愛らしく、笑くぼをよせる。
兩親！ときくと、いつでも、情ない淋しい思が込上てくる。廣野の中央に一人すてられた時のやうな……私は母様を知ない、母様は私を此世にお出になるとてお亡りになつた。一度も御乳を頂いたことも、抱いて頂いたことすらないのだ。母様と云ふのも御寫眞にばかり慈愛深い父様も兄様も可憐そうだといつくしんで下さる。何一つ不自由ない身だが。…………
幸は私より餘程幸福で御出だ」と溜息をつく。
とんでもねい」と驚くのを押へるやうに、「私、母様の味少とも知らないの。母様のある人、どんなに羨やましいか？たつた一度ていゝから、御寫眞でみるばかりの、あの優しいお口から、「露子」と云て下さつたら溜らなく成て涙をふく。
何て優しい心。幸はすゝりないてゐる。
いつか又降り出した。靜かな夜は益々ふけてゆく。

靜かな夜と云ふ題に適合した作てはないが、下女の話が面白いので釣込まれて讀んで了う(記者評)

四等　○妹の顔

神奈川縣久良岐郡六浦荘村字瀬戸　角田秀子

「鍋妾最早出るよ、小枝ちやんが待て居るから」「お嬢様鍋が奇麗に白粉付けて差上げますから宜く温まつて被入いまし」「厭だあ、妾白粉自分て付けるわ、」「ては然う遊ばせな拭くだけ拭いて、上げますから」と立上りて手拭受取其手首を持てば「あらお前、今炭を持た手て御覧な此麼眞黒に成つたぢやあ無か嫌だねえ鍋」「御免遊せお嬢様、鍋は自躰黒物て御座いますから。」「馬鹿だねえ、お前」と言ひ捨て馳け行跡に鍋は口の中に「お茶引――」此方には鏡の前へ、ちよこんと座つて頻に髮を搔き撫て居のは妹の小枝ちやん「あら未だお化粧此度姉様に鏡貸して頂戴」「えお姉様顏は宜事。矢

張湯上のポッと赤味さした顔へ自分化粧「え好事よ」と入變りて鏡の前は玉子、少さき手を洩れて膝の上に時成らぬ櫻の花片一つ二つ散るも他念無くペタ〳〵顔に音立てゝ頓て立ち上り再び映してかたへの衣桁に掛けたる母の衣を取、友禪の長襦袢を妹に着せ、自其袷を被て又鏡の前に立ち、二人莞爾「さあ小枝ちやん、お姫樣妾お母樣ね」と打連ての道中、鏡の前に溢れし白粉、其裾を浸して引かるゝ儘跡付ける。折柄お鍋は手拭を乾さんと此道中に出合頭……疊の上に低き鼻を無理に擦り付け、扨ては御辭誼と思の外、一時にどつと笑ひ出すを「何笑ふんだよ、鍋、彼方へお出な、ねえ小枝ちやん「ええ厭な鍋ね彼方へ行ましよう」と次の室に入りて襖をピシヤリ、跡にお鍋、白粉の筋を傳ひて鏡の前、溢れし白粉轉て居る紅、開つ放の抽出、投出された櫛笄亂た樣に「幾等片付たつて此樣だ物何て小間癪だろう」と小言沸々八ッ當に片付て居る。次室には姉と妹、頻に語る「今日園遊會なのね其て方々の奥樣やお孃樣が被入しつて、ピヤノや、蓄音機を爲るのね小枝ちやん」折柄後の襖を開て「や何だ其樣子は」「あら叔父樣今日は」「さあ散歩に連て行かふ、二人共奇麗に顔洗つてお貰ひ」「今お湯へ這入つた計よ」「最早湯へても其麼顔ぢやあ可笑」「然う」と小枝子は湯殿の方へ行、跡から玉子は厭な顔して「小枝ちやん叔父樣と行くの蒲ら無事よ家で姉樣事仕た方が面白いわ」「でも私行くの」「然う厭な方妾もお母樣も彼叔父樣大嫌ひ、貴女計よ、妾お母樣のお土產頂かふ」小枝子は無言顔洗ひ叔父が洋行土產の洋服付けし嬉さを、何故か例も姉と母とは喜ばざるなり。途々小枝子は叔父に手を引かれて少さき赤靴の歩愛らしく、下髪に青葉の下風習ぎ、うるさく眼の先に散るを、左手は草花持ち引かるゝ手にて拂へば、抱いて上げ樣と言はるゝ儘其襟飾を眺めて「奇麗ね是」「ウン此樣なリボン買て上げ樣か」「エヽ」「此度叔父樣處へ遊びにお出て姉樣と」「行き度いんですけど



花も酔へろや　　大坂和歌子

姉様が厭つて云んです物」「何故」「でも小枝ちやんは叔父様の子見た様だつて」「お前叔母様が居たら、叔父様處に居るんだよ」「然う妾叔母様に可愛がられたわね、何時か叔父様と叔母様と三人で玆散歩つた事在つてね」「ウン未だ能覺えて居るねえ、最早其叔母様は死んだんだよ」「然う仕たら最早御目に掛れ無事、でも叔父様被入はね」「ウン叔父様が可愛がつて遣るよ」と櫻色の頬に熱き接吻を與へた。四五日の後叔父は又小枝子の家へ訪れた。例に無姉の玉子馳寄「お叔父様今日は」と云に「小枝ちやんは」と問へば、玉子は悲し氣に「叔父様小枝ちやんはね一昨日火傷仕たのよ」「火傷、何仕て」「あのねお母様が火熨斗掛けて在た處へ轉んで顔押付けたの」「顔を今何處に居るか」折から椽傳に「お姉様」と入來れるは小枝子「おゝ小枝ちやん、何仕た」崩帯の隙から見れば、其下ぶくれなる可愛の頬幾度か熱き接吻を與へし所、哀焼くとは無情よ「痛いだろう」「否え」思の外元氣好く「叔父様妾ね此處ベコンと凸んで居るの、面白い顔に成つてよ、お姉様も見てね」「えゝ叔父様、小枝ちやん可愛想なのよ」と浮べる涙、血を分けた姉妹、今分つた、里親を慕ひし小枝子、其を嫌ひし姉の、今泣くを見て、恐ろしの跡殘す傷とも知らで言知らぬ嬉しさに「お姉様妾痛かあ無くつてよ。」

趣向も面白い、書き方も一風變つてある、好い作だとは思ふが、只筆さきの運轉を餘り儉約しすぎて、言ひ廻しの足りない爲め、意味の明瞭を缺く點がある、此の癖さへ無くなれば、實に賴母しい筆である（選者評）

五等

○姉の子

本所區外手町六十一番地　田中久子

「サ姫様どれでも宜しいのを」小さな細長い箱を、鏡臺の前に目を見張つたり細くしたり口を曲げたりして頻りに妙な顔をしてみてゐる小さな姫の傍へおいて若やといふ小間使は後へまわる、と赤い襷を掛けてバラバラに亂れた姫様の髪を握つた。

「今日のりボンはね、紅いの、ね？いゝでせう」鏡の中に餘念もない若やの顔をじいつと見詰ながらいふ姫は九つ、色が白くて目が艶々しい。「さようですか」と輕く返事をしてゴシ〱と小さな頭の搖れる迄癖直しをしてゐる、暫くたつと「若や」「何でご在ます」「ポカン」「あら姫様」「オホヽヽ」二人の顔が鏡の中にからまり合つて仲よささうに笑ひ轉けた。

「若や、此度は本當なのよ」「私いや」と若やは口の邊

りに笑を包んで。「あら本當なのよ、あのね姪つて何？」之は又意外な問に驚いて目を見張る鏡の面、廣ければお庭の梧桐、風にゆられて動くのもみえる。

「姪つて申しますのはね、姫樣のお父樣やお母樣の御兄弟から見ますとね姫樣は其方達のお姪でゐらつしやいますの」と若やは姫樣の顏をみると可怪な目付をしてゐたので「困りましたわね何と申上げてよいか……さう〳〵姫樣は根岸の雪枝樣のお姪でゐらつしやるでせう？お分りになりまして？」根をメめた元結、齒で切つて、圓い目を据えた姫樣を見る。「エヽぢや若やは母樣の妹？」エと若やはびつくりした。「姫樣は何お云ひ遊ばすんですの、若やの姉さんなんぞもうとうに亡く成て仕舞ひました、勿體ないわ、若やに此樣いゝ姉さんがあるやうなら……」若やも未だ小供であつた、姫樣の語に涙ぐむで思はず袖口に目を拭ふ。

「だつてね、武兄樣も甚助も云つたわ、私は若やの姪だつて」「ホヽ、何いふので御在ませうね、私の姉はもう賤しい稼業をしてをりましてね十年許りも前に落籍されて赤を生んだのですけれど、相手にはちやんと奧樣も子供もお在なさるつていふのを聞いてがつかりして逆上たのでせう、赤を置いて死んで仕舞ひましたの赤は其旦那樣が引取つて下すつたけれど……てすからホヽ、姫樣は甚助さんにだまされて被居るのですよ」若やは頰を少し紅くして三つ打ちに編むでゐながらいふ。可怪な顏て鏡に映る若やの桃割を見てゐた姫「甚助の僞つき！後て行て二人ていぢめてやらうね若や、若やが母樣の妹だつてホヽ、僞つきねへ」「本當てご在ますねへホヽヽ」姫も若やも堪らなさゝうに笑つた、「サ姫樣宜しう御在ます」「アイ」とつと立つた姫はリボン鳥渡觸つてみて「若や直行かふよ甚助の所へ、ね？」「ハ」と云つて櫛のお道具片付け始める若やの頸あし、雪の樣に白いのへ日がはえて桃割の輪からも鬢からも水が垂れさう。

姫が促し立てる甚助が許にお若は本當に知つてか知らずてか、何か笑ひ乍らとん〳〵とお椽側を踏むでゆく、今年十五のお若は姉の子の男か女かさへも知らなかつたのである。

此れだけに巧みを凝らすのは容易てない、趣向として或は小說らしく、わざとめいたかも知れないが、此の位の結構は小說を書かうと思ふ位の人には持つてもらいたい、行文も頗る輕快、隙間がない。
（選者許）

秀逸

○姉思ひ　本郷　朝井千とせ

「姉様不出來ですよ」今し漸くくけ上げた縞お召の羽織をそつと傍に押し遣つて、細き眞白の手に亂れし襟掻き合せ乍ら云つたのは少し面長で眼元凉しく鼻筋のつんと通つた品好き顔立、髪は寛平と花月巻に水色の紗のリボンうつりよく、姉と呼ばれし方は年こそ二ツ三ツ更けて見ゆれ、稍々肥肉の色飽迄も白く、豊かの頰に溢れる程の愛嬌を湛へて、とけば丈成す黒髮を美しう結び上げたる高島田、「マアモー出來たのどうも有難う」と華な大島紬に柿色絹の裾合せ乍右手を伸して一寸振のあたり返し見れば夜目にも冴ゆる桃色繻子の美しさ、「本當にこう仕て置いてさへ戴けば今年は自分の物いじら無いでも濟み升からね」云ひつゝ又も熱心に針の手を運ばせるので有る「そうです共彼入しやつて早々お裁縫も出來升まいし夫に伯母様がお年召して彼入しやるから是からは一切姉様が遊ばさなければ成りませんわね」「エーそうですよ然し皆な受持つた處てたかゞ三人切りですもの」「デスが姉様私本當に心配なのよ……あの伯母様があんなお喧まし相な方ですからね……」「アラ又琴ちやんは开麼事を……私をそれ程案じてお呉のは嬉しう御座い升が……決して伯母様は开麼に意地の惡いやうな方では無かろうと思ひ升わ」「夫でも此の間俊子さんにお目に掛りましたらねこう云つて被入しやるのよ「私さへ御一所に居れば又母様と姉様との折合をどうにでも好い樣にするのだけれどこう遠方では仕様が無いが嘸是から姉様がお愁氣思ひを遊ばすだろうつて」「マー俊子さんが开麼事を」つと鈴張りたる如き眼元を潤ませて「眞實に俊子さんお優しい方ね」事も無げに云ひ放したれどあらそはれぬは膝に落ちたる怪しの雫、さとられじとてか態と片頰に微笑を浮べつゝ物思はしげに俯ける琴子の顔を一寸覗く如に仕て「だけれどね琴ちやん私こう思つて居るのよ、私嫁つても決して姑だなぞと思ひ升まいと……やはり元の伯母様で今は本當の母様だと思つて云ひ度事は云ひも仕ませうし欲しい物が有ればおねだりも仕様そうしたら却つて圓滿に行くだろうと思ふの、あの杉原さんへいらした花子さんねあの方があんな事に成つたのも元はと云へば餘りお大人し過ぎて只只お姑様を恐れて計いらしたものだから遂にお姑様のお氣に入らなかつたとか云ふのでしよ……マア家の母様でも解りやすが一躰にお年寄は大層お淋しがるも

のですから當り障らずの世間話しとか又は新聞の面白そうな記事てもお話申して居れば自然御退屈も遊ばさ無いからお氣が紛れて些しの過はお眼にも止まらずに濟と云ふ様なものてしよう……畢竟世間てお姑とお嫁との折合がよく無いと云ふのは餘り改り過るのが一つの原因だろうと思ひ升わ」「眞實に姉様がそう云ふお心持て被在しやればいかな伯母様だつて乾度お優敷仕て下さるてしよう……　夫は兄様があんな好方てすからね……」「エーそうてす共だから琴ちやんも安心仕てね若母様が开麼御心配遊ばす様ならあなたから御安心の行く如に申上げて項戴よ……決して琴ちやんも一所に成つて心配するのじやあ有りませんよ」「エエ　私乾度安心仕て姉様の幸福を祈つて居り升わ」漸く安堵の色見えてさも懐かしげに姉の顔じつと見守る

夏の夜　　[illegible]濃　伊藤蹈子



「そう〳〵夫がいゝのよ……　私は大丈夫皆さんの如に他家へ嫁ても痩る如な事無いからねェ、、」「アラ开麼事仰在つて若お痩なさつたらどう成さるの」「そうね其時には」一寸小首を捻つて考へる振すれば「其時には」つと鸚鵡返しに問ひ詰められて「マーいゝわモー开麼事云いつこ無しホヽヽ、大分更けたてしよ、さ今夜は仕舞ませうね」手早く〳〵針數へ了つて鋏、篦、物指と夫々針箱に納むれば違ひ架に美しきお蒲團敷たる置時計はちんちんちんと十時を、晝の暑さも何處へやら漸く冷え渡れる夜風に軒の風鈴は折節チリン〳〵と優敷音を響かせた。

ほんとうに姉思ひの情緒纏綿、姉は稍理性の勝つた氣丈の女として善く表はされて居る、或は作者の家庭観も此れに籠つてゐるか知れない、兎に角穏健の作（選者評）

○若き妻

京都　豊子

一

ほんとに田鶴さん許るしてお呉れよ、結婚する時は此樣な病氣があろうとは自分ながらも知らなかつたのだから、明日はいよ〳〵手術を受けるのだ、すればまあ片足無くなるだけですめばまだしもだが、悪るくすると此の生命も取られねばならん、お前もまだ十九、今の内なら望み手も多くあろう、何うぞわしの事は死んだと思ふて相當な緣があれば其方に身をかためたらよかろうと思ふがね田鶴さん。まあ良人何を仰しやるのです良人のお眼には其樣に私が薄情者く見えますか例へ結婚せないでも一度良人と定められた上は何處迄も妻であります。それに〳〵お情ない事を仰つしやつて下さいますな、良人の御病氣が何とありましようとも其の爲の妻ではありませんか。あゝ有難ふお前がそう言つてくれると倘すまない樣でね、それに病氣が病氣なんだもの今度は幸ひ片足でのがれるとした處がいづれ悲しい目を見なくてはならない、それよりかお前も一つでも年の若い間にまだ良人は其樣な事を仰つしやいますの良人が何と仰しやろうと私は何處迄も良人の妻なんですもの是ればかりは御言葉でも何うしても従ふ事は出來ません。田鶴さんお前が優しい心でそんなに迄言ふて呉れるとわしは泣く程嬉しいよ、しかしね。良人もうお止しなすつて下さい、私は何の樣な苦痛も悲しみも良人のお爲ならばそれ程嬉しい事は御座いません、萬一もしもの事が御座いましようとも何うぞ御安心なすつてね、あゝもう此樣なお話は止しましようあのお乳を召し上がつて下さいましな。やゝそうだつたけ。

二

黒田知近は一昨年の十一月京都醫科大學を卒業した新學士である、卒業後間もなく九州の去る病院長に望まれて、其れと同時に松本大學教授の娘田鶴子孃と結婚の式を擧げて、新婚早々彼地に赴任せしは去年の九月であつた。彼地に任つた知近は大變受けよく、多くの人に良院長と慕はれ何不足なく最も幸運に過ごし來たのに嫉妬の神は怨みてか、今年の五月知近は突然膝關節痛を起し日々强痛のはげしくなるまゝに元學びし醫科大學附屬醫院に一度受診の爲、田鶴子と共に上京した、かるき膝關節炎と思ひの外、聞くも恐ろしい結核性のしかも病勢は餘程進めりとの診斷、何うしても切斷手術をせなければとの事で止むなく同病院外科二等室に入院する事となり、明日はいよ〳〵そが手術を受

くるのである。

三

あゝ僕は何故此樣な病氣が出たのだろう、明日は何うしても片足を取られるのだ、それ位の事はいゝがもしも魔醉が醒めずに其のまゝ歸らぬ人となれば、僕は生命は惜くないが可哀そうなのは年若い田鶴子だ、自分は何處迄も知近の妻で終つてくれるつもりだろうが、世間がそうさせない、それにまだ若い身をあゝ何うして其んな殘酷な事が出來ようか、あゝ可愛そうにまだ結婚して僅か九ケ月にもなりやしないのにと、あれを思ひ是れを想ふて追懷の念に勞かれた眼を開きて妻は如何にと見れば、晝の勞れのさすがに若き身他愛もなく眠つてゐる樣子、窓の外の保養園で蛙が鳴き出した、雲をはなれたのかぼんやりした朧月が桐の葉影と共に淋みしく西の窓に寫り出した。更闌けし病院の夜の沈默を破ぶりて聞ゆるは隣室の患者の咳嗽の聲、看護婦の廊下を歩む足音も靜かてある。

四

外科手術室の前に二人の看護婦と共に手術の終るを待つ年若い婦人の面は心許なげに曇りて太き溜息を洩らしながら‥‥‥つと扉が開いた、消毒衣りゝしい看護婦三人手術終りし一人の患者を運搬車にのせて靜かに引き出だして其處に待つ二人の看護婦に無言に手渡して、婦人に目禮しながら。あのお靜かになすつて下さいます樣に。おゝ御苦勞樣て御座いました有難ふ御座います。いえ何う致しましてあのあなたなるべく安靜にお歸室下さる樣に。看護婦は又室には入つてしまつた魔醉の醒めやらぬ夫の蒼褪めた顔を見つめて居た眼をつと足の方にうつすと右足は大腿より切斷されて白い繃帶にもう血液の赤ふ染つてゐる、若い妻はハラハラと落つる涙を袖に受け、て車の後より靜かについて行く。

多くは手術の場を描く、此篇は手術の前後を描いた、之れ本篇が舊套を離れて、讀者に新しい感興を催ふさしめる所以であらう、一、二、三、四のうち四が最も情景活躍した好文字(選者評)

○病室

長岡　土田りた子

春も中頃を過ぎて、世間はなんとなく靜かてある。苦しさうな息をついて病ひの床にふして居るのは櫻井光子てある。

「お光樣光子樣」室外から呼ぶ聲に「アイ」呼吸遣ひも微かに口元には無限の愛が籠つて居る。

「お光樣御病氣は如何、今學校の歸りです、貴女の事

が氣にかゝりまして一寸御寄り致しました」聲も微かに「よういらつしやいました私御許樣が戀しくて只貴孃のいらつしやるのを御待ち申して居ました、先生はやはり相變らず御出ですか私皆樣の御顏が見たくてなりません、本はどこまで御習ひなさいましたか」

「ハイ……あの皆樣が相變らず御出校です、それからね貴女學科の方など御心配なさいますな、あとで御敎へ申しますから……それが爲めに尙ほ重くなりますとわるうございますから、そうして先生がね學校の方等は御心配なさらない樣につてね、なほつたらよく敎へて上げますからつて」

「ありがとうだけど私ね」語り合ふは櫻井光子と武田春子とである。今高等女學校三年生で向ひ合せの家である。

「武田樣私こんなとこいやてす」

「だけどね家にいらつしやると尙ほ〳〵病はつのる許りですよ、こゝにいらつしやつてこそ、それてもね貴女如何てすか」

「有難う大分なほりました」

「御大切になさいね」……

「最う御歸りの」

「あの遲くなりますと内で心配しますから」

「そう、ぢや御家の方に宜しく、それから學校へいらしたら皆樣に宜しく申して下さいそんなら御免下さい」

「失禮致します、たしかに申します」

光子は春子のかげをみおくり東窓に身を寄せて、暮れ行く庭を眺めながらさめ〳〵泣いて居る。「嗚呼私はどうしてこんなに身體がわるいだろう、武田樣の樣に丈夫になつたらどんなに嬉しかろうどうして私はお母樣がないだらう只一人の荒々しい心の父に育てられて……いや〳〵ぢきになほるだろうそうしたら一生懸命に勉强しやう……今迄の損をみんなかへしてしまほう」なんだか一度に笑顏して狂氣の樣に浮きたつて、もう面には沈痛の色は現はさない。

室外は閑寂として内にはらんぷが燈された。

其内に下女が來て

「おや御孃樣貴孃どうなすつたの」

「どうなすつたつて最うなほつたんだよ安心しておくれそうして家へ行つたらね御父樣になほつたから二三日經つと學校へ通ふ事が出來ると云ふておくれ」

「ハイかしこまりました、必とさう申します……貴孃どうしてそんなに早く御なほりなすつたの私びつく

りしました」
「これは私の氣一つさ、病氣と云ふものは氣持一つてよくなつたり、わるくなつたりするものだからね」
「さやうでございますね、早くおなほりになつて何よりお父樣がお欣びでございませう」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其後の日曜には果して春子と一しよに、散歩が出來るほどに快くなつた。

病人を小說中の人にすることは一種の流行と見る程多いが、此作の變つて居る處は、罪の無い病人が表はされてある、學校の科業を氣にするとか、快くならうと思つて俄に氣が引立つなど、全く若いうちの病氣にはありさうで、文は幼稚であるが擧實を以て此篇を推奬す（選者評）

○白川路

京都　芳香

わたしや京都の白川生れよ‥‥‥清い流れがサアわしの友よ‥‥‥美はしく澄んだ聲音が聞えたかと思ふと姿優しい白川女が二人大きな包を頭の上にのせて身ぶり可笑しく南の方より來た南禪寺橋を東に渡つて白川の流れにそふて北へ北へと歌ひながら行つたが歌聲の細ふなるにつれ其の後姿は微かに遂に岡崎の森につとかくれた、消え行く影を見送つて居た二人の乙女は力なく顏を見合せながら「さあ正樣風を引くといけないからぼつ〱と歸りましよう、早く快癒なつてね、あの二人の女の樣に此の奇麗な流れを友として樂しう暮らしましよふね其の內には兄樣だつて屹度私達の事を思ひ出して下さる時もあるからねおや正樣もう日が落ちてよ」今迄寂みしく照らして居た夕日は紅の珠をくるくると廻して愛宕の山の一端に沒した、西の空一面にパアと殘照の赤く抹してやがて樺色となり淡黃色に薄れて行く「ほんとに正樣早く快癒なつてね退院ができる樣になつて下さいよ私そればかり待つてゐますのよ」「そりやあ私だつて早く快癒なりたいのだけれどね、でもね豊樣何うも病氣が病氣ですもの」「又正樣そんな事言ふて正樣がよくなるつて氣て養生さへして下されば屹度よくなつてよ」「そうでしよふか」病める乙女の面はいと



春日和　麻布　松崎歌子

ど蒼う丁度呼吸なき人の樣なるを友の豐子は優しい表情に富むだ眼でぐつと其の面を見つめて居たが、つと顏をそむけて下を向いた、其の鈴しい雙の眼には露の白玉がキラッと光つた、骨ばかりの手を犇と握りしめながら「正樣快癒なつてよ、ね屹度よくなるわ正樣そら三月の婦人世界に肺病實見談てのがあつたでしよう私それを今ふと思ひ出したの明日持つてくるから讀んで御覧なさいな」「さうねじやあ一度見せて下さいね」「ハア、正樣も何うぞねつまらぬ考へなんかすつぱり捨てゝしまつてね養生して下さいよ」「ハア何も思はないて養生しますよ」「あら正さん奇麗な月、一寸今日はたしか四日ね」西の空夢よりも淡い弦月白金の眉の樣に光かつてゐる、「正樣何だか寒むくなつて來た樣ねさあ早く歸りましよう、いやだろうけれどねもうしばらく病院生活を辛抱なさいよ屹度快癒なるからね」あたりは一面の薄墨色に暮れてしまつた黑谷か眞如堂で撞き出す鐘の音遠の木立にひゞき渡つてインクラインの水利事務所の數知れぬ電燈青白ふ輝いてゐる、二人の乙女は手を握りながら疏水河畔を西に歸つて行つた南禪寺の年古るい椎の木が風もないのにガサ〳〵と音して梢で烏が啼いた。

背景が好いので、さもないこと迄が身にしむやうに想はれる、場所の描寫も輕忽にしてはいけない（選者評）

○狂女

名古屋市　岩田あやめ

私がまだ故郷に居た頃、八九年前の事であるが、私を痛く刺激して今尚忘られないのは狂女乞食「クリヨ」の事である。最も其以後一二度は會つたが……。今でもかうぢつとして居ると「クリヨ」の姿がまざ〳〵と浮んで來る。

「クリヨ」は私の村の乞食ではない、二日か三日目には屹度一度は來る。來れば、先づ泣きさうな聲で、「白粉くりよ紅くりよ水油くりよ鏡くりよ」と云ふ。若しやらないでもするとおかしな目してにらむ。其眼の悽い事、私は何時も泣出した。若しやらうものならそれこそ他愛ない目付でにや〳〵と笑つて、貰つた者で顏の化粧する。

「クリヨ」は餘り年寄つてはいなかつたがさりとてうら若い乙女子ではない。まあ中年增と云つてよからう。「クリヨ」は乞食であつたけれども髮は後れ毛一筋もない程奇麗に、倘油で何時もいゝ艶をして居た。

「クリヨ」は化粧をすると今度は食物をねだるのであ

つたが、此はやらないでも恐ろしい目はしなかつた。そしてもう如何しても貰へないと思ふと氣の毒になる樣な聲で泣いてゐだる。そしてふいと行つて終ふのであつた。

「クリヨ」は何時も背中に大きな袋を三つと小さな袋を無數に負つて居た。其中には鏡の片や白粉の空壺や紅の片皿で充滿てあつた。

私は妙な乞食！否寧ろ恐かつたのであつたが、如何して彼麼風になつたらうとは疑問であつた。

私は母にせがんで幾度か問うたが、母も知らなかつたと見えて、何時も「何んでも色情狂で彼麼になつたそうだよ。」とおつしやるばかりであつた。

私は間もなく女學校に入つたので、都會の人となつたので、「クリヨ」に付ては噂さへ聞かなかつたが、姿は何時も私の眼にはまざ／＼と浮ぶのであつた。

處が意外にも一昨年の事であつた。私は內海の海濱に友の峰子さんと避暑して居た時、計らずも「クリヨ」に會つた。

「クリヨ」の姿は今も昔も變りはない。けれども私は新しい者を得た。意外にも「クリヨ」は峰子さんの故鄉の者であつたので。

「クリヨ」の母は繼母で、心立のよからぬ人で、「クリヨ」を絕えず苛責た。「クリヨ」には約婚の夫があつて、彼女は眞心込めて愛して居た。繼母は「クリヨ」に對して、肉體の苛責のみで滿足せずに約婚の夫を奪つた。恰度其頃は「クリヨ」の父が病氣で寢て居た時であつたさうな。父は三月ばかり病床でもがいて歸らぬ人になつた。繼母は初七日もたゝない中に彼女を家から追出して終つた。

此れが原因になつて、「クリヨ」は間もなく狂女になつたが、村人の情で、暫時の間何不自由なく暮して居たが、何時の間にか飄然と何處へか行つて終つたと。そしてそれがもう十五年近くになると。

私は「クリヨ」の心を忍びて其晩一晩泣いたのであつた。「クリヨ」の運命！此れ程いたましい運命があらうか。私はあるまいと思ふ。

「クリヨ」！今は如何して居るか私は知らない。けれども矢張化粧にうき身をやつして居るだらうと思ふ。

少しの辯もなく、すら／＼と書かれて、此種の描寫には能く適してゐる、事實であらうとも思はれるが、勿論小說になつてゐる（選者評）

○少女の立志

大坂府　赤松富美

母親の今子は、手をコスリながら火鉢で暖ためて居る。室の片隅には、豆ランプの心細ふ燈つてゐて、柱時計は、今しも十時を報じた。母親は早寢るべく仕度をして居る。

折しも臺所の障子を、ガラリと開けて入つて來たのは今年やう／＼小學校を終へたばかりの、娘の花子てあつた。

花子は「母樣、もう御寢みなの……」と訪ひかけた。「はーッ、もう寢よかと思つてね……」と室の方りをかたづけ乍ら言ふのである。花子は「そう……」と言つたが、何か外に話しても有そうな樣子「何か話してもあるのかね……」「はい、有るのよ、だけど何だか言にくいわ……」と少し赤面しながら。「言にくいつて母樣だもの、何もはづかしい事はなかろうがな」と長い煙管で煙草を喫む。「母樣そしたら妾し言ますわ……、實はね、妾し女學校へやつて貰いたいのだわ……」「そうだね、母さんはやつて上度が、父さん如何言ふか知ら……」「だから母樣、一度父樣に賴んて頂戴な……」二人は火鉢にもたれて話しあつて居る。

折しも奥の間からやつて來たのは父親の源三であつた。父親は黒い／＼顏に、目ばかり光らして火鉢の前にすはつた。母親は其そばから「ねえもし、此花がね、女學校へ入れてくれ、と賴んてるんてすが如何でせう……」「何だ女學校へ……生意氣な事言ふな……」と叱りつけた。「ね父樣、何うかやつて頂戴な……」と花子は賴んだ。父は恐ろしい目をむいて「御前等女學なんて行かなくつても良い、こんな田舍に生れて小學校さへ終れば夫て十分だ……」と煙草を吸ふ。「だけど父さん、小學校位しまつて何にもならないわ、向ひの千代子さんかて行なさるのに……」「何だ、他所は他所だ。他所の子が行から內も行なけらならんと言ふ法はない」と花子をにらみつけた。花子は泣きながら「だつて千代子樣が行なさるのに妾しだけいけないとはくやしいわ……」「厭なら奉公にやつてやる……」母親は横合から「ねえもし、やつて下さいな御金だつてわづかしかいらないてせうから……」「何だ御前等無言つていろ……」とはねつける。花子は亦「それて御金がいるのなら妾しも間々に何か內職てもしますからね、どうかやつて頂戴な……」と賴んだ。然し父は許さず奥に行つて寢てしまつた。

夜もだん／＼と更くるに連れて世間は淋しうなる。暫くして母親は花子に向ひ「ね花さん、もう御寢みなさ

「い」と言つて花子を寢につかせた。

＊　＊　＊　＊　＊

夫から丁度二三日してからであつた。餘り毎日〱二人の者から頼まれるので父親も承知した。それで花子は大阪の某女學校に行く事となつた。花子が女學校に入つてから今日迄、まだ日が淺いにもかゝはらず、今てはその組の首席を占めて居るそうな。

○露子

美作　白菊子

先づ此んなものであらうと思はれるだけて、別に文彩ある短篇でもないが、身に引きくらべて感じる人もあらうかと思つて、此所に拔く(選者評)

丸い西窓の障子に、今恰も夕日がさした所で、盛りの彼岸櫻を、夢の樣に寫して居る、此室は、露子の書齋なので、床には、庭の櫻であろう、九谷のさつぱりとした花瓶に、未生流は、何となく床しい、そして、南向の小窓の下に、お机を置いて、其上には、大きな、西洋人形が、いつも飾られてある。多分お正午の、郵便に來たのであろう、男子らしい筆跡の美はしい手紙が、置かれてある。



今學校から、歸つたばかりの露子は、机の上を見て、ニッコリ、「あら兄樣の樣だわ、」と急いで封を切つた、そして讀む内にだん〱彼の顏色は、變つて來て、今迄赤かつた頰は、次第に青く、薄紅色のハンカチて落つる涙を拭ひ乍ら、「ア、」とかすかな溜息をもらした、「噫、兄樣も餘りだわ、」激した調子て、「そりや、妾‥‥‥妾が惡ひには‥‥‥惡ひにわ相違ないけれど、だつて餘りだわ、「私とは少い時からの許嫁で、お互に、氣心も、知つて居る筈だに、たとへ人がどんなに、いつたつて、他人の中傷に接して、其れを信じる樣な、そんな〱、兄樣だとは思はなかつた、妾だつて此の事に付いちや、どんなにか、胸を苦しめたろう、先生にも、御兩親にも詫つて、許して戴たんだし、いゝえ、何にも不義しないのだから、御兩方にはすまないけれど、當前だわ、先生だつて、あんなに同情して下すつて、皆樣にまで、注意して下さるし、春子樣なんか、ほんとうに同情して下すつて、お

おあのお言葉「たとへ他人が何といつたつて、自分さへ神聖であつたなら誰に憚る所もないわ、雲が掛つても月は月よ、必ず氣を大きく持て入らつしやい、現に先生も、あんなに、保證して下さるし、御友達なんか一人も信じちや居ないわ、ねえ、よくつて、露子様、貴方が其んなに泣いてばかり、入らつしやると、妾……妾も悲しくつて……」つとよつて私の手を、お取りなさいました、噫！あの同情にとんだお顔、眞心より出た、あのお言葉、どうして妾忘れませう、其れからは、強いて心を沈め、知らん顔してすましては、居るもの丶心はたへず此事ばかり、噫此れをどうして〳〵京都の兄様に、知らされ様、然し乍らア丶此の煩悶を、どうして胸一つにひめて、居られ様、外から知れた時に、兄様が、どんなに、お思ひ遊ばすかしら、明け暮れ、惱裏を、離れない、懊惱の大部分は、今日、此の手紙を、恐れて居たので有つた、兄様だつて、御立腹成さるのは、御尤だわ、でもあんなに信じて、下すつたんだから、きつと許して、下さるのだけれど……ア丶何と悲しい事だろう、思へば惡らしい西谷、きつと自分の戀の恨から、此の噂を利用して、中傷したに相違ない、惡らしい西谷奴、人の節操が盜めないつて、名譽を盜んでしまつた奴、おのれ惡い西谷奴、と充血した眼を、戸外に移した、此の時姉様と勢よく走つて來た、妹の清子は、いきなり人形を、か丶えて「姉様、これ貸して頂戴」つてのぞきこんだ、其顔の愛らしさ、露子は又も、涙の人である。

少し、くどいやうな所もあつて、今一いき感情の激したところを寫して欲しかつた、よわ〳〵しい女性らしい情はほのめいて居るけれど、割合に刺戟されることが少い（選者評）

○理想の友　愛知　成田いし子

上

「御孃様」日當りのい丶南向の部屋に障子を少し細目に明け、紫檀の机によりて、おり〳〵風なきに散る、白梅の一ひら二ひら、そが行衛をぢッと見やりては何か筆を下して居た政子はこう呼ばれてふと、ふり返ると女中の豐やがそこにかしこまッて居た。

「アノ、御孃様に御目に掛かりたいッて此方が入らッしやいました」と一葉の名刺を差だした「妾に……」不審ながら手に取ッて見れば、金散らしの可愛らしい婦人形、女文字優しく「吉村繁代」と記してある。

「吉村繁代」「吉村」と政子は幾度か心の内に繰り返して見たが心當りがないので「どんな方……」と先づ

聞いて見る。「ハイ、未だ御若い丁度御嬢樣位で御座いますが何でも先樣ではよく御存じのやうで御座いますよ」「そうかへ、でも妾は知らないが」と一寸考へて「いいわ兎に角逢ひましよう御通申して御呉れ」「アノ此方で御座いますか」「そうね、始めての方だから矢張り應接間の方がいゝわ」「かしこまりました」と豐の立去ッた後に政子は持ッて居た筆を下に置いて書きかけのものを机の引出に入れながら更に「吉村繁代」と小首を傾けて居たが、やがて思ひ出したやうに、つと、立ッて鏡の前へ行き、ふッくり出した前髮に一寸櫛を入れ襟を正して、さて應接間へと急いだ。

下

「貴女が花雪さん、まアそうて御座いましたか」と政子は今更のやう相手を見上げた、年は政子と同じ位だろう紫矢絣の御召に小紋縮緬の被布を着て餘りつき出してない廂髮に小さい白百合の造花をたゞ一ッまげの左の方に挿して居るのが何となく奥床しい、これがそも、女子文壇紙上にそが才筆をふるッて讀者に舌を卷かしめて居る吉村花雪女史、自分も常に敬慕しつゝあッた花雪女史か……と思ふと急にその人が尊く思はれた、亦それと同時に政子はいかに嬉しく感じたゞらう「妾、もう御作を拜見してはどんなに御慕ひ申して居たでしよう」と先刻豐が置いて行ッた茶菓をすゝめた。

「有難う」と繁代はそれを受けながら「まア、妾こそ、貴女を、ね、御慕ひ申して居りやアこそこうしてぶしつけに伺ッたんですものホヽヽさぞあつかましい奴だと思ッて居らッしやるでしよう」「どう致しまして本當によく入らして下さいましたわね、妾、こんな嬉しい事は御座いませんのよ」とにッこりして「どうか是れを御緣に以來からも御交際をね」「それはもう妾から御願ひしたい處ですわ」二人はもうすッかり御友達となッて了ッた、暫く二人共沈默て居たが繁代は思ひだしたやうに「政子さん貴女は敍情文が御得意でしたわね」「ホヽヽ御得意だなんて、ですがまア何よりか一番好きですの」

「そうでしよう、敍情文に貴女の御名前の出て居ない事はないんですもの」一寸語をきッて「妾は亦どちらかといやア抒事の方がよう御座いますわ」「そうですね、先號の小松原なんか本當によく出來て居ましたわ、貴女なぞわ全く天才といふものですよ」「アラ妾は駄目よ、貴女こそ天才て居らッしやるわ」「ホヽヽ、それぢ

やアどちらも天才ね」「ホヽヽヽ」「ホヽヽヽ」

さすがに長き春の日足もやう／＼西に傾いてパッとさす名殘の光は純白のカーテンを洩れて彼方の壁ぎわにうつゝた。

趣味ある二人の話はいつ果つべくもない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

日頃理想の友にあこがれて居た政子は今日はからず其友を得たので喜びは一通りでない、何も知らぬ女中の豊やにさへも「豊、初めて妾の理想の友が出來たのよ」と披露するのであッた。

投稿家の想うて居さうな事て、やかましく評論するほどの作てはないが、是も愛讀の一つとして小說欄を賑はす（選者評）

○友思ひ

芝　穗積いつ子

「あらお美津さん」

「まあ千代子さん」

一昨日から吹き暴した風の勢ひも、今日午後からは漸く靜まつて、彼方此方に吹き落された病葉、殘んの和風にかさこそと囁き合ふて居る。茲は芝山内杉並木の下を縫ふて、紅葉館前の通りに出やうとする細道て、ばつたり出會ふた二人の女、久しぶりての會合か、嬉しさうな問は相互に發せられた。

「眞實に暫くでしたことね、お變りなくつて」

「えゝ相變らず丈夫よ、呑氣な性だからよ、でも貴女はゝゝゝ」

「えゝ矢張り丈夫なんですよ、でもね、學校時分と違つてこう何だか、苦勞と言つちやあ可笑しいてしやうがね、漸々年を老るやうな氣持がして、呑氣だなんて貴女が羨しい位ゐよ」

笑は見せても何處か世帶じみた、然も昔ながらの女學生振りの容貌、身丈の娉婷とした、美津子とは彼女が名である。齡正に二十前後。

此女は二つ計り年下らしい、流行の庇髮に桃色躑躅の簪を品善く挿して、銘仙の袷に海老茶袴、はき／＼した物の言ひ振り何となく、境遇に化せられぬ性質を露して居る。

「でも貴方は妾なんぞから較べりやあ、餘程感心だか知れないわ。妾なんか何程學校計り行つてたつて、碌な事は出來やあしないの。それから見りやあ貴方なんぞ、お母さんの手傳ひに、弟さんや妹さんの世話してね、隨分大變てしやう、妾察してよ。

妾、考えちやあ悲しんで居るのよ。貴女のお父さんさ

へお亡くなりにならなきやあ、昔のやうに面白く一所に學校へ行つてね。左う〱何時でしたつけ、あの筍は一度ゆで、煮るのは何うしてしやうなんて、普通のやうな事を疑つちやあ、笑つて居ましたつけね。あの時分の事を思ふとまるで夢のやうね。千代子さん妾學校を退校るのよ。と種〱貴女から不幸の話を聞いた時の悲しさつたら無かつてよ。父が居さへすりやあ、這麼事に成るんぢやあないんですが、どうも仕方がありません。學校を退校ちまへば、今迄折角仲善くして居たのに、行つたり來たりするのが止まつて、自然疎遠になつて仕舞ふのが悲しいつて、貴女と二人で泣いてから、最早二年計りになるのね。ても矢張り親しかつた友達は何處か違ふのね。手紙の往返は絶えた事は無し、貴女も忙しい中をね度々〱。妾、始中終思ふのよ、何も彼も神様がかうして下さるんだと。でも會つて見れば倘慕しいわ』

落語家　三河　藤城のぶへ



杉の枯葉はさら〱と落ちて來た。牛乳配達夫が乳の罎を下げて傍を通つて行つた。躰を除けた二女、鐵鎖に寄つたまゝ千代子は、倘語り續けるのである。

『昨日もあの、何時でしたつけね、そう〱神武祭の日に二人で寫つた寫眞ね、あれを見て熟々追懐たのよ。丁度其日は大森から池上の方を、少しは疲れても二人で一所に疲れりやあ本望だなんてね、隨分歩いてね。未だ咲かなかつたけれど、若し田舍の寂しい山の中に一本でも櫻が咲いて居たら、それこそ萬緑叢中紅一點だわなんてね。菜種の花が奇麗に咲いてるのを見て、ほら貴女作つたじやありませんか（七重八重花のみで散る山吹と色は同じよ實のる菜の花）てね、妾等も山吹のやうに花ばかりで散らないで、菜の花のやうに花を咲かす上に種を殘さうてね、貴女の良妻賢母論を聞いたてしやう。全く夢のやうだわね。其貴女が現在じや妾のお母さんのやうに。アラ失禮ねお母さんなんて、でも能くこんな所で會えたわね、不思議よこれも神様がして下さつたんでしやう』

「全く左樣ね」

二人は心置なき立話しに、早や夕暮の幕は杉林を掩ふたのにも心付かなかつたが、西に傾く夕陽の樹の間を縫ふて來たるに、ふと氣付き二女は殘り惜げに別れを告げた。增上寺の鐘は今し寂滅の響を陰々と樹の間に傳へて行く。

これが立話しとすれば隨分能く饒舌る女である、饒舌る女を寫したと云ふ點に於て、此作は面白いのかも知れない、冷評のやうだが然うじやありませんか（選者評）

○小間づかひ

日本橋　れんげ

今しもお奥から下つて部屋へはいらうとした私は不圖お孃樣のほころびを縫ふのを忘れたので又もお廊下を傳はつて行くと奧樣のおへやからもれる話聲の中に「芳」と云ふ語が聞へるので惡いとは知りつゝも足は動かない、とも知らで朋乘の聲で。

「ほんとに見かけに由りませんてすね」

「私もね初は氣が附かなかつたけれども餘まり不思議だからね試して見ると彼が片づけた後は乾度何かなくなるの、此間もね春がほらなくなつた指環をね、おつこつて居たつてね持つて來て呉れたがね。

「そう仰しやれば此頃あの人は大變身綺麗になりまして御座いますねそれに奧樣のお市樂のお下着を私には奧樣から戴いたつて見せました」

あゝ知らぬ間に我身にはこんな災難があつたのか、今の市樂とやら指環とやらそれは皆お常さんが……いつそとびこんで明しを立て樣かとも思つたが元々立ぎきをしたからこそ苦勞ができたのだまゝよ私はとつたとかいふ人もしつて居るがいへば盗人といふ汚名がかかるむつみ睦んだてはないけれど一度は朋乘と呼んだ人、どうせ私の汚名はいつまで立つてもきえない其人のつみを知つてゝ退くのは大へん善事だと教はつた母樣にはよくわけを話してと決心した時おぼろ月のくもはれて軒からさし入た光は私の顏を照らした。

ほんの一口小說、餘に辯はない（選者評）

小說家の住居

市中		郊外	
藤村	（淺草）	獨步	（大久保）
漱石	（本鄕）	蘆花	（玉河畔）
秋聲	（本鄕）	露伴	（向島）
春葉	（牛込）	葵山	（原宿）
鏡花	（牛込）	風葉	（戶塚）
柳浪	（麻布）	水蔭	（品川）
抱月	（高輪）	花袋	（代々木）

和歌

佐々木信綱先生選評

三等

夏姫のさゝやきませるけはひして谷間にゆらぐ白百合の花
紀伊國木本町 三宅水仙

四等

たそがれや花潮めぐる磯にして嶋の少女と静けさに居ぬ
下野國足利郡三重村 鈴木雪子

五等

梅香る断食堂の夜あけがた美しいかな水浴びる人
下総國成田町土屋 長谷川しん子

秀逸

◎初夏やみどりに暗き杜かげの小さき沼に白き花咲く
和歌山 千伏ぎん子

◎あさの風うつくし人ら車して走るとやうに花野をわたる
弘前市 佐野翠子

◎山寺や二十五菩薩居並べる壇にくづれぬ木蓮の花
陸前 大場ちよせ

◎朝の欄に倚りて眺むる磯の宿君すむ島はむらさきにして
水戸市 小蘋愚女

◎亡き姪によく似し面とゆきずりの順禮を見ぬ春日路にして
飛驒 萬小夜子

◎病む母のやつれに涙催してみ肩なでつゝ秋の雨きく
熊本縣 桑原露子

◎乗り捨てし小舟のはしにかはせみの一つとまりて春雨のふる
北總 ゆき子女史

◎月まろく風うつくしきこの夕べ誰をうらみての笛なるかそも
茨城縣 荻の舍雫子

◎島の鐘は彩雲の底に聞えけり潮薫ずる夕磯の村
弘前 福井松江子

◎あまき詩に綣ひほだされて野に立てど菫興なし血わかぬ身には
日本橋 宮島みちを

◎春日うらゝ鮎子さばしる小流れやすゞな摘む子の陰若うして
麻布 秋山欽子

◎岩をよぢ苔ふみわけて眞清水のさゝやき聞けや世をもだえの子
周防 國原みどり

◎石臼の目きざむ斧の音さむき山の上の宿梅の花さく
銀鈴宮

◎
東京 中村千代

あらわしの羽ばたく峯の岩の上にゆかしく匂ふ姫百合のはな
本所　田中久子

○
山青む甲斐の初風乳母訪ひて都にあらぬほゝときすきく
長崎縣　芳子

○
戸によりて夏の雨見る海の宿君すむ島と虹ぞかゝれる
呉市　世良ふみ子

○
屑繭を椽に干したる山の家の晝静かなり栗の花散る
上毛　磯貝末子

○
餌をやりて水とりかへてかなりやの朝の歌きく白梅の窓
岡山　田上濱子

○
望まれてその一枝を參らせし人とばかりをなどて戀しき
靜岡縣　わか葉

○
笑めば笑みなげゝば露の栞せむはなれ小嶋の夕づゝのかげ
長野縣　豐田たかの

○
朧夜や古井の底の水の音に沈む樣なる身の運命かな
安房　内代汪子

○
牧草に笛弄ぶ詩の子のよき衣ぬらす春の村雨
信濃　中島いちえ

○
君戀ふる宵元結のふとたえてそゞろ狂ほし此亂れ髮
上總　能城美代子

○
雨晴れて夕日斜に海士が家の貝殼屋根に鷄の鳴く
福岡市　藤村芳子

○
水草の今か開きしけはひしてさかしま不二の崩れける哉
京都　S子

○
街つゞき遠くもあらぬ君が家の軒の火消えて夏の夜ふけぬ
埼玉　西田雪子

○
いもうとを都へやりてこの春は我ひとりつむ峰のさわらび
下總　佐久間芳子

○
牛小家に夕月寒く影さして犢の乳を欲しとなくかな
羽前　長岡草舟子

○
友は逝きぬ胸の秘密とこしへに最上の河の底にうづめて
磐城　刀紫子

○
提燈淡くも寂く影も母まさぬ我には悲し故郷の道
上毛　關口むめ子

○
ことことゝあふるゝ水に小羊のあしひたしては夢む葉がくれ
相模　中里かく

○
秋千草露より露に夜は明けて七野越しゆく馬士唄涼し
神戸　竹奥文子

○
春風にひらひらめぐる花ぐるま母に負はれし昔をおもふ
信濃　古澤あき子

○
み名呼べど冷たきむくろいらへなき通夜の室かやかうの香しめる
磐城　遠藤尾上

○
御謎かなる君がみ袖をそとひかへ花に言はせし我思かな
伊勢　紫女史

○
かぜにちる櫻あつめつ歌はそへついつなげ入れん人のたもとに
越後　長谷川田都子

○
さびしげに辻にたちます石佛頭巾の上に桃の花ちる
佐世保　田中要子

○
薪負うて山路おりくる少女等が歌たえだえに秋の日暮るゝ
金澤　大地波子

○
朧夜や石を鳴らしてさらさらと水は流れぬ梅が香のせて
麻布　矢澤いと子

○
亡き母の御墓の邊に咲くすみれ香りも高き紫の色
相模　岩澤翠子

○
如月や梅が香しぶる夕月夜妻戸もさゝで人はおはしぬ

○　千葉縣　蜷川かつ子
隅田川堤の雲にゆきくれて花のふすまにねむる舟人
○　赤坂　中　ゆき子
夕がすみ沖つ島やま立こめておぼろにつゝむ海士の釣ふね
○　澁田　須崎かね子
都より姉は業卒へ歸り來て梅の香たかし今朝の綻び
○　横濱　藤原すみ子
風に散る藤の花びら水に浮き春くれがたの雲のむらさき
○　上毛　富　美子
村しぐれ幾千代かけていろかへぬ松のみさをぞゆかしかりける
○　伊勢　童　子
ふりしきる雪のうちにも時しりてすゞなや春の色を見せける
○　伊豫　福井白百合
鳥はうたひ花はひらきぬ春は來ぬかへり來まさぬ母をしぞ思ふ
○　上毛　花波池女
佐保姫は天降られぬ春風に霞のま袖ひろがへしつゝ
○　大阪　吉田すい子
山吹よその花色と香とを我の學の友となれかし
○　福井縣　赤松八百乃
春の香に甘きは君の息なるか事なし操に咲けるしら桃
○　大阪府　長谷川君枝
ひともとの花をたよりに外國の人もあそばん園山の花
○　備中　馬越昌恵
まだ若き蘆の中を春の壽とつばさ廣げにえがく鶴かな
○　京都　棠　子
山寺の鐘のひゞきもみにしみぬさくらかつ散る春のゆふぐれ
○　新田　つゆ子
梅が枝に宿かる谷のうぐひすはさもたのしげに鳴き渡るかな
○　茨城縣　澁葉花舟子
昔にうみてそゞろあるきの少女子が小櫛落しぬ白梅の園
○　伊豆　福井友代
妹つれてたそがれ時に散歩せば夕日をあびて雪の白富士
○　羽前　清　香
兄君の逝かれし夜にも似たるかな月影淡く小雪そぼ降る
○　兵庫縣　黒田水蓮
大御代の惠の露に色そへてまなびのはやしいよゝしげれる
○　名古屋　島田千代子
我が庭の一木の梅もほころびて鶯來なく聲ののどけさ
○　伊勢　かすみ
背の君が手植の松は枯れ果てゝ時雨るゝ庭に螽斯のなく
○　印旛郡　相川みよ子
やむ人の枕邊照らす燈火のかげ薄暗く夜は更けにけり
○　明石　盛井しげゑ子
打むれて若菜摘む子の袖の上にまたふりかゝる春の白雪


豆賣り　豐橋　藤城のづへ

○　伊豫　鷲崎かめ子
晴れ渡る野山の雪もそこゝゝとなだれとなりてとけてゆくらん
○　能代　小笹千代子
つみ草を里の小川にて洗ふ兒のかざしにたはるゝ胡蝶愛し
○　豐前　南溪女史
彩羽あげて籠の孔雀はまひいでぬ春新らしき大王の庭

○ 柳河 清子

夢の畦すみれ摘みゆく少女子の緋の振袖に蝶のもつるゝ
○ 紀伊 鐵子

森に入りむかし戀ひにし術を招びてもだえて一人泣くかな
○ 埼玉縣 村上花月

雛だんの酒に色よき桃の花一ひら散りて姫がつむりに
○ 常陸 稻葉翠子

幼なくば月と見なまし筑波根の峰白妙に降りつもる雪
○ 羽前 淺外子

かれの音も諸行無常と聞ゆなり佛經ひもどく春の夕暮
○ 東京 燕雨子

ながき夜にあまたたび見し夢のぬし七世の後の君ぞ戀しき
○ 滋賀縣 菊香靜枝子

吉野山花も跡なく春老いて青葉の奥に山ばとのこゑ
○ 廣島縣 河村たもつ

うす霞桃の小村にたなびきて友呼ぶ牛の聲眠氣なり
○ 永井久子

咲き滿つる花の山をば出て初めておぼろにかすむ春の夜の月
○ 近江 松風子

ひう／＼と風にゆらるゝ菫花白き胡蝶のたづれ來りぬ
○ 日本橋 原田仙子

君送る雨の琵琶湖に立つ煙たなびく彼方雁ひくう飛ぶ
○ 佐世保 初瀨みつゑ子

紅梅におぼめく春を山しろの古りしみ寺に今鐘の鳴る
○ 三河 金田よれ子

語らへばおぼろ月夜となりにけりあまりやさしき君がすゝめに
○ 上野 金井黃水子

草枕結ぶゆめ路の時雨るれば風ふかぬ夜も木の葉散るなり
○ 丹波 森田柔子

そよ風に秋なびかせたどゑ哉梅が香ゆかしき乳母が伏屋に
○ 大阪 牧山久子

うなひ子が椿葉めてまゝごとの河岸めぐりて春はきにけり
○ 長崎 山口蝶子

磯の邊の五月の小村に日は暮れて烏一二羽森へと急ぐ
○ 水戸 中山道江

春日和わかなつむとて少女子の聲こそきこゆ野に出る道
○ 沼津 飛奈久枝

遠山は花の白雲たなびきておぼろにかすむ春の月かな
○ 大阪 糸子

かざす手の花より白き少女子もあかう染まりぬ都の風に
○ 紀伊 文子

七とせの旅をかへれば故鄉は昔ながらに櫻咲くなり
○ 常陸 今泉義子

長閑なり胡蝶舞ふなる春の野邊み空に謡ふ雲雀聞えて
○ 信濃 花園守

笛の音に霞のとばりさゆらぎて緋桃がくれに童牛追ふ
○ 埼玉縣 近藤とく子

亡き姉のゑみしおもわに似たるかな露をふくめる白薔薇の花
○ 若狹 津田汐汀

曉の鐘つきおへて櫻くだる我衣手に花吹雪する
○ 磐城 遠藤尾上

眠そへて砧うつなる母君もあらん夜なり月片照りて
○ 本鄉 中村ふじ子

隅田川岸の櫻に風立ちて空にみなぎる花の白浪
○ 遠江 鈴木春子

八千草の花さく野邊は遠けれど吹き來る風に香りするかな
○ 神奈川 あやめ

若菜つむ乙女かへりて春の野の草あたゝかに雨降出てぬ
○ 東京 谷間姫百合

愛らしき小ねこのねむる南ゑんに春風たちて櫻散るなり
○ 京都 島田千代

直ぐならば薪となりて果てぞせむすねて出れる荒磯邊の松

○　韓國　原登里子

ふるさとに睦みし友よわするなよほたるとぶ夜も雪のふる夜も

○　福島縣　小林華子

朧夜に君住む都戀しとて見つむる方ゆ花の香せまる

○　相摸　相樂きみ

思ひあまり一人たゞづむおばしまに春の小雨の音ぞさびしき

○　下總　川奈部琴

今日もまた二人に暮れの鐘鳴りぬ家路わかるゝ川添の道

○　相摸　倉橋よしえ

銀扇にそと琴爪をはづしけり軒に來なきし初燕に

○　尾張　横井浪花

おなじ世にうまれし人の子なれどもつひにしらじな親のなさけを

○　越前　野坂雅子

ところ〴〵桃咲く藁屋ほの見えて霞こめたり江南の村

○　攝津　森井せい子

かゝる夜におなじ心の友ほしき櫻花散るこのうす月夜

○　山梨縣　藤森師惠子

琴の音のもれくる庭に火影して秋海棠に小雨そぼふる

○　韓國　鏡白萩子

春の川前に流れて一本の白桃匂ふ藁ぶきの家

○　北總　あやめ女史

桑の香に夜更け渡る蠶部屋今年は誰れが衣を織るべき

○　熊本縣　津田秋子

遣瀬なの胸にまつはる蔦かづら縺れ亂れて解くにすべなき

○　南葛飾　牧野邦子

暖かく春日輝く椽先に活けて樂しむ梅の一枝

○　越後　硯都子

君住める里を過ぐてふ里川に想を秘めて花流しやる

○　山口縣　萩式部

しづの女が薪買にと町に行く車引歌節面ろき

○　遠江　宮城梅子

青葉風若葉の風に霧ゆらぐ音もきこゆる山中の湯

○　伊勢　垣内かつ代

友は繪にたくみをもてり夕雲に歌ならずやとかろう肩うつ

○　麻布　牧野榮江子

その露に濡れませ君よこのあさげ摘みてし花の色うすくとも

○　日向　歌子

杜鵑二聲三聲音づれて秋の苗田に雨は降りつゝ

○　山口縣　中津江照子

雪分けて小松を引し野邊見れば霞の底に菫咲くなり

○　熊本縣　黒肥地清子

三年ぶり我は聞きけり初音する故郷の若葉の山時鳥

○　徳島縣　紫浪子

ともすれば糸繰る手をばやすむなる庭の菜畑に蝶の訪ひ來て

○　二葉

われもまた少女なりけむ人の子よしばしは物もおもはざらめや

○　靜岡縣　石神喜惠子

忍び泣く天なる姫の袂より落ちし雫か白ゆりの露

○　神戸　天泉春蔭

あやめ草結ぶ五月の玉かづら涼しくかゝる袖の上かな

○　南品川　渡邊金枝子

夕もやのつゝむ木立や花の散りて大地に響く行く春の鐘

○　上毛　黄水子

耳なれてねざめの友となりにけり嵯峨のゝ奥のさを鹿のこゑ

○　千葉縣　吉原勲子

都にと行く友おくる村はづれ我身の宿世更に悲しき

○　羽後　千葉みつ子

深山の櫻も今日は散りしにや谷川ぞひに花流れ來る

○　信濃　有賀まさ子

小鳥なく森を出づれば夢宵に栗の花匂ふ藁ぶきの家

○　常陸　芳香子

せゝらぎは落花さそうて夕べの野若尼住むなる寺に流るゝ

○　南總　三橋芳江
うたゝれの夢のゆくへにまどひありゆふべ冷たき水仙の花
○　陸名女史
瀧壺や飛沫に濡るゝ岩の上に女神の如き白百合の花
○　南品川　萬千田野里子
人さりて人ぞなつかし春の夜の小窓に細き雨の音きく
○　失名
秋の野に折り殘されし女郎花深き惠の露ぞかゝれる
○　若狹　汐汀子
遡る利根の夜舟の春寒に語れば同じふるさとの人
○　神奈川縣　淸水富美子
少女らが手に持つ花をしたひ來る蝶の心の愛らしき哉
○　小石川　近藤愛香
水にうつる若葉の小家白き藤影ゆるがしてあひるむれゆく
○　熊本　八並喜美子
夕暮に降りつむ雪と見へにしは垣根つゞきに咲ける卯の花
○　下谷　新井秀子
楓のかならむ頃はかならずとおもひまたるゝ君がうつしゑ
○　筑前　沖たつな
梅が香に朝月ゆらぐさゝ川や水面ほのかに霧たゞよう
○　浜花　北川花童子
植わたす早苗のすゑに見ゆるかな賤が垣根の卯の花ざかり
○　丹波　齋藤美子
母を待つ兒子のなく聲やかましく庭の櫻に月仄めきぬ
○　下野　永山ちか子
君ゆへに思ひなやます我が心あはれと思へ山櫻花
○　向島　花村艷子
清水吹く凉しき園の東屋に燈火見へて箏の音する
○　北總　塔西女史
梅雨晴れや川添ひ道に少女子が夕日あびたる日傘の榮えよ
○　神奈川縣　岩澤花笠

卯月夜卯の花白き垣根道すれゆく人の香のたゆたひや
○　四谷　櫻子
何となくこひしくなりぬ流れゆくうす紫の雲の行方の
○　播磨　綠子
せゝらぎに螢と見しは大空にまたゝく星の光なりけり
○　神田　佐藤柳子
欸乃は闇より洩れて歸る厂謝來夜舟の波に漂ふ
○　内之浦　竹中たみ子
白桃の花びらのせて行く人のみあとを慕ふ蝶ぞおかしき
○　函館　春江子
霜白き朝の牧場をふみ分けて一人聞きけり天地の靜歌
○　北見　梅田香子
碎けちる磯の白浪泡とびて雪と見まがう冬の月の夜
○　岡山　坂東須美子
春の野に菜の花見へて霞たる空に雲雀の聲ぞ聞ゆる
○　横濱　後閑らく子
花ちりて思は遠きふる里の春の景色はいかになりしぞ
○　臺灣　松しまみどり
運命とや女十九を榮もなう世にわすられつ有りゑんものか
○　小石川　山崎房江
きゞす鳴く菜花の中に月落ちてほのぼのしらむ春の山さと
○　四國町　平岡すゑ
花白く月清く照る此夕君いまいづちあゝなつかしや
○　上總　鈴木花月子
むら消えし白雲衛も打とけて谷間を出づる鶯の聲
○　大分縣　加納豐子
翁婆の昔語りに春の夜をあやなく眠る頃もありした
○　美濃　市川覺子
むすぼれて繭煎る夜かな吾背子の訪ひ來ぬ窓の山吹の花
○　豐前　中村直子
玉椿こぼれし春の御社に孔雀二三羽春の雨ふる

○迷ひ路の深山へ迯る折にして袖がすさびの樵り歌聞く　福島縣　水上喜佐子

○花名せと呼ばう花賣侍せつゝみ堂出てます尼君わかき　大和　霞女史

○我胸に咲く夢の華二人來てたまへといひぬ散りたきおもひ　京都市　田島かほる

○櫻散る朧げの夜は君ゐます東の空のいとゞ戀しき　仁川　今田きく子

○春日和斜めに照らす庭石に小猫ねむりて櫻花ちる　備後　中山やちよ

○けふもまた四方の梢をながむれば花の錦きと風ぞ知らする　越後　池端千代子

○涙涙の我が身をかこつ鐘ならむ月はおぼろに花散る夕　茨城　矢口はつ子

○にしきなす桃の園生にきて居れば歎の心もなのづからなる　山口縣　渡邊靜子

○こゝろなききこりもおしき心地せむみやまのおくにかをるすみれを　大坂　薫　蘭子

○春霞たなびくひまに見ゆるかな行くや歸るや眞帆の片帆の　陸奥　白梅子

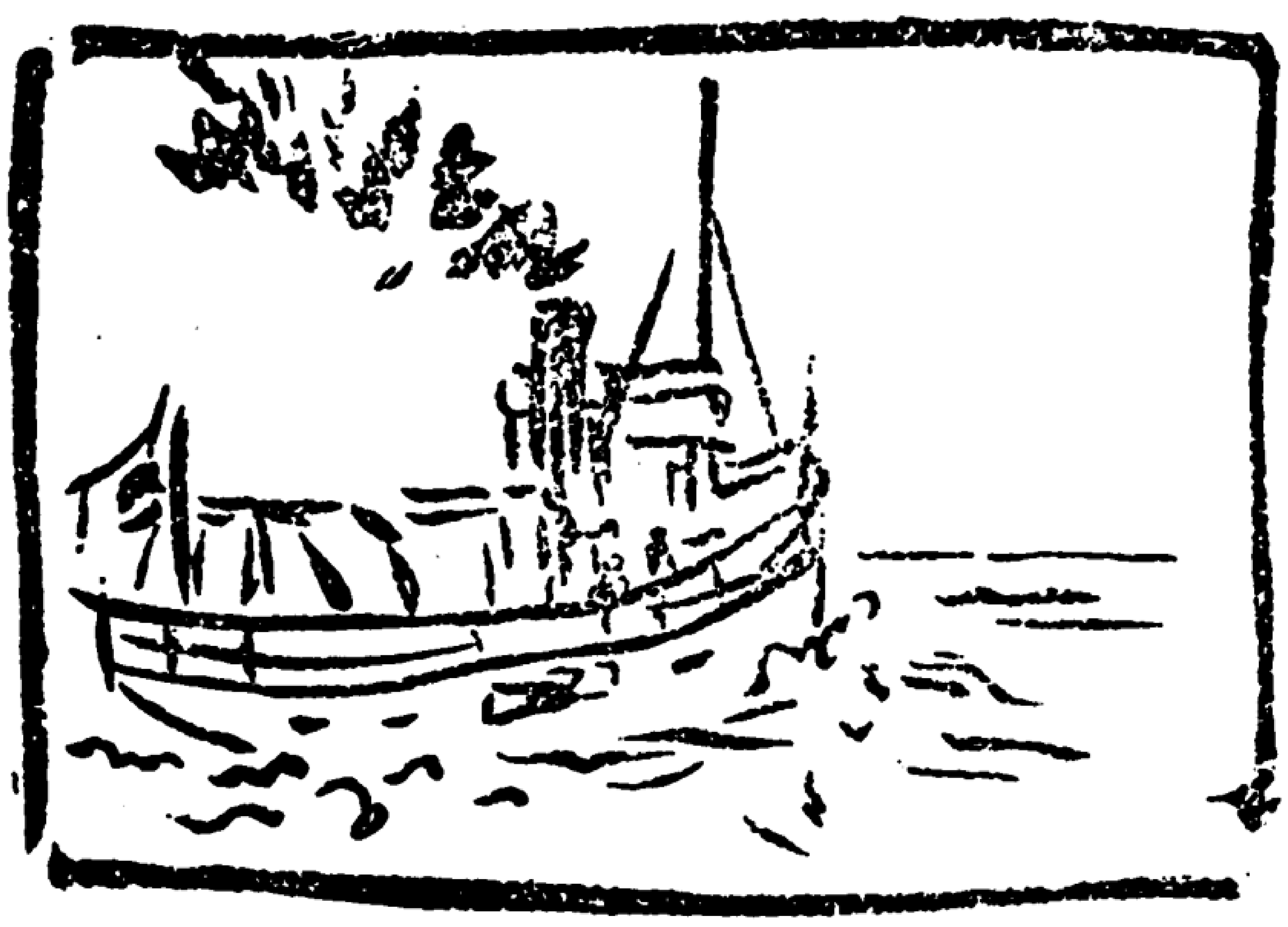
○父こひし母なつかしく日と月の出入にかけて思ひこそやれ　靜岡　堀内つま子

○旅人がすげの小笠を傾けて急ぐ野路の夕ぐれの雨　長門　孤　董女史

○底あさみさゞら波立つ谷川のそれにも似たる我心かな　金澤市　意志子

○　和歌山市　村　重子

汽船　出雲　大森銀子



○雨はれて夕日なゝめにみどりばの下かげ淸し雛のこゑ　美濃　梅村たい子

○行く春の水になやみは流しやり鶏飼ひくらす若葉野の原　京都　南田千代

○み佛にきのふ手向けし木蓮の花ほゝ笑みて香みちけり　大阪　鎌田春枝

○春風やひとりは行かで我が宿の櫻をさへにさそひ行きけり　千葉縣　川名靜江

○けふもまた吉野の山に日は暮ぬ果なき花の陰傳ひして　肥後　喜代子

○栗の花の散りては浮ぶ渡夕淋しくうかれ猫行く　肥後　垂子

○陽炎のたつ庭廣しまゝ事の惣散らばる花の數々　南總　能城利以子

○うらぶれの身を涼風に吹かれつゝ螢追ふなり小田のゆふぐれ　井上文子

○行春のかたみに摘む薫草志賀のみやにあかもすげ引く　京都　島田千代

○山の庵豚とりにと出てし間にしのび入りにし小鳥の跡　上毛　花波池女

○かろく吹く風になやめる灯火を近くよせけりはるの宵の人　神戸　船戸ゆき子

○琴の音の床しう漏て夕顏の花咲き初めぬ二つ三つ四つ　美作　性全紫女

○行く春や理想の藤のはなびらにかいつけて見ぬ懐しのみな　奈良縣　政子

○青柳の糸くりかへし／＼春の女神の何を織るらん　和泉　水郡ひさの

○去歳の春君と別れし闇の都にあはれ淋しくもゆるさわらび

○　和歌山　富永政子
人跡のたえし深山の谷川の清き流に櫻花散る

○　大坂　梅月女
鶯の涙に歌ふ聲きけば春なほ殘る心地こそすれ

○　金澤市　鹿江よし子
影きよき月にうかれて長き夜を枕さだめずあかしぬるかな

○　日向　甲斐きす子
春のくれおぼろに見ゆる彼方の灯のなどてかわれは胸とゞろくな

○　陸前　今泉八重子
われながらあやしかりけり心にもなき古を夢に見る夜

○　福島　景山女史
短か夜に泣きつ恨みつ闇の子銀鈴ふりて亡き母呼びぬ

○　千葉縣　三橋愛子
蓮咲く山田のくろの細流れこの頃かけし橋も見えけり

○　八王子　秋月芙美子
布を張る板をかすめて紫の桐の花ちる朝の庭かな

○　下野　翠葉女史
夕月のかげふみながらたゞずめばいと靜かにも桐の花ちる

○　幽水子
女柚峯に茶を煮る煙りして若葉に濺ぐ雨またやみぬ

○　大坂市　鎌田春枝
春風やひとりは行かでわが宿の櫻をさへにさそひ行きけり

○　信濃　吉田露子
裏庭に積みし豆がらから〳〵と庭にみだれて夜嵐の吹く

○　名古屋　杉原すゞ子
五月雨に燈火遠くほの見へてあたり淋しき暮れの釣殿

○　埼玉縣　近藤久子
なつ草のしげる門田のせゝらぎに水鷄なくなり夕暮の空

○　下總　花馨子
鶯や園の訛りは變れども遁れ得て臨し春の細道

○　南多摩　横倉浪子
墨染の暗き野道を辿りゆき今宵もとはん白薔薇の窓

○　宮崎縣　岩切しづ子
ふりつゞく雨もうれしや晴れ渡りなづかし月影見へにける哉

○　相摸　中村すみれ
うれしきは千とせの松の木の間よりながめさやけき月のかげかな

○　周防　正子
あめ十日やまひ七日の柴の戸を訪ふ人もなし五月の空

○　福岡市　中村峰子
春日なる杉の木陰に集ひ來て人に親しむ神のさを鹿

○　仙臺　文子
葉櫻の木かげに眠る幼兒の罪なき姿神に見せばや

○　南多摩　加藤巍子
卯の花の山家に月の淡うして翁歌よむ聲おごそけき

○　會津　星野光子
いろ〳〵の雲やめぐれる會津富士丈夫大刀はく益男々しき

○　大阪　露子
浪華津の淀の河面を徃き來する白帆かぞへて日はくれにけり

○　山形縣　寒紅梅女
心だに曇らで道をふみゆかばいつかは峯の月を見るらん

○　渡島　鴎島女史
とこしへも變らぬ色の女夫松我れ見る度びに思ふ木嵐

○　千葉縣　鈴木かね子
涼しさに團扇片手に攜えつ里の堤に螢狩する

○　豐後　富士子
ゆら〳〵と光いざよふ水の面をかよわき蝶の花したひ行く

○　宮崎　杉野ますす子
春姫の御衣とも見し花櫻跡なう散りて青葉茂れる

○　無名子
夏ぐさのしげみが中にゑみそめて立てる姫百合折りてかへらん

○　四谷　岡村澄子
吾妹子が苗植ゑ終へてかへる頃五月雨はれて夕月涼し

〇　磐城　やま川
夏の雲霓神湧き出る勢に富士ふみこえて東へかける

〇　赤川みち
紀伊といへばなちととはるゝ伊勢の屋どまだ見ぬ瀧のさてはづかしき

〇　下野　染谷徳子
錦着るすべこそ知られ故郷を忘れぬばかり家土産にせむ

〇　牛込　川上清月子
小簾もれてそよ吹く風の涼しきは假寐のひまに夕立やせし

〇　下野　梅澤哲子
夏の夜月うすれたる夕霧に朧ながらや佳き白衣人

〇　香川縣　山村松子
橋詰に二人涼める京の娘を照して過ぐる螢呼びけり

〇　讃岐　十河花孥子
わびしさに訪ふ人あれど山吹の細窓あけぬ春雨の宵

〇　麻布　片岡みよ子
一むらの大和撫子うらふして月もいろなる庭たづみかな

〇　下野　紅波女史
見るも憂し見ざるもさみし如何にせん昔戀しき君がうつしゑ

〇　靜岡縣　石原時子
日はおちて海は五色に松涼し枝に白帆の往來せる哉

〇　常陸　大和田清子
無住寺の庭荒れ果てゝ千草生へ夕淋しく松虫すだく

〇　香川縣　森田こまき
青疊匂へる寺の廣間ふく風ぞ涼しき蜜顔の花

〇　滋賀　梅香
約せしはあだとなりけり我が病ひ雲のかなたに人やまつらん

〇　三重縣　森永雪子
ひまもなき綠の竹の葉がくれに鳴く音もしげき春の鶯

〇　瀬戸町　津金糸子
たちよりて折らまほしくも思ふかな色なつかしき山吹の花

〇　大和　榧根しよ
山田守る翁もいく夜れさむらんこゑかしましくすだくかはづに

〇　羽前　菅野たか
神風に憂き村雲ははらはれて心地よげなる十六夜の月

〇　夷隅郡　新井春枝子
いかなれば故郷の蟲の音には似ぬと京の小籠に夏の夜わびし

〇　沼津町　飛奈久枝
思ふどちかすみわけつゝ來て見ればあらのゝ末に雉子鳴くなり

〇　紀伊　尾上子
れもやらで待ちにしかひや有明の月に一こゑなく時鳥

〇　筑後　堀木
五月雨にいためしむれは今宵しも晴れてさえたる月にわするゝ

〇　大連　林政野
泣きてれぬ稚兒を抱きて日每々々奥津城とひてともになくなり



おはり　熊本縣　臼杵すゐ

〇　大和　堀内たけ子
世の人の目にこそみえれ時ありて吹き渡るらむ伊勢の神風

〇　栃木　秋雨子
水かゞみ姿つくろふはじらひやうなじたれたる水邊の藤

〇　和歌山　池見俊子
朝の山猿が夢の醒めずして眉麗はしき高僧の行く

〇　若狹　内田美代子
よもすがら降る五月雨はまがつよを嘆く御神が涙なるらん

○ 備中　篠原しげ子
ひな祭りたんご祭りの度毎にさずけ給へや子なき我身に
○ 相模　今井よし子
星とゝぶ螢狩りせし我妹は今さすらふか其星の國
○ 南多摩　花輪靜江
しやくやくの花をりまして兄上の文机に置く心やさしき
○ 豊後　鈴木幸子
渡し四里今日は立つべき島宿に晴れを寓る朝ひばりきく
○ 熊本　六花
願はくば鳴くなやめかし夕鴉我にはやめる姉のいませば
○ 陸中　高橋葉子
杣人の強き足につふれにけん野路の早蕨いたく折れぬる
○ 熊本縣　津田秋子
袖に散り裳裾に匂ふ花の野を夢と流れぬ夕彩霞
○ 羽前　佐藤芳子
野は荒れて氷きびしき北韓の君な思ひぬ吹雪する夜半
○ 茨城縣　富士子
君がため菜にせんとすみれつみそゞろぬれにしわが袂かな
○ 下谷　蕉雨子
花一枝折りてとせがむ君のために衣ぬらしゝをりのこひしき
○ 肥後　みどり女
桃の花かどにつなげる金鞍の驄馬に散るなり洛外のやど
○ 西播　小泉愛子
朝日影うらゝにかすむ野邊ゆけばこゝにも匂ふ姫桃のはな
○ 越後　五十嵐富榮
うら若きおひ〳〵傘は遠くなりて岸の柳に春雨の降る
○ 與　いち子
亡き人の柩を送る春の暮おくり火寒う鷲ぞ鳴く
○ 秋田縣　小笹涙紅子
長閑なる春の日ながに蝶追ひし小猫ねむりて桃の花ちる
○ 近江　今村野百合

春の夜をわが思出の數載せて車走りぬ灯し火の町
○ 信濃　百瀬菊枝子
凩は弓絃たかなる音のして闇の夜神の怒るが如し
○ 伊豆　野菊女
鶯に歡樂の曲うたはせて君と相倚る紅梅の窓
○ 伊勢　靜子
希望ある光はみつる君が身は末たのもしう思はるゝ哉
○ 淺草　高橋はる子
御心を戴く民はうれしけれ榮ゆる國はにぎはひにけり
○ 周防　藤岡靜子
冬の風空をめぐりて陸奥の野にも山にも雪は降り來ぬ
○ 麹町　麗子
緋桃散る流れの岸邊駒とめて足洗ふなりうら若き人
○ 函館區　小島いま
寢殿の夢も亂れて曉の枕にかをる庭の白梅
○ 能登　天涙子
おそろしや何の報のかへりきて心いたむる種となるらん
○ 播磨　田村孝壽子
月見へず星影うすきおぼろ夜に遠く聞ゆる車井の音
○ 岩代　小原愛花女
雲の色もゆかしき花薗小逕に咲ける春の野にして
○ 岩代　渡部とら子
少女らに摘みのこされしたんぽゝのかたぶきつゝも花咲き見んと
○ 横須賀　花舟子
栗の花に蝶まふかなたなつかしき乳母が家なり琴ひゞきくる
○ 東京　船津麗子
梅さくや匂をこめし呉竹の根岸の里に鶯のなく
○ 若松　中原ふみ子
入相の遠山寺の鐘の音もいとゞ淋しき秋の夕暮
○ 新潟　花え
繪日傘の夕日につゞく楓道鹿のなく音の傘より聞こゆ

◯姉君の寫しゑ取りて眺めつるかはらぬ色を松葉の色に　　大分　秋　月　子

◯春の野に滿る梅が香を尋ね來て鳴く谷の鶯　　豊橋　一　枝　女　史

◯眞帆かた帆みえつかくれつかすむなり沖のなみぢに春やたつらん　　尾張　殘　星　子

◯なつかしき故郷出てゝ四年へぬ母の戀しききたかぜぞ吹く　　下野　猪　口　榮　枝　子

◯讀みあきて草にさし置く書の上にしばしを蝶の來てやどりけり　　栃木縣　習　氐　家　女

◯時ならぬ風に散り行く病葉を見る度ごとに思ふ母かな　　若狹　塚　本　ふ　さ　子

◯なたねなに接して張れる蜘蛛網に罹かりてもがく蝶の心は　　大分縣　平　田　つ　み　子

◯行きまし〻祖父が手植ゑの庭の梅今年やう〳〵ほころびにけり　　本　郷　三　千　風

◯花の露硯にうけて書いて見ん限り知られぬ梅の香を　　和歌山　長　谷　川　か　ず　え

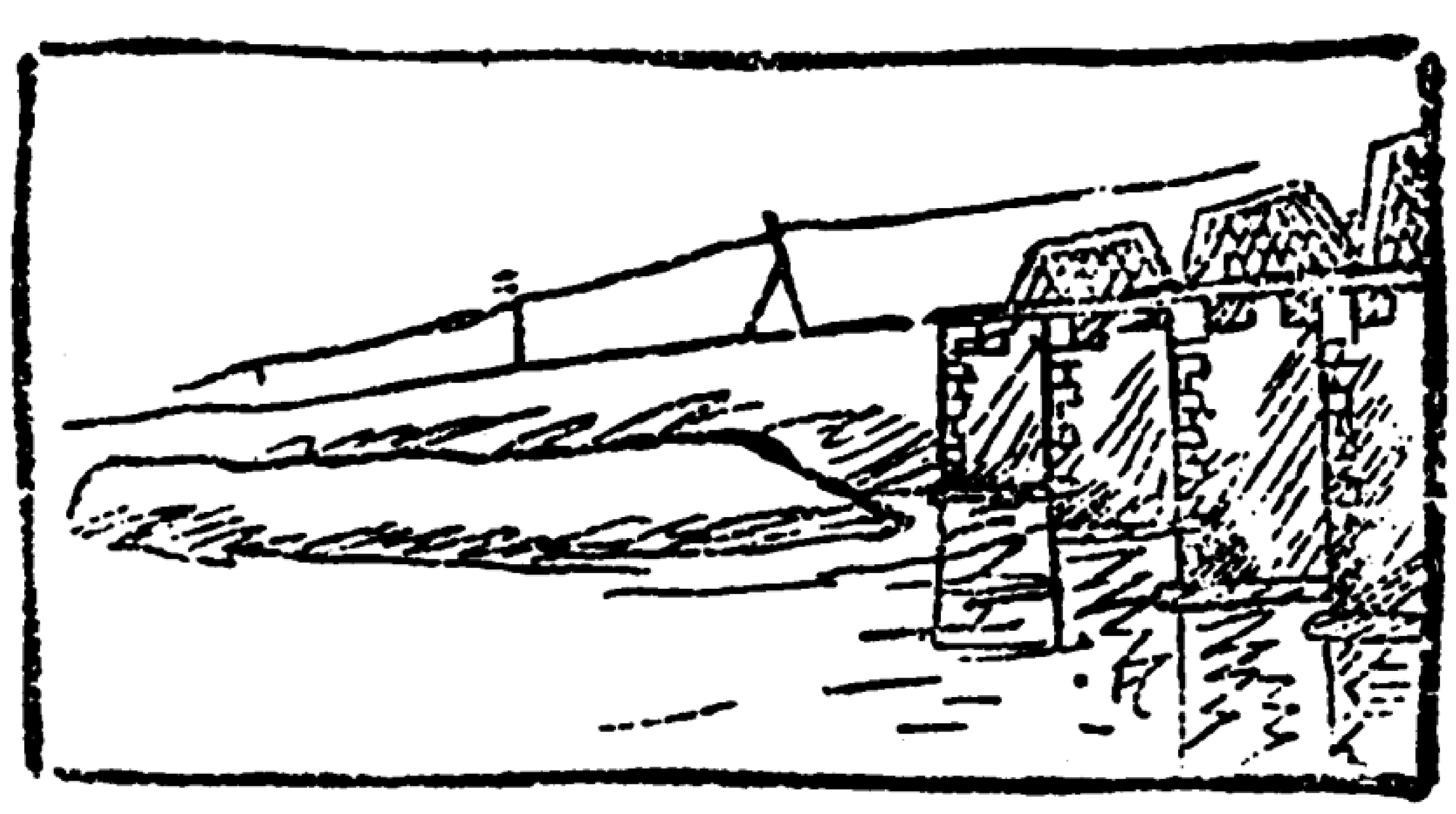
◯青春の血潮のもゆる若き子の情なき戀に消え果にけり　　三重縣　京　ひ　さ

◯老いさきの花まつ庭の若櫻わきてみづえの繁れとぞ思ふ　　羽　後　み　や　子

◯牛牽きて追分低う歌ひつ〻歸る川添夕霞奇しき　　京都府　笑　名

◯浦里の雁鳴き渡るおぼろ夜に網引く海人の唄かすかなり　　能　登　川　島　菊　女

◯山櫻咲きのさかりは我がたま〳〵へるこ蝶の身にやなりなん　　牛　込　古　谷　久　子



鐵橋　　千葉縣　習　つ　れ　よ

◯經誦しつ枯野をたどる旅僧や月光なく風すさぶ牛夜　　茨城縣　芳　香　子

◯落日や遠島ぬらす片夕雨虹七彩に白帆築ゆるよ　　滋賀縣　伊　藤　艶　子

◯天姬の琴のしらべもかきたゑて籬のあたり花靜かなり　　伊　勢　榮　子

◯馬ひきて歸るをんなの影みえてひなうた消し春の夕暮　　日暮里　小　山　芳　子

◯思ふこと額みしこともならぬ世に蒔かぬ鈴菜の花咲きにけり　　京　都　靜　波

◯けがれなきこゝろぞいろにもへいてゝいともめでたししらうめの花　　熊　本　江　副　ち　か　つ　る

◯友染の振袖ながう靈野を櫻かざしてゆく少女かな　　岐　阜　三　浦　敏　子

◯菜の花の朧月夜に幾十の灯つられて狐嫁入る　　東京府　横　倉　玉　江

◯むら長の家より洩る〻琴の音や五月の一村はなに暮れ行く　　佐賀市　松　木　笛　子

◯茶の會してゆく春送る南寮の池邊の藤に雨そゝぐなり　　小　樽　高　橋　喜　美　子

◯つれ〳〵に古き葛籠の紐とけば昔戀しき京人形かな　　牛　込　川　上　清　子

◯搖籠にすや〳〵眠ぶるみどり子が笑まひ誘ひて散るか白桃　　長野縣　古　澤　あ　き　子

◯しとど降る雪にもめげずうなゐ子と兒犬たはる〻山添のみち　　河　内　陰　山　禮　子

◯山櫻咲きのさかりは我がたま〳〵へるこ蝶の身にやなりなん　　秋　田　黑　丸　と　み　子

乳母車こかげに寄せて子守女が菫摘みゆく小野の細道
伊豆　上原雪子
○
春の日に友とふたりて蝶追へば夕日もひくし菜の花の道
播磨　吉田翠子
○
水にぬれし花簪を日のあたる庭に出せば蝶きてとまる
府下　身上千代子
○
曉に星二つ三つきらめいて朝風弱く霜庭を掃づ
備後　渡邊節子
○
わざならでこの世を送る渡守思ひ出多き春の暮かな
神田　渡邊登代子
○
梅咲くと人のうはさに聞きしよりわれも問はんか龜井戸の里
下野　鹽田とし子
○
朝まだき鶯の音もかすかなり梅が香をくる春の明ぼの
駿河　まりこ
○
咲きつゞく梅の林に小雨して窓もしとゞに鶯なくも
日向　窓楓子
○
みどりなす川端柳ふき初めて逆さにうつる春の川面
沼津　鈴木多歌美
○
師の君を日比谷の園に忍びつゝ歸る袂に梅の花散る
越後　迷小舟
○
紅梅の小枝の詩箋春風にすこしゆらぎぬ舞ひいてよ姫
遊部　穂積紫花
○
余吾の湖淡雪消えて夢のごと朝風さむく馬子の笠吹く
西宮　せい子
○
ゆく雲よ心しあらば友ゐます浪花の空に止まりても見よ
周防　小藤女史
○
白藤が名殘の花に利茶する翁の額に皺多きかな
下野　夢倉吉野
○
池水にうつれる花に舞ふ蝶は泳ぎ戯る魚かとぞ思ふ
長野縣　中村まさじ
○
野路行けば花嫂々と山行けば鳥の聲して春は嬉しや

九重の御園にさけろ梅が香に醉てとまれる鳥の幸こそ
近江　千島子
○
雨の夜に靈魂うつろふ病室の闇に消えゆくとむらひの鐘
芝　内海かすみ子
○
敷島の道に通へる君ありて我詩莚にあり君榮ありはた
岡山市　母倉嘉子
○
とんぼ一つ地藏の肩へとまりけり夕日斜に赤羽を照らす
山口縣　井坂禎子
○
いく年をすぐして今日の悲しみを笑みて語らう時やあるらん
伊豆　高木美津子
○
あなをかしはれにすがると今見しは十年むかしの友よさむれば
徳島縣　まつ子
○
里の子が吹くしば笛の音さへて雪間を照らす月美しき
豐後　安部木の葉
○
川添ひや佳き人笛をふところに朧月夜を人目忍びて
埼玉縣　和久井きん子
○
明け近し神使の人の金斧もてセタンを追へる曉の鐘
石見　飯村春子
○
春の日に菜のさく畑に君まてば君影見えず胡蝶飛びくる
栃木縣　鉄子
○
降る雪を花とまがひて此の朝げ梅の小枝にうぐひすの聲
埼玉縣　船津千代
○
若葦分けて十里の潮に浮き出でぬ若き二人を乘せし小舟は
南多摩　青木つれ子
○
春の夜御燭まゐらす山の禰宜白衣の袖に櫻花散る
大阪　片山忠子
○
鶯の聲のかすかにきこゆるは竹の林に宿やあるらん
攝津　鹽田重子
○
なき友と花見しゆめのふとさめて枕邊にさすおぼろ月のかげ
印旛郡　細谷榮子

文藝遊戲

記者曰　文藝遊戲は諸嬢も御承知の通り毎號發表して居ますが、他の原稿と同じく到底紙上に載せ切れませんので、餘つた中から更に面白いのゝ拔いて此處に揭げます、趣向談、百人女、午後六時の題意の說明は其時にしてありますから參照して御らん下さい。

趣向談

○俳趣　　美濃　臼井　宮子

井戸屋の側の柿の木は今が花盛りて其下に少さな盥を据へて、若い女が洗濯をして居ると、折り折り風にひら〳〵と花が散つて、盥の上へ浮ぶ其田園の趣味津々たる所を句に作つたら面白いてしよう。

○小說の趣向　　靜岡縣　鈴木多歌美

一人の女學生都に遊學中或紳士の家に寄宿した其家には主人の遠緣なる靑年が居た此人は眞面目な勉强家故女にくだらぬ口きく事はなかつた此家の子息が熱心に女學生を愛し何かと深切にするを女はさけるので怒て先の靑年と關係が有ると父に訴へた紳士は怒て女の父に報じたので女は國に戾される事になるそこて有ぬ汚名被せられた二人は怒のあまり人々へ面當に婚約して別れる。

○海上　　みかげ　千代子

姿、夕方になると每日のように、親しき友と濱邊へ散步に參りますの、見渡す限り廣々とした海面、美しふ畵にても書きたい極てございます、日がすつかり山の端にかくれて宵の明星のきらめき初める頃には、ずうつと向ふの和田岬の燈臺に、赤い美しい火がつきます、暮れるに從つて、大阪に築港の火も、神戶の港の賑ひも皆お歌になり文章になり作りたいと思ひます。

○月　　岐阜　大西　英子

今から思ふと丁度四年前に、神崎川の橋の袂てあの懷づかしい君さんと別れの淚に袖をぬらしたのも、たつた一人つ限りの妹！吹ちやんが亡なつた時も、姿が文夫さんと新婚の式を擧げた晩も、私が生れた其夜も皆な優さしい淸い〳〵お月樣が見ていらしやいました。姿は深い因緣のあるあのお月樣を題にして文が作つて見たいと思ひます。

○雨中山　　奈良縣　中島よしみ

小雨漸く晴れた奧山の細みちを步いて居ると見渡す四方の山々は皆濃霧にかくれて少しも其姿は見へず、不如歸は前からと後ろからと啼く、其の折々に鶯が美しい歌をもらす。あゝ此の景色を美文に綴つたなら誠に面白いてあらう。

○手向の百合　　小　草　子

墓つんて返りに何心なく松が岡の方を見ました ら左手に新しい墓石が立つてさゝげた百合の花のうすぐらい中に白くうなだれたのがあはれに淋しく見えました。そゞろに若い未亡人の俤が想はれて詩にしたいと思ひました。

○池の鶴　　大阪　武田とし子

當地の天滿宮境內に築山がありまして其の中に小さい池がありますそこに三羽の鶴が悠々と遊んてゐますそして其の前に鶴の食べ物どじやうの外やるべからずと書いてありますから邊りを見ますと丸い籠の中にどじやうが入れてあります私はそれを取つて流しやりますと鶴はクヽクヽと云ひつゝ長い嘴て上手に食べましたが鶴よりは傍で見てゐる子供の方が嬉し相てした私はこういふ無邪氣なのを短文にしたいのです。

○孤兒院　　豐後　落　葉　子

去月の廿八日私は友達と一處に當町の孤兒院を參觀に行きました、丁度其日は地久節に當りましたので勞働はお休みと見え、約廿名計りの孤兒が皆一樣の改良服を着てさまて廣からぬ運動場て嬉々として遊んて居るのです。嗚呼、噫世の中に何が不幸だと言つて未だ幼くして兩親の無い程憐れな者があるてしようか、不圖私はこう考へますと急に不安の念が胸底に湧き出まして何とはなしに彼等の前途が危ぶまれてならず其いたいけな姿からどうしても目を放す事が出來ませんてした。て何時かはこれ等孤兒の憐れな境遇心事に滿腔の同情を寄せて詩なり文なりに作つて見たいと思つて居ります。

○小說中の人　　滋賀縣　西村　悅子

姿が二三日前の夜十時頃に餘りにねられないから外に出ました月はこう〳〵と照つて、あたりは何となく物淋しく思ふ折柄、此方へ近よる年

若き女、泣ける子をすかしつ丶父様がお出てだつたられと、其哀れな身なりはたしかに小説中の人と思ひました。

○眠れる兒　上毛　青木もり子

山莊の釣床に臥せる稚な子の寢顏を見つむれば何を夢むらむ紅匂ふ唇を花のやうに開きて莞爾と笑ふ其の神々しさ、あはれ天の神の使の此の子の夢魂を夢に乘せて八州の野に遊べるならむか、白と黄の蝴蝶の三つ二つひら〳〵と白の美艸に舞ふにつけても時をもわかず歌の詞杳にも書きたきもの哉。

○靜　夜　大阪府　つゆ子

或夕方町はづれの田の中にある氏神様へ御參りして一心に神の御前にぬかづいてあたまを上るといつしか澄きつた月がこんもり繁た木の間を漏れてまばらにあたりを照して居るあまりよい晩であるので思はずおくの方へ行くと小川に添へる薄暗い松のしげみに跳く揺く三つ五つ螢がとびまわつて居て何とも云へぬよい景色ですこんなにしんみりした夜のながめを靜か文にしたく思つて居ります。

○科學思想　宮城縣　てる子

妾は至りて文章はへたゞ、而し作る事が好きてす、讀む事も好きです、て常に讀書する毎に考へて居る事があります、それは今の文章が叙景や叙情文が澤山に出て居るから從つてそれらの思想は親はれて居るが是に反して化學とか理學とかいふ事があない、と云つてよい程である今は國民が理學思想が低いからて、其修養を勸めて居る場合であるからこの擧世の學才ある方々が小説或は其の他の方面に足なつかつて作文したなら面白い内に國民が理學思想を登ふ事が出來ると考へます諸嬢さんどうでせう。

○さくら堤　仙臺市　三好まさる

向ふの師範學校の長い〳〵堤の上には櫻の木が一面に植て有りますから、世が春になると蕾を破つて開ゆる學校の起床喇叭に激破られて、雨戸くりながら白々と明け行く空に吹揃ふた花を見る心地よさ、何かの趣向になりさうてす。

○大垣公園　岐阜縣　白梅子

大垣公園！如何に風光佳絶なる處てありませふ少し小高い丘の上には近郷に名高き大垣城があります其周圍には松楓櫻樹茂りあひ、南手には岐阜縣招魂社がありて勇士の英魂は永久に〳〵眠つて居るのであります。月清き夏の夜など此處へ通ふ西の道代々の藩主の靈魂の祭つてある常葉神社の近くへ通り掛ると南側にある昔ながらの堀の中より床しき蓮の香が匂ふて來ます、詩才があつたなら美しい新體詩でも出來やうものをと毎に思ふのです。

百人女

○女髮結　福岡　貧髮結

私しの希望は、今盛んに流行しつ丶ある廂髮をも少し減なしく、込入つて見掛の善い様に改良して、是非髮結の手に掛らねば、容く出來んやうな風を發明したいものです。

○新　嫁　伊勢　西野

私の思つてゐる事は澤山て、中々百人女位の文字では、書き足りません、ですが私は早くお母さんになりたいのです。

○花賣女　東京市　和歌子

私は每日々々花を賣り歩るく賤しい女で御座います、日々賣り上げました若干の御金は病で居る母様の御藥を買つて戻ります、私の理想は榮達でもなければ快樂でもありません只母様が御健康になるのが私の理想で有ります。

○おさん　京都　松井眉水

妾は人に使はれて居る下女て御座い升、て妾の理想と云ふと一寸生意氣の様に聞えますが、寢ても醒めても念つて居るのは、その此家の奥様の様に、足が痛むから揉んでお呉れお三、肩が痛めるから叩いてよお三、と自分も言はれる様にと

○小　娘　大阪　照ゆり

眞實に可厭になつちまふ、早うつと出して髮結うて見たいわ、咲ちやんや新ちやんや皆あんなに結へてあるのに妾は何故こんなか知ら、姉さん今日三越へゆくッて乾度お嫁入衣裳だわ、それに違ひないわ、妾も行て人形さんの衣服買てもらはう、人形さんに衣服着せてお母ちやんにお辨當作へて貰つて姉ちやんや咲ちやんと演劇見にゆくわ、イヤ姉ちやんはお嫁にゆくんだもの眞實に可厭になつちまふわ。

○商人の妻　靜岡市　捨小舟

私は賤しき商人のおかみさんです、其れ故理想とは何の事やら解らぬだろうと思召すお奥様方もおありでしよふがやはり理想？望みと云ふものは有るんですよ申上ましよふか、私は誰れか

ら一身に夫と共にかせぎ商法を盛くし夫は外國に妾は內地にゐて支店も多く出し日本一の商人となり年に一度づゝ外國へ觀察に行き外國人と親しく交りたいです。

○花賣女　　沼津　渡邊とよ

私は駿河路のほとりに住む花賣女でおります、朝とくより山に登り花をかごに摘ては いつも兩親におくられて 町へ賣に行きます、これと云ふ希望とてなけれど只とこしへに 朝は富士を眺め夕には紫の霞たな引く姿を見渡し、美しい自然の花のごとき心で一生を此地で おくりたう思ひます。

○少　女　　大阪市　糸　子

姉樣私し何日から學校へ行きますの 早く行きたいわ……だつて姉樣は何日も優等だつて父樣にようび貰ふんですもの、母樣私しにも頂戴チー紅いリボンやお人形や 繪葉書も頂戴そしてチー姉樣、私しも束髮に結つて頂戴な。

○下　女　　埼玉縣　田島つれ子

今朝から腹が痛くて仕樣がないなあ、一日暇をもらうか、 さうだがだんなはいゝが、あの意地のわるいお神さんが……外所へ出てしまうといいな。

○女學生　　名古屋　長　女

私が常に感じて居る所は日本婦人の通性として衣服其他裝飾品などには實に千金を惜まぬ有樣ながら 公の爲めか又臺所道具の改良などには出金を惜む私共の將來にはかゝる 點は取り去りたいものです。

○後　家　　下關　島田豊子

正直やお前一生懸命に勉强して立派な人になつておくれよ去年お父樣がお逝れ遊してからと云ふものは母樣は マアーどんなにお前で苦勞するのだか知れませんよ それでも私は娘時分に學を習つたからこれから學の師匠でもして お前の學費のたしにでも仕樣と思つて居るんですよ 母樣はねえお前ばかりが 賴みなんだからねえよく勉强して立派な人に成つておくれよいゝかへ。

午後六時

○颶　風　　北海道　高橋ゆき子

思ひ出す度に涙がこぼれるのは 七年前の十二月……阿父さんは今朝沖の方へ行つたぎり、まだ來ない、意地惡の北風は止まず、阿母さんは心配の餘りに、泣くので、私も無邪氣な一心に泣いた、歸つて來ない、時々濱へ走つて行つて、見るけれども、船一つ見えぬ、失望して家へ歸つた時、柱時計が宿く／＼六時を打つた、もう日は暮れて濱には、かゞり火が彼方にも此方にも、もゝ阿父さんは、遂に颶風の爲に、連れて行かれたのです。

○春　粧　　鳥取市　上山千重子

「ソラ六時だ、早く／＼しないかい」。「ハア只今、だけど入場券を何處へか見失ひました」、「何だれ馬鹿な、先程帶の間に入れたぢやないか」、「アさうだつけ、ホッホ、、、妾どうかしてゐますわ……」

ソト机はなれてかいまみれば、花やかに興じて今し出行く兩箇の若人、つい二三日以前嫁つたそれである、衣ずれの音ゆるやかに、長い廊下をぬふて階段に半身を沒した、春の粧の得ならぬ香がしばしたゞようて……。

○鶯　　近江　蒲生志津子

毎日午後六時頃になりますと 妾の庭園で鶯が清い聲で啼きます 妾可愛くつてなりませんで來る毎に餌をやりますから 妾になつきました。

○父よ兄よ　　長崎市　木原すい子

今しがた造船所の 汽笛がなつたかと思ふともふぞろ／＼と職工が歸り始める 其の日の出來事や上役のわる口をがや／＼と 話しながら行くやかましさ、 私は何の氣もなくのぞいて見て居りますとさつきからそこらで遊んで居た小供が、お父ちやんが、 兄ちやんが、 と走りよつてすがり付くと、なゝと、 手を引く物も有り、 其のまゝかたにのせて行くものも有る、 實に此の可愛ゆい小供を見ては、 一日の勞働も忘らるゝであらう。

○ボ　ヤ　　長崎市　白井千代子

丁度四月四日の午後五時四十五分でした お父樣やお母樣は湯に御出になり 妾一人留守番をして居ましたが お隣りの榮ちやん方から突然火事！と聲がしましたから 足袋のまゝ急いで參りました處がどうも火は燃て入られませんでしたから裏の方へ廻り手桶に水を汲んで運ぶやら近所の人を呼ぶやら力ある限り手傳ひまして 漸く六時に消止めてしまひました。

○笑ひ聲　　倉波彩惠子

私の宅は午後六時がお夕飯の時で有りますから
それがすむといつも家内の物が皆集つて其日の
事を話してはみんなで笑ひます一番と末の妹が
自分の事を云はれても何でもわからなんておか
しいなアと笑ひますから又一ふき吹出します。

○小　羊　　岐阜縣　中島　重子

庭の木戸口で家鷄ががあ〳〵と鳴いた故縫かけ
の人形の衣物も針も投げて飛石傳いに行き開け
ましたら樂しそうに尾を振つて小屋へ行きまし
た何つの間にか今年生れた小羊が綺麗な葉を啣
え可愛眸差して私を眺めて居りました。

○花友染　　京都　ひさ子

縫物にもあきた私はホッと吐息をしながらみる
ともなく窓の外をみた、昨日まで晴てあつた庭
の海棠はおひるすぎから降つた雨で大分ほころ
びてゐるそれが垣のうしろの木蓮の白い花とう
つり合つて此間兄樣から頂いた友染縮緬のやう
だと思ひながら、うつとりとしてゐると「姉樣
御飯だよ」と突然うしろから弟の聲がしたので
ひつくりして、もうそんな時分かしらと時計を
みると丁度六時。

○惠美耶　　深川　川村　愛子

春雨の降る夕、丁度小說の「無花果」を讀み終つ
た、あゝ天使の樣なエミヤ、愛情の籠つた目つ
き、優しい可憐の姿は、直に目にうかんできた
實に理想の婦人である、私は今學びの暇、否一
瞬時に理想の婦人を得ました、之からは身は女
學生ても、心は常に淸い優しいエミヤの如くあ
ろうと堅く決心しました。

○虹　　本所　高橋　元子

「アラッ」と一聲お隣の花樣が西の空を仰ぎなが
ら叫びました。私も驚いて其方を見ますと嬉し
い事アゝ美しい虹が一帶。そして私達にとてど
んなに此美しい虹が嬉しいのでせう。それは明
日花樣と摘み草に行く約束をしておいたのです
もの、此時二人顏見合せて思はずニッコリほゝ
笑みました。

○ひともし頃　　下野　鈴木　露子

洋燈の掃除をしてゐるとお隣りの島子さんが風
呂がたちましたと、招びに來て下さいました：
：厨家で釜を洗ふ音、姉樣であろう。
染色會社の終業の汽笛がボーと黃昏れてゆく野
に響ひた、前の駄菓子屋の店にはもはや洋燈が
灯された。

○料理の實習　　山梨縣　四條　艶子

四月七日私は一日の日曜日を利用して料理の講
習に行きまして大根、人參、鰹、の甘煮などの
たき方を習ひました家に歸つて早速實習して見
ますと大そうおいしく出來ました私の料理で家
内揃ふて夕飯をたべて居ますと丁度午後六時が
打ちました。

○電　報　　北海道　ひさ子

三十八年三月廿日午後六時と記した日誌!!!あゝ
此日誌いつになつてゝ、わすれられません、雲
も風も月も星も燈も皆悲しふ見え小鳥の鳴く音
もなんとなく哀れに聞えまして異樣に聞えしは
電報此聲でありましたこれぞ杖とも柱とも賴み
し兄さんの戰死を知らせて來たのです。

○ありのまゝ　　長岡市　土田　りた

今日は午後三時迄晝天なりしが其後雨ふり出し
て六時歸宅時間には盛なりき。
妾はひくき下駄にて雨具なく大に困りたり。
歸宅の後ぬれし着物を火にあて御飯をすませ
たり。

○蟹　　北海道　馬場しづ子

今年六つになる菊ちやんと二人海岸を散步して
居りました處大きな聲であれカニが居るよと申
しましたからどれと言つて手を出す柏子にザブ
ンと水中に足をすべらしたので菊ちやんは泣き
出すし私も泣き度い程でした。

○鉢の菫　　石川　ひばり

母が夕飯の準備をしてゐますと、居間にあたつ
てガタンと音がしたから、もしやと思つて、と
んでいつて見ますと、まあ、三ッの弟が、私の
大事の、大事の、西洋すみれの花を一つとつて
おまけに、鉢をひつくりかへしてあるのです。
びつくりして「ブラッ」といひますとわつと泣き
だしました。

○閑な人　　出雲　世良宮美子

夕飾を焚きつけて置いて、傍の風呂で煮物をす
ると、醬油がなくなつて居たので、早速醬油屋
へ駈けつけた急いで歸つて見れば、御飯が焦け
て大變臭い、ランプをつければならぬ、掃除も
せればならぬ、妾一人て大變忙がしい、所へ根
本綾子さんが、今晚音樂會へ行かうと、誘に來
られたけれども母が留守なので妾はやめにした
「貴女等暇でいゝわね」と言つたら笑つて歸られた

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○湯がへり

小芳

あらお寄んなさいよ、松の湯を出ると姐さんはにつこり、通りすがりの若い人に追ひ着いて、話ながら並んで行く、私は後から濡手拭をさげて伏目がちにとぼり〳〵。

ひろめをしてもう三月にも成るけれど、なぜか私は此通りへ出ると耻しくてたまらない、十三や十四のものに誰もさう深く氣をつけで、あの子はどうも小野さんに似て居る、先生もこゝを引越して郡部へ移つてから惡い事ばかし續いて、おまけに酒毒で死んださうだで後家さんが暮しに困つて、娘を半玉に出したのではあるまいかなぞ、云ふ人もあるまいけれど、朧氣ながら覺えて居る乳母に抱かれた其頃の住居、ともかくも門生の二三十人もあつて、鷗洲といへば一かどの人に知られた畫家であつたに、其遺族が落ぶれて、賤業を營むとあつては位牌の手前もはづかしい、と思へば顏から火が出る思ひで、後ろ暗い事でもしたやうに、人に顏見らるゝが怖しく、わき見一つした事はない。

前かた手織木綿に藁草履で、買物、かりもの、屆け物、父の使ひに走つた頃は、外見掛はきたなく共、心が玉で光ればとやましい處はなかつたが、今は死をかざりたてる友禪の大柄にくす玉の簪、人目をひく派手姿が、あさましい耻かしい心苦しい、行かひざまに殊更のぞき込む男をんなのある度に、知つてのわざかと冷りとする。

お芳さあてねえかあ、破鐘のやうな聲が耳もとで響いたので、ハッとして頭を上げると、畑一つ隔てた裏の友作さん、蓮根うりに來たのであらう、畚をかついで突つ立つてる、オ友さんとかけよつて、あの此間お母さんのお便りに少し加減が惡いとありましたが、其後どんな樣子ですか、手紙を出したが返事がないでと、うら問へば點頭いて、仲々腦ましやつたゞ、だがもう大分好い、大丈夫だ、お前樣にも知らすべい思つたが、案じるとわるいと思つて態と捨てゝ置たゞ、ご新樣もお前樣にあひていと見えて、熱の譫語にもお芳お芳つて、いひましたゞあ、と云はれては猶更に、戀しさなつかしさせぐりきて、はりきれ

るやうに胸一ぱい悲しさがこみあげた時、あらよつちやん何をしてゐるんだねえとつき刺すやうな鋭い聲、我に返つて振むくと、横町への曲りかどに姐さんが、グッとこつちを睨めながら立どまつて居る、ギヨッとして二三歩足早に離れながら、友さん私は達者だつて言傳ておくんなさいと頼めば、云ひますだとも、そして私がついてるでご新樣は心配しなさんなと云うてくれた、小刻みにいそぎながら五六間きて振返ると、友作さんはまだ頰被りのくびをかしげて見送つて居る、あゝわたしも此振袖なんかぬいで了つて、友作さんと一緒に家路へ急ぎたい、火の見櫓の朽ちたあの山陰の村へ……。

（評）憐むべき雛妓が錦衣の中につゝめる煩悶は人をして泣かしむるに足れり、筆致穩にして美なり。

五等

○筆の罪

小石川　深山埋木

春雨の露を宿して海棠の眠氣なるに引かへて、江戸川べりの櫻樹の見覺しくも殘りなく紐解きたる昨日今日ののどやかなる日影のさし入る椽に家の玉がうづくまりて、ごろ〱とならすのど笛に、我れにもあらずつと手さしのべてなでてやりつれば、うれしげに身をすり寄する樣のをかしとて笑ひころげる妹につり込まれて、ほのかに笑みをもらし給ふは、四五日前にめづらしくも此の京都に物したまひし父君なり、折りしも郵便てふ聲につと立ちて見るに、なつかしき姉上よりの文、あなあはいとうれしう封おし切りつ讀みもて行くに、あなあはれ〱父君は妾が御上京を進め參らせしその文にいたく御心をなやませたまひての御上京とか、扨てはとばかり胸のみをどりてとみには言の葉だに出でず、あはれかくまで御心をなやめ奉りしとは露知らず、博覽會にとておぼしたゝせられての御上京とのみ思ひ居たりし事のおろかさよ、さるにても如何なる事をか書い列ねたりけむ、たゞ何とはなしに此の樂しみ多き花のあしたを見るにつけ、一人あだに過さんもいと口惜しくせめてはふるさとに淋しう在します父君を迎へて共に此の樂しき都の景色などながめんには日頃のうさ晴しの種ともなり給ふらむかと、墓なき女心の一とすぢに思ひ立ちては矢も楯もたまらず、兄君のみ許しを得てかつは物せしなるを、今より思ひめぐらせば我が輕かなる文一とすぢに人幾人かの御心を損じまつり、幾人をか悲しまし、そがためあらぬ方に迷惑をかけまゐらせしもいくそばくとか、あはれ姉君よりちとつゝしめよとの御言の葉たまはらむとて、かくは物せしにてはなかりしものを、父君の御心いため奉らんとての筆のすさびにはなかりしものを、何とて我がおろかなり

けんと、胸中は只搔撈らるゝ如く苦しく〳〵、身も世もあらぬ思ひに、父君のうれたき御顏み參らせん折毎、御聲もらし給ふ時毎、何とはなしに悲しさの涙のみはらはらとつゝむ袖のすきよりもれて……。さあれ人の世の生だにあらば命あらば、いつかは報いん折もあらんを、露けき命は明日をも待たじものをまして七十年にあまり給ふ父君……あはれ春をつゝむ花霞もいつかは晴れ渡る時あれど、書けども〳〵書けぬうらみにむねのむら雲深うのみなりまさりて、いつ晴るべうもなし思へば〳〵我が筆の罪、今更にそらおそろしうてなん。

（評）書きたる人自らが「如何なる事をか書い列れたりけむ」といふ程なるを、その文の氣づかはれて、老の身のはる〳〵都に上り來しは、實にも親のなさけなりりや。

秀逸

○思ひ出　攝津　松風

去年のいつなりけん、空少しかきくもりて朝より蒸し暑かりし日、認むべきもの〻數々重ねたる机前にほつと一息腰をおろすや否、けた〻ましくかけ來る廊下の足音、又かと顧みれば、戸口に息せき立ちたる看護婦鳥山樣が腦溢血との急報、今し窓外に見しは彼の人なりけんに、いと心得ずといぶかしみつゝ行きて見れば看護婦二人に手足を抑へられたる其人、紫色の顏の右半面は釣り上りて烈しき搐搦、痙攣、手足を放ち置きなば寢臺よりまろび落ちなん有樣なり、氷嚢水枕の手當、さては灌腸も二筒に及びて漸く鎭靜はせしものから、猶人事不省に近き容態、僅に知覺を存せる徵はなきにあらねど五官の機能の大部はうばひ去られたるぞ悲しき、嗟乎此人歩兵少尉にして過ぐる旅順の戰に元より身は鴻毛の輕きに比して力戰奮鬪の折こそあれ敵の砲彈身近く碎けて、勢猛く飛び散る破片は頭骨を打わり、顏肉をかすめて去りぬ、到底生くべからざる大負傷も、幾月かを經て漸く人心付くに至りしぞ不思議なる、されど其右眼は竪樣に位置を變へ、眉は三つに切れ、鼻翼も欠けたり、一見怪物とも思はるゝ其氣の毒なる面も、此院に來りて



貝ひろひ　赤坂　伊地知のり子

巧なる手術を受け、稍人らしき顏とこそなりたりけに表皮の上にあらはれざる前頭骨の損傷は遂に治癒せしめん見込もなくて、此大事には立ち至れるなりけり、されば世の常の腦溢血と云ふにはあらで、醫學上如何なる手段方法をもてするも到底救ふ能はざる外傷性の腦症を起せるにて、多くの醫員が手を盡せる治療も、看護婦が熱心なる介抱も、些の効を奏せざるこそ口惜かりける極みなれ、半時ばかりを經て再び前に異らぬ發作あり、やをら鎭靜劑を灌腸して、痙攣はやみたるも、やがて又々發作は繰り返されぬ、漸く度重なるにつれ、鎭まれる間は短く、遂に五分間をだに待たぬ迄に烈しうなりぬ、四肢の强牽、顏面の鬱血、息絶え絶えに悶ゆる樣、目も當てられぬいたましさは、筆にも言葉にも盡し難し、電報に驚き來ける父なる人の心中推し量るも涙なり、斯くて四晝夜の後苦しみもつきて遂に永き眠りには就きぬ。

あはれ人の命ばかりもろきはあらざりけり、遠き荒野に驚ひしぎたるますら猛夫も、死の神のとりことなりては免れん術もなきのみかは、其攻めさいなむに任する外の事ぞなきや、夕の觀經諸行無常と告げ渡りて、向ひの森に日暮しの鳴きしきる頃、鳥山氏の靈今は何處の空をや迷へると去年を思ひ出づるまゝにかくはものしぬ。

（評）作者は亡き人が枕頭に在りて看護の職に從ひし身か。

○うつしゑ

小石川　深山なでしこ

咲き匂へる櫻が下、其れよ戯れに櫻が丘と呼びなせし母校の庭にて、友どち三人睦まじ氣に寫し取りし此のうつしゑよ。面影も姿も昔の儘なるに、儘ならぬは浮世の常とや、三人の運命、奇しくも變りはてしもの哉紫紺の袴胸高かに、フランス靴のみ足かろう、ラケット片手に老櫻の根元に腰かけ居給ふ松岡花子の君、テニス塲裡の撰手にて、目的は外交官夫人よと無邪氣に謂ひ放ち、房々とせる前髮豐かに、廂に結び給ひし頭をかたげての給ふが常なりしが、其れかあらぬかフランス語はいと巧みに友人間にてたれ一人及ぶ者なかりき、五年の春秋を寄宿舍の窓に送り迎へて目出度、業終へ嘻々として校門を出でし花子の君、其の後故鄕に歸り給ひし由のゑはがき着せしのみ、音信なきに今日は如何に、明日こそはと賴みしも空事、咲き匂ひし櫻は青葉と變り、紅葉と化せしも、杳としておとづれ無かりき、去るものは日々にうとしとの譬に洩れて、忘るゝともなく忘れ果てし折、光子の君よりの玉章によれば、花子の君は一家の事情やむなく、年來の目的なりし外交官も過ぎ去りし廬生が夢の樂しみ、今は某銀行の頭取なる某の許に嫁ぎて、リボンよテニスよと狂ひさわぎし昔の面影は更に無く、何事も古風なる姑君につかへて、日本婦人の衣服を非難し、丸まげを衞生上有害なりと口をきはめて罵倒せられしが、過日寺參

りのお風姿は黑五つ紋に裾模樣艶々しく、丸まげにて姑君の後へにしたがひゐられしも、心ばかり美はしきお顏に愁はし氣の見え給ひしとかや、草むらにすだく虫の音澄み渡る月影に此のうつしゑを見給ひて妾の如く妾等の友の上いかにと偲ばせ玉ふならむ?!

ハイチの詩集片手に花子の君の左側の芝原に伏して、小聲に「菫とばら」を誦しつゝ寫されし山林芳子の君、熱心なるクリスト信者なりき、かつて慕はしの母君逝き給ひし時も露なげかせ給ふみけしきなく、母上は、安らかに、主のみ手に抱かれて樂しき天のみ國に行き給ひしならんと、み空遙かに仰ぎてはの給ひしが、今は親切なるウォルス夫人にともなはれ遠き洋上の波をけつて名もなつかしきアメリカの空に夫人を助けて敎會に勉め居たまふよし、思ひめぐらせば渡米の前夜、上野の森に澄み渡る月影を、樹蔭のベンチにさけて相語りし、オゝ其の時よ、初めて明し給ひしお身の上、あゝ君も幸運兒にはあらざりしよ。

實母に別れし君は、二度の母君の空恐ろしき、計略にかゝりて、苦悶し居たるの時、ウォルス夫人の切に望まるゝを幸ひ、渡米するべく決したれど、なつかしき母上の墳墓の地を離るゝはと、落淚したまひき、我も泣きぬおゝ悲しかりし其の夜の光景よ、月も哀れと見そなはしてか雲をおほひき。

今日此頃は異國の野外にもえ出でし芝草を、自然の床と橫たはり、今も猶、ハイチの詩集を繙きつゝ得意の讃美歌、空高く囀づる告天子の歌に相合して、平和に長閑に歌ひ居給ふならむか、夫人の慇ろなる訓を受けつゝ樂しく暮し居給ふ君を、幸福なりと人は謂ふ、さはれ、秋の夜長、寢覺の度每、故國の墓地に睡れる亡き母上を偲び、身は今、異鄕にあるを思ひめぐらしては淚にくるゝこともあるならむ、文子の君よ幸ひに健在なれ！

詩集繙きゐ給ふ文子の君の左側に、編物に餘念なきは妾、慕はしの母校を出でなつかしの友に別れてより只一人の祖母の病をみとりすべく此の里に來りてより、暇行く駒のあがき早く、はや三年の昔しとなりき、父なく母なく頼るべき兄弟もなき妾を、不運なりと人は謂ふ、さはれ吾は思ふ、此の淸き村里に住み、自然を友とする妾は、實に幸福なりと。

何の望む處も無く企つる業もせで、只、まじ〳〵と照る夏の日光を一の麥わらの編笠にさけて、川風淸き、馬入川の邊に釣をたれ、うめば木かげに、いこひて快を、むさぼり、得たる處の魚尾は、荒れたる庭の草むらに、すだく虫の音をきゝつゝ月影淸き小椽に納涼する時、祖母と妾の膳部に上せらるゝなり、かゝる樂しき境遇をのがれて、塵深き都に功名榮達を望まん心は微塵もなし。

後の森にハンモックつりて蟬を友とし詩集繙けば、折折をくりくる微風の心地好きこと、あゝ。螢は呼ばねど來りて室内にとび、蛙は自然の音樂を吹奏す、あゝ平和なる生涯なる哉。

却て妾もみとせの昔、靑春の血暖かなりし頃は、歐米陸を、スケッチ旅行をてゝろみんと、意氣揚々、一意畫にのみ心をかたむけ、畫狂の名をとりしがあゝ思へば、何ごとも、盧生が夢のたのしみなりしよ、かゝる樂しき内にありては、又外に望む處なし、祖母君の病一日も早く、全快せんことをのみ。

（評）樂しげに見えて苦しく、不運に見えて其實幸福なる、人さまざまの生活を叙したる、面白くは讀まれたれど、作者は恐らくまことの女性にてはあらざらん。

○千鳥の曲　熊本　花あやめ

え、丁度七月の三十日でしたの、御貸申上たのが、お姉樣の方が十八許て、妹子樣が十四位、御美しい事といつたらどんな人だつて恍惚となりますよ。

お父樣は會社の御用とかでおありなさるさうて、日曜にだけ被居る事に御定なすつて東京へお歸りなさいましたの、大層部屋が御氣に召したつて喜んで被居ました海水浴に行つたり、御本をお讀なすつたり、寂しいつて私相手に御話なんかなすつて下さつたんですがれえ、昨年御母樣がお亡りになつたとの事、誠に御不憫しくてお不憫しくて。

其時丁度十二か三の娘と其妹らしい巡禮が來ましたがお孃樣は可哀さうにつて若干か包んでおやりなすつたら、——今よく其歌を覺えて居ませんが何ても——一つ二つや三つや四つ五つや六つの幼兒が死ぬる筈ではなけれどゝ無常の風に誘はれて……哀に唱ふのですものだうして聞いて居られませう、三人とも泣き伏して、しまひましたよ。

夜れ、お琴が彈きたいつておつしやるから、お隣の、御隱居から一寸借りて差上ました、大層月のいゝ夜でしたので、わざと御燈をお消し遊ばして、お姉樣が、お琴お妹子がヴアイオリンとやらか合奏なさいました千鳥の曲とかね。前彈……潮の山さしての磯にすむ千鳥……淸い御聲て高く低く御唱いなさる御聲。いゝ事いゝこと私は恍惚となりましたよ。……あは路島通ふ千鳥のなく聲に幾夜ねざめぬ須磨の關守と餘韻長う、其御手つき御こゑ、いまだに耳に殘つて居ます翌朝突然お父樣がいらして、わけは知りませんが、急につれて御返りになりました、又來ますかられ又お部屋をかして頂戴よつて。

今年て三年になりますが雁の音づれもありません、けれどもあるまで待ちませう、千鳥が啼く月のいゝ夜にはきつと御出になりませう、あゝいつ迄もいつ迄も妾は待ちます。

○嫁く夜　下野　幾舞子

朝まだきよりあまたの人があつまつて何かといそがしく立働いてくれる來る人ごとに御目出度御座いますと言はれるごとに私は何となく胸がさわいて頰が紅に染つてうろ〳〵して返事も出來ない、終には奧座敷にかくれてしまつたら、母が何て事だらう、そんなに少女心では困つてしまうれ、あちらにいつて、どうします、早く髮を結ふのですよと母に道びかれて行くと髮結が二人、鏡に向ふと常には青い方の顏が今日は眞紅、いろ〳〵の思ひに耽つて居る中に髮は結ばれた、見ると鏡にうつる我姿今朝までの油氣うせたひさしの形はなく油のためかピカ〳〵と黑光りする文金島田、自分の顏でなくだれかの頭を持つてきた樣な氣がして我れながら光りある髮に見とれて居ると、母が、立て見、座つて見して、よく似合ふとよろこんで居る、恥しいから下を向くと。金糸がちら〳〵と鏡にうつゝた、それから湯に入つておつくりも出來た、いよ〳〵衣裳へ襟袴を數々重れ合せた、ことに八尺釉の重さ立矢に結んだ帶の胸のくろしさ、いざと綿帽子きせられし時の心は、是れで皆とお別れか、私は今日から此家の人でなくなつてしまふのかと思ふと、悲しくてせきあげる淚、やつとおさへてわざと笑顏をして皆に別れをつげて車にのると、後

ふり向くひまもなく、梶棒は上つて後につゞく何臺かの車、家では可愛い靜ちやんの聲で、姉ちやんアバヨーが聞えた、何となく涙ぐまれたがしひて留て、思はれるは嫁ぐ家の風　仕へまつる舅姑の君はどんな人だらう、夫の君はやさしい方だと兄上より聞いては居たが、此身で務まるかしら、此なに早く嫁ぐのであつたら、もう少し家政裁縫も心掛るので有つたつけ、ことに炊煮料理は一家の主婦として大切の事である、やがて子を育てる、家庭教育は重き務めで有けれ共私に出來得るだらうか、夫の家についたらどうするのだらう、西も東も知らぬ人ばかりでなぞと、種々の思に胸とどろかせて居る中に、夫の家についた、立ち迎ふる人々に手をとられて光輝く大廣間、數十人のひかへてる中頃に座らせられると、共に皆の目は私にあつまつた、胸のとゞろきますます高く、耳はほてつて何が何だか夢うつつ、あゝ此一夜をどうして明したらよからう眞に嫁の恥しいと言ふ事が知れた。

○ゆふ顔

名古屋　宮脇とし子

白の夕顔は云はずもあれ、紫夕顔の大輪の見事さ、鉢の數は四十幾つ、父が丹精の名と共に、近所界隈に響いたものです。

明るいうちに行水が濟む、お夕飯は茄子の淺漬かなんかで、さら〳〵とほんの一ッ時、

それからが妹と二人、助手に母さんを賴んで夕顔棚のひま〳〵に雪灯（ぼんぼり）をつけたもので。

へ、お見事で、など近所の人がぽつ〳〵見にくる、其中につい隣り邸はやんごとなき殿が別莊とやら妾宅とやら、見に來る客の少い折など、こそ〳〵と來ては、しかしいろ〳〵とお話もあつた、あの、あの方を、妬たくもあると、妾はどんなに美しと見たてせう。

所が――ある年。枯々の夕顔の葉陰を渡る風にも底冷えがし、やがて秋ぞと心寂しい蟲の音の物置の下邊り晝さへちゝと、わびしい秋の始めてした。

とある所で妾は聞て吃驚した、あの、あのお隣りの美しいあの方が邸をしかも夜脫け出したつて。

隱れ住むには都に增る所があらうか、何遍夕顔の花は咲た、が今だにそれらしい噂も聞かない。妾は、乾度矢張此地のどこかにゐらつしやるやうな氣のして……。と云へば、こないだ學校の歸り遲くなつたあの晚?

さう〳〵あの晚?、廣小路筋の人ごみの中で……だが正か、何が何だつてあれは法界節ではないか、しかも男と二人連れだ……

そうではないと思つてみ、何だか似てたと思つてもみる。人の運命の何うなるとか、あの時あんなに美しかつたあの方の、幾とせ過た今もまだあのお顔の艶は……?

けども今年も、夕顔の花に變りはない。



やしろ　淺草　靜子

○くり言

本所　鶴ぎ子

君逝きて早や三年……たとへ約束許りなりとて、親も許して夫と定めし君……アゝ君に別れてよりは一日とて樂しき日とて無く、一層お後をと思ひし事も幾度ぞ……されどさすがに其れもならねば、身は獨立と決心なし、其業には造花を修めんと、去る年より學び初めしかど、家も多忙なる業とて、休みのみ多く、爲に今猶勉强しつゝあるなり、されどまゝならぬは我が身の上或夜母の仰せらるゝには、お前何時迄其樣にして居るぞ、もう好加減に思案して父の業をつぐ覺悟をせずや、私等とて、さういつ迄動ける者でもなし、まアよく考へても見よ、今の世の女子の獨立は容易な事ではない、其も今の內は兎も角なれど、年老いて後、若し路途に迷ふ樣な事になれば、何とする、よもや佛も喜びはすまじ、其故相當の緣あらば、早く身を固めるこそ親への孝行、家

名の爲、其上には命日を守るなら反て佛の爲では無いかと。嗚呼私は幾夜かな考へあかしぬ、君よ許しませ、常より弱からぬ身なりせば、あく迄意地も通すべきを、ア・私は遂に母の言葉に服せり。然し自分にも望みあり、そは人の多くは先夫の墓詣りなどするを不快に思ふとか聞きぬされば如何なる事情有り共、かゝる人とは添ふまじ、よしや香花は手向けくれず共深き情に慰さめ下さる人ならば私は必らず一心をば捧げ出來得るかざりの愛を以て妻の勤をせんと一人決心はしたれど、薄き情の今の世にかゝる人はよもあるまじ、共も二十を越えぬ身なりせば、アゝ何れにしても不幸なる我が身の上よ。

○思ふこと

茨城　すみれ子

つれ〴〵なる時、あるはさ夜更けて、獨燈火をながむる時など、つくづくとこし方思へば、わがふるまひにあかぬふし多く、かのことこの事、今ならばかくはせまじ、今ならばかくやいはまし、をこなる行ひしてけりと、いろ〳〵とつぎ〳〵に思ひ續けられて、取りかへすものにもがと悔しく、腹立しく、はては何の罪なき机をばしたゝかにうちたゝき、われながら其の音におどろき、空を仰ぎのゝしり、聲あげては其聲にあきれなどするを、側に人なくばこそあれ、もしあらば狂氣のものとやいはまし、いふかひなき我身には、嬉しきことはなくて、思ひいづることとてはあやにく悔しきことのみ、わびしや……。

○境遇

横濱　清水千秋子

私は幼い時から伯母樣の家に養はれる事となつて今迄十數年の間父母にも代へ難い伯母樣の御傍に居るのです、元はと云へば皆な兄一人の爲めに我家は零落し、その爲父母も病氣となり、三十餘才の早世で歸らぬ旅に行かれました、後或人の話によれば、何でも兄は東海道靜岡の近くでとある家の養子に入り、元の心はすつかりなほつて働いて居りましたがふとした事から病氣になつて父母の後を追ひ世を去つたと云ふ話なのです、私はほんとうに因果な身上です、今では我身内と云ふものは此家の伯母樣お一人、六十路を越された伯母樣が眼鏡をかけて他所の仕事をなさるのに、ぢつと見て居られませうか、私とても今は血氣盛な花の時代世の令孃方は星よ霞よ戀よ煩悶よと浮かれて居られますのに、私は水仕の業して聊か生計を補つて居るのです、そんな事は厭ひはしませんが、なぜこんなに不幸なのでしよう、此頃は又杖柱とも頼む伯母樣が持病のリウマチスで足が立たず、醫師の云はれるには、老躰故で衰へて居るから全快は覺束なからうとの事、如何したらよいでせう、豐かならざる生計に、私一人ではお藥さへもろ〳〵上る事は出來ないのです、いつも傍らに坐して看護しながら、縫物をして、やつと其日々々を過して居ります、實に女は氣の弱いもので、胸には行く末の事が浮んで來る、若し父母が活きて居たならば、暖い褥に夢を結ぶであらうに、せめて兄でもと、歸らぬ事まで思ひ出しては、涙に袖を濡します、何と云つても只今の境遇誰一人見舞うてくれる者もありません、あゝ實に世の中は冷たいもの、世には神や佛はないでせうか、あゝ。

○乳房

埼玉縣　中村紫香子

實に戀しく懷しきは、乳房なるよ!!

妾は一人子にて、弟や妹など生れては死しゝ爲七つの末まで乳をすゝりき。幼な心にもかすかに覺ふ妾は每も、針仕事に餘念なき母に迫りて寒ければと、拒むを、わざと泣聲してあまたれ、胸押ひろげて乳房弄び、眞白き母の胸にヒタと前髮さげし毛をあてゝマツチリと豐かなる乳房を口に、片方を手に握りて膝に抱かれ居るを隣家の叔母にみられ「マア小さい赤兒がお乳をのんでゐる事」と笑はれていとゞ恥しう母の脇の方に首差入て顔を隱しき。又隣りの梅子樣とまゝごと遊びには、今迄乳ねだりゐし妾の俄かにお母樣振りて、小さき胸おしひろげ、ちよつとつまみし如き小さき乳房を人形の口に含ませしよ。其の外夜寢ても猶乳房の戀しうて堪られずそと母の懷中に手を入てはうるさしと叱られし事も幾度若し母の他に宿りし時などは只淋しく乳房の戀しくて一夜泣通しに待ち明せし事など未だ昨日の如く覺ゆるに、はや十幾歳を過ぎて、妾は今は眞の母親となりて、人形ならぬ眞の赤兒に、愛をこめたる乳房含せる身となりぬ。あゝげに夢の間なりしよ。

* * * * * *

日は暖かに百鳥うたひ、緋桃白桃咲き亂れたる庭に面せし椽の柱に身をもたせ、幼兒に乳與へつゝ幼かりし時を思ひ浮べて、そゞろ母の乳房を慕ひし頃の戀しくなつかしうなりぬ。

俳句　桑谷小波先生選評

三等

小狐のあそんで居るや木瓜の花　ふみ江女史

（評）着想の斬新を喜ぶべし。

四等

向ふ合て門司と馬關の日永かな　銀鈴宮

（評）大膽に詠じ得て妙なり。

五等

呑むとして清水に櫛を落しけり　高岡市通町三十一番地　北本歌子

（評）中七、巧。

出代りの一夜となりし枕かな　越後　藤原歌子
濡れ髪に若葉の風やハンモック　淡路　紫陽花
月涼し辻の小茶屋の高笑ひ　上毛　背木もり子
夜櫻や言葉なまめく京女　伊勢　かすみ
張板に影斜めなり桃の枝　山口縣　村田松子
人に嫁世話して我は年忘　伊豆　あい子
卯の花に駒止めけり曉の月　本郷　齋藤八重子
春の水繪筆の紅な點じ晃　高崎　長坂美子
砂川なおぼろに人の渡りけり　備中　馬越昌惑
春の夜の丁字に暗き行燈哉　千葉縣　松ヶ枝・富士枝
竿の露二つ寄つては零かな　埼玉　西田露子
爐を塞ぐ窓に南山登えけり　越後　登子
山ありの岩匐ひ上る清水哉　下總　蓮葉女史
買はれ行く籠の女や桃の花　水戸市　島田小蘋子
朝虹の根からのぼりし雲雀哉　北總　菜董子
茶の水にくむや柳の下流　駿河　峯子
行春の雨綠なり三笠山　深川　山下みの
庭石に山吹たれて雨細し　下總　ふみ江女史
若竹や風を見せたる朝の月　北總　酒井宮美江
初東風や馬並べ行く美少年　名古屋　銀鈴宮
藻の花の間に魚の浮びけり　下野　遠井曉子
蝙蝠や登をさかさに神の杉　北總　山崎澄江子
笹もれて月影うつる岩清水　はな子
若楓朝の稽の持心　越後　竹子
花嫁の給日傘差して渡頭哉　高知市　高橋龜齋
夕月や小牛のほゆる麥の秋　下總　文井丈子
紫陽花や雞眠る草の家　豊後　村崎よし子
二階から螢を呼ぶや小傾城　大和　櫻根しよ子
四つ手引く小屋に夕日の名殘かな　常陸　細田かすみ
夏草の末に落ちたり鼎き螢　遠江　增田たけ子
人戀し雨の夕の燕子花　京橋　梅浦香子
さゞ波の湖畔の松や青嵐　磐城　片寄しな子
月はとく山に入りけり時鳥　大和　こう子
旅人の笠に蜻蛉のとまりけり　磐城　村岡敬子
夕がほや月洩る影の奥ゆかし　南多摩　花輪靜江
風呂たきの又仰ぎけり時鳥　土佐　一葦女
柴刈りの鎌といで清水濁りけり　廣島縣　影山美枝
草の葉を落るより飛ぶ螢かな　上野　松本きくの子



書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

四等　○明家を知らす

小石川久堅町七四　奈美木翠子

先日母の參上の折明家お需めのお話之れあり候由、私も注意いたしをり候へども二三年前までは田舍にも均しき邊鄙なる場所とてお望みに叶ふ家も間々之れあり候ひしが昨今あたりよりは田地をさへ埋立たる有樣にて明家などなか〳〵思ひもより申さず、まして近く電車さへ通ふとの事に候へば官吏などの住む者とりわけて多く朝に明きたる家の、はや夕に移り來て束の間さへ明きとてはなく、あなた樣よりの御事に候へば私も力めて心を配りをり候ところ漸う見當り申候。それとても未だ明きたるにてはなく、あなた樣もお存知の秋子樣の御住ひに候。それは秋子樣御父上此度さる遠方へ御移住にて近き內に皆々樣御引拂ひ遊ばるゝさ由にて、やがて明家となり申すべき家に候。私も度々遊びに參り候へばよく存じ居り候。先づ玄關の三疊に六疊二間、八疊一間都合、四間に候、東向の門を右に入りし勝手口には座ながらに手の屆く專用井戶（近く水道も敷設せらるべく候）あり又更に左に敷石を辿り春ならば芳香馥郁たる老梅のもと黃の花袖にこぼるゝ山吹を分け候へば南向の椽は六坪程の庭を控へ隣家に接する垣の邊り太陽の遮るほどの物もなく、折々の花の眺めにもさして狹くもなく父君が菊の栽培には殊にふさはしき所かと存じ候日暮れ燈火かゝげて六疊の間（庭に面したる室）の机に向ふ折など春は朧月微かに差し、夏は虫の音時雨の如く夏草の葉影に漏れ、秋は又月に想ひを抒ぶるを得べく冬の暖かさは又別段にて失禮ながら終日喧しき今の御住ひに比べては遙かに優るかと存じ候。父君樣の御勤め幷にあなた樣の御通學には少しく遠路かと存じ申候へども却て御運動となり侍らんか。兎に角明日は日曜にもあり久しくお目もじいたさず候へば御母上樣共々容子御覽旁々御遊びにお出でのほど待ちをり候。

（評）委曲を盡せり。

五等　○菊に添へて

靜岡縣小笠郡朝比奈村上朝比奈增田平太郎方　藤本靜江

父が手作りの菊の花小さく候へ共年寄り候て眼鏡越しに大火きらも見え候か自慢顏なるも可

笑しくて獨り微笑まれ候をいと〳〵恥かしく候へ共差上候てはと母も申候儘妹に持たせて差上候白きは怒濤黄なるは連城の玉と申候とか。

（評）悠然として南山をみる。

秀逸

○病氣見舞　岐阜　花村浪子

雪子樣御病氣は如何てすか、まだお惡るいの、ほんとに早くなほつて頂戴な、あなたが學校に見えないと私共の級はほんとに淋しいのよ、今日も甲組のチャンピオンのね例の鞠子さんや澄子さん達とクロッケーをしましたの、私の方がRて甲組の方がWてした、初めはRが勝つて居たのてすけれど、とうとうしまひに敗けてしまつたのよ、私ほんとに殘念て〳〵たまらないの、きつとあなたがいらつしやつたら勝つたにきまつてるわ、どうしてあなたの樣な運動好きな方が御病氣におかゝりなすつたのてせう、早くなほつて學校へ來て頂戴よ、ね雪子樣、私ほんとに待つて居ますよそれからまだお話することがあるの、これはね來月の第一の土曜日にテニスのマッチがあるのよ、それでねこれまでにはぜひなほつて頂戴ね、さうしないと又私の方の級が敗けてしまつてよ、甲組の鞠子さんや花子さんは毎日々々稽古していらつしやいますの、それて私も一生懸命にして居るのてすけれど、ちつとも上手になれないわ、今日の二時間目の體操の時にね、平野先生が例のあのお優しいお顏て宮本さんはどうしましたかつて私にお尋ねなさいましたの、そうしてね、來月はテニスのマッチがあるんてすから、早くなほればいゝのにねつて先生までがあんなに心配して下さいますのよ。ほんとに皆の心配だけでもあなたの御病氣がなほる位てすわ、いづれ明日ね、御見舞にあがりますから、その時もつとくはしくお話しませう、どうぞお體をだいじにして頂戴ね、さようなら。



信香あつめ　野梅のぶへ

（評）ワとノとネとが語句の終に目まぐろしい程ある。

○寄宿舍にある從妹に　金澤　山本よね子

久子さん此二三週間は、さらにお姿を見ませぬが、如何なさいましたか、此前の日曜にも今日こそはお出なさるだらうと思つて、朝からおさつをどつさり蒸して

お待ち申して居ましたのに、とう〳〵お出がなくて、ほんとに失望致しましたよ、今日も亦お出なさらぬ御豫定ですか、隨分ひどいお見限りですね、しかし今日は是非妾等の手なみをお目にかけたうございますからどうぞ萬障おくり合せなすつてお出下さい、他でもございませんが、今朝近藤の姉が參りましたの、それで兄の發議で妾と妹とが俄にお萩係りを命ぜられて只今早速と妹は襷がけてお米をといて居ますし妾は小豆をかけて火をたきながら此手紙認めて居るの！ 兄は親友の山川さん、ほら御存じの甘蔗のチャンよ、あの方をお呼び申して競爭をしようと言つて今折角運動しておなかをへらしてをります、久子さんは此頃試驗前でお忙しいのでせう、しかし今日は日曜ですもの、さうさう御勉强ばかりなすつては頭がいたみますよ、それに姉も久振で、御目にかゝりたいと言つて居ますし、おもしろい勝負も見られませうからね、末の妹に此手紙もたせて上げますから、どうぞ御一所にいらしつて下さい、お萩のさめないうちにね、きつとよ、おまち申して居ますから、あつい小豆がこげくさい樣だから、これで御免下さい、あとはお目にかゝつてゆつくり。

（評）實に面白き勝負なる哉。

○姉へ返し　　三河　中島いそ子

今日か明日かと指をりて配達のみ待居候折柄姉樣よりの御玉章とる手もどかしう拜し申候人の噂に始めては十人が九人手間どるとか聞及び誠に心元なく御案じ申居候ひしに殊の外御安産にて其後の御肥立もはか〳〵しくおはし候由皆樣御滿足の程推し上候殊に例の御氣性の御兄樣抱きなれ給はぬ手付もをかしくりんごの如き美しき頰におひげの御顏をすりつけ給ひ御母樣より小言いはれやせんと一人ほゝゑまれ候姉樣も始めて母樣と呼ばれ給ふ御心持の如何に御嬉しく候はん赤チャンは兄樣に似てか姉樣に似てか直に伺ひたけれど勤ある身の心のみあせり居候、明後日の日曜には早々始めて持た可愛い姪子さんへ初對面に伺ふ可く樂しみ居候先は取あへず御喜迄筆末乍ら御母樣始め御兄樣へ宜しく御傳へ下され度候かしこ。

（評）貴郎そんなに遊ばすと坊が泣きますよ。

○夕顏咲く宿より　　鳥取市　上山千重子

二日月の影細き夕ぐれを、やう〳〵咲き初めし宿の夕顏、一鉢二鉢撰びて椽近ううつせば、其處此處に涼氣動きて、淸き香に浴衣の袖も薫るとばかり、花より出でゝ身に通ふ何ものかを認め候。御許御自慢の朝がほは如何に入らせられ候や、寢ざめ淸き御朝の花の榮寸時も久しかれと祈り候。扨御約束の御琴のさらひ、來ん土曜日と聞えあげ候も、幸ひ二三日前より山田の姉も參り居り、明後日あたりは歸るやう申候へば、去ら

ぬうちに是非御來駕を願ひ、姉をも御仲間に加へて頂き、久方ぶり本手替手に種々の調べ合し度、明日と取定め候、御都合如何に候や、此方は落れぬほどより繁みの燈籠や、軒端の岐阜提灯に灯いれて、水うち置き候へば、夕顔の花めでがてら疾より入らせ給はり度、御令妹、御從姉樣御同伴かなひ候はゞ一しほ嬉しう存じ候。先は御返事給はり度かしこ。

（評）才氣流るゝが如し。

◎旅中より

遠江　高橋けん子

かりがねならぬ假にてひとひらのはしりがき聞へはべる、姿いてたちのなりはいともれむごろなる爲の簡御いや聞えん言の葉も侍らずなん。さて其の日は小蒸汽にて汽笛もろとも戀しくなつかしきふるさとを後に見て、大島小島の間を縫ひ／＼て海上の釣舟も島がくれゆく眞帆片帆など打詠めつゝ走る、なかしともなかし、ふと思ひこみ眉をひそめ首さしのべてなつかしきふるさとをみやれば、ふるさとの山は夢か現か幻か何方ともなくわかずなりはべり、知らず／＼涙は頰を濕し候、こゝを過ぎてより浪は高まりしも、ことなうて午の時ばかり鷲津に着きぬ。田畑村なる天滿宮、大崎なる八滿宮など拜み奉り、かくて夜更けて寢待の月もろともに汽車にのる、明六つの朝霧破る鐘の音の響ける頃三島驛につく、さて舞阪の風景も濱松も天龍も中泉も暗の中なりしこそかへす／＼も口惜しけれ。さればこゝに一日を過して淸水港に遊ばんと思ひしも遂に、はたさずなりぬ。この後は次の便りに、くれ／＼もふつゝかな私をも御みすてなく御憐みの程願ひ上げます、あら／＼かしこ。

◎都の弟へ

飾磨郡　黑田政江

無事に東京へ着ふましたか、ステーションてお別れする時「姉さんいつて參ります御機嫌よう」といふてくれたが、これて幾年かのお別かと思ふと悲うて／＼て胸が一杯に成つて、いひたい事は澤山あつたけれど、一寸もえいはなかつたの、すると汽車は、だん／＼プラツトホームを遠ざかつてしまつて、もう、妾は、後から、引かるゝ心地して、いろ／＼な事を心配して、知らず／＼の間に宅へ歸つたよ、お前もこの樣な田舍に居つて都會の風に、なれない身、隨分、不自由な事もあるだらう、悲しい事も、心細い事もあらう、けれど辛抱してね、これからは波風あらい、船路を渡つて行かなければならない身、どこ迄も眞面目に勉强して御年取給ふ父母上が、これてこそと、よろこばれる位立派な人に成つてお呉れ、妹が十分おけいこをする迄は、妾は家にゐてお父樣やお母樣に出來るだけの、おてつだひをします、お前も御兩親の仰つた事をわすれないで、よく勉强して頂戴。

◎明石の月

兵庫　白旗淸子

（八月五日別れし加古川の友よりの消息の寫し）

馬追虫が凉しく藤棚の下の草叢に鳴いて居ます。十三夜の月が公孫樹の影を椽に落して、靑白い光を机になげるにつけても、一昨夜見た明石の月の奇麗でしたのが、思出さずには居られません。明晩は藥師山頭に中秋の月を賞す筈、けれ共海のそれには遠く及びません明石の月、舞子の松、茅海の眺望、大山寺奥の幽谷、僅か二週の淸遊は、貴女と共に深い印象を私に與へました。豐かな、平和な、美しい面影は、なつかしい夜中の思出の種となる事でせう。田舍では蟬の喧しいのに閉口しますわ、有るだけの聲ふり上げて鳴く響は、中々やがて死ぬ氣色など見うけませんもの、矢張りなれても耳障のするものですね、是も夕顏棚の下凉、蚊遣の煙と共に、田園趣味の存する所ですが、親しい友もなく淋しくて耐へません、淸子樣どうぞ御手紙を頂戴、待つものはそれ許り。本性寺の庭の萩は如何に、中崎濱の鈴虫は如何に、砂白き長汀を逍遙して、ひろつた貝は、今朝朝顔の鉢へならべました。何れ休暇中には最う一度、貝子を送りかた／＼遊びにゆきますよ。ヤレ端册、ヤレ鬼灯などゝ貝子は七夕祭の準備に忙しく、盆も近づき候折角御自愛專一に存じ候。

○歸郷
神戸市　竹畏文子

昨日はつい長居いたしまして、ほんとに失禮いたしました、あれから家へ歸りますと直ぐ後へ電報が參りましたの、お祖母様が大變悪いって……、荷もそこ／＼にしてこれから歸りますわ、お目にかゝりたう御ざいますけれど、もう心の中がひつくり返つて氣があせつてますから……何れおそくも十日ばかりしたら歸ります、お氣の毒ですがお學校へもお友達へも一寸被仰つといて下さいな、さやうなら。

○生兒の名を
松山　壽美禮子

今朝六時女子出生、母子共に甚だ健氣に候、名は何と致すべきや

父上様　秀雄

未歳に女の子とは此上もなき事、皆々大喜びに候、花の如く愛らしき子には、花子こそ相應はしう候へ、花の頃には博覧會見物旁々の顔見せに上京あり度候。

秀どの　父より

○嫁せる妹に
徳島縣　山邊暉子

御文正に落手致し再三拜讀仕り候皆様にも恙なくいらせられ候由、何よりも目出度存じ候、御玉章の趣によれば、姑君には何角につれなく御當り玉ふ由、御心勞の御事と深く察し入り候、然るに御許様には忍耐てふ勇ましき御決心女として誰しもかくありたき事と感じ入り候、若し母上此世に居まさんにはと、嬉しさの餘り徐ろ涙にくれ申し候、もとより賢き御許故、今更申す迄もなき事乍ら妾等の祖母上は殊に御氣荒々しくおはして、母上に當り玉ふ中、父上にも又淫酒に耽り玉ふなど、重ね／＼の不幸に、今まで堪へ忍びたる母上も、如何はせむと一時は思ひまどひ玉ひしが、可愛き小兒に歎をかけむはと、又み心を勵まし、妾等の生長を樂しみに、むくつけき姑つれなき夫に對し眞心を盡し玉ひければ、其心の通じてや、御二方も我を折らせ玉ひしとか、御身も何事も母上の御性行に倣ひ、一層忍耐の心を强め、眞心を盡し玉はゞ、姑君の御心も和ぎ候べしと察し申し候、斯く海路はるけく隔り候へ共外に便るべき方とてもなき妾等姉妹に候へば、互に力になりて恥かしからぬべう世を渡り候はゞ亡き母上への孝行と存じ候、返す／＼も忍耐の程祈り上げ候、余は又の便りに相讓り候、先はあら／＼かしこ。

○いそぎ
福井縣　片山千里

明日から暑中休暇、寄宿舍へ歸るのも今夜限り。郷里への戻りがけに貴孃の宅へ寄りますから、茶と菓子との御用意な。

○入學の知らせ
麹町　山岡ふみ子

時子さんたび／＼御心配ないたゞきまして有難うあの學校の事ね、昨夜皆んなといろ／＼考へて商業學校ときめました、實業家になるのよ、あなたにあんなに御世話になつてあなたの學校に入學しないで御免んなさい、さよなら。

○長壽を賀す
日向　翠蘭子

來る紀元節の佳辰に御祖母様の古稀の御祝ひ遊ばさるとの御事、母より承り候、つきては緣者ならぬ私方まで御丁寧なる御招ぎ状いたゞき誠に難有く御禮申上候。人生五十年と果敢なく申し候が、御祖母様には年改り候てよりはいよいよ御健かにて、齡がための餅も數多くものせられ候由、めでたく御家の榮千代八千代と壽ぎ申し候、御家内御一同様まどゐし給ふ夜の賑さ、いかばかりかと漫ろ其御様子推しまゐらせ候、又祖父母覺えぬ身にはいと羨しく存ぜられ申候、先日御祖母様御所望遊ばされし紅梅綻び染め候まゝ一枝手折り參らせ候、妾もかゝるむしろにあやかりたく候まゝ參上のうへゆる／＼御祝ひ申上ぐべく、先は母にかはりて御禮まで申上候かしこ。

○疎忽を謝す
石川縣　寺本かず子

一筆染しまゐらせ候先日あなた様より拜借いたしましたる琵琶歌小説お蔭様にて樂しく讀み終り申し候まことに有りがたくお禮申し上げ候。さてとや今朝のことに御座候早速お返し申さんと本箱より取り出し候際あやまつて上にありし赤インキを取り落しましたる爲惡しや同册赤うそ

まり申し候因て新らしきを購ひ求め、お返し申し上げんと存じ、市内の書林を見廻り購求に手を盡し候へども、如何にせん一冊も之なく候間、在京の友人へ賴みおき候へば、何れ購求次第お返し申すべく候。
然身眘にも之あり候油斷大敵なる金言も知りながら油斷いたし思はざる失錯を釀し申譯も之なく候、以後は決してかくの如き事はいたすまじく候へば、今度はあなた樣の寛大仁慈なる思召を以て御ゆるし下さる樣偏に念じまゐらせ候先は御わびまであら〳〵かしこ。

○京の友へ

三河　白百合

温きめぐみに會ひて麗はしき花は咲き揃ひ愛らしき百鳥は樂しく歌うて、人の心の浮き立ちし春も過ぎて、いつしか青葉若葉の色みづ〳〵しき季節と相成り、血に啼き渡る杜鵑の聲は夏を迎ふるかと怪まるゝ今日此頃、舒子の君には何の御さはりもなうひたすら御學業に御熱心御勉强の由喜ばしくも亦羨ましく存じ候、さるにても幸なき吾れが身のいかに心を苦めしか、父は妾が八歳の時無き人の數に入られ、夫れより後はかよわき母の御手に養はれて漸く此處に十九の春を迎へて候、然るに哀れ脆きは露の身の御恩深き母上は去年の秋のくれつ方無情の風に誘はれて散り行く桐の葉と共に敢なく永き眠につき給ひぬ、さればやむなく紅塵萬丈の都を去つて淋しき片田舍の詫住居と相成候てより早や半年、朝はとく起きて野良に出て、夕は月を頁うて歸る境遇、何のたよりもなく候を有難や君のみ昔の情を忘れ給はず、温き玉章に吾れを慰めらるゝやさしき御心、げに嬉し涙に咽び候、妾が庭の草苺今赤々と熟し候間不味のものには候が御送申上候間、妾が手入になりしものと思召して御味ひ下され度候、あゝ此の土臭き手に認されし拙き文も君が御手に握らるゝかと思へばいと喜ばしく候、先は申すまでも無之御身御大切に御勉學なされ

山村　群馬縣　河内よめ子



槃ある月の桂を手折り給はん事を陰ながら祈り居り候かしこ。

○都の友に

群馬　しづ子

流るゝ花に胡蝶のゆめのせて、春ははかなくすぎさり、何れの野山も夏げしき、彼の綠陰幽草勝花野の匂も、げにきのふけふのおもむきを歌ひたるものと存ぜられ候、寄宿舍の山吹こがれの涙うたせたるものしばしお慰にて、今ははや風のまに〳〵ちりゆき候よし、去年御許樣等と花のかげにて草もちいたゞきし折なつかしく候、今年も加茂川堤によもぎあさり給ひしや、學校去りてはや一月あまり……げに人の運命は妙なるものにて候。
五月雨もちかく相成、「ほとゝぎす」ならひ給ふ由いつぞやの音樂會にて林田先生のあの歌うたひたまひし折など、今中々に思出られつ、雲間もる山ほとゝぎすの聲いかに聞給ひし、こなた卯花かをる椽側に膝たてゝ毎夜一聲二聲とかぞへつゝ、身につばさのありせばなどゝ、かひなきことのみ望み居候、けふは十日、只今弓はり月中空にきよくてり居候、一日前今宵は君と手とりかはして旅庭雲井櫻のかげそゞろあるきいたし候ものを……かけども〳〵名殘つき申さず、胸は千々にかき亂れあれも申上むこれも申上むかと存じ候へ共けふの出舟にまにあはずと男共のせきたて候まゝけふはこれにて筆とめ候、此文つき候折宛神樣のかゞり火金の障子にうつる頃かと存候、いかゞ。

○リボンに添へて

麻布　秋山欽子

雨傘の乾くひまなく降りしきる淋しさ、故郷を窓に傳ふ軒の玉水、音しげき朝の窓にて候、
御兩方樣には御健やかに渡らせ玉ふや。
御前樣には日々苺の手入に忙はしき由、霞帯びし綠の葉がくれに、あるは

散きつめし濃なる葉の上に、紅もゆらむ實を眺めらるゝも遠きにあらじと思ひては、すゞろ樂ましう覺え候

さても、きのふは大路小路に、子ルなどまとひし人を見かけし程の好日和、いかに寒がりなればとて、綿入とてもあるまじ、との叔母上の御言に、うなづきて、母上が心さへ濃紫地の袷と更へ申し候

すが〱しう心地よきまゝ、樂ちやん伴ひ、たそがるゝ頃より三田邊まで、さ迷ひ出で候ひき。

御承知の花菱の前にさしかゝり候程、桃太郎の歌、いたいけに歌ひつゝつき來し樂ちやんの、緋天の緒の雪駄はヒタリと動かずなりて、華々しきリボンと私の顏を見並べては、夫れといはぬいぢらしさ。あれやこれやの品評のはて、輕き財布倒しまにして、手に入れしはこれ學校のゆきゝになりともかざし候へ、房にしたる髮には、さこそ映えつらめ。

叔母が京土產の對のリボン丈長う結びて、夕陽赤き廊の椽にまりつき興ぜしはいづちの日にて候ひしか、忍ばせ候へ。

御前樣によう似し樂ちやんは、はやかのリボン一文字に引結びて、ほこりがに幼稚園へと赴きし樣子にて候あまり長くなりては遲刻のうれひも候まゝ、つきやらぬ思、これにて止むべく候。

青葉がくれ、郭公鳴くの好季節、あまり浮かれすごして試驗の鬼に許されぬ樣、心したまへ、もとよりさる事のあるべしとは、ゆめ思はれどかしこ。

○遊學する友に　京都　田邊俊子

同じ學びの窓に、螢はたるを集めし頃より、よろづのこと他に優れ給ひしは、卒業の式に榮ある賞を得させ玉ひしにても、明かに候、さればこたびは、又都なる女學校に入らせ玉ふとて、明日立たせ給ふ由、御樂ましうなく、ふり分け髮の幼きむかしより、昨日今日はらからもたゞならずむつみあひて、たらはぬ姿を何くれとなく導き玉はりし嬉しさ誠に御許樣をのみ、杖とも柱とも賴み、行末ながくお敎うけまつらんと樂しみ居り候ひしを、いかに御物學びのためとはいへ、御身を立たせ玉うよすがとは申せ、今御別れ參らする心の程たとふべくも候はず、げに交りの深き程、別るゝ折は悲しとかや、さりながらかゝる目出度折に、少しの年月をいかで惜しみ候ふべき、只此上は日頃のさかしき御氣性もて、いそしみ勵み玉ひて、實の玉を得させ玉へ、不束なる妾の申すまでも候はれど、人は交はる友に依りて、善くもなりあしくもなる習とか申せば、ゆめ〱惡しきならはせに染み玉ふことなく、又暑さ寒さのみぎり〱にはすくよくいとはせ玉ひて、只一とすじに志ざす方に勉められ、三とせの春秋つゝみなく、はやばやたちて、長閑けき風に錦の袖をひろがへし、かへりまさんこと、指をり數へて待居り申候。たとへ、都の友の數しげくとも、深山の草木をさけすみ玉はず、谷川のきよき流れをくみとりて、折々は都のさまをもらし玉はゞ、こよなき幸になんかしこ。

○廢兵院の兄上へ　小石川　山崎ふさ子

兄上が去年の秋、廢兵院へ入らせられてからはや半歲すぎましたが、まだ昨日の樣に思はれます。

一昨日御投じの玉章今朝程慥かに拜見致しました、御尋れの家内一同極く呑氣に暮して居りますから、御心配は御無用です、度々御心配下さいました妾事今春の試驗もぶじて刺繡科を卒業致しまして、此頃は毎日母上の御手つだひをして居ます、妹花事も今春小學を卒へ進んで女學校へ入れました、成績が良かつた爲めに校長から賞狀を戴きましたよく御覽下さい。

次に小包郵便をあけて御覽なさい中にオレンヂ色のハンカチーフが御座いましよう、これは妾が織つたのです、妾が毎日學校の歸途妹と採りためた山まゆを糸にひきまして毎日手隙に少しづゝ織つたのです、それからよくハンカチーフをひろげて御覽なさい白く歌が書てありましよう、此の歌は兄上が凱旋歸郷の府縣知事樣から戴きました勳績の御歌を妾が刺繡したのです、中々美しくできたでしよう、母上もお友達もこれなら兄上は嘸喜ぶて御座いましようと皆はめて下さいましたのです。また小さな白帛に包んであるのは妾が心づけです、少しで恥かしいけれど煙艸でも買つて召上つて下さい。まだかきたいが其内伺ひます母よりも妹よりも下女よりも宜しく申しました、返す〲もおん身を御大切に願ますかしこ。

新歌謠

編輯局選評

三等

切ふ切ふとお庭のぼたん今日もきらずに日は暮れる

俳趣　磐城國平町五丁目一四　片寄しな子

四等

汽車で五十里車で三里歸省りや鹽湯がわいて居る

實境　相模國高座郡大和村下鶴間　野島里子

五等

海を隔つる印度の國は夏も降りますけしの雪

京都市聖護院町中河原町岸村文平方　岸村季子

註　夏期印度内地を旅行すれば必ず平野に白雪を見る頗る壯觀なり近づき見ればけしの花なりとぞ

地理の參考

○美濃で高いは伊吹か惠那かまんだ名高い美濃米よ　岐阜縣　日置桃花

○花の吉野も青葉の吉野やがて紅葉の吉野山　奈艮縣　中富よしみ

○人てきれいな東京よりも花で美しこの田舍　盛岡　燕雨

○田植すまぬに旱がつゞく雨の十日も降ればよい　陸奥　名久井さえ子

○花の上着に流れの帶に霞の羽織を着て見たい　北海道　くれなゐ子

○櫻散る散る縮緬の袖に可愛女子の舞ふ姿　東京府　風間瀾壽子

○いまは子供の二人も出來た島田結ふたも一と昔　若狹　飯田秋郊女

○棚の藤花泉水にうつる上を跳せ行く人の影　若狹　塚本ふさ子

○雪がきえたら奥山三里町へ賣り出す芋ほりに　近江　松ヶ枝

○殿ごぶりなら炭燒與作わたしや花賣マイラバー　羽後　みや子

○蘭や薫の理想はないが心野菊で日を送る　對馬　重富白露

○星をいたゞきすみれをふんで春の野道を往來する　小草子

○木曾川よいとこ櫻がござる兩側つゞいて一里半　名古屋　原田季子

○東風にゆられて櫻が散れば青い柳が手をのばす　麹町　淺井千鳥子

○山の雪消へ櫻は笑らう麥は三寸東風渡り　德島縣　織田きく子

○いなせ魚屋が傘してござる傘にひら／＼花が散る　麹町　小島よし子

○はなの朝露あさひに散れば蝶が惜しみて吸ひにくる　京都　宍田松江

○お江戸上りと仰山らしい今は汽車にて參拾四時　福岡　細川村雨

○名所古蹟も澤山あるが甲斐と駿河は富士でもつ　沼津　渡邊とよを

○　下野　梅澤曾子

拳あげても品よい物だ春の山路のわらび草
○牛込　川上清子

都住ひは私しや早あきた田植してなり村住ひ
○相模　今井靜枝子

菫つむ子に野の途問へば蝶の行く手を花でさす
○沼津　千代子

わたしお嫁に行く身となつたほんに月日は早いもの
○伊賀　山村りやう

花のだんつう綺麗に敷いて可愛い胡蝶がまひを舞ふ
○備前　我澤素代

少女可愛や小牛をつれて今朝も堤へ草刈りに
○大和　澁谷彌生

人のうはさに東の都屋根の上まで汽車かゝる
○福岡縣　菜の花

早く逐はぬかいばらに遊ぶ蝶を逐はれば花がちる
○麻布　松崎歌子

祇園花町朧に更けて戀の辻うら買ふ舞子
○丹後　鹽見千代子

わたしや夜が好き胡蝶に乘つて花の野あるき飛びめるぐ
○信濃　花園守

淺間嵐しの咲露を見つゝ花のたよりを待つ炬燵
○奈良　なつ子

奈良で名物何ぞと問へば奈良人形にはりこ鹿
○長野　小田切清子

雨の降る日も風吹く時も厭やしません野良仕事
○岡山　野崎麻須子

いつて見たいわお雲に乘つて月の世界が巡りたい
○大阪　坂富江

はやく歸つて老いたる母の笑顔見たいよ汽車の窓
○香川縣　長尾峯子

松は目出たし櫻は床し園に咲く梅薫りよし
○相模倉橋　よしえ子

天女忘れた羽衣よりか霞棚引く三保の松
○下總　川奈部野

花に鳥鳴く故郷の野邊を夢に見る夜の歸る雁
○東京　谷岡姫百合

やなぎにかゝる夕月見れば今日は舊曆三四日
○茨城縣　はや子

花を持たして都の人に蝶を遣りたや花便り
○横濱　清水千秋子

星と菫は仲よく暮らす菫摘んだら星が泣く
○北遠　秀子

わしのすまゐは後は山で前は名高い天龍川
○下野　須藤胡蝶

花の舞臺で霞のまくよ踊る役者は蝶雲雀
○磐城　鈴木ちとせ

小猫じやれゝば蝶々がまわる蝶々まわれば菜花ちる
○香川縣　曾根白露

馬子の追分狹霧に消えて又も散りだす櫻花
○茨城縣　白ばら女

島がうたへば胡蝶がおどる花が笑へば人が見る
○伊賀　山村すみれ

百合の模樣のたてやの帶に蝶々ひら〱ついて行く
○德島　玉鶴

赤の襷に姉さん冠り藍の實りは二百萬
○名古屋　胡蝶

電氣ないとて恨んだ島に今から引けたよ水電氣
○備中　愛讀女

わたしや濱邊の船頭の娘舟の艪もをすかいもこぐ
○阿波　内田茂子

私なりたいすみれの花になつて胡蝶と暮したい
○京都　三好露子

梅が散つたら櫻が開くわたしや卒業して嫁に行く　長岡　河内米子

○

越後一ノ宮伊夜日子祭嫁も姑も出て踊る　若狭　津田汐汀

○

春の臺にうたふよ舞ふよやぶの鶯野の蝶々　下總　相川みよ

○

友の便りは日毎にあるがなぜに姉さんの便りない　長門　白椿

○

棚てうづめた鎭守の森からすみれ色した烟がたつ　筑波根　白ばら女

○

筑波女體山から霞が滴みればかもめか白帆かちらほらと　本郷　小權きく子

○

寒い名物我が故郷は五月漸々花が咲く　備後　白菫

○

姿しや十五のお多福姐妹は九ッ立田姫　徳島　吉田菜花

○

白い椿をかざしにすれば赤い椿が首振つた　横濱　わらび子

○

淡路島かげ墨畫のやうに月はながれる須磨の浦　石見　千代延操

○

小鮎くむ子もちらほら見える霞ながるゝ大井川　和歌山　桂月子

○

伏虎目をむきや紀州富士や手出す中の紀の川高笑ひ　濱田　三明ちどり

○

緋鯉躍れる掬水亭に亀山城からさくら散る　筑前　安部富士子

○

一つ過げたい都の人に田植馳走の粟團子　埼玉縣　近藤登久子

○

花は眞盛り小鳥は歌ふなかで草摘む蝶々鷺　沖繩縣　藤井初枝

○

花の幔幕ズラリと張りて扇ひらめく娘の舞

春の深山に蕨をとれば踊るわらじの緒がゆるむ　備後　田邊節子

○

姿柳に三ヶ月まゆに色はお山の八重櫻　藤あづさ

○

波はどう〳〵三ヶ月千里間を水噴く背見鯨　伊勢　西野

○

まゝになるなら翼をつけて月の御殿へ行て見たい　常陸　大和田清子

○

爹も小爹も蠶も當てゝ家内總出で博覽會　茨城縣　楢本小春

○

蠶よい虫生糸をはいた私しの着物がまたふえる　多摩村　横倉濱子

○

手織縞よと笑はゞ笑へ母がなさけの初袷　埼玉縣　和久井登和子

○

わたしや十七他人の中で故郷こひしと機を織る　鳳月

○

花が娘か娘が花か聟に香のある花資子　岩代　入重子

○

西と南は山又山で北の平野に米が山　北越　山うば

○

内の海では鯨がとれる山じや木も出る炭も出る　紀伊　あをみれ

○

圓い月をば手毬について君に手渡しゝて見たい　京都　松井星水

○

奥州で名高い勿來の關は前に五浦が見へまする　常陸　小松原波子

○

肌の滑ひも道理ぢやないか瞻の流れは花の露　信濃　下里みのる

○

川の白銀畑の黄金野邊にうすらぐ六つの道　石岡　今泉義子

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

四等　○不平と慰安

千葉縣山武郡成東町　松枝浪江

現在に滿足して不平の苦を知らぬ人は到底進歩せず、されど朝より夕まで不平のみに胸を焦がして少しも慰安の道を求めざるものも亦遂に發達せず、不平は盛んに起るを可とす、現在に滿足せずして常に理想に向上し、不斷の進歩を謀るべし、人間若し不平なかりせば最早死期を待つの外はあらず、然れども之と同時に大に慰安を求めよ、如何に煩悶し如何に苦腦すとも、猶其の間に綽々たる餘裕なかるべからず、然らざれば不平失望落膽自滅に終るか、或は又自暴自棄の徒となるべし、畢竟不平も大不平たれ、理想に對する不平たれ、然らば決して活動の氣象は銷沈するものに非ず、而して慰安も亦理想的慰安を追求せよ、活動に依らざる慰安は姑息の遺悶に過ぎず。理想の成就についての不平は飽く迄嘉すべし、理想の成就についての慰安は飽く迄之を與ふべし、斯くして活動は不斷に其の勢力を高むべく、向上進歩歷々として見ることを得べし、瑣々たる不平をして撲滅せしめよ、酒色に依る慰安は全廢せよ、吾人は唯働かんが爲めに不平し、働かんが爲めに慰安せんことを望みて止まず、過去に對する不平は愚痴なり、現在より出でざる慰安は却つて將來の累となる、愚痴は女々しく、一時の慰安に將來の累を遺すは愚も亦甚しからずや。

（評）斯の不平と斯の慰安とありて人ははじめて向上し、發達す、今の青年多くは遣般の大不平なく、遣般の慰安を求めず、徒らに小なる不平を鳴らし小なる慰藉に安んず、歎ずべきかな。

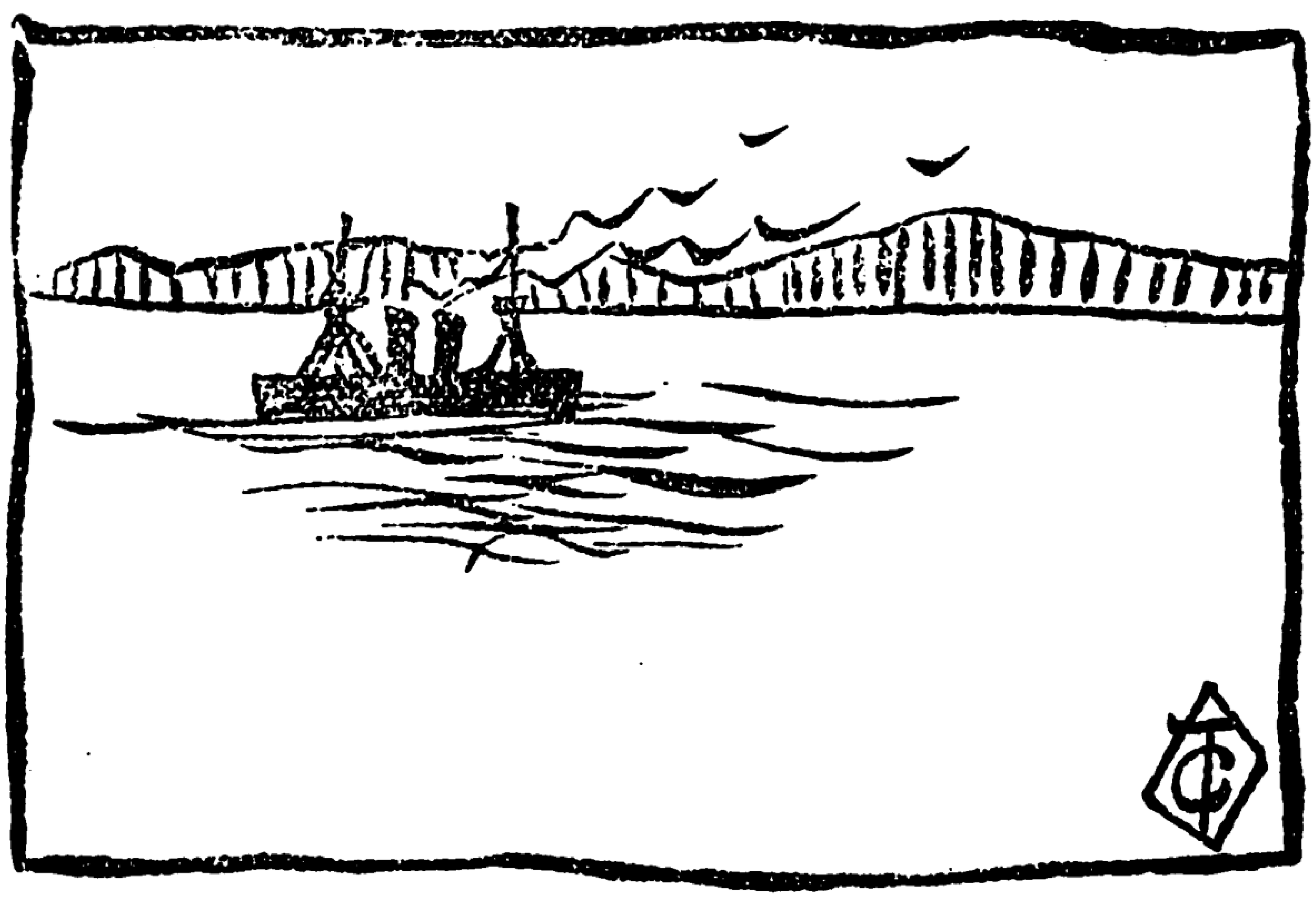
五等　○厭世

東京下谷區入谷町　蕉雨子

總て人生には實に憂苦悲歎すべき事ぞ多かる、されど之れを理に訴ふることをなさずして情一遍より觀察せんとするは厭世家の常なり。人生には暗黑なる面と光明の面とあるべし。されば暗黑あるが故に厭忌するは未だ以てわれらの取るべき方法にはあらざるべし。苟も人生を重んじ、人間の價値を知得する人士ならんには寧ぞ飄然として人生を去り、あるは放肆淫亂に流れ、あるは憂愁に沈淪して又起つ能はざるに至るべけんや。靜かに思ひ見よ、天地到

る處に美神潜み、惠露滴る。杖を曳いて三春の景を看よ。胡蝶は春風に飜つて天地を樂み、雲雀は蒼空に囀じて天恩を壽く。銀川野に横はり、綠野天に接す。晴夜蒼穹を仰げば星宿各天位を謐し大月人心を照らして明かなり。かのテニソンを見よ、親友ハラムの夭死を悲歎し、深淵に入り、大海に沈み、遂に無恨の光明を發見したる如きは眞に人生の眞意義にはあらざるか。之を要するに厭世的觀念なる者は變則的觀念なり。悲哀にして嗚咽すべき時あればとて直ちに以て『世界は大牢獄なり』と呼ぶは大早計にあらずや。思ふに厭世家は餘りに人世に向て注文の過大なるものなり。於是乎其注文に滿たざれば則ち厭忌すべきものなりと叫ぶ。さらに之を云はしめば、かれ等はエマルソンの所謂世に負けたる者なり。幾多の人間は厭世的觀念の爲めに身躰を誤りたり、我日本民族の如き、佛敎の厭世的觀念の爲めに、幾多の精力を減殺せられしにあらずや。甚だしきに至りては、實に人をして自殺せしめ、犧牲に供するものあるに非ずや。印度土人の迷信の如く其好適例なりとす。

（評）論ずる所平凡なれども、此平凡なる語を繰返さしむる程、爾く不健全なる思想は現代に汪溢せるなり。



軍艦　尾張　長司哲子

秀逸

○爾悔い改めよ

芝區　大木いちじく

皆さん、今やおそろしい〱社會の濁流は野越え山越えて我等の身を襲ひつゝあるのを御さとりありませんか營利の聲、邪惡の音は靜かに睡つた眞夜中でも皆さんの耳朶近く迫つて來て、深い〱限りも知れぬ奈落の底に誘ひつゝあるのであります、けれど、サタンの面影は、實に美はしく、導く御手は、やはらかに、優しき聲ねもて、しづか〱に皆さんを、遠い〱魔窟の中に、伴はんとしつゝあるのであります、其の美しい面影、やさしい聲は、全く化物の假面である事を自覺して下さい。

愛に滿ちた、神樣は、善人も惡人も貧者も富者も、へ

だてなく、望の光りを與へて下さるのであります。けれどもサタンの手に握られて、惡むべき邪道に墮つる人には、決して〳〵最大の幸福を與へては下さりませぬ。

今や、社會の濁流は皆さんの御身近く襲ひ來つて悲哀の淵に沈めようとしてゐるのでありますが然し美しい神樣は、希望に滿ちた愛の御船に掉して、あらゆる罪人を、此の船の中に御助け下さつて永久に樂しい〳〵生涯と靈魂とを送らしむべく御つとめなされつゝあります、どうか皆さん、人の罪惡に代つて一身を十字架上に犧牲し再び現社會に甦られた、神樣の御面影の數千年前認められた事を覺つて下さい。

過日來上京された、ブース大將は、至る所て小兒の手を、犇と握られつゝ、爾ぢ神の國へ進めと申されました、大將は實に明治の偉人て、亦有り難い神樣の御言葉を享けて吾人に御傳へ下さつたのであります、私の心も神樣の御咎めて常に〳〵此の暗世界の一方に美しい美しい望の光りを廻つて、平和に生涯を送りつゝあるのてあります、御心同じき皆樣よ、倶に〳〵天國の愛の神樣の御膝近く進みませう。

（評）牧師の說敎を聞くやうなれど、何處となく熱誠足らず。

○戀愛と博愛

長野縣　山田くに子

女にもあれ男にもあれ、もし其異性の人を愛するならば、其人の心は其愛する者のみに滿されて居るて有らう。男ならぬ我は、男子の心は知らぬけれ共、女として考へれば、それに相違ないのである。

愛する人の爲となら火の中水の底に迄、とびこむ共決して後悔せぬてあらう。

實に愛する人の爲には、身を忘れ世を忘れ、其人の優しき心を、全く自分の生命としてしまふ。故にその人無ければ死の決心を起すのも決して無理ては無いのである。

此の心は天下廣しといへ共、多少の相違こそ有れ、之なき人は一人も無いと思ふ。我を忘れて其人につくす其美しき心をして、博く天下萬民にそゝいだなら、天下に飢に泣く子なく、貧に悶ゆる人もなく、實にエデンの園の樣な、淸い美しい世界となるて有らう。

神の子イエスキリストは即ち此博愛の心からして、罪なくして十字架にかゝられ、死に至る迄罪人の爲に祈つたと云ふ美しい事が出來たのである。人の爲に己を忘れる、あゝ之より世に美しき事が又と有らうか。眞に戀愛の聖いと云ふのは、一つは此の、人の爲に己を忘れると云ふ其所からてはなからうか。

戀愛は一人の爲に己を忘れ、博愛は衆人の爲に己を忘れる。されば博愛は戀愛の上て有る。あゝ此聖き博愛の德！

願はくば戀愛を知る人皆が、今一歩進めて博愛の人と成る樣に、私は切に祈るので有る。私も亦つとめて怠らず此美しき德有る人と成らん事を今より勉めてやまぬのである。

(評) 戀愛を口にして得々たるの徒、少しく省る所あれ。

○眞の安息　奈良縣　曉花女史

勞役に依りて得たる安息に非ざれば眞の安息にあらず勞役の後に來たる安息程、樂しきものはあらざる也。

勞役は一見恰も苦痛を意味する如くなれども、其實安息の根源たるものなり、人の老いて平和の安息に入るは少壯年の時代を無爲怠慢にして空過せざりし勞役の賜なりと云はざるべからず、一日の勞働を了へて、晩餐卓上少量の濁酒を樂む勞役者の心中は、徒食者の到底想像し得ざる所也勞働は人生の義務たると同時に其趣味なり、吾人は各自の勞役を免るゝと能はず、而して一日の勞役に對して其報償として適當の安息を與へらるこれ人生の一法則也、勞役が吾人に與ふる安息は、獨り身體上のみにあらず、更に精神上にも及べる也、吾人が遺憾なく勞役の義務を了へたる時、心中の慰安は幾何ぞや。吾人が日々の勞働を樂み得るものは、額上流汗の淋漓たる時、仄かに神の微笑を認め得らるれば也、夜の安息は一日の勞働が與ふる所也、老境の安息は少壯年時代の善果也、吾人が死して永世の平和に入り、天國の樂園に遊ぶは、一生の勞役が吾人に酬ゆる永久の安息ならずとせんや。

(評) 所謂永久の安息に入らんとして周章するは畢竟爲すべきを爲さゞりし過去怠慢の罪のみ。



子守　武藏　角田すみ子

○感觀錄　筑前　若林らく子

花の一枝を持てば風流なり、花の一枝を折れば沒風流なり、一は過去にして一は現在なり、惡因にして美果を得るものなり、因果應報を說く佛者も花丈けは例外なる可し。

若後家の切髮は厭らしきものなり、少くも五十歲以上に於てす可し、老紳士のフロックに挿む一枝のばらは氣高き香に匂へ共、青年なれば輕薄の色に見ゆるなる可し、所詮年齡は總て調和するものなり。

學者と思はれたき人の談話の間に、チョイ／＼外國語

を変ゆるは賢き方法なり、辭書に見えざる外國語は殊に妙なる可し、同僚は直ちに了解す可く、上官は成程と云ふ可し。

些細の落度にも無暗に給仕小使を叱り飛ばす可し、常に鼻息の荒きは間接に同輩の輕蔑を防ぐと共に、聞ざれば善く氣が付くと思ふ可し、如何なる御名論も彼等は謹聽するものなり。

酒は飲む可し、而して大に醉ふ可し、醉へば人の惡口を言ふ可し、温和なる堪忍强き人と見て取れば喧嘩を吹き掛ける可し、今の世の名聲は大抵こんな事より來るものなり。

（評）皮肉なれども未だ人の肺腑を刺すに至らず。

○吾人の覺悟

靜岡縣　秋月安子

吾々には後來到達すべき理想の必要なるは云ふまでもなきことながら亦現在に處すの決意なかる可からず理想なる者は社會進歩の羅針盤の如く決意は其の動力とも云ふべき者なれば理想確然たらざれば方向を定むる能はざるべく意志鞏固ならざれば逡巡機を失すること多かるべし。

我國は僅々數十年間に於て駸々として文明の域に進み有形に無形に大なる進歩をなしたりと雖も破壞せられたる舊文明に代はるの新文明は未だ充分に建設せられたりと云ふを得ず今日の社會は所謂文餘りありて質足らざるの憂はなきか表面的裝飾的の文明は進歩するも實質内容の之に伴はざる憂はなきか優勝劣敗の競爭場裏に於て最後の勝利を占むるものは内容實質に富めるものたるべきは嘗て鎌倉の文明が平安城裏の文明に勝ち希臘の文明が羅馬の文明に對して敗れたるによりても明に知ることを得べきなりされば文餘りありて質足らざるは憂ふべきことならずや。

古來我國の歷史を貫ける所の所謂武士道なる者に於ては純潔清明なる感情と專に當りて躊躇することなき意志の修練とに重きを置きたるを以て其居るや光風霽月の如く其の事に當るや千萬人と雖も我行かんの勢ありしなり此の美風此の美德は富士の高嶺吉野の櫻と共に東方日出國の精華にして忠孝信義仁慈等の大道なり如斯我國民は古來意志に重きを置き實踐躬行を主としたれども近來盛に流入し來れる西洋文明に於ては智力的の要素多く知らず知らずの間に意志の修練を忘るゝに至りし傾向なきにあらずや。

議論なる者は主に智力の產物にして實行なるものは直接に意志の發現なり、進歩の指導となるべき理想は議論によりて出來るものなれば尊ぶべきは云ふまでもなけれども、直接に利用厚生の道に於て裨益を與ふるものは實行にあり畢竟議論なる者は實行によりて眞價を

生ずる者なり。世の開明に進むに從ひ社會の事情は愈々複雜を極め且變轉窮りなきものなれば、今後の社會を維持し二十世紀の舞臺に立つ者に於ては其意志の修練實際的方面の活動を勸め益々以て其意志を鞏固にし事に當りて堂々步武を進むるの覺悟なくんばあるべからず。

（評）實行のともなはざる議論は空論のみ、希はくは此議論をして空論に終らしむる勿れ。

○大和風景論

大和　藤本糸子

「草かげに殘るをみるもあはれなり古き都の跡の石ずゑ」茜さす夕づく日艶なる二子山の彼方に落ちて稍霞ゆく山下の一村鷄犬の聲もかすかにいと靜けくぞ暮てゆくよしや三十の帝陵低くしてみえずとも懷かしき哉倭の地空みつ倭の地は我國古美術の寶藏にして千年以前の美術其儘殘れる處也千年以前の時代精神の宿れる處也妾幸ひにして美なる詩趣多き倭の地に生れ感懷の念にたへず春は落花繽々たる三芳野に南朝を弔ひ落日の光はなやかなる秋の夕には殷々たる秋篠寺の鐘の音に無明の夢のさむるを覺ゆ倭の地や壯大なる海の美てそなけれ曲廓山の腰を廻りて蒼旻雨ならざるに何の龍ぞ堂古く境廣き遠山麓を包んで春は花一村を粧ひ秋は紅葉態をつくる初瀬の景青山に紅さして春を粉黛に粧ふ多武峰の風色落花霰の如く晩鐘寒き三芳野の趣はしばし語らずもあれ山も秋ふけて林漸く疎に山骨稍寒く次第に乾き樹々日々透明ならんとするを覺ゆる候逍遙の道すがら乙女の頬の如く彩れたる紅葉の自然の彩色の奧に碧瓦丹欄美しく古社寺の莊嚴に見ゆるは大和到る處の風景に非ずや。世人稱する鎌倉は一漁村にすぎず丘陵平凡佳氣鬱葱たるをみず六百年以前の遺物概ね寒烟荒草の間に葬られ覇府の跡麥秀漸々たるもの丶如し日光の觀天下之を稱すと雖彫鏤篆刻殆ど兒戲に類するもの丶如し則ち大和に至りては祖帝が東に青山四圍のうまし國ありと宣ひてはる〴〵下り給ひし地聖武帝の乾符を握て神珍を開き青瑣丹墀之を飾りとし給ひし「奈良七重七堂伽藍八重櫻」の跡今も尙行客の涙を注がしむ、實にも世界の樂園たる日本の樂園は大和になむ

（評）筆鋭く、文に氣力あり。

短文

編輯局選評

一等　○燕

栃木縣上都賀郡南押原　靑木たか子

家のひさしの處へ燕が巣を作つて子供を七ツ生みました、そして毎日親が餌を運んできますので、私もくもを取つては棒の先へつけてやりました、今日もやろうと來て見るとまあどうしたのであらう、一羽もゐない、私は友達にでも行かれたやうに淋しくなりました今頃は嘸愉快に親子打揃ふて廣い海を渡つてゐるでせう。

やゝを設けてはるぐゝと故郷へ歸る旅の空……

二等　○辛夷の花

長野縣諏訪郡下諏訪　山田くに子

古からの云傳へて、辛夷の花が空向に咲けば、お日照で豐年、横むきに咲けば風多く、下向に咲けば雨降りて凶年だと云ひます、それが今年は皆空に向つて、美しう咲たものですから、白き花の梢を仰ぎ見る人皆の眉は、希望の香に溢れて居ます。

花の豫言

三等　○茶の時

駿河清水町松永兼吉方　松永しげ子

今妾どもの土地はお茶摘の時季なのです。三時頃に起て見ますと、何處の家もランプを點して、昨日摘て來た葉を火にかけて居ます、野も山もまだ霧に包まれた闇を透して、鄙歌の響いて來るのは、若い女が茶を摘に行く聲なのです。

あけゆく空に茶のにほひ

四等　○海邊の朝

江尻　筑地すみ子

朝日が天城山のあなたより美くしき光をはなてば、三保の松原も一入うるはしく見え富士山は明瞭と淸らかなる姿をあらはし、軍艦のラッパも勇ましくきこえ、蒼波しづかに立て居る景色を眺めながら、毎朝早くから妾は運動するのです。

海光山影、彷彿として双眸に浮ぶ

五等　生垣

石狩國上川郡　若木美枝子

私の家は五町歩の屋敷で周圍は落葉松の垣でありますそしてしぜんのまゝに成長させて鋏など入れません

北海道に限る生垣

秀逸

○蕗の葉　秋田縣　佐々木園子

私は秋田の田舍で庭に蕗を植えて居ます毎年六七月頃になると、葉は極大きくなつて、丁度青き大傘をならべ立た樣になります。それに折々鳥海山から夕立が通ふので、涼しくて／＼夏も忘るゝやうであります。

綠の傘、一度にゆらぐ

○夏蜜柑　大阪市　生田花朝女

私はいつも夏蜜柑を頂きますと種子をすぐまきます只今では頂度百本餘も木が出來ました、家の者は皆柚は九年の花盛りと云ふから、此木に大きい蜜柑のなるのはいつか分らないつて笑ひなすのだけれども私はいくら笑はれてもやはり培養して居ります。

此の子、生存の意義を知る

○胡瓜賣　金澤市　三代子

毎夏、ことしかぎりの、口くせあつた胡瓜賣りの老翁さんは今なほ元氣と見えて、今日も朝早くから胡瓜パイ／＼と

人の命の長きことよ



天下茶屋　大坂　高橋芳子

○私は?　東京　なでしこ

父は軍人です、東京で生れるとすぐ私は廣島にそして山口、松山、伏見、大坂と廻り歩き只今は又東京です。元はさ程でなかつた所も今は其の戀しい事非常です一生の中には今一度づつ參つて見とう御座いますよ。

矢張しまひは東京が戀しい

○御威德　鳥取　東子

三日と天氣のつゞかぬ山陰の雨地も皇太子殿下の行啓遊ばした日からもう十五日餘も雨が降らない然も黑雲さへ姿を見せないのです、嗚呼雨も御威光には恐れ入つたのでせう、妾達人民も更に御威德の有難さが身にしみ渡るのですそして草も木も。

聖德、六合に溢る

○落葉かき　越後　野菫子

風なく、雲なく、滿林寂として只落葉掻く音のガサガサとするのみ、何處よりか百舌鳥一羽飛び來りて楷の

枯枝に上り左顧右眄と四邊を覗く、熊手をもて追ひやれば聲も立てず、斜陽射す松の梢に遷りて平氣の貌附なり、落葉掻きし跡の小虫を探すならむ。

文氣沉痛

○夏やすみ　いちじく女

私の所は田舎ですから、女といつたらいの字も知りませんの、そしてお手紙なんか讀んでくれ書いてくれつて來るのよ、で妾餘り可哀さうですから、とても上手に敎へる事は出來ませんが、せめていろは丈でも此度の夏やすみに敎へてやろうと思ひます。

村一番の學者

○海人　大阪　和田順子

巖も碎けよと狂ひたける波間を、此方に潜り、彼方に潜る怪しのものは何であろうと、瞬きもせず熟と眺めてゐますと、軈て潑々と躍る大魚を小脇に挾んで浮び上つたのは、龍神かとも思はれる麗はしき乙女、お〻それが海人てした。

千日前ではありませんか

○講話　神戸　弓月

金よう日に學校て修身のかわりに講話が御座いました其主意は、悲しみのある時は歴史を讀みなさい、歴史をよみますと、其時の一人になつた樣な氣がして苦みを忘れてしまふと、云ふのでした、私は大いに感じ其通にして居ります。

好い敎訓

○蠅　麻布　星聲

蠅が蠅に結着られて悶て居ますが此蠅は今生死の何れを望で居ませう、蠅でも生物ですから必助り度に違い有升まゐと思ひます、私は直にも救ふかと考ましたが是は、黴菌の媒介者、助けるのは容易けれど情が仇と成る樣ではと妙に理屈ぽく。暫し熟考の末にと先づ其儘にして。

時代は此の如き冷靜なる女性を生じ來れり

○鼠と雜誌　神田　岩田こしん

妾は何もうれしく有りませんのよ、只今の妾は鼠を取つて二三の雜誌に替へ月にも花にも風にも親しむのを慰めの第一と致して居るのです。

ペスト撲滅

○避暑の宿　丹後　高柴小靜

御飯を焚いた落し火て蚊遣をこしらへる。この寺は藪蚊の來襲がひどいのてすから、煙にむせんて窓のところへ來て泪をふく、今しも鐘を撞き放して鐘樓から下

りて來た小僧さんは庭の百日紅の木に登らうとしては辷つて轉がるのを可笑がつてゐる。

葷酒山門に入る

○轉宅日　　　　鹿兒島　柳　子

兄さんの旅行に、ゐらつしやらない前で、弟の試驗のすんだ後て、下女のおよめに行かない前て、巣鷄の卵をかへした後て、そしてお天氣のいゝ日なればいゝ。

わたましよし

○野　菊　　　　三河　近田みつ子

萩や淺茅が亂れかゝつて居る此野中の泉で、毎朝、櫛をひたして髮や額髪を梳き上げ、傍に咲いて居る野菊をとつて髮にさして、水にうつる自分のすがたを見てほゝゑむ草刈娘のお露は、與作の一人娘で年は十七てある。

小說的

○日々の役　　　　神奈川縣　木村はる

私は毎日六回づゝ病の爲藥を飮みます時によると忘れたりまちがへたりしますのそれて今日も父樣が申されますにお前は服藥を六度するのが毎日の役てあるから決して忘れたり飮みちがへたりしてはならないア、私はいつ此役目が變るてあろうか。

役目の終つた時に、役目が變る

○海　岸　　　　四谷　樓　折　笠

朝の潮はひた〳〵と石崖によせて、遠く築港の邊から吹いて來る海の風の、そよ〳〵と氣持のいゝ事、ついその棧橋のきわにつないてある、はしけの五六間先を目覺る如な眞白なつばさをひろげたかもめが、飛だ、と、どの船てかボーッと長い汽笛がなる。

太平洋を渡る知らせ

○妾の住む町　　　　遠江　深谷春香

後は青々たる山をおひ、前は浪靜なる濱名湖をひかえ、西東には五百餘町の水田あり、又二十里の水源を有する二川は、町を經て濱名湖に入る風景繪の如し、海陸共に運輸の便よく、商業盛大なり、人口五千人、蠶業、茶疊表等名高き産物なり。

小地誌

○花　　　　信濃　桐原敏子

私の父は草花が大變好きてしてね畑の隅に十坪ばかりの畑を作り其處に色々の花を蒔きますのよ、名も知らない花も澤山有りますが珍らしい花も有りますから押花にして有ります、御望みの方には澤山送つて上げます。

春夏秋冬花不斷

○仙　境　　小石川　山崎房子

處は豆州東海岸、東京から三十餘里、石段を昇ると九百、伊豆山神社あり、見下ろせば渺々たる相模灘、社の後が時鳥の名所古々井森、ア、玆が妾が昨年避暑せし地。

今年は？

○圖書館　　大阪市　大磯年子

第二の學校、學校以外の修養處と自信して、妾は毎日此所へ來て居るのです、今日は常にない熱苦しいで頭が痛出ましたから、西の窓を明て廣い公園に氣を晴しますと其所には面白想にテニスやクリケットをして遊て居る。

大阪の圖書館にも此人あり

○貝拾ひ　　備中　遠藤芳子

隣の君子さんと共に南へ〳〵と流れる小川に添て海邊へと出た廣々とした海には海鳥があちこちと飛んで浪間には白帆も見へる私は鹽風に醉ひながら眞白な蛤を拾ふのが毎日のたのしみてあります。

白き蛤、黑き蟹、五色の石など

○夏の朝　　豐後　仙女

私は製絲の工女てす、朝の汽笛て起き上ると大野川の川霧が立つてぼーつとしてまだ薄暗い、イデて顏を洗つて二三本垂れて居る髪の毛を親指と人指て掻き上げながら工場へ這入ると、もう皆さんが場に着いてから笑つて居ます朝は誠に氣色が宜い。

工女にも文字あり

○お婆さん　　北多摩　野菊

私のおばあさんは今年九十三になりましたが、非常に丈夫で風などにかゝつた事はありません、そして内中一番の齒がよくていつも固いものはおばあさんに上ますが、好おとして上ります、私ほんとに羨やましく思ひます。

生命保險の必要もない

○幸福ある一家　　信濃　波浪

東には囁ゆかしき細流、西には風そよぐ青葉の小山、南は庭に北は納屋、といふ極粗末な然し自然的な離家が一軒、これは妾共四人――父と母と弟と妾が――天の惠の下に、朝な夕な、爐のまはりを取り卷いて、薄き柴茶に滿足して談笑する、幸福に滿ちた一家です

茶氣あり

○產　婆　　阿波　暉子

妾はよう〳〵昨年、產婆となる資格を、得ましたが、

誰も雇つて呉れません。
年が若いからでしようか。
今に雇ひに來ます

○避暑　丹波　伊東菊枝

皆樣のうちには、此暑中休暇を利用して海邊へ避暑に行れる方もあるでしよ『此田舍住居の私の家へ遊びに來てくださる方はありませんか』若し、いらつしやる方があれば田舍珍物岩梨漬を差し上ます
但し、お土産御持參の方へ。

岩梨漬、流石は山國の珍

○姿の寫眞帖　琵琶　三井月代

美根子は花薔薇て、さだちやんは八重櫻、琴音樣は海棠に似て、八重子樣は姫百合、お隣りの綾さやんは薫祝ちやんは桃の花、妾は凋れた水仙のやう。

○奇しき夢　京都市　田島薫

妾は、何處ともわかぬ曠い野の中に佇んで思ひに沈んで居ました。と何處よりか妙なる薰がして紫の雲が妾を包みました、琴を抱いた姫と、パレットを握つた姫と、可愛口元て自作の詩を歌ふ姫が風のやうにふわりと。妾は詩の女神に振ひつきました。

○我が家　三河　今井初子

家の前は見渡す限りの廣い青海原其處には小舟が白い帆を水の線に寫して居ます夫れから裏手は汽車が黑い烟を吐きながらいつもゴウ〳〵と東西へ往復して居ります。

繪本　萩町　小國敏子



○信心　河内　松露

私は、毎朝氏神樣へお參りをして、父母が無事に長命するやうにお願ひ致します、それに、凶事が起ると、私は、自分の孝行が足りないから、神樣が、お怒り遊ばすだと思つて氣をつけます。

○知りたいもの　和歌山　千鶴子

親しい友の近況、一ト通りの料理法、種々な機の織方、女子文壇の讀者の數、其れから自分の運命と世界の終局。

○神秘　茨城縣　濱ちどり女史

清き露を宿し曉の白百合に、美しき蝶が一羽、其の花の香に醉ふて居る鈍白な白百合は神の色、羽衣優しき胡蝶は天使の姿、あゝ蝶と花との間には如何な秘密が包まれて……。

○雨の夜　福岡縣　永野ふさを

靜かな雨の夜は一番このんでゐるときてある机によつて耳をすますとポツリポツリと音がして蛙の聲も時々まじる何となく氣が引き入れられるやうて障子を開けると木の葉の露が光り出す。

○涼み　日本橋　原田重子

蟬の聲がだん〳〵遠くなつた頃。お庭に打水するのは仙ちやん。椅子を運んて御兩親をお連申すのが私。そしてたえなる房ちやんのヴァイオリンは皆に晝のあつさを忘れさせるのてある。

○私の願　赤坂　松野久子

私し他所の御孃樣みたいに自分の書齋と机の上をかざる小さい置時計と其れからあの房々したカシミヤの御袴と靴がほしいのよだけどもあたしの家は貧しいのて自分の御小使て女子文壇買ふのがヤツトの事てすもの

○清き心　信夫の里　薰子

私の村ては薄暗い中に皆起きて前の小川て顏を洗ひ、御日樣がパツと御上りになると皆手を合せて拜むのてす、私も毎朝拜みます、そうすると其日一日心持が精々して居るのです。

○私の樂　新潟縣　日下　きよの子

私が此小學校に奉職してから最う四年、今は卒業生の中で女學校へ通ふて居る生徒が十名餘り此生徒は皆な課業が終ると每日私の寄宿舍に來て復習したり遊んだりして居ます、私は此無邪氣な優しい生徒を友として勉强して居るのが第一の樂みであります。

○思出の草　宮城縣　工藤　榮萩

去年の朝顏の蔓があちこちにからびた種子をつけて木にフタ〳〵して居る、福壽草の盛りは過ぎて葉の代謝はまだ蟹庭櫻もそう若葉は赤芽を孕んだばかり萩はまだ何も影がない、種子はそろそろ水飯み初めて。

○蝶と花　靜岡縣　竹　泉　女

理想國夢野郡別天地村字歡讃村では稜黃蝶次郎と夏山ゆり子と仲が好過ぎて傍に居た蜀大五郎は姤み風の吹每にゆり子を打擲します。

○出　植　上　野　松村　さだ子

今度の櫓こそは幾兄樣に負けないと、一生懸命に植ゑたので、ずつと早くしかも眞直に出來て、生き返つた樣に風に吹かれてなびいてます、晴れた空には凱歌でもあげる樣に高く高く雲雀がさへづり出しました。

○夜の慰藉　備　後　鶯　子

朝は星を戴いて起き一日燒釜の邊で汗を流して菓子燒の手傳致します隨分辛いてすが晚には早く仕舞つて風通の好い乾棚で文壇等讀んで母に聞かせて慰め升と母が今日の疲も夢と成つたと云ふ言葉を聞くのが姿何よりも何よりも嬉しいのです。

○峠　浪　花　順　子

汗水流がしてやつと昇つた村峠、涼しい風にまた無い景色、向ふの小流は三年前釣垂た懷かしい里川、彼方の小岡は蕈狩せし床しい所、松の葉越しにちら〳〵見ゆる白壁、あれは確かに内の土藏!!。

○金　山　上　毛　柳　こ　ま　子

或る日朋友二三人と金山に登りました頂には新田神社がいとうや〳〵しく實に壯麗て御座います南を望みますと利根川は細く白線のやうに見え太閤町は眼前に橫たはつて美しく又北東は眼界漸々と諸方の遊山や村里は一目の下に交錯して居ります足利町は渡良瀨川から隔たつて遙か東方に眺められます。

○お手傳　千　葉　菫　子

燕が來る樣な、暖い陽氣になつたので、お母さんが兄さんの晴衣に蠶も少し飼ひました、姿は每日々々早く起きて、お母さんのお手傳をして、桑をつんで、食べさせます、最早四眠も濟んだから、明後日頃吹雪の樣な眞白の銀の玉に、なるでしよう。

○嬉しい時　磐　城　村岡　布貴子

姿の嬉しい時。弟の武さんのお淸書が上出來な時。東京の姉樣より御手紙が來た時、兄樣に色々お話をして頂く時。お父樣の御酒召しあがらぬ時。それから神棚に手が屆いた時。膳に向つて皆舌皷を打ち大層結構に出來たと料理を御賞めに預かつた時。

○手帕にそへて　京都市　田　島　薫

貴女、此帕はね、姿が蠶つた蠶の吐いた絹なのよ、それを姿が機織つたのです、美くしいてせう。殊更に眞白のを織つたのは、純潔い貴女に進げやうとて眞意から。貴女の柔しい玉手に愛でられて淸い化粧の畓をうつしてもらつたら、此帕もどんなに幸福でせう。

○心　配　丹　波　齋藤　笑　子

每日々々共に少し向ふの手藝學校へ行くのですから例の通り靜さんの御宅に行きますと、靜さんは何んだか欬をかんでないて居らしやるし、御母さんが今日は少し用事があるからと言ふと斷はられましたので、仕方なく獨り行きましたけれど、姿も心配で〳〵てたまらんのよ。

○五色の繭　神　田　長井　漣月子

昨年の春、御母さんから體の透き通つた蠶を五つ頂いて邪な事とは思ひましたが、一匹づゝの首の所から下を、赤靑黃紫オレンヂの五色で彩りまして、蔟に上簇らせました、それから五日目の朝、起き出て、見ますと、見事に五色の繭を作つて居ました。

○埴生の宿　南品川　風間　康　子

落ちかゝつた壁を古新聞で止め、すゝけた障子には、弟の淸書のつぎが

有ろ、壁は古びて所々に罅が見へろ。汚い家と笑はゞ笑へ、此内にも云ひしれぬ家庭の味が有るのです。

○日課の一つ　福山　工藤いつ

私は毎朝早く眠いのを我まんして公園地へ行つて、翠滴たる様な若葉の繁みから吹いてくる、初夏の涼風を全身に浴びながら數回の深呼吸をします。やがて疲れた身をやはらかい芝生に横たへて明星が消ゆるまで空想に耽るのですが、これは此頃の私の日課の一つであります。

○鐘　廣島縣　今西初野

私しは、寺の坊主の子です、いつも傳助が、私しが致しますから、およしなさいと、とめるのもきかずに、朝夕鐘樓に上つて鐘をつくのです。

○養蠶　府下　森田なか子

去年までは養蠶に一人づゝ頼む事に定つて居ましたが今年は母樣と兄樣と私と三人許りで一生懸命に働きました、體はかへつて健康で有ますが何しても手少なのせいか大變につかれました、其かはり夜業を終つて寐んだ時心持の宜い事天國に行つても是程ではあるまいと思ひました。

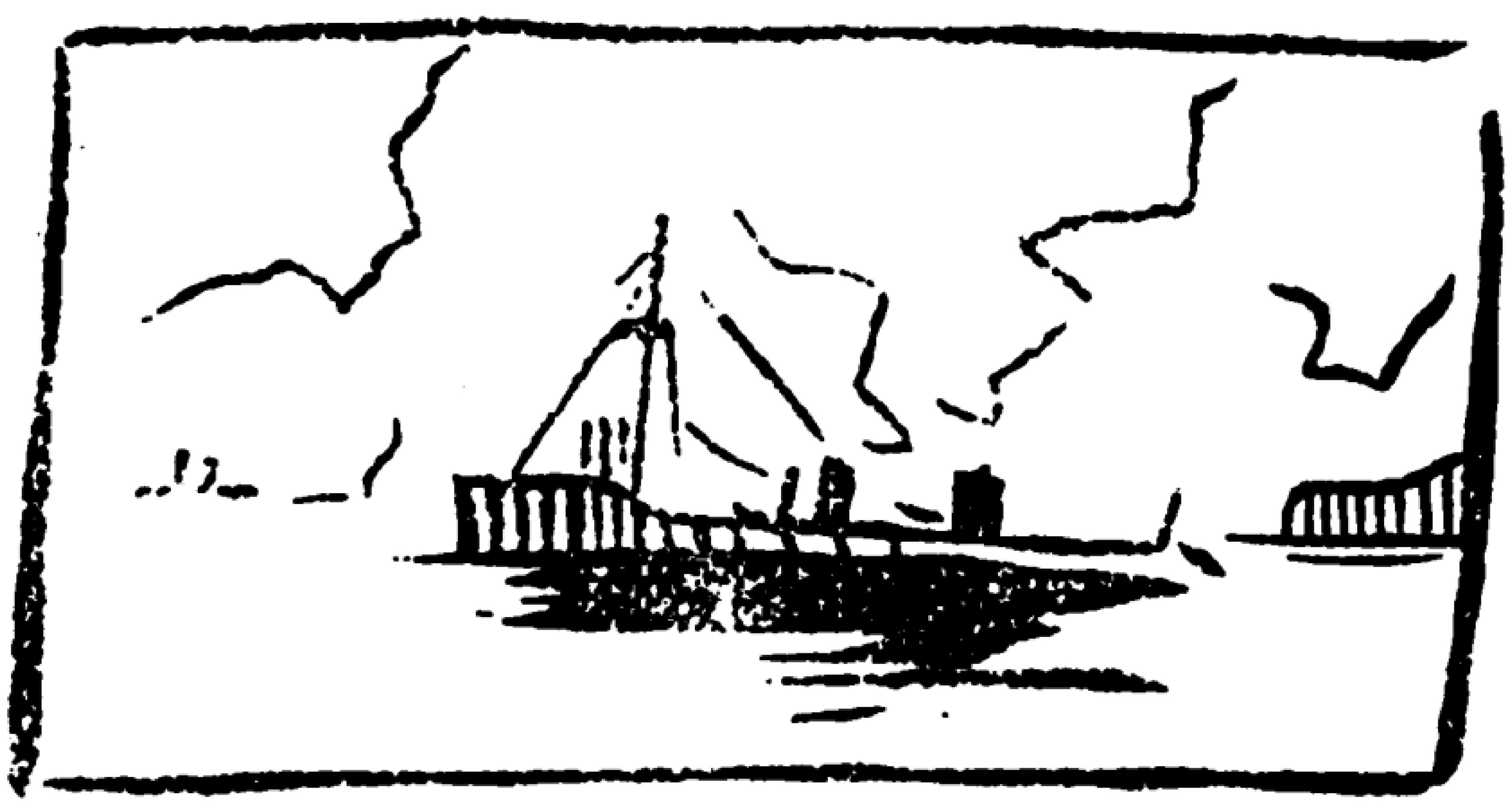
○妹の夢　土佐　岡村元衛

私のたつた一人の妹は此間頓に死ました、丁度死ぬまへの夜云ひますには、私昨夜夢を見てよ、それはネ、寺と寺との間をぬけて千、はすの花の咲いた舟にのつて行たのよつて之が前兆とは神ならぬ身の知りませんでした。

○夕化粧の花　長野　きし子

自分ながら驚く程美しい肌姿は恥かしいから裏の高塀の蔭で夕方行水を致しました手足が伸びりとして心地がよく糊の硬い浴衣と着更て母屋の方へ足を運ぶとたん小さな音でパツおヤツと振り返り見ますと夕化粧の花が一輪美しう袖のあふりにや白粉のような香がプーン。

くちく　本郷　増田小富



○夏の朝　靜岡縣　かくみ女

妾の家の裏には大きな蓮の池が有ります、て妾は昨夕蓮の花は未だかと行ッて見ると、七ッ八ッ蕾がありましたから之は明朝はさくであらうと翌朝折戸をあけて行ッてみるとまだ一ッ咲いたばかりでした、お願洗ッたばかり故アノピばかりして居ると後ろてパン〳〵と音がして二ッ咲きました。

○清水　栃木縣　川風子

深山の細谷川を流出てそして今私の足元を喜ぶ樣に笑ふ樣に又水の神が小鈴でもふる樣に涼しい音立て流れ去りつゝある清水狭き岩間にせかれて別れ〳〵ては又合ふて來る中には花の名殘の花瓣を此里に誘ふてろう。

○裏畑　土浦　佐野淸子

家の裏には三畝許の畑があつて私は毎朝早く起て見廻りますと露をおびた紺色の茄子の葉はつんと起つてりきんでをります傍には可憐なる胡瓜の花も咲ております木の下豆も青々とアー何たるよい心地でありましよふ。

○小猫　茨城　矢口波津子

妾が原稿の淸書に倦きて、門邊に出て四方山の景色を眺めて居ると、大勢の百姓等は笠を並べて今を盛りと田植をして居る、妾は恥しい樣な氣持をして家に歸りましたすると小猫が机にジヤレたのか硯の中に足を入れて、原稿に眞黑な花を咲かしてしまうた。

○庭　伊勢　坂西野

庭といつてもホンの一坪ほどで妾の……小さき女一人の……庭といつてもよい位で山椿が一本と妾が靜子さまに戴いた極く小さな紅椿と外に一株のさつきが程よく植えてあるだけて殺風景なものですけれども妾はよい庭だと思つて毎夕散歩してゐます。

○役割　山城　ひさ子

今度の暑中休暇を利用して兄さんは弟をつれて須磨へ海水浴に妹は父さ

んに連れられて嚴島へ私と母さんとは一番悪ゆきてお留守番之がきのゝの晩夕飯のすんだあとできまつた役割よ。

○私の身　　神戸　さゞ波リボン

私は人様に數もにくまれる交換手でございますそうして夜は夜學校に通て居りますが一番嬉しいのは夜學校に行つて居る間でありますが皆様の様に女學校にても行て居たならどんなにうれしいであろうかと思ひますけれど私は毎日花賣りにくる少女の事を思て喜て居ます。

○火事の跡　　筑前　青葉女史

大火事て在た跡を踏りて見ますと昨日迄余所の主力を集めて賑やかて在た二百餘戸は一夕の魔烟に嘗め盡され熱き瓦の町中に飛散して方々に未だ白煙が立昇て居る罹災者は黒山の見物人に交りてうろ／＼眼にて焼跡を眺めて居る様目も當られません。

○蛙　　成田　きさえ

つれなくて、蛙なく夜の闇路を、辿るはいと淋し、さはれ小雨そぼふる夜燈のかげ、濁りし池の灯に、綠かすめる青柳に、はゞかる許小蛙の力なく、歌ひ出てし一聲を、聞かばさびしさ、一入うちまされり。

○北海道豆　　大窪慶子

此頃お朋友から北海道豆をもらつたの一弟と二人お裏の畑けにまいて置きました。そしたら二三日すぎて青々と二三寸のびてきましたので弟と一生懸命にこやしをやつて實を結ばして一家そろつて食べようと皆をなつて居ります。

○なつかしさ　　阿波　西野恒子

世界て云へば亞細亞洲亞細亞て云へば日本國日本國ては南海道南海道ては四國四國ては阿波阿波ては小松島一等々々なつかしきは我家。

○夕立　　仙臺　文子

ゴロ／＼と遠くて聞えると、怖ろしき黒雲西の方よりあらはれて大粒の雨ボツリ／＼と、黒雲次第に進み來れば雨はザァ／＼と大降りになり稲妻の光物凄きばかりやがて黒雲東に逃げ去れば、そよ風吹きて心涼しひぐらしの音はいと心地よく聞え萬物は蘇生るのである。

○たうゑ　　三河　永田舞鶴子

書齋の小窓に凭れて裏の田圃をながめますると、村里の娘さん達が眞白い手拭を姉さ冠りにして、涼しさうな聲を揃はせて田植唄を謡ひながらさも多忙しそうに苗を植て居られます。

○袂の中　　篠代町　米子女史

今日は鎮守祭なので、笛太鼓の音や、女子供の笑ふ聲が森から溢れて聞える、兩親の無い妹は、兄様につれられて御神樂を見に行つた、後で着更をたたんだら袂の中に、私が投書しようと思つて淸書して置いた短篇と、赤蛙の脚が四本。

○お晝時　　岐阜縣　大西英子

お父様は病院に兄、様は銀行に、姉様は學校へ教鞭採りに、妾とお母様とは御留守居役、文さんは高等へ春さんは尋常に！十二時の時計が打つ頃いつも青葉の下風涼しい臺所の椽へぞろ／＼集り合つて、御飯を濟ます其時には、言ひ知れぬ樂しみがあります。

○桃のはつなり　　長崎市　峰時子

三年前植ゑて置きました桃が今年はじめて花が咲て實が五つほど止まりましたから私嬉しくてたまりませんですから朝に夕べにお庭へいつてはおゝ桃よはやく大きくなれ／＼となほ三千年の末までも澤山なれと。

○麥畑　　下總　武田たき子

霜や雪に埋れながら育つた麥が漸々初穂が出ました、すると先達の大きな嵐のために皆な倒されました、妾の御父様は、暇さへあれば麥畑を漠然として眺めて居ります何を想つて居らるゝのでせう。

○汽車　　越後　白菊子

樂しき希望をのせて東に我を運びしもかの汽車、朝夕の笛に故山を忍ばしめしも亦かの汽車、かくてかなしき運命の下に我を故山に運びしも今過ぎ去りしかの汽車？、あゝあはれうれしかりし汽車はその昔にて。

○人眞似　　下野　翠蔭女史

大變々々、大切な／＼鉢植の牡丹、一片の花もない、妾は餘りのことに只茫然、すると玄關に小さな足音、見ると障子に影法師、時々小穴から

覗く樣子、妾は障子をがらりと開くと、妹顏に紅葉を散して、花を入れた封筒を出し、姉さん名前を、政姉さんに送るのだから、又妾は茫然。

○我庭の朝　仁川　今田きく子

顏を洗つて庭に出て見ると今しがた東の山をはなれた朝日は庭一面を照して居る。

牡丹の花が露にきらめいて一層美くしい。

○白牡丹　大和　霞女史

女子文壇へ投書の短文でも作ろうかと思つて、庭の白牡丹を見ると、玲瓏たる露の白玉が花や葉から今にも滴るやう、自分は二滴三滴硯へ受て墨を磨つた、どうか此の清い牡丹のやうな氣高い、美しい詩想をと、靜に筆を執つた。

○白百合　伊勢　垣内かつ代

腹立たしさに、手紙はズタ／＼に引裂いたが封じてあつた百合の純白な花片はソツト紅唇に。

○卒業式　麹町　湖月

「よしや今こゝを去るも」といふ感謝の曲が沈んで行くと共に式は閉ぢられた日頃親しき友達先生方と泣いて別れて校門を出て宿につくと机上に清チヤンの手紙「姉サンが御歸省の時には母樣と渡場の柳の下まで御迎へに」と‥‥。

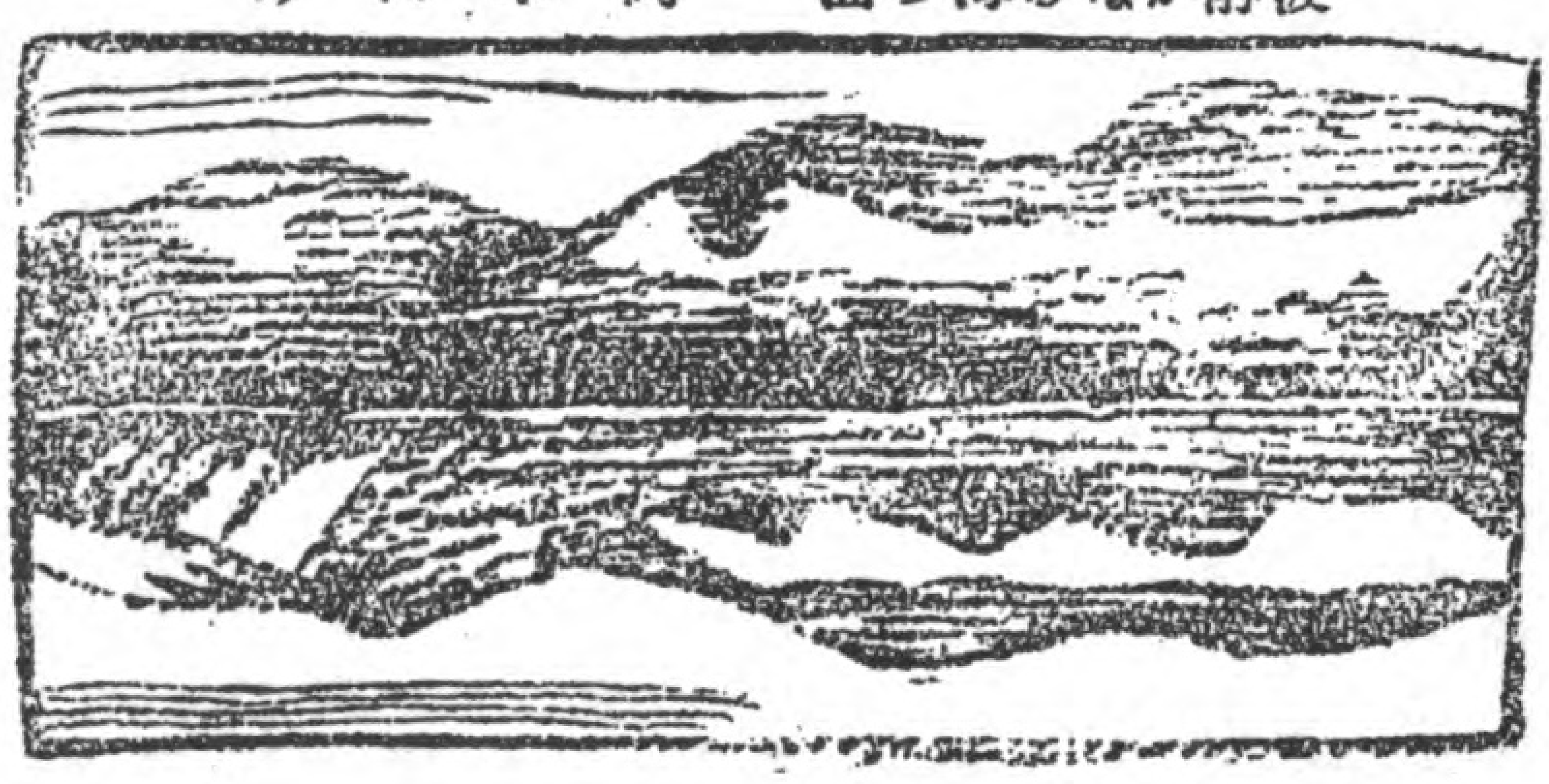
○笛の主　本郷　朝井ちとせ

去年の秋久しく病んで居た頃每夕向ふの高樓から淋しい樣な悲しい樣な笛の音がするので私は夫を唯一の樂と思つて居た、處が花咲く頃からぱつたり其の音が止んで仕まつたそして二階の戸も閉された限り、仄かに聽けば五月雨打續く頃彼の家に喪が有つたそうな。

○愛讀會　福井縣　上原嘉子

本年始めて女子文壇の愛讀者は當村で五名出來ましたそこで四月三日を期し私の家へ橋本喜久子樣以下三名を招きまして初會を開きましたそして女子文壇を永久に愛讀し尙其他每週一度集合して讀書や有益なる談話等をなし新智識を廣める事にしました。

波靜かなる海の面　岡本ため



○靜岡縣道　靜岡縣　靜山

早一面に夜の世界におゝはれてさすが縣道ひつそりとなつた時遠く馬の鈴が聞えると馬子がふし面白く「エーまゝになるなら翼がほしい私しや東へ飛んで行くホー」。

○眠る時　羽後　俊江子

私は、眠る時はいつも、神々を祈つて、ねます、どーぞ今夜の夢に、故鄕の有樣を、見せて下さいつて。

○我が心　飾磨郡　黑田政江

私の母が病身で何も思ふ樣に出來ないので私が何もかも宅の事を手傳て居ります隨分忙しいですが近い將來に是非實地に行ふ事を今より練習して居るのだと思ふて決して厭いません飽く迄母の手傳を致します。

○私の機織り　長野縣　ひさ子

今度こそお母さんの手も借りず一人で三尋四尋と上手に織れて嬉しくありましたが、一寸留守しましたら妹が學校から歸つて來て、バタン、バタンとして居ります、行つて見ますと糸は切つてある、織つた所は畝の樣、そしてまだ袴もとらないで。

○雨漏　千葉　穗岐山

降り續く春雨蕭々と何處から滲み込んで傳ふて來るのか雨漏二ヶ所金盥と手桶とを間に合に受て置くポチンポチンの音交も半宵の寢耳に通ふ佗しさの中に寂味を味へばポチンは消極的でポツンは積極的である。

○東都遊學　佐世保　いちじく

やう／＼東都遊學がゆるされたので、妾は大喜び早速荷ごしらへをしてお父さんお心配なさいますなきつと成功して歸つて來ますと言つて出發したのが一番雞の鳴く頃そして東京について有と有ゆる困難して歸宅したのは二番雞の鳴く頃でした。

○芳さん　埼玉縣　中村紫香子

裏の芳ちやん子供な學校に入學るので先生に對ひ「先生此の野郎は眼玉が此樣にてんぐり眼て强げてがんすが極泣虫てすから、どうか面倒みて下さんし」といふたてんて大笑。記者先生こうゆうのがヒヨーキンてんてせうか。

○我が母校　京都　入重子

鴨川の支流をさかのぼりて市をはなるゝ事一町、桑の花の中にして、白い校舍、廣い運動場の間には、上手の水車から落ちて來る小さな流れがちよろ〳〵と音をたてゝ居る、可愛らしい生徒は輕快に遊んで居るあゝこれがなつかしい我が母校である。

○外出　千葉縣　今井紅ばら

今日はなんとなく氣がふさいでなりませんから、散步に出掛けました。日は高く、氣は澄むで大變よいお天氣でした。蓮花草、菫、蒲公英はあとものこさず萎れて、梅は若葉のかげに靑い鈴か連れた樣に見えましたざつと一時間許遊んだので、頭がさつぱりしてきましたから、書齋に入りました。

○湖畔の夕　滋賀縣　井上つゆ子

オールの響かまびすしく、漁夫が歌長閑なりし琵琶湖上は、いつしか靜まりて、愛宕山に名殘を惜む夕陽は、また來む日を、ちぎりつゝあるが如く、おぼろの月は小波にゆら〳〵ゆれて、春風は水に冷され、妾が袖をはらふ、……ウチルヅチオスにもあれば、今宵如何なる詩想やうかぶらむ

○私の熱心　南豐　藤の舍

私は本誌を昨年五月から愛讀して居ます。今月までいまだ一ケ月も原稿をださなひ月はなひのてす。それにたんだ一度も誌上にあらはれた事はありません。けれど私は少しも失望しません。尙此上幾十回ても投書しよふと思ひます。

○渡し舟　北總　黃雨女史

赤い諸てまいた紺の筒袖を小高く持上てろ帶の結目を一寸押して、どら俺が代つて遣ると微笑めば楷拍子亂れてあら厭な頭作さんよ舟い視線が悉く隣人へ注ぐ中に隅に居た役場の書記のみ獨り横を向いて居る。

○夕立のあと　横濱　みき子

盥の水を一度にあける樣な大雨も、はや彼方の空に驅せ去つて、再びパツとさす夕日の光眩い午後の五時、傍の靑葉若葉からは綠の露がポタリポタリと滴つて居る、と見ると向ふ山をまたいて、七彩鮮かな虹の掛橋あらりポンの樣れと美代ちやんが……。

○隣りの家庭　甲斐　玉枝

私の隣りに今年三十歲で充分心得て居る嫁がありますが每日子を背負ふて臺所の世話病氣の姑や子供の厄介は言ふに及ばず隙を見ては田畠へ出て迄稼ぐのに小姑は某女學校へ通ふのとお化粧とに日を送り乍ら姉樣が未だ不服だと語られる小姑は何んな事を學校で習ふのか。

○妾家の音樂　高岡市　北本歌子

妾の家は板ぶきの屋根ですから雨が降るといつも漏ります、そして漏る處にはバケツを置くのです、高い處から落ちるのですから一滴の水も大きい音がします、之が彼方にも此方にも代り〳〵に鳴るのですから、田舍の妾等にはバイオリンよりも宜い音樂です。

○月影　越後　五十嵐みつ

肺を病み給ふ姉上は、自ら起たざることを覺悟なさつたか、どうぞ見させめに夏の月をと、いはるゝまゝに、私は無言て靜に窓を明けたら、さやけき月影は病みやつれたる姉上の頰を照らすのである。

○我が苗字　横濱　淸水千秋子

私は此春箱根に參りました實に何處を見ても山と谷ばかり谷間には名にしおふ鶯が鳴いて居ました山からは絕えず淸水が流れて居ます嗚呼我が苗字は實に詩的であると思ひます谷間の鶯も此水を飮むてせうか。

○樂の音　三河　白ゆり

箏の音は淸くして氣高く、笛の音は怨むが如く、琵琶の音は妙なれども哀深く、風琴は優美にして三絃は悲しむが如し、總じて樂器は皆聽く者をして心耳を澄ましむ。殊に月靜かなる秋の夕箏笛琵琶等をきかば淚のおのづと出るを知る、されどそは何故ならむ、知らず。

新笑話

編輯局選

三等　○バナヽ

神田區南甲賀町八　須藤元子

甲「君南洋の土人は贅澤だネー」乙「なぜ」甲「だつても一斤十五錢も二十錢もするバナヽを常食にして居ると云ふ事ではないか」

四等　○長座無用

和歌山市附近岡崎村門前吉田方　伏見八千子

來客「オヤ〳〵長く失禮しましたこともう三時間になるわ」子供側から「うちの御母さんが時計をすゝめたんだい」

五等　○蚊

遠江國見付町　宮城梅子

母「太郎やお前らが蚊幬を破つたものだから蚊がはいつて仕方がない。太郎「お母さんそれては蚊帳を取ればいゝぢやありませんか。

○病氣　下總　板橋たゞ子

隣の妻君車夫の女房に向いて妻君「病氣は如何てすか」女房「どうも發熱がてまして」妻君「それて頭ては頭痛しませんか」

○馬鹿な車掌　下谷　春洋子

子「あの車掌は馬鹿だよ」父「なぜ」子「でも自分の墓口が開いて居るのに懐中物御用心て云つてゐるもの」

○帰りたい　下谷　橋本波子

良人「お前よくお聞き、あの吉村の奥さんは、毎日毎日朝から晩まて、其所此所へ買物に御出掛けになるので、とう〳〵病氣になられたさうだ」

妻君「おやまアそう、私も女に生れた以上は、一編でもよござんすから、其樣病氣に罹りたいものですヮ」

○取次ぎ　西多摩　森田なか子

奥さん「何――吉岡の奥樣が? 其れては成るべく疎匆のないやうに鄭重にお通し申しな」。山出しの下女玄關に至り、「其れては成べく疎匆のないやうに鄭重にお通り下さいまし」。

○らつぱ　仙臺　大久保直子

子供「お父さんラッパを買つて下さい」父親「ラッパはやかましいから駄目だ」子供「そんならお父さんがれてから ふきますからどうぞ」

○速成課　秋田縣　佐々木園子

母「君子お前まだその單衣出來さないの、マア久しい子芳子さんなんぞ一日に三枚も裁ふといふのに」娘「だつて母さん芳子さんは 速成課を卒業したんだもの早く裁ふんてせう」

○馬の田樂　靜岡縣　あや子

若者老人にむかひ「今こゝを味噌を積けた馬は通りませんてしたか」老人「此年になるが未だ一度も馬の田樂は見た事は御座んせん」

○忘れ物　伊勢　本田文子

下女「唯今歸りました」奥樣「鶏肉とねぎとふうと皆々買つて來たかね」下女「おやふうだけ忘れて來ましたわ」奥樣「そりやおまいふうぬけじやれ」

○ゆかた　岩代　濱井女

母「お前は大そう長けがのびたからあの格子のゆかたは着られなくなつたらう」子供「私の體だつて毎年同じゆかたも着たくないわ」

○無邪氣　大和　岡崎執達子

子「母ちやん痒い〳〵背よ」母「何所が痒って」子「痒い所よ、よく分つてるのに」

○瘠せ藥　京橋　みどり

下女「奥樣牛乳は瘠せる爲めに 召上りますのですか」奥樣「イヽエ肥る爲めに飲むのよ、なぜ?」下女「デモ牛乳上る方は 皆瘠せていらつしやいますから」。

○女中と下女　橫濱　清水千秋子

子「母樣女巾と下女とどうちがうの」母「それは同じだよ」子「デモ他家のはお三てうちのはお一てすもの」

○スケッチ　福岡縣　松本貞子

「あの芳子さん金比羅山に行つて スケッチしませう一寸待て居らつしやい」芳子「私スケッチて言ふダンスはしりません。

○不思議の年　阿波　暉子

「あなたお年お幾つなの?」「あたし家ては十三よ」「まだ外にお年があるの?」「はあ學校ては十四て汽車に乘る時は十二よ」

讀友倶樂部

文學顧問

問　高等小學程度で女子美術學校の西洋畫科へ入學する事が出來ますかそして入學時期は春期丈ですか秋期には有ませんかどうぞお敎へ下さいませ（大阪あさ子）

答　高等小學卒業滿十四年以上ならば入學は出來ます、入學期は四月になつてゐます。

問　與謝野晶子さまはおいくつ位ですか、何學校の御出身ですか（涙光）

答　晶子さんは多分二十九か三十のやうに思ひます、何學校の出身などゝ云ふほど學校で學んだ方ではありません。

問　記者樣、御地に簿記學校がいくつ位あるでせうかそして一番よいのはどこでせうか（岩代、白雪）

答　簿記の學校は小さなのはいくつもありますけれど、女子簿記專門の好い學校は殆んど有りません、寧ろ女子商業に入學して簿記もおやりになれば如何です。

問　俳句と川柳と發句との區別を聞かして下さい（德島、宗子）

答　俳句も發句も同じもの、現今では凡て俳句と云ふやうになりました、川柳は別です、俳句より更に通俗な滑稽を主としたものです。

問　私は實に寢坊でく我ながら愛想がつきてしまひますどうしてどしよう私は恥しくてなりません目ざめよくなる法はありますまいかあつたらどうか御敎へ下さいませ慚愧に堪ざる（寢坊女）

答　文學顧問以外のお尋ねで、少々御返答に困りますが、文學に依りて朝寢を癒す法は解決されません、少し意志の鋭い人なら朝寢位はなほるでせう、一定の睡眠時間さへ眠れば其れ以上むやみに寢たくてたまらない譯はない筈です、若しあつたら病氣です。

問　東京には澤山の中學講義がありますが一番何れがよろしいでせうか（花蝶子）

答　大日本國民中學會發行の中學講義錄は最もひろく行はれてゐるやうです。

問　高等小學を卒業したばかりで御地の共立女子職業學校へ入學が出來ませうか（神戸、ゆり子）

答　出來ます。

問　「現代青年論」（伊藤銀月著）の代價を問ふ（千葉縣、原たき子）

答　定價三十八錢、郵稅四錢

問　女子美術の規則書を送つてもらうには何うしたら好いでせう（小樽、なでしこ）

答　二錢の郵便切手を封入して學校へお賴みなさい。

問　文學顧問へ自作の歌を出して記者先生になほして頂けませうか（長門、田舍女）

答　それはいけませんやはり投書としてお出しになり佐々木先生の選拔を經るのが正當です

問　高須梅溪先生の御住所は何地でございますか（大和、月萩）

答　牛込區新小川町三丁目十四番地

問　記者さん私はまだなにも存じませんが誌上で見ますと作り名の方があるようですが作り名で投書してもよろしいか御おしへ下さい（尾張、市川房枝）

答　よろしいけれども記者だけには本姓名住所をお知らせ置き下さい。

諸孃と記者

○記者さん私等は今高等四年に在る者ですが今度から四人が一生懸命勉强して投書しようと思ますからどうぞ幾重にもお敎へ下さいます樣御願ひ申します（加賀國小松、本谷式部、松美白撫子、小竹姬百合子、澤田夕月子）（記者曰、四人で仲好くして競爭するのは面白いでせう）○記者樣に御伺ひ致しますが誌友倶樂部に投書するにははがきではいけませんか宛は編輯局宛ですかお敎へ下さい（東京府艷子）（記者曰はがきでもよろしいが必ず編輯局宛にして下さい）○京都、玉淳女史。長野縣、一少女。藤枝子。秀坊。三重縣森永雪子、岡松光子、西岡安子。滋賀縣、君子名古屋、蝶子。長岡市、土田りた。筑前、雀部富子。相摸、淸水富美子。上總、汀の狂女。丹波、小糸。明石、齊雨。石狩、野田まさ子。山口縣、泉月女。日向、野々上佐和子。長野縣、加藤芳子。堺、すえ子。常陸、磯みい子。丹波、

伊藤喜久榮。大隅、小野しか子。山口縣、寂子いちじく女。青森縣、山本直子。三田野小夜子越中、野菊。讃岐、孤女。播磨、井貫房子。愛媛縣、花子。京都、辻あい子。岩代、かつ子。尾張 所操。淺草、神岡たま子。大坂府、竹原菊枝。筑前、撫子、東京府、紅薔薇女。以上の諸孃からの原稿は殘らず拜見いたしましたお尋れの通りで差支ないのと投書規則を御覽になればお分りになるとには別に 御答へしませんからどうか惡しからず、猶暑中の見舞狀を下すつた方々には厚く御禮申上げます)(記者)○記者樣あの投稿〆切は只十五日としてありますが十五日の最終郵便のをてすかお敎へ下さい (我孫子、林君子)(記者曰、十五日の最終郵便までに本社に着いたものと云ふ意味てすから遠くの方は十五日にお出しになつたては間に合ひませんのです、 時日を見計らつて何うか十五日迄に本社に着くやうにお出し下さい) ○記者樣此度圖畫を投書するには姓名を何所へ書いたらよろしいてすかお敎へ下さい (野里女史)(記者曰、繪の外へ) ○記者足下妾は北信の山奧に鳥や獸を友として其日を送り自然の美によりて多少思を慰めて居る不幸子てす、 が女子文壇は初號より愛讀して座右の良友として居る者てす 不束ながら以後投書致しますから宜敷御敎導下さい、 記者樣諸讓と共に淺間登山は如何てす實に愉快てす是非一度いらしつて信山信水の名地を御尋ね下さい御待申ます (信濃背擬子)(記者曰、如何にも諸孃の一隊を組んて御嶽登山、淺間登山などは壯快てせう、 けれども未だ不二登山すら試みない記者はそれがいつの事やら分りません○記者樣私には父母がありますけれど家に居ず兄姉弟妹もなくたゞ祖母と二人きりてすから今年小學校を終へても進むて敎育を受ける事ができません作文などを投書する事は お恥しくて思ひもよらぬ事てすけれど今度恥しさを忍んで投書しましたいくら沒書になつてもかまひません倘は勉めて投書致すつもりてございます(陸中山櫻花)(記者曰作文を投書したところて何もはづかしいことはありません御勉強なさい、 祖母さんとおふたりなら作る暇もおありてせう) ○記者樣に是非御願ひ申ます、 私は岩代國の一愚女てあります。 今度て五度投書致しましたが一度も本誌へ記載してくださりませんが 本社から直接に本誌を購讀しなくては 文の良好によらず總て沒書にするのてすか是非に本誌上て敎へて下さいまし以上(岩代、根本寨代子)(記者曰、何方からお求めになりましても、 本誌の讀者てさへあれば御投稿は差支えありませぬ、 又投稿の選擇は勿論詩文の良否に據るので、 直接讀者たると否とには何等の關係もないことは 明言いたします○皆樣の御寫眞を拜見致しまして 大變嬉しく存じます今度のはどなただろうといつも 待つて居ますの、 そして七月の女子と修養と云ふのは大變有益だと思つて讀みました、 今度からもどうぞあんなのを澤山れ、 そして近頃流行します水彩畫の樣な日本畫の樣な西洋がゝつた畫は (當雜誌に懸募なさる 内に見ゆる) 名は何と申しますか(くちば女)(記者曰、矢張日本畫てす)

諸孃の交際

○先月の誌上に一寸文通の御願出し致しましたら此の樣な可憐なる身を御いたわり下さるやさしの御方の多くてか御玉章をぞく／＼と下さいまして何と御禮を申して良いやら只 有難泪にむせぶの他ありません猶之れからも下さい (三河國蒲郡町今井波津子) ○記者樣の御陰で私は東京に御友逹が出來ました 先月博覽會見物にまゐりましてかねて御交際致して居りました 種川みつの子樣と親しく御面會致しました 色々女子文壇のよい御事など話し致して御別れしましたが 之れも皆記者樣の御陰と嬉んで居ります 親愛なる姉上樣愚なる私に御敎導を願ます 御禮には粗製のシオリを以て致します 繪ハガキの御交際もなし下さい(佐世保市天滿町四八、大崎光子)○皆樣よ私の樣な田舍娘て皆樣と交際をすることは につきませんが 此後は玉章の交際を願ひます (能登國輪島町大平ふみ子) ○誌友の諸孃樣おかわりは御座いませんか諸孃樣の內に「造花」「瓶細工」「寫眞」「繪葉書」「玉章」「編物」等をどし／＼御送り下さい御禮は必ずいたします (河內南河內郡長野村西代奧田黃菊) ○誌上の姉上樣妾は淋しき片田舍に只一人暮して居りますのよ 別に樂しき事もなく只花を栽培するを 樂みにして居りますから珍らしき 種御送り下さい御返事は不束な妾の寫生や繪葉書て必ず致します (岡山縣淺口郡三和村三近繁子) ○誌友の皆樣其後は意外に御無沙汰しました許して下さいましな 實は母が病氣なり 看護及び家事多忙てすみませんてした皆樣に手紙差上る筈てすが 御多數の御方てすから御返事差上ぬ 御方が三人程ありましたが惡からずれ 當地の雜誌を先着十名へ送り其あとの御方へも送る積りてしたが 其意を得ず皆樣より頂きし物を見ては 感謝して居りますのよ何卒前

に變らず一層まさる御交際を願ひます（周防國大島郡蒲野村中谷孝子）○誌友の姉君樣妾も當縣女學校三學年に通學致して居ります何とぞ皆皆樣に御玉章や繪葉書の御交際を御願ひ致しますそして御寫眞も御惠投を願います必ずく御返事は致します さよなら（高知市南與力町高橋英子）○愛讀者の諸孃樣方妾は昨年より腦患者となりました爲め今年は上京も出來ず片田舍に恨みを懷いて煩悶致し居る一少女です同情ある十六七才の少女樣方よ玉章なりと御惠み下さればこれにこした喜びは有りません（北海道後志國歌棄郡潮路村三宅みめ子）○諸姉上樣私は小學校を卒へ裁縫專修科に通ふて居る不束者でありますから末永く御交り下さい（山形縣新庄十日町九九清水てう）○妾は此度誌友となりました以上は皆樣と親密の御交際を願ふは勿論の事何んな事でも御相談をいたしたう御座います御寫眞やたまづさを御交換なして下さいな妾それはかりが樂みなのですから、（兵庫縣揖保郡御部村遠藤ゆき子）○皆樣妾は丹後の山奥に住む薄命な者ですが何卒哀れと思召し下さつて繪葉書や御手紙の交換をして下さいな一生の御願です（丹後國加佐郡東雲村字水間櫻井玉子）○親愛なる御愛讀諸孃妾は玉章やしやしんやゑはがきの御交換が大好てす何卒永久に御交際が願ひます（京都府相樂郡高山村字田山森西松子）○どなたでもよいですから妾を慰め下さるかたは寢はおきても玉章でもなんでもかんでも願ます妾は早速御返事申ます信切のある方は是非々々御玉章な頂戴（東京本郷區駒込曙町七番地花壽美館内宮川春子）○誌友の諸姉樣方私もお仲間に入りました末永く御交際下さいませ（小倉市田町百二十番地小川方白百合子）○おなつかしい諸姉樣妾は片田舍の小學校に通つて居る不束者ですどうか御見捨なく御交際を願ひます玉章はもとよりあみものやゑはがき御寫眞などの御交換をもして下さい御送りの御方には先着十五名に上等の二豐北築の山水を寫したものを上げます（豐後速見郡小武尋常小學校内河野ちず子）○あああはれみ深き皆樣此の頃の淋しさいかなれば斯もありつらんと空を見て皆樣を思ふのみ又失せにし友を考ふるのみ思ひかへしては小說にまぎらはして心をなぐさめ居る、妾をあはれと思めし同情の御手紙にても只の御はがきにても心あればうれしく存じ候又本にても品にても御望は必ずいたします家内少しにて妾一人てす（下野國那須郡佐久山町伊東花子）○どうか以後寫眞繪葉書の交換をお願ひいたします（名古屋市議事堂師立松惣太郎内みさを）○滿天下の姉樣達よ妾は新聞社にありて拙き筆に紙上を汚しつつ勉強して居ります何うか永久にお交際下さい（岡山市中國民報社内武本盛子）○誌友の皆樣妾は北國の雪多き片田舍に住むものてすが何卒親しき永久的の御交際をお願ひ申ます（加賀國小松町角本あけぼの）○誌友の姉上樣よ何卒繪葉書や小說寫眞編物等い交換を願ひます又玉章の交換も（三重縣龜山大字東町井野秀子）○花咲く春の歌は古びしも、青葉繁き夏木立の中より流るゝせゝらぎに、暫し神韻の調べを奏し給はずや消き水莖の跡に、そをものして惠み給はゞ何の幸ちか是れに及ぶべき、いざ友よ、涙ある友よ、とく來ませ、誠の心もて手を取らん（東京麻布市兵衛町二ノ四○牧野方大木無果花）○感謝す吾が女子文壇！妾が薄命を怨えたるを御援護下されし爲め世のお情深き諸孃樣は續々篤き同情を寄せられしお玉章を寄せ給ひて妾の前途に一導の慰安の光明を與へ給ひぬ あゝされど冷酷なる浮世の涙風は何處迄ても妾を拋擲して止まざるか激浪に漂泊ふ筏舟の此身は左の箇所へ移轉す可く餘儀なくせられぬ（富山縣中新川郡五百石町字松本 開町谷方松井みよ子）○妾初めて愛讀者になりました どうぞエハガキなり玉章なり寫眞なりの御交換を願ひます 先着九名に限り當地紀念園の繪ハガキに 妾の寫眞を添へて御返し致します（信濃國上水内郡豐島村市川豐治郎樣方齊木茂子）○頃日御申込みの親愛なる誌友に豫定の如く廿人に分配しました 後答の御方は誠に御氣の毒てした然し返事は 出した積りですが出し漏れの御方があつたら許して下さい尚ほ一層永しなへに繪端書寫眞書籍の御交換を願ひます以上の物御送り下さつた方に先着十名迄繪端書編物と 寫眞を送ります（名古屋清水町甲二八池山滿子）○皆樣の 御內で末永く不束な妾と御交際下されませぬか 御交際下さる方には紀念として 妾通學の女學校の假裝會の繪葉書を差上げます（大阪市北區源藏町七五 大谷方細川綾子）○諸姉樣よ 妾しも女子文壇の愛讀者て御座いますが御見捨なく 永久に御交際を願みますよ何卒繪葉書や 玉章や寫眞交換も 願みますよ（丹後國加佐郡由良港九番地篠原登美枝）○女子文壇愛讀者の諸姉樣よ 妾しは淋しき片田舍の小學校に教鞭を取て居る者てすが見捨なく永久に御交際を願ますよ何卒繪葉書や 玉章や寫眞の御

交換なも願ますよ（丹後國加佐郡由良町三四三番地中西しげ子）○私の樣な者にわざ〳〵御晉楽を下さいまして誠に有難う存じますが、私は家が貧しくつて閑のない身の上で御座いますから皆樣のやうに廣く御交際が出來ないので御座います、一々御返事も差し上げませぬ失禮はいく重にも御宥し下さいませ（三浦半島にて、長塚よし）○親愛なる姉樣方よ此度左記の處へ轉居致ました何卒御見捨無く永久繪葉書や玉章の交換を願ます（岩代若松市本郷町二三渡部柳子）○私は、音樂が大好きて手許に手風琴、鐵琴、吹風琴、明笛、ハーモニカ、の品御座いますの誌友の皆樣の內でヴァイオリンが御座います御方は御交換を願ひますなほ御寫眞繪葉書、の御交換を願ます又美しい、繪葉書を送つて下すつた御方には私の不出來な寫眞差上げます（栃木縣下都賀郡寺尾村字尻內福富濟子）○皆樣の內女盛か產婆か看護婦希望の御方永久にお交際下さいませ（秋田能代島町建部燕子）○皆さま妾は今度葉書歌集と言ふのを拵へようと思ひます同好の方は白はがきに自作の和歌五首を認めて御惠み下さい、御禮は差上げます（東京府南玉郡多摩の里横倉玉江）○私は靜岡の片田舍に居る極々淺學の者ですが何卒誌友の皆樣末長く水魚の交をして頂戴れ又御寫眞を御送り下さられた御方にはみすぼらしい妾の寫眞に靜岡名物の安倍川餅をそへて御禮致します玉章や繪葉書を御送り下された方には靜岡電話開通式紀念繪葉書を以て必ず御禮致します又地方新聞の交換を願ひます（靜岡縣安倍郡南藁科村深谷牧野八重）○満天下の諸姉上樣私はこの若松の町はづれに女子文壇を愛して居りますが何も辨まへぬ不束者ですけれど皆樣あはれと思召して寫眞繪葉書玉章御惠み下さいますやう伏して御願ひいたします（筑前若松土井町堀內朝露）○誌友の姉上樣よ妾は大井川の邊りに住む賤しき者てすが御みすて無御交際を願ひ升又遠方の姉上樣より御音信下さると先生より御褒美を貰つたよりうれしう御座い升諸姉上樣よくれ〴〵も願ひます（靜岡縣榛原郡萩間村東萩間秋山直太郎內琴月）○愛讀の皆樣御變りなくつて本誌へのせて戴きましたら多くの友垣が出來ました實に樂みて御座います何卒皆樣マッチのペーパーの變つたのを御送り下さいな御禮は必ずいたしますなほ此後共繪はがき玉章の交換を一頁に御願ひ申候（千葉縣佐倉町吉田秋子）○記者樣毎號みな樣の御姿が出ていますが誌友となつたら一度は寫影を出して皆樣に御目にかゝる方がいゝてせうか？私は母もなく姉もないので母とも姉ともなつて下さる樣な親切な方と御交際をしたいのてす（和歌山市嘉家作り町廿六神保須磨子）○諸姉よ妾は大變な句宗信者なのよ繪葉書て俳句和歌の交換を御願致します又寫眞御持ちの御方は惠んてよ肥太つた妾のもすぐ御送り致しますから、（備後比婆郡帝釋村影山妙子紫雲女史）○誌友の姉樣末長く友情的に繪葉書の交換を願ひます妾手元に岡山公園紀念繪葉書壹組十二枚の分と遞信省發行の凱戰紀念繪葉書壹組六枚の分とが澤山有ます交換の方法は御問合せ下さい詳しく申上升（岡山縣岡山市內山下病院通り三宅信次郎方波月女史）○備中の撫川町木村つる子樣御玉章ありがとう併し未納税のため六錢とられましてあなた表面に女子の名を書いてありましたから妾女子だと思つてあげたら堂々たる男子妾おどろいたわ御返事出す筈てすが妾男子の方とは文通は御ことはり誌上て御禮申上ます（淡路國分光子）○音信といふ事に趣味をおもちの方は御文通なすつて下さいまし又歌集靜夜お望の方があれば相當の絹製寫眞掛をお送り下さい、交換いたします。（下總東葛飾郡八榮村夏見神田みち）○私は世にもわびしき山寺に朝夕心さびしく日を送る少女てありますがおなさけにてとこしへに御交際を木數ならぬ拙なき身をもおいとひなくば折々はうつしゑや玉章の交換をもおねがひ申ますよ（秋田縣秋田市楢山滿福寺方鈴木妙子）○賢明なる皆樣、以後どうか玉章や繪葉書て親しき御交際をして頂戴な御返事はきつと致し升から（福島縣若松市上大和町四谷歌子）○富山市舟木廣子さん山川遠く隔てたる越國のはてよりはる〴〵玉章をよせられ床敷御心のほど深く心に銘じ候されど男子のお方と承りわざと御返事をさしひかへ候（大分縣東國東郡西安岐村近藤げん）○誌友の諸孃よ私は高價なる所の繪葉書などはのぞみません只々淸き御手になつた美はしい水莖の痕を郵便はがきにかいて下されば澤山ですよ永久の御交際をして下さい（新潟縣北蒲原郡新發田町字三之丸山內みさほ子）○誌友の諸姉樣私も本誌愛讀者の一人に加はりましたから玉章や寫眞の交換を願ます私地は田舍てすが溫泉所てすから御出ての節はおまはり下さい記者さんもれ（福島縣岩代國伊達郡湯野村橋本久保のぶ子）○誌友の諸孃樣妾は本月より淋しき故鄉にて家事の手傳をせなければなら

ぬ身となりました何卒以後は繪葉書やら寫眞やらの交際をねがいます妾も返事は致しますから（兵庫縣川邊郡小濱村の內川面村四十七番地中野美波子）○皆さん暑くなりましたね、思へば鴨河に四年を過しあはれ今病得て草深き故鄕のいぶせき伏家に母と二人暮す妾に露の情のあるお方樣よ寫眞や編物及繪葉書などの交換も致して妾に多大の慰藉を與へ給へや返禮は必ず違ひなくいたしますよ横取りなんかする妾でありません（京都府相樂郡高山村松田眞襄方綾子宛）○皆樣妾は田舍の淺學者ですが本誌愛讀して居るのですどうか姉樣方今後、和歌、俳句、文章などの交際を願ひます、そして水彩畫、御自筆の繪端書なども御惠み下さいませ（大和宇智郡五條町九拾八番地栗山英子）○私しも愛讀者の一人ですから御見捨なく御交際を願ひます（筑前國遠賀郡黑崎町字船町雀部登美子）○諸孃樣の御親交を望みます…繪葉書、玉章、寫眞、の御交換も願ひます返事は必ず差上ます不用なる雜誌の御交換も願ひます（美濃國加藤裁縫舍內傍島みゆき）○誌友の姉樣私は豐浦郡の片田舍に住んで居ります眞事に愚な物ですが繪葉書や寫眞又は玉章の交際を何卒末永く御惠み下さい私も右の品物は澤山用意してありますから御返事はすぐに致しますよ（長門瀧部局內上大田本田方中村あき子）○御なつかしき誌友の皆さま妾のような者でもどうか御見捨なく繪葉書や玉章の御交換を願ひます御返事は速に差上ます（山口縣玖珂郡廣瀨村廣兼勝二內廣兼しげ子）○諸孃の姉樣方私は淺はかな者ですか此度誌友の中に加はりました何卒末長く御交際が願ひます（京橋區柳町井上小學校石坂武子）みなさん妾は琵琶湖のほとり淋しい町に住んで居るものよ御有情の御手紙やきれいな繪はがき送つて頂戴御かへしはすぐ致しますよ（滋賀縣大津市松本町八二大杉君子）○皆さん私も讀友となりましたから御交際を願ひます。始めてのお目見えに秩父根の山水でも御紹介いたしませう。山が秀て水が淸いと云へばそれで大體おわかりになるのでせうが、其の水に育つた魚は別段おいしく山に歌ふ小鳥の聲は極めて美しいのです村の娘の大方は糸繰の業にいそしんで居ります。（その糸が名高い秩父絹に織られるのでございます）私もやはり其內に洩れぬ賤の女でございます。（埼玉縣入間郡東吾野の里淺見なみ子）○諸孃の中で國學者中平田篤胤先生の性質事蹟を御したひなさる方がありますかあつたら左の住所へ御知らせ下さい其の方御交際を願ひ上げます（尾張中島郡朝日村市川房江）○慕しい御姉樣方よ暑中休暇が來て嬉しいでせう私のやうな不束者に美しい繪葉書眞情こもれる御玉章殊に麗しい栞有がとう存じました以後もドシ／＼願ひます又上州高崎の誌友諸孃と交際を望みます高崎は私の故鄕だから本統になつかしいのよ（神田南甲賀町八內藤方吉田たつ子）○皆樣私は淋しい田舍に生れた不束者です、何卒永久に御手紙、ヘガキの交際を希ひます返事は直ちに差上ます（下野那波郡佐久山町榊原ます子）

圖書換讀

○妾は文學博士小杉榲邨閱女子文のはやし。小說不如歸（歟共）、吾輩は猫である。己が罪上中下。など有りますから草村北星著濱子。村井弦齋著食道樂（春夏秋冬）四册。と交換して下さいませんか高價の本なれど何他の書數種と私の寫眞を添えます（讃岐國木田郡川添村元山町佐野紫女）○諸姉の中に陸奥の花の唱歌の譜附の發行所並に定價御存じの御方は下名まで御敎示を願ます御禮は早速申上ます猶花類のヱハガキの交換をも御願申上ます（肥後鹿本郡山鹿町衛藤菫）○皆樣の內で女子文壇第一回の懸賞文集御不用の方が有ればほとゝぎすの歌、こぼれ月、女學世界の增刊現代婦人成効立志談、銀鈴、の中のどれかと交換して下さい着次第送ります（牛込築土八幡町三十土居優子）○皆樣私の家にふるい少女界や女學世界ありますのよ御のぞみの方は御申こし下さい差し上げますから皆樣御文通願ひます（千葉縣香取郡多古町水戸高岡もと子）○私は左の小說が讀みたくありますが何誰か繪葉書と交換して下さいませんか本は眞人の自白前編同後編、女夫波一年有半とて其外面白いのが御不用の方は送て下さい（東京日本橋濱町二ノ一七片山薇風）○誌友之姉樣よ私の手許に靑年畫家、裁縫敎科書上卷、女子の美文、が不用に成つて居りますから血の淚、みだれがみ、澄子、御持ちの方は御交換を願ひます（埼玉縣所澤町金山關根德子）○姉樣よ妾は性來讀書好にて大抵な小說はよみそしてもつて居りましたが東都にて在學中火災に羅かり燒失して仕舞ひましたのよ諸姉樣御不用のが御座いましたら御惠み下さい何でも宜しいから御禮には繪葉書りボン自製の造花編物シシユー等（東京府下王子岩崎方信代）○左の書不用なり相當書籍と交換したし、獨斷勝、雜誌、さゝやき、ゆり籠、本朝廿四孝、サンド

ゥ鉢力養成法、怪談深閨屏、三勝半七、世路日記、大晦日、嗜双紙、作文寶典、文士寶典、天地有情、雪月花、波菊白菊、文學漫筆増補千山萬水（横濱市末吉町七丁目七十一番地、秋葉まさ子）○妾所持に思草、小詩國、源氏物語、不如歸の歌、磯馴松、竹柏園集、萩之屋遺稿、萩之家歌集、新詩辭典、俳句案內、火之柱、良人の自白等がありますから廿八宿、花守、花守日記、和歌入門、日本歌學全書、萬葉講義、わがおもひ、等を御送り下された御方には以上所持のものを御送附致します（熊本縣菊池郡菊池村大字北宮佐藤まつ子）○幸福なる令嬢達よ妾に金色夜叉に魔風戀風青春いづれかを御惠み下さるまじくやもし御惠み下さるやうなれば御一報願ひ度候 大町桂月著女學生訓棚橋あや子著女道鑑話玉むし等にても宜敷候はゞ御禮の印までに差上べく候（清國大連市榮城町日清勸産場いづみや方池田芳子）○私の手元に女學世界女鑑文藝界少女界少年界文藝倶樂部秀才文壇女子學術講義錄全部本誌全部神代の話フランクリン不用になつて居りますから端はがきか玉稿て申込み下さいますれば送つて上げます又りボン寫眞なども御交換下さい（福島縣福島町新町六七石田芳子）○皆様の內金色夜叉、夏子、伯爵夫人、鎌子、己が罪、數學辭書等御不用の姉上は私の濱子、思出の記不如歸の歌、藤村詩集、天うつ浪短篇小說、毛赤布などゝ御交換下さいまし（福岡縣企救郡柳ヶ浦村大里北大汐よし子）○私の手許に小說不如歸火の柱寫眞術第一筋初姿俳句練習談新小說文藝倶樂部婦人世界其他數百册有升故皆様の內女子衞生學小說鏡子良人の自白懸賞文集女子遊學便覽何れかと御交換下さいませんか（秋田縣能代島町建部志子）○和歌山縣海草郡なる池見俊子樣貴女は御自分より交換して呉れよと御玉章下すつたのでは ありませんか、私は誌上で貴女の御姿拜見致し此の方ならばよも嘘はなかろうと思つて直ちに御送り致したのです、野ノ花がないならば何故直ぐ送り返して下さらないのです、今となつて返して下さいとは申しません否返して戴く程ならば素より御送りは致しませんよ、燒きなと捨てるなと御勝手になさいませだが私の心は白菊の中に滿々としてますよ貴女は御自分の姓名に一點の曇もないと思て被有いますか貴女の行ひを良心は如何に解きました御伺ひ致します（溪川靜子）○天下の諸嬢よ私は各地發行の新聞讀み度思ふ故送つて下された姉様には私の卒業した學校の繪葉書をそへて德島發行の毎日か日日か公論か望のを御禮と致します（德島縣麻植郡上浦村鎌田京藏內野子）○皆様妾しの處に左の雜誌や小說やが不用になつて居ります、寫眞や肘突や絹巾を送つて下さつた方に差上ます、文藝倶樂部、戰爭文學、文庫、中學文壇、順禮紀行、美文スケツチ、青年英雄頭、島田中尉、不知火、軍國文壇、春情浮世之夢、婦學褒鏡、戲曲叢書、秀才文壇、女學世界、少年世界、少年之友、少女世界等尙外に澤山あります、どれでもお好みのものを差上げます、（熊本縣飽託郡八分字村八分字山部重子）○皆様の內で家庭新報の五、六月＝四部お持ちの人は二三日間お貸し下さい何か美麗な繪葉書を添へてお返へし申します（越前圓山西村因幾竹下濱尾）○諸嬢様よ妾の手許に新不如歸朝晴、濱子、夏子、和歌入門、文藝倶樂部、妾發行のすみれ草等がありますから皆さまの內で黃菊白菊、金色夜叉、青春、孝女白菊、新體詩自在、と交換下さる人はありませんか御寫眞や未使用舶來エハガキで申込んで下されしお方にも御望の物を差上ます先着五名へは登錄にエハガキ 妾の寫眞とを添へて必ず差上ます神に誓つて（下總印旛郡里村鈴木樣方綾野蝶子）○四十年一月、四月五月六月の趣味、ホト、ギス何號でもお持の方はお送り下さいませんか、中央公論や趣味をお送り下すつた藤子様、お住所お知らせ下さいましお禮申上たうございますから。（岩代須賀川町服部貞子）○いとも神聖なる紙上を拜借して獨歩、破戒、獨步集、百合子、吾輩は猫である以上何れか御不用のお方は獨乙製ゑはがき或は相等代價にゆづり受けたし心ある諸嬢は本月中旬迄至急下名へ御一報を。（大坂西成郡西中島高畑石原かよ子）○皆さんの中で「淋しき夜」といふ唱歌御存じのお方は五線紙に書いた譜と歌を惠んで下さい御禮は先着三名の方に流行りボンを（京都室町下長者町下ル八代內花浦澄子）○妾は淸き吉野河畔に住む不束者でございますが愛讀者の一人ですから以後はよろしく願ひます尙私方に「家庭讀本卯の花月夜、落語八百題、文學奇瑞譚、明治豪商の夫人」右不用なれば他の本とかへことして下さい（奈良宇智郡五條町スエ受田貴美惠子）○私手許に美文作法、山高水長、山上湖上、この花、山家集評釋、金色夜叉の歌、寫生文作法詳解、新派和歌獨習、新古俳諧、奇調集、文倶增刊ふた昔、美文資料戀愛麗句類纂藤村詩集さを鹿一號より十號

迄十冊等の不用書があります諸孃の中で子規隨筆、蕪闇先生のわがおもひ、伶人鐵幹の擲の葉靜夜、紅葉句帖、湯島詣、良人の自白、お持ちの方は交換して下さい（神戸市兵庫門口町杉山俊子）○誌友の皆樣私し新古書籍澤山あります御望みの御方は端はがき（端面へ何にもかゝぬもの、而し住所姓名は差支なし成べく小さく丁寧に御認めを乞）にて申込下さい不用書籍全部の目錄を謄寫いたしてありますから夫れを郵送いたします依て皆樣は夫をごらんになつて御請求して下さい（靜岡縣駿東郡原町原庄司清藏方じゆん）○私は次に擧ぐる書籍、第一軍、第二軍、第四軍、寫眞帖、遼陽、旅順、奉天占領紀念帖、東京、京都と奈良、大阪と神戸、名古屋と伊勢、女學校生活、婦人壯烈譚、冬木立、はつもみぢ、わか草、方丈記、十六夜、更科、土佐日記、竹取物語等持つて居ります御望の方は至急下名まで（常陸筑波郡久賀村上當場闘野淸子）○妾の手許に風月集、和す禮貝、花月集、美文自在其外家庭書、澤山持つて居ますから皆さんの內で少女界、女子文壇、中學文壇、秀才文壇、小說で不如歸、金色夜叉の續編以下の本と御取換下さる方には當地名所繪はがきを添へて差上ます（山形縣西置賜郡豐川村五島乙羽女史）○青春怨不用になつて居りますから不如歸と交換して頂戴お持ちの方は次號でお知らせ下さい（いちじく女）○皆樣お健在におはすか、私の所に英字新聞ありますから、お望みのお方は繪葉書て申込なさい、又寫眞器もありますよ、左樣なら（若松市中六日町一二一宮原白雲女史）○女學世界八冊本年五月の新小說女波男波不用になつてをります諸姉樣の中に魔風戀風（全部）須子己が罪金色夜叉（全部）御不用のがありましたら古くてもよろしう御座りますから右のと交換願ひます（京都市烏丸夷川上ル藤野もと子）○私は渡米しますもので御座いますが皆樣の中で靈光破戒不如歸思ひ出の記我輩は猫である（全部）等御持ちの方は私の王冠長恨治郞島琵琶歌橘英男想夫憐病戀愛新夫人戀と戀火の社避暑の友戀の一年有半虛無黨奇談其他新小說文藝俱樂部などと御取替へ下さいまし私は船中などで讀まして戴きます（大阪東區博勞町二ノ三六加藤樣內桂水子）○親愛なる姉樣方の內に、紅葉全集、靑葉若葉、思出の記、晴小袖、ほとゝぎす、天うつ涙、靑春の怨、いづれにても御持合の御方は私しのと換て呉れませんか小說己が罪（三冊）薄命の花、魔風戀風三冊、夢の夢、やどり木、花たば、風流線、此內お好み次第送りますから、何卒送つて下さい、愚なる私しの寫眞を添へますから（北海道石狩國樺戶郡浦臼村小西婦美子）○皆樣の內「家庭衞生訓」お持ちのお方は私にお惠み下さいませんか御禮はキツト〳〵二三日內に差上げ升（秋田能代畠町建部ひさ子）○私不用の雜誌で書齋がむさくつて困つてゐるのですがお望みのお方は五錢以上の繪葉書て申込みなさい早速送本いたしますから（紀伊海草郡西和佐村池見俊子）○皆さまの內萩の家歌集の御不用のを御持の方がありましたら私の脚本桐一葉か小野鵞堂先生の習字帖日用文字と替えて下さい又金子先生か尾上柴舟先生の歌集、選集又は佐々木先生の玉川集等御不用の方は御送り下さい御禮は、明星文庫女學世界、小說色懺悔其他の小說雜誌又は繪葉書てきつといたします（東京府南多摩郡多摩の里、横倉たまえ）○藤澤利喜太郞著算術小敎科書上下敎育勅語衍義、千景萬色記事紀行、萩の下露、高等女學校用修身敎科書不用になつて居ますから萩の家歌集、萩の家遺稿又は食道樂か其他詩的の本と交換下さいませんか（東濃加茂郡輪知村野村季子）○光榮ある諸孃樣方よ、妾には左の書が不用となつて居ます、俳諧提要、夏草、美文の資料、母の心（小說）、夏子、金色夜叉脚本人情の後見、新化粧法山高水長、世界歷史問答、女子國語讀本（落合直文著二四）、時代小品文集、桑園集などがあります、就いては皆樣の中で、女夫波の歌、不如歸の歌、金色夜叉の歌、琵琶歌、花守、にせ紫などの書が御不用で御座いましたならどうか妾の書と御交換下さいまし、妾は神に誓つて、御送り次第、早速御禮に、當地新公園の繪葉書をそへて御送り申します、（盛岡市日影外小路佐々木幸子）

寫眞編物交換

○嶄新なる粟リボン御惠送のお方へはお粗末なる自製の編物をお返しします先着九名限りですよ（美濃山縣郡葛原村大野裁縫所內秀枝）○寫し繪送りのお方には私も御送りいたしますよ（大阪東區博勞町二ノ三六加藤樣內桂水子）○私は不束な者でありますが何とぞ寫眞交換を願ひます編物も御孃樣方よろしく交換を願ひます（埼玉縣南埼玉郡須賀村大字和戶菊地美智子）○皆樣の內て御寫眞を御送り下さるなら妾何程ても御返し致します寫眞器を持つて居ますから（山形縣西置賜郡手ノ子五島孝子）○天下の諸孃樣私も當

縣の高等女學校に在學して居りますからなにとぞ今後よりは おん交際して下さい寫眞アミ物の交換もして下さい返事は是非とも差上ますゝ、（秋田縣平鹿郡横手町柳町三ツ梨健一郎方菅よし子）○無理な御願でありますが栞を惠てくださろお方はありませんでしようか若しお惠くださりますれば粗末ながらも繪はがきに御望てありますれば赤白の（花げし）もそへておれいいたします但し種子ですよ（備中吉備郡園村下田口林浩之助内ふみ子）○皆樣から繪葉書やお御手紙にて二十八名の御申越がありましたけれど先着近江の土井美根樣名古屋の咲子樣外七名のお方へ栞花りボン御送りしました尙麗はしき上等繪葉書を御惠みのお方へ 先着八名を限り自製ののハート形栞を差上ます（美濃谷合郵便局内臼井安子）○諸嬢樣よ何卒寫眞の交換を賴みます送つて頂戴な、 不つゞか乍ら私しの絹シチリを添へてお返し致します（北海道石狩國樺戸郡浦臼村小西婦美子）

繪葉書交換

○何卒皆樣永久繪葉書の御交換を願ます私は俳句が大好て御座いますから美しい繪葉書へ御自作の二句以下を書て お送り下さい私も俳句を以て御返禮申ます（芝區芝公園地三ノ二菅間隆子）○懐なつかしき誌友の皆樣私も女子文壇愛讀者てすどうぞ以後エハガキの交換して頂戴な决して御返事をいたさぬ樣な事はいたしません必ず返します先着五名には 筑波山名所繪葉がき一組づゝと山階宮妃殿下の御登山遊されし節御撮影相なりし繪はがき一組差上ます（常陸國下妻町赤澤千代子）○諸藝研究の 爲所く肉筆を望む但し葉書にて宜敷拙なれど返書相違なし（岡山縣中鐵線誕生寺驛近杉本天巖子）○誌友の御姉樣妾は富士の裾野の淋しき田舍に棲む不束物ですが繪葉書の御交換を願ます和製のものでも宜しいから可成上等のものを下さい妾も極上等のものへ富士名所繪端書壹百名を限り壹組ずゝ添へ蛇渡御返禮いたします尙寫眞御添への御姉には妾の寫眞を差上ます（靜岡縣富士郡北山村北山一四七御宿のり方御宿ふみを）○妾は繪葉書が大變すきて有りますので是迄度々姉樣達と交換を願つた者ですが、 此後諸國の名所が集めたいと思ひますので。スタンプ付の上等にて可成よき物を御惠頂戴返信は上等の 大阪名所を必ず差上ます（大阪天王寺境内六歌仙舘内西澤操子）○大そう御暑くなりましたが 皆樣御變り御座いませんの？御なつかしい諸姉樣どうぞ ひきつゞいて御自筆の繪葉書御めぐみ下さいまし私もきつと御返しいたしますから（長野市大門町九十三前島喜美）○誌友の姉うへ 樣がた私も愛讀者の一人となりましたから 不束ものでもどうか末ながく「エハガキ」の御交換を願ます（岩手縣黑澤尻町九十四三浦方永井久子）○私等雨後女子文壇愛讀者御一同樣と繪ハガキ御交換願升（尾張國起町加藤博）○懐かしの諸姉樣方、妾は繪葉書大好のよどうぞ 良美なのを多數交換して下さいな返事は必ず出しますの、 先着五名の御方へは別に送り下されたのよりもずつとよいのを返します、 其れから又寫眞の交換もどしどしして下さいな返しにははずかしながら私のか又は御好きのを送ります（岐阜縣土岐郡笠戸公文梅村たい子）○讀んで面白い繪はがきを 交換して下さいな（神戸市再度筋三宅しづを）○私も繪葉書交換の仲間に 入れて下さい私は地方の風景繪葉書を上げますから（長野縣諏訪郡永明村 加藤よし子）○誌友の姉上樣私にも繪葉書の御交換をして頂戴よ、 きつと御返事をだしますからね（京都四條寺町赤井又七方中島花子）○嗚呼妾が親しき學友よ妾なつかしき故鄕を出て親しき友垣と別れを惜んで無限の涙をのんで 其名も淸き布引の瀑布に年を送る事既に半を過ぐ御情あらば 此後御交際を給り繪端書交換の榮を賜り 度偏に願ます（神戸市布引川崎邸にて田中稻穗）○皆樣妾も繪葉書交換の仲間へ 入れて頂戴な（京都府加佐郡丸八江村字和江秋山梅子）○繪葉書の交換を卒願候。 俳句和歌などお添へくだされば殊に嬉しく玉吟は當地、 神戸又新日報へ掲載仕り當日の新紙一葉は別に差上げ申候。（神戸市下山手通六丁目二三〇ノ一、 非崎なを子）○妾は北海道の一隅に住む貧家の娘てす 性來文學を好み女子文壇を愛讀して居ります何卒皆々樣御交際を願ひます 又各地名勝繪ハガキの御惠送を願ひます必ず御返禮は 致します（北海道石狩國妹背牛局區内和綸澤源子）○誌友の諸孃方へ申します皆さんの御內て繪葉書御交換を望まるゝ方に妾しより熱心な交換家を紹介しますから 妾の手本まて申越しください（越後國中蒲原郡早通村に嫁居河內米子）○誌友の御姉上樣何卒繪葉書の御交換を御願ひ申します 私は京都名勝の彩色ので御返し申します（京都市南禪寺町廿一番戸の內一號田中留吉方まき子）○誌友の姉上樣美しき繪葉書澤山何も有難たう御座ります 御返事のこらず差上ましたもれたる 方御座りませんか此後

とても御見捨なく御交換を御返事は神にちかつてすぐ御返し致します（大阪西區靱中通三町目島雄禎子）○繪葉書交換が此の上もない大好きて近邊の諸姉様方とも常に交際して居ますが未だ誌友とは初めてであります先着十名樣には美しい繪葉書を差し上升又寫眞を御送附の御方には繪葉書と共に私の寫眞を添て屹度御禮を致し升（下總國印旛郡内郷村高座木山崎源三郎方山崎幾子）○誌友の姉樣方よ妾は霞が浦の北岸に住む不束者ですが何卒繪はがきの交換をして下さいな妾決して只取はしませんよ（茨城縣新治郡牛渡村大字牛渡石川ひさ子）○交換して下さる方樣は成る可くなれば美しいゑはがきに和歌とか俳句とかを書いて送て下さいね先着五名樣だけは妾しの寫眞を美しいゑは書に添へて御返し致します（神戸市楠通四丁目九十七番、東川艶子）○我懐かしき本文壇愛讀の諸姉様よ妾の樣な不束なものと行く末長がく親密に御交際を垂れ賜はり度う伏して お願ひ申します因みに美しい繪葉書の御交換をして頂戴な御禮は必ず繪葉書にて致しますから子ー（大阪府三島郡三宅村大字藏垣内竹原菊枝）○おゝ皆さんよ妾は片田舍の鬱屈な所に住む極不束者ですが以後繪葉書や玉章の交換を宜しく願ひます（京都府下相樂郡富山村田山有野貞子）○滿天下の誌友諸孃よ交際を願ふ妾は奈良名所スタンプ附の繪葉書を持つて居ますが何卒美麗な繪葉書と交換して下さいよそして玉章の交換も致します（京都府相樂郡東和束村字門前堀昌平方堀星子）○親しい誌友の諸姉よ繪葉書の交換を願ます妾只今皇太子殿下山陵巡行啓記念スタンプ付繪葉書十五組用意して居りますから美しい編物に未使用繪葉書を添へて御申込み先着十五名の御方へ差上ます又繪葉書ばかりの御方へは相當のもので御禮を致します（島根縣能義郡赤屋村神庭ゆう）○私は此度始めて御仲間入りしてよどうか永久に御交際を御願ひ申しますよそれから澤山風景繪はがきの御交換して頂戴なるべく繪の方に字を書かないで下さいな始めて御友だちになつてこんなあつかましいこと御願ひ致しますがどうかよろしく（丹波氷上郡柏原町足立小糸）○誌友の皆樣不束の私も愛讀者になりましたから何卒繪端書や書状の御交換を願ひます（遠江濱松町停車場前高柳宅治方大橋益子）○お斷り申し升妾は六月初旬から或る地方へ旅行して居りまして歸つて見ましたら繪葉書が八十七枚も來て居りました早速に御返事致しましたが何分數多の中ですから送り洩れもあるかも知れません故萬一送り洩のお方がありましたら御通知下さいませ早速送り升此後もどうか宜しく御願申し升繪葉書、地方新聞の交換を子ー（京都府舞鶴港丹州時報社内西春子）○御慈愛深き諸姉樣ふつゞかなる私をいとしみ給いて繪葉書下され有難く感謝致します尙變らせ給ふ事なく私名が男子のようですからいろ〳〵不便を感じましたから今日より撫子と申します（筑前若松土井町熊本内撫子）○親愛なる諸孃樣よ妾は繪葉書の交換と俳句が好ですから皆樣お送り下さいな妾も屹度返事上げますから（新潟縣中蒲原郡早通村茅野山鹽田とみ子）○皆樣つまらぬ妹と思召して以後御見知り置きを願升それから繪端書の交換も！（神奈川縣高座郡田名村葛輪篠崎いそ子）

文藝遊戲　讀書會（懸賞課題）

文藝遊戲として本誌上に「讀書會」を開きます、節は新秋に入りて書籍に親しき時分ですから讀書會もよからうと存じます、左の約束を守りて例の通り續々御出席御投稿下さい。

▲讀書に關する凡ての感想▲例へば讀書の趣味、讀書の利益などに就いての感想▲讀書に依りて得たる經驗談▲愛讀の書籍中より一節又は一句を拔くこと▲發見したる珍しき書籍▲わが家の藏書▲友人等の讀書會の現狀▲本誌の圖書換讀に就いて▲地方の圖書館のありさま▲學校で用ゆる書籍に就いて其書名好き嫌ひ▲讀みたいと思ふ書籍▲愛讀中の書籍▲新聞又は雜誌の事▲歷史の書物にては何の條が好きとか地理の書物にては何の處が好きとかいふこと▲雜誌の記事では何から先きに讀むといふ事▲其外凡て書物に關することなら何でもよろしい▲原稿は一文每に「讀書會」と題を記き入れ十行內外に認めること▲締切は本月二十日▲懸賞品は圖書切符、例の通り。

投書家並に愛讀諸君は此社告を見落す勿れ



選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生 佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種（◉叙事文◉抒情文◉書簡文◉評論文（各半紙廿四字詰三十行以內楷書にて認めらるべし）◉短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行內）◉新體詩（半紙かな付十句以內））

乙種（◉和歌（半紙半分一首宛）◉俳句（仝上）◉新歌謠（仝上）◉短文（半紙かな付廿四字五行）◉新笑話（半紙半分十六字詰）◉圖書（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの））

別種◉文藝遊戲（半紙十六字詰）
◉誌友俱樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを曰す」

▲都て各項とも課題は隨意▲
▲同封にて送付差支なし

↓（每月十五日投稿〆切）↑

獎學懸賞品

甲種

第一等　賞金賜品類……價格金拾圓
第二等　吳服物類……價格金參圓
第三等　小間物類……價格金八拾錢
第四等　便利の圖書切符……金五拾錢
第五等　同……金三拾錢

乙種

第一等　絹張洋傘……價格金五圓
第二等　帶止、半襟類……價格金壹圓
第三等　文房具類……價格金五拾錢
第四等　便利の圖書切符……金貳拾錢
第五等　同……金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必ず一讀を要す

○投書は各欄題の下に必ず住所姓名を記し假名は半假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は「原稿在中」の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納稅は一切受取らざるべし
とも決して政治的時事論に渉るべからず

定價

女子文壇（每月一回（一日發行）定期增刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一冊（大判百頁）	前金拾錢	郵稅共前金拾壹錢
八冊（半年増刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除く）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓廿錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割增

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年八月十二日印刷
明治四十年八月十五日增刊

無比廉價　金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	一行……
上等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行……
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切每號十五日前

（宮本劇本）

第三巻第拾壹號
女子文壇
明治四十年八月十五日増刊
（毎月一回一日發行）

明治三十七年

空前の特賣◉餘すと半月（九月[illegible]より正價に復す）



（東京各地外書店）出版元 女子文壇社 東京京橋大鋸町十一（振替口座東京第七貳九番）

（東京秀英舎印刷）